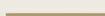




うつせみのあなたに  
2023年2月・3月

星野廉





# 目次

◆各記事の要約・抜粋	
* . . . . .	3
02/21 名前のない怪物	
* . . . . .	23
02/22 影を踏むのをためらう	
* . . . . .	27
02/23 影に影を見る	
* . . . . .	33
02/24 月影、星影	
* . . . . .	41
02/25 蛍の影、螢の影、火垂るの影	
* . . . . .	49
02/26 知ではなく痴にうながされて書く	
* . . . . .	57
02/27 「ない」を「ある」に変える魔法	
* . . . . .	65
02/28 影の精度を向上させる	
* . . . . .	73
03/01 言葉が世界を見えなくするとき	
* . . . . .	79
03/02 おもかげ	
* . . . . .	93
03/03 かげ、figure	
* . . . . .	99
03/03 柳瀬尚紀先生の思い出に	

* .....	113
03/04 影のこだまを聞く	
* .....	147
03/05 「ない」から書けている	
* .....	159
03/06 川のほとりで流れをながめる	
* .....	175
03/07 外からやって来る外【引用の織物】	
* .....	183
03/08 言葉の中にある言葉	
* .....	207
03/09 うつせみのたわごと-1- (全 14 回)	
* .....	225
03/10 文字や文章や書物を眺める	
* .....	229
03/11 「ない」ものに気づく、「ある」ものに目を向ける	
* .....	241
03/12 小説をまばらにまだらに読む	
* .....	255
03/13 素描、描写、写生	
* .....	271
03/14 うつせみのたわごと-2- (全 14 回)	
* .....	285
03/14 言葉の向こうに見える、言葉、現実、まぼろし	
* .....	289
03/15 内から来る外【引用の織物】	
* .....	297
04/16 うつせみのたわごと-3- (全 14 回)	
* .....	317
03/17 辺境としての人間	
* .....	323

03/18 赤ちゃんのいる空間	
* . . . . .	349
03/19 張り裂ける芽、腫れる粘膜、晴れる空	
* . . . . .	363
03/19 福永武彦先生の思い出に	
* . . . . .	375
03/20 うつせみのたわごと-4- (全 14 回)	
* . . . . .	389
03/21 解くのではなく溶ける	
* . . . . .	395
03/22 げん・幻 (うつせみのたわごと-5-)	
* . . . . .	403
03/23 「たったひとつ」「たったひとり」に抗おうとする身振り	
* . . . . .	409
03/24 人工〇〇になりたい	
* . . . . .	425
03/25 影の文法	
* . . . . .	439
03/26 影の落とし物	
* . . . . .	449
03/27 げん・言 (うつせみのたわごと-6-)	
* . . . . .	459
03/28 2人のゲンちゃん	
* . . . . .	467
03/29 連想でつなぐ「2・二・II」	
* . . . . .	473
03/30 はなは、はなが、はな	
* . . . . .	481
03/31 もつれる、ねじれる、こじれる (連想でつなぐ)	
* . . . . .	485



◆各記事の要約・抜粋



＊

### ＊名前のない怪物

〇〇さんがAIを使って描いた絵（作詞作曲した歌、書いた小説）。〇〇研究所（〇〇社、〇〇グループ、〇〇大学）がAIを利用して開発した商品（システム、サービス、アプリ、ソフト、ツール）。こんな具合に、個人名や集団名が明記されることはあっても、AIはその貢献度が度外視されたかたちで刺身のつま扱いされています。名前のない怪物なのでしょうか。そんな怪物の登場する小説がありました。とても悲しい物語です。なによりも人間が怪物であることを感じさせる恐ろしい作品でもあります。

### ＊影を踏むのをためらう

地面や水面や鏡にうつった影は、物や人の影であると同時に、物や人そのものでもあり、さらには物や人の影を作る光でもある。そんな思いが人の心のどこかにある。だから、人は大切な人の名前の書いてある紙や大切な人の姿が写っている絵や写真を踏むのにためらいを覚えるのではないのでしょうか。文字やうつった像が、その文字や像が呼びさます物や人そのものではないのにもかかわらず、です。

こういう人の気持ちは、学習した知識や理屈で押しつぶしたり抑えられるたぐいものではない気がします。逆に言うと、こうした感情（想像力と言ってもかまいません）を押しつぶせば、文字や像だけでなく、物や人そのものもためらいなく踏めるにちがいありません。そこには光もないはずです。

### ＊影に影を見る

私たちは、物そのものに触れたり至れるわけではなく、物の姿を物の影という光と闇

の交錯を見ているのかもしれませんが。この場合の影とは、地面や壁にうつる影、水面や鏡にうつる影、そしてそもそも目の網膜にうつる影です。それだけではありません。自然界に見られる、うつる影だけでなく、人は自分の手でうつす影を作ることになりました。人工の影です。

落書き、絵、影絵、しるし、文字、筆写、印刷、写真、レコード・蓄音機、映画、複写・コピー、デジタル化した情報（映像・音声・文書）の配信・複製・拡散・保存。どれもが「うつす・うつる・うつし」です。

### \*月影、星影

私にとって言葉とは、「同じ」と「異なる」が同居する、シンプルとはほど遠い「何か」なのです。「星影、ほしかげ、ホシカゲ、星明かり、星あかり、ほしあかり」で並んでいる各語が文字または文字列としてぴったり一致していないのは確かです。ぴったり重なっていないのですから、ずれている、つまり「異なる」わけです。それでいて「同じ」ものを指すとされています。

ずれ（「異なる」）は観念でも抽象でもなく具体的な「物」として、そこに「ある」のです。それが言葉のありようです。一方で、上の各語が「同じ」だというのは抽象であり観念なのでしょうが、それもまた言葉のありようなのです。

「異なる」（具体）と「同じ」（抽象）の同居こそが、言葉のありようである、とまとめることもできるでしょう。

### \*蛍の影、螢の影、火垂るの影

星影や月影というと、地面に星や月の黒い影が映っている絵が目には浮かびます。いったん思いうかべてしまうと、そんな光景が現実にあるような、どこかでじっさいに見たような気持ちになります。

「アルミ缶の上にあるミカン」と同じです。この駄洒落のおかしさは、言葉が掛けてあるおもしろみだけでなく、文字どおりに取った時に浮かぶシュールな絵のおかしさが重なることでしょう。掛け詞も駄洒落も（比喩も）同じ操作をしますが、駄洒落は掛け詞の別称であると同時に蔑称でもあるのです。

このように、言葉が呼びよせる言葉やイメージはきわめて個人的なものであり、だからこそ、自分だけのイメージは愛おしいと感じます。寝入り際の夢うつつにだけでなく、意識があれば、たぶん死に際になってもやってきて慰めたり笑わせてくれるのではないのでしょうか。

### \*知ではなく痴にうながされて書く

私は掛け詞のように見えたり響く語源が好きです。字面や音を楽しむわけですが、これを「正しい」知識としてとらえて、まるでたった一つの正解のように解する気にはなれません。そんなわけで、国語辞典の語源の欄にある「〇〇が訛って」とか「〇〇か」とか「諸説あり」という自信なげな記述が好きです。

「訛って（要するに、口が回らなかった）」「転じて（要するに、間違えた）」「と解釈して（要するに、勘違いした）」「字を当てて（要するに、当て字であり感字）」というふうを受けとめています。映り、写し間違え、移る。言葉は、そうやって移り変わってきたようです。

語源の解を知る喜びはタイムマシンが発明されるまで取っておきましょう。いまは、起源なき引用であり、現物や実物なき複製である声と文字を相手に遊んでもらおうと考えています。

### \*「ない」を「ある」に変える魔法

猫という文字をよく見てください。猫に似ていますか？ 私にはぜんぜん似ていないように見えるのですが、それでも猫を指すものとして、人は使っています。不思議な話です。何度腰を抜かしても罰は当たらないほど不思議だと思います。

言葉、とりわけ文字は太古から人が利用している仮想現実（「ない」を「ある」と感じさせる仕掛け）ではないでしょうか。しかも、何の機械も装置も電源も要りません。寝入り際の夢うつつでも、たぶん死に際でも楽しめます。

### \*影の精度を向上させる

影は実体がある程度正しく反映している、映している、写している。できれば、「移す」まで考えたいところなのです。移すとなると、何かが何かに、何かがどこかに移\*\*\*\*動するのですから、物理的な移動と考えた場合には、これはすごいことになります。理論から観測と実験による再現を経て実証する。

メタフィジカルではなくフィジカルにいきたい。人は影の精度を物理的かつ身体的にとらえたいのでしょう。「映る」とか「写す」なんていかにも影っぽい言い回しでは満足できずに、「移す・移る」という、なんか、こう、移動っぽい、つまりじっさいに何かを動かせる力がほしいようです。

影に働きかけることで物を動かす。動けばそれで結果良しとする。影がどれだけ実体を反映しているかなんて考えているだけ時間の無駄ということでしょう。気合いを入れれば、何とかできます。言葉は景気づけのためにあるのです。「影に影を見る」なんていって、意気消沈するためにはありません。

### \*\* \*言葉が世界を見えなくするとき \*\*

言葉は物を見えなくしているのではないか。いや、正確には言葉で物が見えなくなっていることもあるのではないか。そんなふうに思います。たとえば、「○○する」と「○○される」という言い回しがあるから、ある物や事や現象を見て、「する」と「される」に「分けて」しまう。それで「分かった」気分になるという意味です。

でも、じっさいには「する」と「される」のさかいは不明な状況というのは多々あり

そうです。訳が分からないというよりも、一時的に分けが分からなくなっているだけだから、時間をかけて真摯に丁寧に分けていけばそのうち分けが分かるはずだ。そのように楽観できるたぐいの問題なのでしょうか。

世界はそんなに単純明快だとはとうてい思えないのです。

\*\* ＊おもかげ ＊\*\*

面影を抱くとはふつうは言いませんが、人のうちにある思いとしての影（像）は、「いだく、抱く、だく、抱える、かかえる」ものです。「いだく、だく、かかえる」という行為においては、こっちが相手や対象に接触するのですから、相手と対象もまた「いだく、だく、かかえる」側にあるわけです。

こっちとあっちが「する、される」を相互に同時に体感する関係にあると言えます。内なる影の場合には、ひとりの中で分裂が生じるわけです。思いやった結果として、ひとりがふたりになるのかもしれませんが。だから寂しくはないのです。その体感が残るのが「おもかげ」なのでしょう。

\*\* ＊かげ、figure ＊\*\*

そこにはないものをそこに見る。影や面影を見る。

「かげ、影、陰（蔭）、翳」と「figure」、そして辞書にあるそれぞれの語義や例文は、まさにそうした体感を、言葉の顔や表情や身振りとして見せてくれる。そんなふうに私は思います。これは——ややこしい言い方ではありますが——具象と抽象の同居という言葉ありようでもあるのです。

辞書に載っているのは意味ではありません。言葉なのです。意味を見たことがあるでしょうか。触れたことがありますか。話し言葉であれば音を聞くことができます。文字であれば形を見ることができます。それが言葉です。具象としての言葉だと言えるでしょう。

見ることも聞くことも触れることもできない意味は抽象なのです。意味もまた言葉を成り立たせているのは事実です。意味という言葉をつかうかぎり、抽象を免れることはできません。そうであれば、言葉という具象と抽象の同居と積極的にかかわり、戯れようではありませんか。

\*\* ＊柳瀬尚紀先生の思い出に \*\*

かつて翻訳家を志していた私は、柳瀬尚紀先生の訳業から多大な影響を受けています。昨日（3月2日）は柳瀬尚紀先生の誕生日だったので、先生の思い出に、先生が出てくる過去の記事を三本再掲します。

\*\* ＊影のこだまを聞く \*\*

世界は文字と意味に満ちています。これだけ文字が増えていくのは殖えているのではないかと思うほど、複製が複製を生み産むさまが進行し拡散しています。なにしろいまは文字の入力と投稿と複製と拡散と保存が瞬時に同時に並行して起きている時代ですが、人類の歴史の中ではごく最近の出来事なのです。

人が文字に先立つとき、いまや勝手に殖えつつあるかのように見える文字は、人を送ってくれるのでしょうか。このところ、文字に先立ち、文字に野辺で送られる人の光景が、オブセッションになっています。杞憂と妄想であることを祈るばかりです。

\*\* ＊「ない」から書けている \*\*

古井由吉の『杏子』における「名前の不在」は、『水』（短編集『水』所収）という短編では「私を省く」という形に変奏されています。日常において「自分」を根底から支え、「自分」にとって自明のものとされている名前と一人称の代名詞が欠けたまま、小説が書かれているのです。

『杵子』と『水』は言界（言葉の世界）が非日常、または異世界であり、現界（現実の世界）や幻界（思いの世界）とは重なら「ない」、欠けて足り「ない」世界、つまり限界でもあると感じさせる作品です。それが具体的な文字の身振りとして「ある」のです。

\*\* ＊川のほとりで流れをながめる \*\*

ほとり、ふち、きわ——と変奏されながら、言葉と現実と思いのあいだを行き来しています。小説と詩とエッセイのあいだも行き来しています。心境小説のような、散文詩みたいな、随想っぽい、そんな感じですが。言葉の流れを眺めながら意識のふちにいた語り手が、じっさいに川のほとりに向かうところで、この文章はきわまります。

\*\* ＊外からやって来る外【引用の織物】 \*\*

しゃきっとする。覚醒した気分になる。世界がクリアに見える。これは強力な、いや最強の嗜好品ではないか。最強の嗜好品どころか、きわめて危うい薬物なのではないか。嗜癖している相手に嗜癖を説いても、無駄。この最強の嗜好品が言葉なのです。

人にとって、言葉は外から来るものであり、外との接点でもあり、外のものだとも言えるし、たぶん外そのものなのです。信用することに無理があります。

外から来たものと、内なるものとの間に齟齬（そご・食い違い）が生じるのは当然でしょう。そもそも両者をつながらせようとか対応させようとするのが無理なのです。どだい無理なのです。

\*\* ＊言葉の中にある言葉 \*\*

日本語の「山」と英語の「mountain」、そして日本語の「川・河」と英語の「river」は、一対一で対応しないらしいのです。

「國破れて 山河在り」

たぶん、日本語の「やま」と「かわ」と大昔の中国語の「山」と「川・河」も、一対一で対応していなかったのではないのでしょうか。

もともと日本語とずれていた言葉と文字が、いまの日本語の中にあるのです。言葉の中に別の言葉が入っているとも言えます。どの言語もそうなのでしょう。そう考えると日本語であれ、英語であれ、中国語であれ、言葉というものが、ざらりとした違和と異和、そして移和に満ちたものを感じられませんか。そのざらり感を豊かさと呼んでもいいのではないのでしょうか。

\*\* ＊うつせみのたわごと -1- (全 14 回) \*\*

できるだけ大和言葉系の語をもちいて、平仮名づくしで書こうという試みをしています。ふだん書いている文章とは違った書き方で、「言葉」、「書くということ」、「読むということ」をテーマに書くという実験をしています。

\*\* ＊文字や文章や書物を眺める \*\*

「猫が眠っている。」という文字を読んでいると、猫が眠っている光景が頭に浮かびますが、それはいまここにはない光景です。それが抽象です。「猫が眠っている。」という文字に意識を集中してじっと見ていると、文字だけが感じられてきます。これが具象です。

抽象と具象が同居している言葉を、人は抽象（そこにはない像）としてとらえたり、具象（そこにある文字やいま聞いている音）として体感しているわけです。両者のあいだを行ったり来たりします。

こういうとりとめのない話をしていると、眠くなります。おそらく、ふちとか、ほとりとか、きわにいるからでしょう。ゆめうつつ、ゆめとうつつのふちにいるのかもしれない

ません。

\*\* \* 「ない」ものに気づく、「ある」ものに目を向ける \*\*

私の印象では、吉田修一の『元職員』においては、「 」(省かれた一人称の代名詞)と「こちら」(一人称の代名詞)と「俺」の登場によって雰囲気徐徐に変わっていきます。「 」が「こちら」、そして「俺」となるにつれて、限定的な描写の文体が語りの文体に転じていく。いまとここだけの「現在」が、過去と祖国日本を含む時空を背景とし、人間関係の渦巻く「現在」へと転じていくのです。ただし、最後にいま述べた印象を裏切る形で、意表を突く展開があります。それはストーリーの展開としてあらわれるのではなく、具体的に言葉の身振りにあらわれる展開なのです。

\*\* \* 小説をまばらにまだらに読む \*\*

小説は一気に書かれたものではありません。加筆、書き直し、推敲、第三者によるチェックや手直し、編集、校正といった作業をへて最終的な原稿や作品として読まれるのです。とはいえ、私たちが目にするのはいわば最終的な形の完成品ですから、まるで一気に整然と書かれたような印象を与えます。

筋があって(筋は人が読み取るものです)、それに沿ってきれいに流れているように見えるのです。活字になった文字の威力は強いです。活字の並びと活字の字面があまりにも整然としているために、あまりにも視覚的に流麗なために、そのように書かれたのだろうという錯覚するのかもしれませんが。

もし一気に整然と書かれたように見えるだけで、じっさいには一気に整然と書かれたものでないなら、一気に整然と読まなくてもいいのではないのでしょうか(そもそもそんな読みが人間に可能なのでしょうか、ありもしない抽象ではないのでしょうか)。まばらにまだらに読むという意味です。じっさい、私はそんな読み方をしてきたし、いまもしている気がします。

多くの人にとって小説を読むのは私的な楽しみだと思います。「きちんと」とか「ちゃ

んど」読んだというふうに、外向けに体裁をとりつくりわなくてもいいじゃないですか。

**\*\* ＊素描、描写、写生 \*\***

音と意味とイメージは、まるで文字の影のようですが、そんなことはなく、むしろ音が先で、文字は後付けなのです。まず話し言葉があって、書き言葉が出てきたのはずっと後のことだと言われています。

それなのに、目に見える形としてある文字はいかにも偉そうに見えます。人は目に見えるものに信を置きます。一方で、目に見えないものに畏怖の念をいただくことがあります。音や意味やイメージがそうでしょう。

言葉は目に見えるものでありながら、目に見えないものでもあります。具象と抽象を兼ねそなえている、具象と抽象が同居しているという言い方もできるでしょう。だから、人の外にあって、人の中に入ったり出たりできるのです。

不思議ですね。謎です。考えれば考えるほど不思議でなりません。

**\*\* ＊うつせみのたわごと -2- (全 14 回) \*\***

「うつせみのたわごと-1-」につづき、できるだけ大和言葉系の語をもちいて、平仮名づくしで書こうという試みをしています。ふだん書いている文章とは違った書き方で、「言葉」、「書くということ」、「読むということ」をテーマに書くという実験です。今回のテーマは、言葉でものごとを語ること、および、ヒトが真実・現実・事実をとらえることの不可能性です。

**\*\* ＊言葉の向こうに見える、言葉、現実、まぼろし \*\***

言葉の向こうには言葉が見えることがあるし、言葉の向こうには現実が見えることが

あるし、言葉の向こうにはまぼろしが見えることがある。そんな気がします。「うつせみのたわごと」(全14回)ではそういう話をしていきます。読みにくくて退屈な連載ですけど、「うつせみのたわごと」をよろしく願います。

**\*\* \*内から来る外【引用の織物】\*\***

言葉が内から来るとは、翻訳や他言語の習得をイメージすると分かりやすいと思います。Aという言語のフレーズをBという言語のフレーズに置き換える。Aという言語の話し手がBという言語を習得する。またその逆もある。こうした行為が可能であるなら、他言語間には共通する基盤があるはずです。

人の内には「言葉・言語の素地」(内なる言葉と言ってもいいでしょう)みたいなものがあるのではないかと。さもないと、言葉・言語は習得できない。こう考えるのが妥当ではないでしょうか。言葉は内から来るもの、とはそういう意味です。

なお、内も外だという気がするので、「出る」ではなく「来る」としておきます。自覚や意識されない「内」は「外」と言ってもかまわないのではないかと、という意味です。

**\*\* \*うつせみのたわごと -3- (全14回) \*\***

今回のテーマは、ヒトが言語を獲得したとテリトリーと知との絡み合いです。これまで何度か論じてきたことを、大和言葉系の語だけで語ろうとすることのおもしろさを感じました。スリリングな体験でした。

標準的な表記に直したキーワードは、「謎」「なぞる」「かく・描く・搔く・書く」「思い」「掟」「しる・知る・領る・汁」「名づける」「手なずける」「なわばり・縄張り」「ち・地・知・血」「懐かしい所」「帰る」「戻る」「源」です。

\*\* ＊辺境としての人間 \*\*

澁澤龍彦、種村季弘、由良君美。「辺境」をキーワードに、この三人を論じています。詳しく言うと、「辺境としての人間」が「辺境に身を置いている」という具合に、「辺境」という言葉を人物と境遇に重ねてとらえています。

外からやって来る言葉と事物、自覚も意識もできないブラックボックスのような「内なる言葉」。この外と内が会う場が、個人としての人であり、国や地域なのではないでしょうか。そうであれば、人は辺境であり、あらゆる国と地域も辺境だと言えるのではないのでしょうか。

辺境は常に揺らぎ移ろう。辺境は、混合という形での創造が常に生起する場である。そんな気がします。

言葉は外と内から辺境へとやって来る。辺境という揺らぎの場へと。人は辺境から辺境へと移る。人がいるところは常に辺境。

\*\* ＊赤ちゃんのいる空間 \*\*

よるべない、寄る辺ない、寄る方ない。人間の赤ちゃんには、まさに寄り掛かるものがないのです。ふち、へり、きわ、はしっこ、すみっこにいるとも言えるでしょう。世界のふち、人間の世界のふち。

でも、縁（ふち）は縁（えん）なのです。どういうことかと言うと、赤ちゃんは縁（ふち）に身を置くことで、縁（えん）を呼び寄せているという意味です。

縁（えん）とは、他者との出会いに他なりません。仮に赤ちゃんがど真ん中にいるとするなら、他者との出会いはないでしょう。縁（ふち）にいるから、外や周りと同様に触れあえるのです。

\*\* ＊張り裂ける芽、腫れる粘膜、晴れる空 \*\*

言葉の音、形、意味、イメージの類似という一点だけ（複数の点の場合もあります）で、懸け離れたもの同士を一瞬つなげることができます。それが比喩であり掛け詞であり駄洒落であると言えます。ちなみに、駄洒落は掛け詞の別称であり蔑称でもあるわけです。いまのは音の類似でつないだ例です。多層的で多元的なもの同士が、ある一点で一瞬だけつながる世界に、私ははかない美しさを感じます。まぼろしなのかもしれません。きっとそうです。

\*\* ＊福永武彦先生の思い出に \*\*

私の大学時代にフランス語の詩の読み方を手ほどきしてくれたのが福永武彦先生でした。その福永先生の授業で使用した教科書に、この記事で触れたステファヌ・マラルメ作の「海のそよ風 (Brise marine)」が入っていたのです。Anthologie des Poetes du XIXe Siecle [MAYNIAL, Edouard.] というアンソロジーは、いまも大切に保存しています。褪せてくすんではいるものの、古い本独特のいい香りがします。しばらくパソコンの脇に置くことにします。

\*\* ＊うつせみのたわごと -4- (全 14 回) \*\*

今回のテーマは、「外部・内部・辺境」という分類です。「よそおう」という言葉をつかって、そうした分類=分ける作業が、ありもしない物事を捏造することだと指摘しています。ヒトという生き物の性（さが）を嘆いています。

標準的な表記に直したキーワードは、「よそ」「装う」「そと」「うち」「ふち」「代わり」「偽物」「ずれる」「はずれる」「語る・騙る」「仮」「化ける」「誤る・謝る」「賢しい」「悪賢い」です。

\*\* ＊解くのではなく溶ける \*\*

それぞれの単語の語義を辞書で眺めるとわかりますが、フランス語も英語も日本語と同じく、もつれにもつれていることが目に見えます。一目瞭然なのです。言葉の中に言葉があり、言語の中に言語があるからに他なりません。

英語やフランス語の単語のそれぞれの語義は英和辞典や仏和辞典に載っているものの、英和や仏和辞典に載っているのは、語の意味ではなく訳語です。こうした訳語が日本語の中の言葉になっていることは明らかです。まさに言葉の中の言葉です。

漢字やひらがなからなる訳語があるのに、カタカナで表記された語が並行してもちいられている場合も多々あります。もつれているのです。私は、こうしたもつれは言葉にとって自然なありようであり、このもつれが言葉を豊かにしていると思います。

もつれにもつれたものを、ときほぐすのは人には無理でしょう。人がもつれているからです。こちらがとけてほぐればいいのです。

\*\* ＊げん・幻（うつせみのたわごと -5-） \*\*

できるだけ大和言葉系の語をもちいて、平仮名づくしで書こうという試みです。今回のテーマは、「まぼろし・げん・幻」という言葉とイメージをもとに世界をとらえる「幻界」です。この回から、10の「げん」について連載していく形になります。

標準的な表記に直したキーワードは、「幻・まぼろし」「間を滅ぼす」「真を滅ぼす」「魔を滅ぼす」「イメージ・image」「信じる」です。

\*\* ＊「たったひとつ」「たったひとり」に抗おうとする身振り \*\*

フーコー、ドゥルーズ、デリダ、バルトから、私が学んだ大切なことは、彼らの著作から「たった一つ」の解を求めるなという戒めです。「たった一つ」の解を求めるのではなく、自分の問題として自分の母語で、彼らの言葉の身振りを真似て演じることが、「フー

コーする」であり、「ドゥルーズする」であり、「デリダする」であり、「バルトする」だと、私は思います。

たとえば、彼らの著作の翻訳にある翻訳語をもちいて作文したり、または著作を部分的に引用したり、あるいは部分を継ぎ接ぎすることが、「○○（上の固有名詞のお好きなものを入れてください）する」ことになるわけではぜんぜんないのです。

\*\* \*人工○○になりたい\*\*

人は人工○○になりたいのではないのでしょうか。人工○○は人がいわば「神」としてつくったものなのに、人はその自分のつくったものになりたいのではないかと私は最近よく思います。

人間——人類でもホモ・サピエンスでもヒトでもいいです——は自分たちのつくったものになりたいのではないのでしょうか。最初はそんなつもりはなくて、ただ自分たちに似たものをつくって楽しんでいたのですが、そのうち、つくったものに憧れをいだくようになったという意味です。あまりにもうまく出来すぎたからかもしれません。つくってから、二度見してしまったのです。

こうなるのを薄々感じていた。無意識のうちに、自らこういう事態を招いたという気もします。たぶん機が熟したのでしょう。いまは神への遠慮がない時代です。

\*\* \*影の文法\*\*

「影に影が落ちる」と「陰に影が落ちる」は、よく観察すると現実にあるようです。

言葉にするとありえないことに思われることが現実にはあるのではないのでしょうか。もしそうであるなら、現実には現実の文法（比喩です）があって、それは言葉の文法や言葉の慣用とは重ならないし、ずれていてもおかしくはありません。

こういうありえないことを想像すると、わくわくどころかぞくぞくしてきました。ありえなさにぞくぞくするのは。ありえないこと、さらにはありもしないこと、ないことほどぞくぞくするものはない気がします。少なくとも私にはそうです。

ありそうや、あるは、つまらないのです。ありふれていて退屈なのです。

\*\* ＊影の落とし物 ＊\*\*

私は描写が苦手なので、優れた描写があればそれから学ぶ気持ちがつねにあります。ただし説明や成句や比喩に頼らない正確な描写でなければ尊敬できません。映像による描写に比べて、言葉によって正確な描写をするのは至難の業だと思っています。

言葉による描写が困難なのは、言葉が視覚的なものではないからです。視覚を呼び覚ますものであっても、視覚に直結していないという意味です。要するに、視覚的ではない言葉をつかっての描写――事物や現象を写すこと――は効率が悪くて、もどかしいのです。そのため逸脱と停滞をとまいます。

停滞を避けてストーリーに沿って説明するほうがずっと楽だとも言えるでしょう。いまはそうした書き方が求められている気がします。

\*\* ＊げん・言（うつせみのたわごと -6-） ＊\*\*

今回のテーマは、「言葉・げん・言」という言葉とイメージをもとに世界をとらえる「言界」です。言葉が代理でしかないこと、ヒトには言語を習得する先天的な能力が備わっているらしいこと、言葉はヒトの思いや感情の表出や伝達を担っていること、言葉がヒトの知の体系をつくり上げる支えとなってきたこと、について論じています。

こうしたことがらを、大和言葉を多用しながら平仮名だけで記述する場合と、そうした語の使い方によらない書き方をした場合とを比較すると、つづる形態がつづられる内容に大きな影響を及ぼすことがよく分かる。そんな気がしました。簡単に言うと、書き

方が書く内容を左右するという事です。それに気づいたことが大きな収穫でした。

\*\* \* 2人のゲンちゃん \*\*

"唯\*論"でネット検索してみると、たくさんの唯○論があります。その中で以前に聞いたり見たことがあるものを個別に見てみたのですが、仮想敵があるのではないかと感じられる唯○論が多いようです。

唯○論対唯△論とは限りませんが、何かを敵（かたき）にして論を張っているという感じで、ほのめかしや当てこすりが透けて見えるのです。さらに興味深いのは、その仮想敵と推測できる「何らかの論」と、その論がよく似ていたり、ほぼ同じではないかと感じられることです。

「唯」という大げさな言葉をつかいながら、意外と局所的な不満や批判ややっかみ、あるいは近親憎悪から生まれているのではないかと感じました。今回の2人のゲンちゃんの喧嘩も、そうした文脈で読めそうです。

### \*連想でつなぐ「2・二・II」

私は「数・すう・かず」は影だと思っています。「すう・かず」は見ることも触ることもできそうもないので、抽象とか観念という意味での影に思えます。

私にとって数字は「数・すう・かず」という抽象である影の具象としての影です。影の影なのですが、この影は見えます。文字ですから物だと思っています。

算数と数学は、私には数字という影（目の前にある物）をつかって、数という影（見えない抽象）を遠隔操作する操作マニュアルに感じられます。影を処理するための文法とかレトリックというイメージも浮かびます。影の文法集、影のレトリック集という感じでした。

＊はなは、はなが、はな

花は花が花  
花は人のために咲くのでない  
人は花が散ると木と葉には気を掛けない  
人は木を伐り葉を払う  
人はいまが花  
それは確か  
三分、五分、七分、満開、散り始め  
それは分からない

＊もつれる、ねじれる、こじれる（連想でつなぐ）

- ・英語：ゲルマン系（土着・島の言葉系）とラテン系（外・大陸から来た系）
- ・日本語：大和言葉・和語系（土着・島々の言葉系）と漢語系（外・大陸から来た系）

こうやって見ると、地理的にも歴史的にも文化的にも両者は似ていますね。この島々（日本）もあの島々（英国）も、大陸から見て、「へり・ふち」にあるのです。そして、そこで話され書かれている言葉（日本語・英語）も、つねにへり・ふち、つまり辺境にあると言えるでしょう。だから、もつれているのです。

逆に言うと、両国は大陸のへりにへばりついているからこそ、「他者」との出会いがあり、その結果さまざまな文物を取り入れたのです。ただし、このへりである国に、さらにへりと辺境——それぞれの隣国や内なる辺境である「よそ者」たちの存在——があることを忘れてはならないでしょう。

02/21 名前のない怪物



＊

## 名前のない怪物

星野廉

2023年2月21日 13:38

世の中にはよく見聞きしたり自分で口にするにもかかわらず、それを見たことが一度もないものがあります。見たことも触れたこともないのに言葉だけで知っているのです。人工知能もその一つでしょう。

人工知能を見たことも触ったこともないのに、それが作ったと言われる物がたくさんあって、それらは見ることができるし、場合によっては触れることもできます。ネット上にも、おびただしい数の人工知能作とされる物の複製があふれています。文書、映像、音声という形で存在しているのですが、どれもが複製であって現物とか実物ではありません。そうした複製たちに、そもそも現物や実物があるのかさえ不明に思えます。

人工知能によって作られたとされている物があちこちに存在しながら、その作者であるはずの人工知能を目にしたことがないのですから不思議な話です。AI、AIと呼ばれながら、その個別の名前がない点も不思議です。呼称や愛称があるのかもしれませんが、前面に出てくることはまずありません。

〇〇さんがAIを使って描いた絵（作詞作曲した歌、書いた小説）。〇〇研究所（〇〇社、〇〇グループ、〇〇大学）がAIを利用して開発した商品（システム、サービス、アプリ、ソフト、ツール）。こんな具合に、個人名や集団名が明記されることはあっても、AIはその貢献度が度外視されたかたちで刺身のつま扱いされています。

名前のない怪物なののでしょうか。そんな怪物の登場する小説がありました。とても悲しい物語です。なによりも人間が怪物であることを感じさせる恐ろしい作品でもあります。

たぶん AI は大部分の人にとってはブラックボックスなのでしょう。そもそも人工知能に限らず、知能（通常は人間の知能を指します）というものがブラックボックスだと思ひあたりました。知能を見たことも触ったこともないのに、知能によって作られたとか生みだされたとかされる物たちに、この星は満ちあふれています。しかも現在では、その多く、ひょっとするとほとんどが複製なのです。

人工知能と知能の違いはどこにあるのでしょうか。固有の名前があるかないかなのでしょうか。名前や名づけは基本的に人だけに許されるものです。というか、擬人化されるほど人にとって親しい物（人以外の生物や無生物や現象）にも名前（名詞）が与えられます。呼びかける必要があるからです。

人ではないものに呼びかける、話しかけるためには、名前（名詞・名称）が必要です。相手が人ではないものや正体不明の物の場合には、人はそれを手なずけるために名づけます。名づけたところでなつてくれる保証はありませんし、なじんでくれるとも限りません。まるで人のほうがなつき、なじみ、すり寄っているかのようです。でも懲りずに名づけ続けます。人から名づける行為を取ったら何が残るのでしょうか。

知能、知性、知識、知——見たことも触れたこともないのに、それが生みだしたとされるものが無数にあり、それらは見たり聞いたり触れたりできる。交換も売り買いも強奪も窃盗も詐取もできるし、じっさいに、そうされている。この星はそうした行為の場になっている。

そんなことは考えなくても生きていけるという意味で当然と言えば当然であり、それでも考えてしまうという意味で不思議と言えば不思議ですけど、私はと言えば摩訶不思議だとしか言いようがありませんし、同時に慄然としないではられません。自分が当事者だからです。

#人工知能 # AI # 名前 # 名詞 # 固有名詞 # 擬人化 # 言葉 # 小説 # 怪物# フランケンシュタイン # メアリー・シェリー

02/22 影を踏むのをためらう



＊

## 影を踏むのをためらう

星野廉

2023年2月22日 13:24

私は辞書を読むのが趣味なのですが、好きなのは「かげ」という見出し語の項目です。読むというより見たり眺めていることがよくあります。語義や例文の字面を眺めているだけで幸せな気持ちになるのです。

辞書では多義的な言葉の項目ほど読んだり見ていてわくわくしますが、そのひとつである「かげ」の場合には、その意味を考えると反対であったり別物に思える語義がいっしょに並んでいて、読むたびにその意外性にはっとします。

たとえば、光という語義がある一方で、光が何かの表面に反射して目にうつる物の形、水面や鏡にうつる物の形、光が物にさえぎられてできる暗い部分、という語義が並んで挙げられています。単純に言えば、光と物の姿とその影をひっくるめて「かげ」と呼んでいる、つまり同じ語が当てられているわけです。

こんな文も書けそうです。

<午後の強い日の影に照らされて地面に落ちた木の影が濃い。>

<月影の下で、池の傍らにそびえる木の影に目を凝らし、庭の砂利の上に長く伸びる薄暗い木の影から、水をたたえた池に映るその木の黒々とした影へと視線を移した。>

ややこしい話なので説明すると、次のような意味になります。いずれにせよ、悪文です。

<午後の強い日の影（光）に照らされて地面に落ちた木の影（映ったかげ）が濃い。>

<月影（つきあかり）の下で、池の傍らにそびえる木の影（姿）に目を凝らし、庭の砂利の上に長く伸びる薄暗い木の影（映ったかげ）から、水をたたえた池に映るその木の黒々とした影（映ったかげ）へと視線を移した。>

\*

光と物の姿とその影に同じ「かげ」という語を当てる、日本語の言葉の世界を思うとき、それが現実になっている世界をも思いうかべてしまう自分がいます。光と物の姿と影が同じである世界です。

三者が同じである世界と言いましたが、物理的に同じであるとか、それぞれが一対一に対応するという話ではなく、光と物の姿と影を同じだと見なす世界観、つまり考え方があるという意味です。

（もちろん、ある時期、ある地域、ある集団に限定された、日本語特有の語感であり世界観なのでしょう。）

言葉や絵や映像や音声や象徴は、森羅万象をうつす影である。森羅万象とそうした影たちは、物の姿とその影のありようを成り立たせている仕組みと連動している。そんなふうに私は夢想するのですが、あくまでも夢想であり根拠などぜんぜんないわけです。

一方で、森羅万象と、それを照らす光と、光によってうつりうつされる影たちが同一視されている——別個のものたちが同じだと見なされている——のが、人の世界ではないかという気がします。話す言語に関係なくです。

たとえば、映画、動画、ドキュメンタリー、ニュースは、映像や音声や文書からなる物語であり、人はそうしたものを見聞きして世界を感知したつもりになります。うつっているものを、ものと同一視するわけです。

物と、それらをうつした別の物と、そうしたうつりうつされるという物のありようを成り立たせている仕組みが、自然で当然のものとしてとらえられている。

言い換えれば、ある物の代わりに、その物ではない別の物で済ます——要するに、Aの代わりにAではないもので済ます——という仕組みが、人の世界では当り前のこと（いちいち深く考えないこと）としてとらえられているのではないか。そんなふうに私は感じています。

（Aの代わりにAではないもので済ますという仕組みの根っこにあるのが、広い意味での言葉——話し言葉（声）、書き言葉（文字やしるし）、映像、音、表情、身振り——だと思います。言葉にどっぷり浸かっているから言葉の仕組みに気づかないし、気づいてもすぐに忘れて意識しないという意味です。）

極端な言い方になりますが、人は人や物の影を踏むのに躊躇する唯一の生き物なのです。

地面や水面や鏡にうつった影は、物や人の影であると同時に、物や人そのものでもあり、さらには物や人の影を作る光でもある。そんな思いが人の心のどこかにある。（とりわけ影が光でもあるという思いは人にとって決定的な意味を持ちます。光を畏怖しているからであり、人にとって光と闇は同じだからです。これは科学的知識と併存しています。人は矛盾を生きる生き物だからです。）

だから、人は大切な人の名前の書いてある紙や大切な人の姿が写っている絵や写真を踏むのにためらいを覚えるのではないのでしょうか。

文字やうつった像が、その文字や像が呼びさます物や人そのものではないのにもかかわらず、です。こういう人の気持ちは、学習した知識や理屈で押しつぶしたり抑えられるたぐいのものではない気がします。

逆に言うと、こうした感情（想像力と言ってもかまいません）を押しつぶせば、文字や像だけでなく、物や人そのものもためらいなく踏めるにちがいません。そこには光もないはずです。

#影 # 光 # 辞書 # 言葉 # 多義性 # 言葉 # 写真 # 絵 # 名前

02/23 影に影を見る



＊

## 影に影を見る

星野廉

2023年2月23日 12:36

初めは人が影に先立ったのに、影が人に先立つようになり、最後には人が影に先立つのでしょうか。

(拙文「影に先立つ【引用の織物】」より)

目次

辞書を眺める

引用の引用、複製の複製

短いけど長い

影に影を見る

## 辞書を眺める

光、物の影、物の姿。

物の影、光、物の姿。

物の影、物の姿、光。

「陰・蔭」と「翳」を除き、さらに地面や壁に映るものか水面や鏡に映るものかといった区別をせず、おおまかに「影」だけに絞り単純化して、「かげ・影」を大きく三つに分けると上のような順に並んでいます。

「光」だけに注目すると、上の文字列から下に行くにつれて、右へとずれていくところが、私には興味深く思われます。左から右へと読んでいく、日本語の横書きでは、左から右へという位置的な流れが時間的な推移や順位または序列に感じられるからかもしれません。

辞書の話です。光、物の影、物の姿——。私の愛用している辞書では、この順に語義が並んでいます。文字列だけを眺めていると、まず光源があって、その光に照らされた影があって、最後にその影を作っている物が浮かびます。

この言葉の配列に物語や筋を読み取る人もいそうです。A、そしてB、それでもってCという具合に。AだからBであり、BだからCとなるというふうに因果関係や論理の流れを見る人もいるでしょう。

光、物の影、物の姿——という順で私は絵として思い描いているわけですが、三つの絵がある場合には視点の移動があるわけですから、一枚一枚がコマになり、続き物の絵とか漫画みたいに頭の中でコマ送りして思いう浮かべています。やろうと思えば、動画のように浮かべることもできそうです。

＊

一方で、物の影、物の姿、光——という順で語義を並べている辞書も持っています。「影」と言えば、私は物の影を連想するので、この順番だといちばんしっくりきます。たしか、この辞書では現行の一般的な語義から並べるという方針があったはずですが。

最後に光が出てきて、「はあ!？」と感じる人もいそうです。これが、光、物の影、物の姿——だと、いきなり光が来ますから、「影」という語で物の影をまっさきに思い浮かべる人の中には、「……!？」みたいに絶句する人がいても不思議はありません。

私の愛用している国語辞典には、古い意味から、つまり語源に近いものから語義を載せる方針があるようです（古い意味から載せるか、あるいは現在の一般的な意味から並べるかという編集方針の違いは、英語やフランス語の辞典でも見られます）。かといって、私はそれを意識することがありません。ただ漫然と眺めているだけです。

## 引用の引用、複製の複製

私は辞書を読むのが趣味なのですが、知識を得たり勉強するというよりも、あるペー

ジを開いたまま語義や例文を眺めながら物思いにふけります。いろいろなイメージ——模様や光景や言葉の断片——ががつぎつぎと浮かんできて飽きません。載っている例文をもとにして、見よう見まねで作文するのも楽しいものです。手本があるので作文というより借文でしょうか。

読んでいてとりわけわくわくするのは多義語を見出しにしている項目で、「かげ」や「うつす」「うつる」なんて大好物です。項目全体を見渡せるという点で紙の辞書が便利なのですが、いまはネット上で閲覧できる辞書が複数あり、それらを読みくらべる楽しさもあります。

辞書の読み比べは、引用の引用、複製の複製、起源なき引用、実物や現物なき複製といった言葉とそのイメージを連想させる刺激的な体験です。似ている、そっくり、同じ、同一の乱舞の感があります。目まいを覚えるほどですが、これが意外と快感なのです。

国語辞典がどんなふうになられるのかは知りませんが、作業の性質上、結果的に孫引きの印象を与えるものができあがるのは仕方がないでしょう。辞書によって語義がまちまちであっては困るわけですから。もちろん、各辞書に創意工夫が感じられる箇所も多々あります。

## 短いけど長い

「かげ」に話を戻します。

手元にある複数の辞書を見くらべると、「影」と「陰」を分けて見出し語にしているものもありますが、その場合には「陰」が先に載せてあるものが多いのに気づきます。たまにあまり利用しない別の辞書を眺めていると、そのレイアウトというか設計によって、自分の思いこみが揺さぶられることがあります。

各辞書で、語義が大見出しと小見出しによって分れるさまや、見出しの並ぶ順番や、語義の説明の仕方や例文が異なり、見比べや読み比べの醍醐味を味わうことができます。

辞書を読むよりも、目を細めて眺めていると気づくこともあります。目を凝らすのではなく細めると見えるのです。たとえば、短い語ほど語義や例文が多い、つまり短い語

ほど説明が長い、長い語ほど語義が短いという現象です。短いのは長い、長いのは短い。こんなことは、言葉が物や事をうつした影だからこそありうることだという気がします。

不思議な体験です。短いけど長い——。見えているのは実相なのか、それとも幻影なのかという不思議さなのです。俳句が決して短くないのと似ています。定型詩としての俳句が短いというのは事実誤認ではないかと思えます。俳句は一句で完結もしていなければ、一句で成立もしていないからです。

## 影に影を見る

言葉は影であるをつくづく思います。何の影なのかというと、上で述べたように物や事の影でしょう。言葉に物や事を見るのだとすれば、私たちは影に影を見ているのです。

私たちは、物そのものに触れたり至れるわけではなく、物の姿を物の影という光と闇の交錯を見ているのかもしれない。この場合の影とは、地面や壁にうつる影、水面や鏡にうつる影、そしてそもそも目の網膜にうつる影です。

それだけではありません。

自然界に見られる、うつる影だけでなく、人は自分の手でうつす影を作るようになりました。人工の影です。

落書き、絵、影絵、しるし、文字、筆写、印刷、写真、レコード・蓄音機、映画、複写・コピー、デジタル化した情報（映像・音声・文書）の配信・複製・拡散・保存。どれもが「うつす・うつる・うつし」です。

私たちはこうした影たちに何を見ているのでしょうか。世界でしょうか、森羅万象でしょうか。やはり、影に影を見ているのではないのでしょうか。

影が影を生む。影の影を見る。影の影を聞く。影の影を読む。影の影を知覚する（VR・AR）、影の影をいただく。影の影に驚く、泣く、嘆く、笑う、喜ぶ、怒る。影の影をめぐる、戦争も起きます。

私たちは目をつむっても、光のないはずの闇の中で「何か」を見ているようです。静寂の中で「何か」を聞いているようです。無であるはずの夢の中で「何か」に触れているようです。

それら全部が「かげ」だという気がします。私たちは、光と闇と影が同じである世界に生きているのではないのでしょうか。大昔も、いまも、おそらくこれからもです。これからがあるとすれば。人が影に先立つ事態を招かなければ。

#影 # 光 # 闇 # 言葉 # 多義性 # 文字 # 絵 # 写真 # 複製



02/24 月影、星影



＊

月影、星影

星野廉

2023年2月24日 11:56

目次

月影、星影、火影

言葉が言葉を呼びよせる

言葉と言葉のずれをすくい取る

文字は複製で読むもの

作文の鑑賞

月影、星影、火影

辞書で「かげ」の語義としてある「日・月・灯火などの光」（広辞苑）の意味で「かげ」や「影」を使ったことは、私にはありません。話し言葉でも書き言葉でもです。こういう不慣れた言葉遣いの語感をさぐるのには、例文を読むのがいちばんわかりやすいと思います。

とはいうものの、広辞苑にある「月影がさえる」という例は私にとってぴんと来ないので、手元にある別の辞書やネット上にある複数の辞書に当たってみたところ、次のような言い方ができそうです。

月影（つきかげ）、月の影、淡い月影、星影（ほしかげ）、火影（ほかげ）、灯火の影、木陰にまたたく灯火の影、日の影。

こうした言い回しが複数の辞書に共通して見られるのは、いわゆる孫引きがおこなわれているからかもしれませんが、辞書がまちまちであっては困るわけですから、当然の結果でしょう。

## 言葉が言葉を呼びよせる

月影と星影と日影と火影は手持ちの辞書では独立した語として見出しがあります。無理をしてまで使う気持ちはありませんが、このうちの星影と月影はぜひ使ってみたいです。

複数の辞書に載っている例文を見ると、星影は「きらめく」「きらきらと光る」「ちらつく」「見える」と、月影だと「淡い」「(月影で・月影に) 見る」「さす」「(月影に) 浮かぶ・浮く」「浴びる」と相性がいいようです。

「日影」と「火影」はぴんと来ないのですが、「日の影」なら使ってみたいと思いました。「日の影にゆらめく」「○○が日の影にゆらめいて見える」というフレーズがいま浮かびましたが、これは「陽炎(かげろう)」を連想したようです。

「日の影」の「影(かげ)」につられて「陽炎(かげろう)」が出てきたわけですけど、言葉が言葉を呼びよせた、つまり影が陽炎を呼びよせた気がします。当然のことながら、言葉といっしょにイメージも呼びよせられます。

「星影」と「星明かり」は私の中では異なっています。さらに言えば、「星影、ほしかげ、ホシカゲ、星明かり、星あかり、ほしあかり、ホシアカリ、HOSHIAKARI」もそれぞれ違う気がしてなりません。

この思いは、ニュアンス、語感、イメージ、印象、字面、連想という言葉を使って説明できそうです。「星影」も「星明かり」も同じものをさすのだから同じなの。現実も事実も言葉もすごくシンプルなわけ。そんなふうには威勢よく片づける気にはなれません。

## 言葉と言葉のずれをすくい取る

私にとって言葉とは、「同じ」と「異なる」が同居する、シンプルとはほど遠い「何か」なのです。

「星影、ほしかげ、ホシカゲ、星明かり、星あかり、ほしあかり」で並んでいる各語が文字または文字列としてぴったり一致していないのは確かです。ぴったり重なっていないのですから、ずれている、つまり「異なる」わけです。それでいて「同じ」ものを指すとされています。

ずれ（「異なる」）は観念でも抽象でもなく具体的な「物」として、そこに「ある」のです。それが言葉のありようです。一方で、上の各語が「同じ」だというのは抽象であり観念なのかもしれませんが、それもまた言葉のありようなのです。

「異なる」（具体）と「同じ」（抽象）の同居こそが、言葉のありようである、とまとめることもできるでしょう。

具体と抽象が同居する、言葉における「ずれ」（たとえば表記のずれ）をすくい取り、ずれにこだわった上で言葉を選ぶことが、文学や広告・宣伝の現場でおこなわれている作業ではないでしょうか。

## 文字は複製で読むもの

文字は複製として読み書きされるものです。小説であれ詩であれビジネス書であれ法令であれ、それが文書として読まれるのであれば、複製を読んでいると言えます（元原稿や原本であってもです）。文書を成り立たせている文字が複製でしかありえないからに他なりません。

複製が複製を生む。これが複製である文字のありようです。文字は複製されるために存在するかのようです。世界は、複製である文字に満ちています（同じ言葉でも、話し言葉である声や、視覚言語と言われることもある表情と身振りが発せられた瞬間に消えるのに対し、文字だけが残るからです）。

言い換えると、文字は、現物や実物のない複製、または複製の複製であり、さらに言えば起源のない引用、または引用の引用でもあります。文字にとって、現物や実物や起源は抽象であって観念でしかありえません（書道、カリグラフィー、タイポグラフィ、活

字やフォントの制作の現場においては話は別です)。

＊

このように、複製（複製の複製でもかまいません）として読まれ書かれるとき、同じ文字だという点で「星影と星影」は「同じ」どころか同一なのですが（抽象）、「星影とほしかげと星明かりと星の光」となると、それぞれ「異なる」別物（具体）なのです（先に述べた「抽象と具体の同居」という言葉のありようがここでも見られます）。その異なる別物の間の「ずれ」の話、いまはしています。

では、「ずれ」にこだわって作文をしてみます。

### 作文の鑑賞

「星かげにうかんだ少女の姿」「星影に浮かんだ少女の姿」——「かげ」と「うかんだ」に少女のやわらかな体を感じます。「影」と「浮かんだ」には、ずっと立った少女の姿が目に見えるようです。ひらがなは触覚を刺激し、漢字は視覚に訴える気がします。

「星明かりがきらめくなかで競うように輝く蛍たち」「星影と競う蛍」——前者は語数が多いだけに冗漫な印象がして、言葉に酔っている書き手を感じます。後者は簡潔ですが、簡潔なだけにかえって星空の下できらめく蛍の群れが目には浮かんできます。

「月明かりのもとで見る彼女の顔」「月影に浮かんだ彼女の顔」——やっぱり「明かり」と「影」は印象が違うなあと痛感します。両方ともここでは光を意味するとしても「明かり」には色があるのです。「彼女の顔」に「赤み」が差していると妄想してしまうのは「あかり」からの連想でしょう（「明」「日」「月」という文字と「赤」の持つイメージを多用し偏愛した古井由吉について語りたくなります⇒拙文「異、違、移」）。

「月影がさす庭にたたずむ人」「月明かりに照らされた庭にたたずむ人」——前者のほうが光の背景にある闇を感じさせます。私の印象では、後者のほうが散文的です。

以上、自分で作文して自分でああでもないこうでもない鑑賞していれば世話ないですが、そんな感想を持ちました。ふだんの私はこういう思いをあまり意識せずに文章を

書いています。

いずれにせよ、言葉が言葉を呼びよせるということはあると思います。言葉が異なれば、呼びよせる言葉も違ってきます（その時々気分によっても異なる気がしますけど、この点には立ち入りません）。呼びよせるのは言葉だけでなくイメージも、です。

私は部外者なのでぜんぜん知りませんが、俳句や短歌の世界では、星影や月影を使う人がいまでもけっこういるのかもしれない。詩や歌詞にも不案内なのですが、積極的に使う人がいてほしい気がします。

私は小説を書くことがあります。星影と月影を使いたいと思いつつも、特殊な設定でないかぎり、小説では星影と月影を使いにくいと感じています。散文だからでしょうか。私は散文的な人間で、詩を書いたことはありません。

#辞書 # 日本語 # 表記 # 字面 # 言葉 # ひらがな # 漢字 # 影 # 星 # 月 # 文字 # 複製  
# 引用 # 散文



02/25 蛍の影、螢の影、火垂るの影



＊

螢の影、螢の影、火垂るの影

星野廉

2023年2月25日 09:58

目次

文字どおり取る

掛け詞、駄洒落

作文

火垂る、螢、螢

螢の影

文字どおり取る

星影（ほしかげ）と月影（つきかげ）を文字どおりにとってみましょう。星の影と月の影のことです。

とはいうものの、星影って何でしょう？ 月影とはどんなものを指すのでしょうか？ 愛用の辞書には、星影は「星の光。ほしあかり。」（広辞苑・以下同じ）とあり、月影だと「月のひかり」だけでなく「月の形。月の姿。」という語義も載っています。

星の明かりという意味での星影と、月の光という意味での月影は、私にはいまだにぴんと来ません。星影や月影というと、地面や壁に映った黒い影と、または水面やガラスや鏡に映った姿が私の頭には浮かびます。絵として浮かぶのです。

水面に浮かんだ星や月の姿ならじっさいに見た覚えもありますが、地面に星や月の黒い影が映っている光景となると現実にはありそうもありません。でも、思い描くことならできます。これが星影と月影を文字どおり取るという意味です。現実にある日食や月食など「食（蝕）」の話ではありません。

地面に星や月の黒い影が映っている光景——そんな絵を頭の中でいったん思いうかべてしまうと、そんな光景が現実になりそうな気がしてきました。どこかでじっさいに見たような気持ちも起こります。偽の記憶になりそうで、そう感じる自分を怪しく危ういと思う自分がいます。いわば自分の中で分裂が生じるわけです。

## 掛け詞、駄洒落

「アルミ缶の上にあるミカン」と同じです。この有名な駄洒落のおかしさは、言葉が掛けてあるおもしろみだけでなく、文字どおりに取ったときに浮かぶシュールな絵のおかしさが重なることだと思います。

掛け詞も駄洒落も——さらには比喩も——基本的には同じ操作をしますが、駄洒落は掛け詞の別称であると同時に蔑称でもあるのです。

「ニューヨークで入浴」なんていうのも、私は好きです。かつては、自由の女神像の真下に据えられたバスタブのお湯に浸かっている自分の姿が目蓋の裏に浮かんでならなかったのですが、いまお気に入りの絵は、摩天楼の屋上に置かれたバスタブから五番街を見下ろしながら入浴する自分の姿なのです。

自分だけ受けするギャグみたいなもので、シュールと言うより滑稽です。他人に話せば失笑を買うか、うんざりされるだけです。

寝入り際や、じっさいに湯船に浸かっているときや、トイレでぼーっとしていると、ときどきこれらの絵が浮かぶことがあります。

このように、言葉が呼びよせる言葉やイメージはきわめて個人的なものであることが多いようです。だからこそ、自分だけのイメージは愛おしいと感じます。寝入り際の夢うつつにだけでなく、意識があれば、たぶん死に際になってもやってきて慰めたり笑わせてくれるのではないのでしょうか。

言葉は、世界を相手にするときに、いつもそばにいてくれる友達なのです。呼べばすぐに来てくれます。いつか意識が薄れる直前に、あなただけに受けるギャグであなたを笑わせてくるかもしれません。

## 作文

星影（ほしかげ）、月影（つきかげ）、火影（ほかげ）——漢字で見ても、ひらがなで見ても、声に出してみても、綺麗に感じる言葉です。自分が使うことはなくても、目に耳に肌に心地よく感じられます。

寒い夜に星影がまたたく。  
庭に月影がさす。  
ろうそくの火影がゆらめく。

頑張って作文してみました。作文する前と後とでは、星影と月影と火影に対する語感や親しみが変わっています。前に比べると、ずっと頭に入るだけでなく、おなかのあたりにも来る感じがします。「腑に落ちる」というのはこういうことなのでしょうか。

でも、そんな腑に落ちる感はまだ身につけていないので、すぐに消えそうな予感があります。ある言葉を身につけたり慣れるためには時間をかける必要があります。気長にかまえましょう。

## 火垂る、蛍、螢

星影（ほしかげ）、月影（つきかげ）、火影（ほかげ）——。

このうち、「星影（ほしかげ）」で連想する言葉は「きらきら」だったり「またたく」だったり「ほしの光」だったりします。「ほしの光」から「蛍の光（ほたるのひかり）」を私が思うかべるのは、「ほ」という同音があり、思いえがく星の点滅するさまが蛍の青白い光のまたたきに似ているからでしょう。

星影（ほしかげ）、月影（つきかげ）、火影（ほかげ）——。

そう思った心で「火影（ほかげ）」を目にすると、たぶん「ほ」の連続と「火」という文字からでしょう、『火垂るの墓』（野坂昭如作）を思い出しました。この表記が気になってネットで検索して調べてみたところ、複数のサイトに「ほたる」の語源として共通する諸説が紹介してありました。

火垂り（れ）、火照り（れ）、火（ひ・ほ）立る、星垂（ほしたる）

上のような文字列が見られるのですが、節操がない私はどれにも説得力を感じてしまいます。楽しいのです。これもいいけど、あれもいいなあ。ぜんぶ、いいなあ。

諸説のある語源は正しい正しくないという対立ではなく、それぞれの説のいい点を尊重しながら楽しみたいと私は考えています。一つの解を求めてはいませんが、最後は好みでしょうか。正解ではなく好みです。

この小説のタイトルでは、蛍でも螢でもほたるでもホタルでもなく、「火垂る」という表記が選ばれているわけですが、私の場合には作者の意図を考えることはありません。勝手に想像します。

火垂るの墓、火照るの墓、火立るの墓、星垂るの墓——こんな言葉とイメージが浮かびました。どれもが言えている気がしてなりません。

この短編を読むと大空襲が出てくるので、空に火が垂れるさまが目浮かびます。火とはつぎつぎと投下される爆弾のことです。夜であれば、地面が照らされるでしょう。防空壕へと走りながら空をあおぐと、星のまたたきに似た点滅が目映るかもしれません。それが垂れる、つまり降ってくるのです。

その「火（が）垂る」という恐ろしいイメージを想起させる言葉と「墓」が組み合わせられているのです。しかも、「ほたる」と読ませます。あの美しくはかない光を発するホタルです。水生または陸生の幼虫が、成虫になってからの期間はごく短いと聞きます。

恐怖、悲しみ、弔い、点滅、肉親への愛、光の美しさ、生と死、光と闇、空と地面、「飛ぶ」と「横たわる」、上昇と下降、飛翔と落下、美と醜、香（かお）りと臭（にお）い、「長い」と「短い」、火・風・水・土——そうした相反する感情と要素が「火垂るの墓」と

いうタイトルの文字列に込められている。そんなふうに感じます。

いかにも安易な連想ですが、「火垂るの墓」という言葉から「野垂れ死に」「はかない」も想起されますが、じっさい、この小説にはそれに近い死が出てきますし、墓もないわけです。掛け詞ですが真面目な話をしています。

蛍の墓、螢の墓、ほたるの墓、ホタルの墓。上で述べたのは、このうちのどれにもないイメージです。というか、そもそも「ほたるのはか」という音があって、それをどの文字に当てるかという発想で付けられたタイトルではないでしょうか。

空からつぎつぎと火が垂れてくる。この両義的、いや多義的なイメージからタイトルが選ばれた気が私にはします。

「火垂る」という文字列を見ると、野坂昭如の小説のもとになった戦争だけでなく、現在起こっている戦争を思いうかべないではいられません。そして、気配として感じてしまう、これからの戦争です。

耳すまし 火垂るの影に 身がすくむ

\*

いまの私は「流星」や「流れ星」という言葉を見聞きするたびに shooting star という言葉が重なって、「空を流れていく星」という美しい光景を文字どおりに、素直に思いえがくことができなくなりました。どうしてもミサイル攻撃を連想します。shoot という言葉の語感が胸に迫ってくるのです。

shoot が「(心や身体に) 刺さる」多義語であることは、大きめの英和辞典でその語義の数々を見ると実感できます。日本語で言うと「さす、しゃ、いる」という感じがして、なにしろ暴力的で攻撃的で一方的で恐ろしいのです。シュートという音もある種の蛇を連想させて、私なんか自分で口にただけで、びくっとします。

写、射、斜、車、シャッター、カシャッ、射る、入る——こういう感じがするのです。  
(中略)

指す、差す、刺す、射す、挿すのです。何度も何度も。そして射る、入るのです。つまり、サディスティックなのです。

(拙文「うつる」でも「映る」でもなく「写る」より)

\*

蛍影という言葉がないだろうかと思って調べてみたところ、ネット上で閲覧できる辞書に「蛍影（けいえい）」(コトバンク・普及版字通)がありました。個人的には螢影でなく蛍影がしっくり来ます。強いて文字どおりに取る必要はないのですが、この一年間で私は火という文字が苦手になりました。

いつまで続くのでしょうか。

## 蛍の影

蛍の影には思い出があります。

夜の病室で親に付き添いながら眠っているときに、ふと目を覚まして見た神秘的とも言える光景を、いまもよく思い浮かべます。

患者の生命を維持するために置かれた機器のことです。その器械に付いているいくつもの小さなランプの点滅——。それが青だったか、黄色だったか、緑だったかまでは覚えていません。ただ蛍に似ていると思ったことは覚えています。

病室で蛍に囲まれているという、あのときに見た荒唐無稽な幻想（寝ぼけていたにちがいません）が、どうやら私の心象風景になっているようなのです。その光景の中では決まってそばに母がいます。

(拙文「病室の蛍」より)

星影に 群れ飛ぶ蛍 母のそば

#影 #星 #月# 蛍 # 日本語 # 言葉 # 連想 # 掛け詞 # イメージ # 文字 # 野坂昭如  
# 辞書

02/26 知ではなく痴にうながされて書く



＊

知ではなく痴にうながされて書く

星野廉

2023年2月26日 11:16

目次

ふれる、ゆれる

月に触れる

月に吠える

ふれる、触れる、振れる

知ではなく痴にうながされて書く

ふれる、ゆれる

月明かりのともる道を、ふたりの連れと歩む。空に浮かぶ丸い影、地にぼとりと落ちた影。一步一步、一刻一刻、ともに歩む。

「明かり」につられて「ともる」が来て、人が歩くにつれて付いてくるように見える「月（つき）」の連想で「連れ（つれ）」とつながり、「ふたり」を受けて、念を押すように月の「影（姿）」と地面に映る自分の「影」が言及され、ふたりの「とも（友・朋・共）」との歩みが「一步一步」で空間的な推移として、「一刻一刻」で時の刻みとして触れられる。

こんなふうに音と文字とイメージで遊べる言葉の世界が好きです。英語では無理ですから日本語の世界と言うべきでしょう。というか、それぞれの言語にそれぞれの多義語があって、そのなかで言葉を掛ける遊びがあるにちがいません。

言葉の世界と現実の世界と思いの世界は、ぴったり重なるようには一致しないが、それにもかかわらず「擦れ違う」というかたちで、触れるか触れないかの、ぎりぎりの出会いがある。そんな気がします。

触れそうになっただけなのに触れた心もちになる。相手に触れてはいないのに思わず、こちらが振れてしまう。これを押しすすめれば、気が触れることになるのかもしれませんが。

「気が触れる」の「触れる」は「狂れる」とも書きます。狂うのです。振れが振れを、触れが触れを、揺れが揺れをさそう。狂ったようにばらばらにふれていたのが、狂ったようにみんなでいっしょにふれるようになる。いずれにせよ、ふれているのです。

## 月に触れる

月は英語ではふつう moon、フランス語では lune ですが、英語にはラテン語で月を意味する luna から来たらしい lunacy や lunatic があります。それぞれ「狂気」、「狂気の」という意味になります。

私は掛け詞のように見えたり響く語源が好きです。字面や音を楽しむわけですが、これを「正しい」知識としてとらえて、まるでたった一つの正解のように解する気にはなれません。

そんなわけで、国語辞典の語源の欄にある「〇〇が訛って」とか「〇〇か」とか「諸説あり」という自信なげな記述が好きです。

「訛って（要するに、口が回らなかった）」「転じて（要するに、間違えた）」と解釈して（要するに、勘違いした）」「字を当てて（要するに、当て字であり感字）」というふう

に受けとめています。

映り、写し間違い、移る。言葉は、そうやって移り変わってきたようです。

私は、求める解よりも迷う快を選びます。語源の解を知る喜びはタイムマシンが発明されるまで取っておきましょう。怪のままではじゅうぶんに快なのです。いまは、起源なき引用であり、現物や実物なき複製である声と文字を相手に遊んでもらおうと考えています。

## 月に吠える

それにしても、なんで月が狂気とつながるのでしょうか。調べて解を求めるのではなく、迷って楽しんでみます。答えは出なくてかまいません。私には出ないほうがいいのです。「わかる」の醍醐味がゴールではなくプロセスであるように、迷う過程が楽しいのです。

満月や月というと狂気を連想する人は多いようです。やはり、lunatic という言葉の影響でしょうか。full moon (満月) と fool moon という言葉遊びを思い出しました。満月の夜に〇〇が多い——といったたぐいの都市伝説も思い出します。こうこうと輝く満月を見ると、人も吠えたくなるのかもしれませんが。

「狂う」がらみでいうと、正気のサタデーナイ (沙汰でない) トという駄洒落を聞いた覚えがあります。確かに、夜になると人は程度の差はあれ、ふれます。とりわけ「ハレ」っぽい週末には。

こうした、きわめて多くの人、あるいはそこそこ多くの人に共有されたイメージがある場合には、詩や小説や音楽や映画やテレビドラマで、似たようなイメージが繰り返され、さらにイメージが拡散されていきます。

音楽と言え、バンド名の LUNA SEA が頭に浮かびましたが、これは上で述べた英語の lunacy と同じ発音になるみたいです。

海の月、月の海、狂気——。こう並べると、なんだか綺麗でうっとします。「月に吠える」というフレーズを連想してしまいました。月に触れたのでしょうか。

言葉には辞書に載っている語義だけでなく、集団や共同体に共有されているイメージがあったり、おそらく一人だけにしかいだかれぬ私的なイメージがあります。後者は誰かに話せば「あほか」と言われるのがオチで——話せば話すほど正気の沙汰でない人に思われます——、他人に分かってもらう必要のないものですが、だからこそ大切なのです。

もしもしカメよカメさんよ。この歌詞を耳にしたり口にするたびに、月でカメさんに電話をしているウサギさんの姿が浮かぶのですが、こども時代からいただいているこの心象を、私はとても愛おしく思っています。

### ふれる、触れる、振れる

「気がふれる」という言い回しが気にかかります。この言い回しで、「琴線に触れる」というフレーズを連想しました。

琴の金色の線（糸・弦）に何かが触れて、線が振れ、空気が震える。そんな光景が目には浮かびます。金色の線から金色の空気の波がつつぎと円を描いて広がっていくのです。

薄く弱いながら艶のある光を感じて見上げると、弦月半月が濃い紫の空に見えます。月は、金と銀のどちらにも見える微かな色をしています。あ、ウサギさんだ——。そう思ったとんに、夢ゆめうつつから覚めます。または別の夢ゆめうつつへとうつります。さめてもさめても夢うつつなのです。

こういうのを「狂（ふ）れる」というのでしょうか。少なくとも、この「ふれる、ふる、ふるえる」という言葉とそれが喚起する上のイメージは、私には美しいものです。

ところで、「触れる」と「触れられる」は同時に起こっているはずです。視覚や聴覚や嗅覚や味覚と異なり、触覚は双方向的なものです。それだけに五感のうちで最も始原的な体感に思えます。知とはほど遠い感じ分けなのです。「触れる」は正確には「触れ合う」と言うべきかもしれません。

人同士の——相互的な——触れ合いの話に絞ると、体が二つない限り、人はどちらか一方なのですから、相手のことは想像するしかありません。

つまり、相手にとっての「触れる、同時に触れられる」は、体感できないという意味で抽象になるわけです。他者を前にして（相手にして）、人は想像し抽象するしかないということでしょうか。想像の「像」と抽象の「象」は影です。「他者を相手にする」とは

影を相手にするという意味での「触れ合い」だと考えられます。

自分ではない「何か」や「誰か」、自分ではない相手——人であっても、人以外の生き物であっても、無生物であっても、なんらかの現象であっても——を思いやるとき、人は「それ」に触れた気持ちになるという意味で、触れる（狂れる）のではないのでしょうか。触れるは狂れる。

### 知ではなく痴にうながされて書く

月の影を見る。星の影を見る。

水面に映った星や月の姿ならじっさいに見た覚えがありますが、地面や壁に星や月の影が映っているさまは見たことはありません。でも、見たことはなくても思いえがくことはできます。

強いて思いの中で描かなくても、月の影、星の影と唱えただけで、浮かんでくるのです。まだまだ月のひかりや星のあかりのさすさまは浮かんできません。

ひかりやあかりという意味での影は、まだまだ私の中では知識でしかないようです。

\*

暗い道に星の影が落ちている。青みを帯びた灰色の影がぼつぼつと点になって散らばっている。壁に大きな月の薄い影が映っている。このあいだ見たときにはまん丸だったのが、きょうはちょっと欠けている。

現実にはありそうもありませんが、このように思いえがいたり思いうかべることなら楽にできます。星の影と月の影を、自分にとっての「文字どおり」に取っているわけです。

天体の影といっても、現実にある日食や月食など「食（蝕）」の話ではありません。科学的事実とも呼ばれる、知識として学ぶ「食（蝕）」の話よりも、現実にはありえない、荒唐無稽であったりとりとめのない個人的な影のイメージのほうに、私はわくわくします。

この「わくわく」がないと私は文章が書けません。学校で学習した地動説よりも、日々体感している天動説にわくわくを覚えると言え、わかっていただけるでしょうか。私はこの感覚を夜の思考と呼んで大切にしています。これがあるから生きているようなものです。

なお、私は地動説を否定しているわけではありません。そもそも否定できるほど知的な人間ではありません。

このところ連続して投稿している記事は、どれも「知る」という「知」ではなく、「痴（し）れる」という意味での「痴」にながされて書いています。きっと私は痴人なのでしょう。「痴人夢を説く」の痴人です。

#言葉 #日本語 #辞書 #英語 #漢字 #月 #星 #影 #イメージ #連想 #触覚 #体感 #知識

02/27 「ない」を「ある」に変える魔法



＊

「ない」を「ある」に変える魔法

星野廉

2023年2月27日 13:06

目次

言葉を並べて眺める

どのように見ているのか

「ない」を「ある」に見せかける魔法

言葉を並べて眺める

言葉を並べるのが好きです。並べる最中もわくわくしますが、並べた言葉を眺めて思いにふけっているとわくわくが持続します。

抽象、具象、事象、現象、森羅万象、象形、象嵌、象徴、表象、仮象、印象、対象。  
映像、想像、偶像、肖像、残像、映象、画像、鏡像、実像、巨像、音像、写像、現像。

文字を眺めていると影絵を見ているような気持ちになります。影絵を見ながら、つぎつぎと別の絵や言葉の断片が浮かんでくると似た心境です。目にしているのが、文字なのか、文字があらわすとされる「何か」なのか、文字が呼びさます「何か」なのか、その境が不明になってきます。

相手にとっての「触れる、同時に触れられる」は、体感できないという意味で抽象になるわけです。他者を前にして（相手にして）、人は想像し抽象するしかないということでしょうか。想像の「像」と抽象の「象」は影です。「他者を相手にする」とは影を相手にするという意味での「触れ合い」だと考えられます。

(拙文「知ではなく痴にうながされて書く」より)

象も像も影です。人は影に影を見ているのです。それでいながら、影を見ているとはふつうは意識しません。むなしいからだと思います。見えているものすべてが影だなんて、ホモ・サピエンスとしてのプライドが許さないのかもしれない。

「そのもの」「それ自体」を見ていると考えたいのです。私も人間ですから、その気持ちは痛いほどわかります。「そのもの」「それ自体」、ぜひ見てみたいです。

「そのもの」「それ自体」とまで欲張らずに「本当の姿」「真の姿」を見ていると言う人もいます。「姿」と言っているのですから謙虚ではありますが、「本当の」「真の」という怪しげな言い回しに、まだ人としてのプライドを感じないではられません。

往生際が悪いのです。それほどまでに、人は「そのもの」「それ自体」「本当の」「真の」を求めているのでしょう。これだけこだわるのだから、オブセッション（強迫観念）になっているにちがいありません。

だから、見るのです。飽きもせずに見つづけます。ひたすら見て、何かに到達しようと考えているにちがいありません。

「何か」の代わりにその「何か」ではない「別物」で済みます。しかも、済まして澄ましている。こうやって、別物を相手にしていることを忘れようとするのが、太古から続いている人の習性なのかもしれません。

そんなわけで、私も見つづけます。じっと見ます。

実体、実像、実物、現物、事実、真実、真理、本質。

実、体、物、事、真、理。

こうした文字と文字列には、人類の必死な願い、つまり悲願が込められているようです。「そのもの」に到達したいなあ――。彼岸への悲願。叶わない夢。必死すぎて、一方で、むなしさも覚えます。

## どのように見ているのか

悲願を胸に、さらに見つづけてみましょう。

抽象、具象、事象、現象、森羅万象、象形、象嵌、象徴、表象、仮象、印象、対象。  
映像、想像、偶像、肖像、残像、映像、画像、鏡像、実像、巨像、音像、写像、現像。

人が「見る」、「見ている」ことは確かです。何を見ているかという影だと思のですが、何の影なのかがわかるとは私には考えられないので、どうやって影を見ているのかを見てみます。たくさんあるので、目を惹くものから見ていきます。

抽象——抽選や抽出の抽ですから、選ぶのでしょうか。捨て去るわけです。何を捨て去るのかというと、見るのに都合の悪いものでしょう。人は見たいものを見ようとするので、自分が見たいものに近づくように、どんどん捨ててすっきりとスリムにする。そんなふうには私にはこの文字が見えます。

想像——文字どおりに取ると像を想いうかべるです。影や姿や形を想いうかべる。形や姿のないものの影も想いうかべる、もあります。見える物だけでなく、見えない物や事や現象も人は想いうかべるし、思いえがきます。人の想像力はすごいです。いずれにせよ、「そのもの」を見ることができないから思いの中で「影」を浮かべたり描いているのは確かでしょう。

印象——思いの中で、しるされ刻まれて残った影という感じ。「残っている」がキーワードです。人は印象の世界に生きてるとよく考えます。印象の基本にあるのは「似ている」です。ああ、これは何かに似ている。これはあれに似ている。こんな感じですが。人はつねに影を見ているので「同じ」かどうかは確認できません。「同じ」を確認するためには、自分たちで作った精巧な道具や器械や機械を使う必要があります。じっさいに使っています。

実像——じっさいの姿、つまり影ですから、実物ではありません。虚像は、実像の反対とされていますが、私には見方の相違というふうに見えます。

疲れてきました。体力を消耗する作業だと気づきました。この辺でやめておきます。

＊

漢字や漢字の文字列を見ていると、それが文字であり、像であり、影であることを忘れそうになります。そういう「もの」があるように見えてくるし、思えてくるし、感じられてくるのです。

この感じ、何かに似ていると思ったのですが、考えてみたところ、わかりました。仮想現実です。「ない」のに「ある」のように見えるし思えるだけでなく、感じられるようにする仕掛けです。

五感の中で人にとってもっとも大きな意味を持つと言われる視覚や聴覚だけでなく、嗅覚や味覚や触覚までリアルに感じさせてくれる VR とか AR が開発されているそうです。

「ない」のに「ある」ように感じさせる。これが基本のようです、「ない」とか「そのもの」では「ない」にもかかわらず、「ある」とか「そのもので「ある」」ように見せて、思わせて、さらには感じさせる、仕組みである、文字、とりわけ漢字と似ていませんか。

猫という文字をよく見てください。猫に似ていますか？ 私にはぜんぜん似ていないように見えるのですが、それでも猫をさすものとして、人は使っています。使ってきたし、これからも使いつづけるでしょう。

不思議な話です。私なんか考えるたびに腰を抜かしています。これは冗談ですが、何度腰を抜かしても罰は当たらないほど不思議だと思います。

言葉、とくに文字は太古から人が利用している仮想現実（「ない」を「ある」と感じさせる仕掛け）ではないでしょうか。しかも、何の機械も装置も電源も要りません。寝入り際の夢うつつでも、たぶん死に際でも楽しめます。

**「ない」を「ある」に見せかける魔法**

抽象、具象、事象、現象、森羅万象、象徴、表象、仮象、印象、対象。  
映像、想像、偶像、肖像、残像、映像、画像、鏡像、実像。

実体、実像、実物、現物、事実、真実、真理、本質。  
実、体、物、事、真、理。

理想、現実、思考、思想、思索、論理、理論、分析、批判、批評、観念、概念、必然、偶然、読解、解釈、証明、検証、明晰、精緻、存在、核心、展望、俯瞰、探求、差異、同一性。

〇〇主義、〇〇学、〇〇論、〇〇効果、〇〇現象。

私も使っていますが、威勢のいい文字列だという印象を持ちます。こういう言葉が適度にちりばめてある文章は、いかにも賢そうに見えます。「適度に」がポイントです。何ごともやり過ぎは逆効果をもたらします。

固有名詞と同じくまばゆい光を放ちます。見栄え——見映えとも書きますが、映える、つまり輝くという意味です——がいいのです。固有名詞（とくに有名人や偉い人の名前です）や偉そうな（見栄えがいい）言葉をキーワードやハッシュタグにして文章を投稿すると、見る人や読む人が増えます。

読む前に、そういう映える言葉がちりばめてあるのを見て、すごいと感じるのです。見た目で、すごいと感じさせたら、こっちのものです。その文章は半分成功したのも同然だと言えます。人は印象の世界に生きているからです。

逆に、固有名詞（人名だけでなく書籍名や作品名や集団名も含みます）やこういう見栄えのいい言葉が頻出する文章を避ける人もいます。

ここにも一人いますが、固有名詞に「虎の威を借る狐」とか「人の禪で相撲を取る」的な安易さ——なにしろ固有名詞は最小最軽最短であるだけでなく最強の引用なので——を、そして偉そうな言葉にはうさんくささを感じたり、または単に理解力が足りなかったり、へそが曲がっているからでしょう。少数派であることは確かです。

この種の言葉は「ない」を「ある」に変える魔法の言葉なのです。訂正します。「ない」

が「ある」に変わるわけではないので、「ない」を「ある」に見せかける魔法の言葉、です。

何が「ない」の？ 何が「ある」の？ ですか？ 影です。実体とか、実物とか、事実とか、真実とか、そんな話ではなく、影の話をしています。

#文字 # 漢字 # 文章 # 影 # 抽象 # 印象 # 想像 # 言葉 # 魔法 # 固有名詞# 仮想現実  
# VR # AR

02/28 影の精度を向上させる



＊

## 影の精度を向上させる

星野廉

2023年2月28日 09:20

かげ、影、姿、像、声、文字、表情、身振り。

こっちがあっちに映っている。似ているような似ていないような、ときには同じにも見える。映っているのは確か。こっちが手を振れば、あっちも手を振っている。

あっちはこっちとどれくらい似ているのか。あっちのこっち度。こっちのあっち度。

言葉、像、影。

あっちを「そのもの」とか「実体」とか「世界」とか「何か」とか「それ」とか「彼岸」とか呼んで名づけたところで、それはこっちで使っている言葉という影でしかありません。「あっち」はこっち、「こっち」はあっちの影でしかないから、影で影を見ている、影に影を見ているというわけです。

言葉。

手なづけようとして名づけてもなつかない。飼いならせないし、なれてくれないし、なじまない。もどかしい、ままならない。隔靴搔痒。長靴の上から痒いところを搔いても搔いても痒みが続く。夢の中で駆けても駆けても駆けたことにはならない。うつつでどんなに書いても書いても書けていない。藻搔く、足搔く。

何かの代わりにその何かではない別の物で済ましているからです。それが永遠の隔たりとなっているからです。

＊

落書き、絵、影絵、しるし、文字、筆写、印刷、写真、レコード・蓄音機、映画、複写・コピー、デジタル化した情報（映像・音声・文書）の配信・複製・拡散・保存。どれもが「うつす・うつる・うつし」です。

私たちはこうした影たちに何を見ているのでしょうか。世界でしょうか、森羅万象でしょうか。やはり、影に影を見ているのではないのでしょうか。（拙文「影に影を見る」より）

影であっちを見ている、影で影を見ているといっても、あっちのこっち度、こっちのあっち度、影の精度はそこそこあるようです。

なにしろ、影のおかげで、人は月に仲間を飛ばしたり、この星の気温を上げたり、2000年問題に打ち勝ったり（ですよ？）、高速の人工流れ星で敵を攻撃したり脅したりできるわけです。ある程度の精度がなければ叶いません。ぜんぶ、おかげさまのおかげ。かげ、さまさま。

影は実体をある程度正しく反映している、映している、写している。できれば、「移す」まで考えたいところなのです。移すとなると、何かが何かに、何かがどこかに移動するので、物理的な移動と考えた場合には、これはすごいことになります。理論から観測と実験による再現を経て実証する。

念力が可能になったも同然です。念ずれば為る。こっちで念ずればあっちで為る。隔靴搔痒の遠隔操作の有効性と実用性。精神一到何事か成らざらん。サイコキネシス、テレパシー、マインドパワー、ハンドパワー、千里眼、透視、クレヤボヤンス、テレポーション、ぜんぶオーケー。

物理的、そうなのです。メタフィジカルではなくフィジカルにいきたい。人は影の精度を物理的かつ身体的にとらえたいのでしょうか。「映る」とか「写す」なんていかにも影っぽい言い回しでは満足できずに、「移す・移る」という、なんか、こう、移動っぽい、つまりじっさいに何かを動かせる力がほしいようです。

影に働きかけることで、ものを動かす。動けばそれで結果良しとする。影がどれだけ

実体を反映しているかなんて考えているだけ時間の無駄ということでしょうか。

＊

影の精度を磨く。精度を向上させる。精度、向上、です。漢語は見映えがいいし格好いいです。元気も出そう。

あっちがどれくらいこっちか。あっちがどれくらいこっちに似ているか。あっちのこっち度、こっちのあっち度。こんな和語を使った煮えきらない言い方より、漢語のほうが、ずっと「ある」度、つまり現実感や存在感やリアリティ、そして何よりも説得力があります。

「ない」を「ある」に見せかける、いや、「ない」を「ある」に変える魔法。

結局はレトリックの問題なのでしょうか。何と云うかによる、どう語るか次第というわけなのでしょうか。語るは騙る、なんて語るに落ちました。あることないことではなく、存在と無。

「無」を「存在」に偽装し、「無」から「存在」を捏造する魔法、おまじない、お呪い、呪い、*creatio ex nihilo*、*ex nihilo, nihil fit*。

見映えのいい耳にも快い、威勢のいい言葉を使って威勢の言い方をする。これで気合いを入れれば、何とかなります。じっさいに人類はそうやってきたのです。言葉は景気づけのためにあるのです。「影に影を見る」なんていって、意気消沈するためにはありません。

念力が可能になったも同然です。念ずれば為る。こっちで念ずればあっちで為る。隔靴搔痒の遠隔操作の有効性と実用性。精神一到何事か成らざらん。サイコキネシス、テレパシー、マインドパワー、ハンドパワー、千里眼、透視、クレヤボヤンス、ぜんぶオーケー。

テレグラム/テレグラフ (文字)、テレホン (音声)、テレスコープ (像)、テレビジョン

(像)、テレメデシン/テレヘルス (医療)。遠くを近くする。遠くを知覚する。こうやって生きてきたのですから、こうやって生きていきましょう。

念ずれば、テレパシーもテレポーテーションもできるはず。理論から観測と実験による再現を経て実証する。ほんまかいな。

#影# レトリック# 漢字# 漢語# 大和言葉# 和語# 掛け詞# 言葉# 日本語

03/01 言葉が世界を見えなくするとき



＊

言葉が世界を見えなくするとき

星野廉

2023年3月1日 08:16

目次

さわる、さわられる

言葉が世界を見えなくするとき

俯瞰に嗜癖する

部分、全体

さわる、さわられる

路上で負傷して歩けなくなり、通りかかった人におんぶされて、とりあえず安全な場所へと運ばれた。

見も知らぬ人の背中にひしにしがみつकिながら、涙が出てきた。その人の親切にではなく、情けない自分ではなく、悲しいその状況ではなく、懐かしさでいっぱいになる自分がいた。

幼いころに、母親の背中にしがみついていたときの記憶が、腕、手、背中、首、肩、腰、胸、腹、足のさかいなく、全身的によみがえってくる思いがした。

以前に、こんなことがありました。

「腕、手、背中、首、肩、腰、胸、腹、足のさかいなく」と書きましたが、まさにそんな感じだったのです。体の部位のさかいがないだけでなく、相手の体と自分の体のさかいも感じられない一体感を覚えました。

おんぶをされるというのは、相手に抱きつくようなかたちにもなります。背後から抱く感じです。ふだん人と接触することのない私は、あのときほどうろたえたことはありませんでした。

＊

さわる・さわられる、ふれる・ふれられる、おす・おされる、なでる・なでられる、さする・さすられる（こする・こすられる）、あてる・あてられる、つねる・つねられる、ひっかく・ひっかかれる、たたく・たたかれる。

いま挙げたのは、触覚とか触感的な身振り、動作、行為、動詞です。

目をつむって、上の動作をしたり、思いえがいたり、思いだすと分かりますが、「する」と「される」が同時に起きている場合があります。「働きかける」と「働きかけられる」、「かける」と「かけられる」が同時に起きているとも言えそうです。

触覚や触感とは、相手、つまり人や物や生物との双方向で相互的な行為だからです。全身的な行為とも言いたくなります。訳（分け）が分からないのです。対象と一体化するとも言えるでしょう。

触覚の双方向性は、視覚や聴覚や嗅覚や味覚にはない気がします。それだけに五感のうちで最も始原的な体感に思えます。知とはほど遠い感じ分けなのです。

触覚や触感が感じ分けとしてプリミティブであったり、知識や知能とは遠いものであったとしても、後ろめたさを感じたり恥じることはないし、ないがしろにしていいとは思いません。

いずれにせよ、対象がない状態でひとりで触れるわけにはいかないのが触覚や触感です。これと対照的なのが視覚だと思います。視覚は絵にしますから、言葉と相性がいいのです。絵も言葉も、ある部分だけを切りとり、ふるいにかけるからでしょう。

取捨選択が根っこにあるのです。この取捨が、一方的で一方的なものであることに注目しましょう。サディスティックとも言える気がします。

視覚にせよ、言葉での切り分けにせよ、触覚や触感のように双方向的ではありませんから、相手のことを意識しない、考えない、つまり思いやりに欠けるのです。

見ているだけ、言葉だけ、触れよう（同時に触れられよう）とはしない。触れない以上、対象との間に距離があるのだから当然ではありますが、ダイレクト（直接的）なかわり合いでない（遠隔操作になる）ことは確かです。

（視覚だけでなく聴覚と嗅覚でも、対象との間に距離があります。味覚や食感はといえば、対象に舌や唇や歯や口内の粘膜が触れるわけですが、相手を食べるのですから、触覚や触感と同様に、対象との間に距離がないとか、ダイレクトなかわり合いだとか、双方向的だと言っても、それはブラックでシックなジョークでしかありません。）

そんなわけで言葉は抽象と相性がいいと言えそうです。繰り返しになりますが、言葉の基本的な身振りは「分ける」「切り分ける」だからです。部分に分断するのです。余計な部分は捨てることもあります。つまり抽象です。その代わり、すっきりはします。ある程度は。

＊

こどもをだっこしていると、抱いているのか抱かれているのか分からない気分になることがある。これは、ある女性から聞いた話です。子をもった経験のない私は感心しながら聞いていました。

「あと、お乳をやっているとき、うちは男の子なんですけど、乳首を口でふくまれていると、何というか、夫と重なるんです——」

女性はそこで口をつぐんで、その話はそれで終わったのですが、それ以上尋ねる気にはなりませんでした。

＊

性行為のときに、するとされるのさかいが不明になるとか、自分の体と相手の体のさかいが消えた感じがするとか、自分がどこにいるのか、何なのか、誰なのかが頭のない状態におちいる。

そうした状況は、小説、映画、テレビドラマで繰り返され出てきます。表現の仕方しだいで、いやらしくも、うつくしくも、きれいにも、きたならしくも、ほっこりにも、暴力的にもなります。

「する・される」が不明になるのは、性行為だけでなく、読むとき、書くとき、映画や動画を見るとき、お芝居を見るとき、歌を歌ったり、音楽を聞くときにも起きる日常的な体感ではないかとも思います。

私は不案内なのですが、たぶん、ゲームやスポーツや楽器の演奏でもあるのではないのでしょうか。

そういう状況をどう言葉にすればいいのでしょうか。描いた言葉はあります。数えきれないほどあります。文学でも、学術的な論文でも。でも、しっくりこないのです。

そうかなあ。そうだったかなあ。そういうものなのかなあ。

言葉に期待しすぎているのかもしれません。

＊

なぐる・なぐられる、ひっぱる・ひっぱられる、つきだす・つきだされる、つつく・つつかれる、ひっぱたく・ひっぱたかれる。

こうした行為、動作もひとりではできません。相手や対象とのかかわりあいから生まれる出来事です。

「する」と「される」が言葉として既にあるから、それらをつかうだけの状況に投げ

こまれている。それが人と言葉の関係であり、その言葉とは必ずしも世界や現実を「正しく」反映したものではないのです。

いま「正しく」を括弧に入れたのは、そもそも「正しい・正しく」なんてあるの？  
と思っているからです。言葉は欠陥品だと考えているので、慎重になってしまうのですが、人それぞれです。

\*

なぐりあう、ひっぱりあう、つきだしあう、つつきあう、ひっぱたきあう。

このように「あう」をつかうという妥協策もあるのですが、なんだか笑ってしまいました。

ふれあう、ふれあっている、さわりあう、さわりあっている、なであう、なであっている、だきあう、だきあっている。

うーむ。そういう話でもない気がします。なんか、こう、しっくり来ないのです。「する・される」が不明である、あのわけの分からない一体感と恍惚とは隔たっている気がします。やっぱり言葉で分けたところで分からないのかもしれない。

### 言葉が世界を見えなくするとき

車の運転をする人も同乗者も移動しながら静止している、静止していると思いきこんでいるが、じつは動いている。

こういう文を書いていると、自分の表現力のなさを棚に上げて、言葉はなんてまどろっこしいのだろうとか、言葉にもてあそばれているなあ、なんて思うことがあります。

記述は、既述であり、奇術であり、詭術でもあると感じる瞬間です。

つまり、言葉をつかって「しるす」行為つまり記述は、すでに何度もしるされた言葉

や言い回しを「なぞる」ことで、言い換えると既述であり、そもそも言葉ではない事物や現象を、もっともらしく言葉に置き換えて「描写しました」とか「説明しました」と澄ましているという意味で奇術であり、ひいては語ることで騙る、要するに人を「だます」のですから詭術である、というわけです。

いま書いたような騙りに満ちた文自体が、記述であり、既述であり、奇術であり、詭術なのですから、語るに落ちるところか、騙るに落ちるという感じで、呆れかえって思わずのけぞりそうになる自分がいます。

＊

言葉は物を見えなくしているのではないか。いや、正確には言葉で物が見えなくなっていることもあるのではないか。そんなふうに思います。

たとえば、「〇〇する」と「〇〇される」という言い回しがあるから、ある物や事や現象を見て、「する」と「される」に「分けて」しまう。それで「分かった」気分になるという意味です。

でも、じっさいには「する」と「される」のさかいが不明な状況というのは多々ありそうです。訳が分からないというよりも、一時的に分けが分からなくなっているだけだから、時間をかけて真摯に丁寧に分けていけばそのうち分けが分かるはずだ。そのように楽観できるたぐいの問題なのでしょうか。

世界はそんなに単純明快だとはとうてい思えないのです。

＊

言葉をつかうと世界は「ある程度」単純明快に見えるでしょう。言葉の世界に入るからです。言界は現界とは異なります。「ある程度」の対応や関係はあるにちがいません。

人は言界（言葉の世界）と現界（現実の世界）と幻界（思いの世界）のあいだを行き来している、あるいは複数の界に同時にいる、とも言えそうです。ただし、限界があります。それぞれの界が一对一に対応した関係にあるわけではないからです。

食い違い、ずれ、ゆがみ、誤差、欠損、干渉、錯覚、ノイズがあるはずで、それが限界です。限りがあるわけです。かぎりなくかぎりがあるはずで。

あらゆる現象や、言象や幻象が、たがいに整然と対応しあうという形で、人に都合よく存在しているわけでもないでしょう。いや、存在するどころか、しょせん、どこかの阿呆がつくった自分語でしかありません。

＊

言界は現界に追いつけません。言葉や言い回しの数が圧倒的に少ないからです。現界の複雑さについていけないのです。これが言界の限界である減界です。

限りなく少ないもので限りなく多いものを組み立てようとするに土台無理があるのです。少ない限りには単純明快に見えるという利点もあります。

複雑で難解なことを簡潔で平明に——そこそこの数で無数を説明する利点はそこにあります。が、「そこそこ」であるという限界を念頭に置かないと過信にいたるのは分かりやすい話だと思います。

分かったつもりになってしまう恐れがあるという意味です。ある意味怖いです。人は分かりやすいものや分かりやすい世界を蔑ろにする気がします。チョロいと感じてしまうのです。

### 俯瞰に嗜癖する

目に見える世界、つまり眼界もまた、限界にあります。視野と視点とは、枠と焦点でもあります。つまり、見える範囲には限りがあり、見るとは見えている部分を忘れて意識に置かないようにして、ある一点に集中することです。

視野全体をまんべんなく見ることができる人はいないでしょう。焦点があるからです。

集中すれば、捨てる部分が必ず出てきます。捨てないで集中しようなんてありえません。虫のいい話です。

俯瞰や展望とは、世界や宇宙の、ある部分をながめることにほかなりません。威勢のいい言葉に惑わされてはいけません。全体とは必ず部分なのです。あらゆる俯瞰と展望は局所的、つまりローカルなものだと言えそうです。

＊

人は俯瞰が好きです。嗜癖（しへき）し依存しているとしか考えられません。

何でも視覚化できるだけでなく、何でも俯瞰できると思いこんでいる節が見られます。地域地図、世界地図、航空写真、宇宙の画像。集合写真も、俯瞰の一種かもしれません。クラスの全員が映っていれば、全員を把握した気分になれるからです。

俯瞰とは、場所、つまり空間だけではありません。時間的な俯瞰もあります。スケジュール表、タイムライン、カレンダー、年表などは、時間を見える化するだけでなく、時間の流れを時系列で視覚化する仕掛けとか仕組みとか装置だといえるでしょう。

地誌・地史、家系図、伝記、国の歴史、世界史、文学史、音楽史、科学史、宗教の歴史というぐあいに、個々の事象にまつわる出来事を時系列で記述しようとする人の試みと情熱には驚かされます。

図書館、博物館、美術館、博覧会も、それぞれが俯瞰の一形態だと見なすことができるでしょう。百科事典、辞書、図鑑、博物誌のたぐいも、空間（地球・宇宙）だけでなく時間（歴史・有史以前）の俯瞰を指向していますね。人の飽くなき意志と欲求に驚かされます。

＊

話を縮小します。

地誌・地史、家系図、伝記、国の歴史、世界史、文学史、音楽史、科学史、宗教の歴史

——。歴史は時間的な俯瞰と見なすことができますが、それぞれの歴史は、やはりローカルなものです。

ある部分、ある特定の要素、ある特殊な視野と視点（立場）からながめているだけです。

たとえば、世界史という言葉は言葉の綾です。世界史という言葉があるから世界史があると思ってしまう。

各国、各地域、各言語圏、各文化圏にそれぞれの世界史があります。世界史はローカルなものなのです。「世界史」間の闘争も起きています。戦争にもなります。

しかも、いま挙げた各〇〇の中に、さらにさまざまな考えや意見に基づく世界史があります。この国でもあります。「世界史観」間の争いもありますね。話が、ややこしくてごめんなさい。

普遍的な世界史などないのです。それぞれの立場と視点による無数の世界史があると言えます。世界史とは名前だけがそうなっているのであって、ある時代のある時期という時間、ある場所という空間の制約の中にあるわけです。

人に世界が俯瞰できるわけがないじゃありませんか。時間的にも、空間的にもです。世界地図という言い方も言葉の綾という意味です。

このように人には、自分にできもしないことや自分に検証もできないことを言葉にする習性があります。真理や普遍や客観や魔法や悟りがそうです（努力目標なのかもしれません）。

\*

言界は現界とずれています。どれくらいずれているかは、人それぞれでしょう。印象の問題だからです。そこそこずれているか、とほうもなくずれているか。

言界と現界がそこそこ対応していると感じて、たとえば世界史という言葉が文字どおりに取ってしまう。これは致し方ないことです。

人は目にした文字、読んだ文字を、いったん信じます。信じないと読めないからです。読むことは信じることなのです。

判断、批判、否定、評価は、信じた後に来ます。ただ信じることの容易さにくらべて、判断、批判、否定、評価にはエネルギーを要します。考えなければならぬし、調べることも必要でしょう。

面倒なのです。だから、たいてい「信じた」だけが残ります。

\*

「ない」のに「ある」ように感じさせる。これが基本のようです、「ない」とか「そのものでは「ない」」にもかかわらず、「ある」とか「そのもので「ある」」ように見せて、思わせて、さらには感じさせる、仕組みである、文字、とりわけ漢字と似ていませんか。

猫という文字をよく見てください。猫に似ていますか？ 私にはぜんぜん似ていないように見えるのですが、それでも猫をさすものとして、人は使っています。使ってきたし、これからも使いつづけるでしょう。(中略)

言葉、とくに文字は太古から人が利用している仮想現実（「ない」を「ある」と感じさせる仕掛け）ではないでしょうか。

(拙文「「ない」を「ある」に変える魔法」より)

言葉の世界は仮想現実というよりも、疑似現実だったり偽装現実だったりするのかもしれない。

## 部分、全体

空間的なものにして、時間的なものにして、俯瞰はローカル、つまり局所的なものしか、ありえません。そもそも視野自体が枠であって、枠には限りがあります。

俯瞰の語義としてある「全体を見おろす」というのは「部分を見おろす」であるという意味です。あくまでも見ているのは部分なのです。

また視野全体をまんべんなく見ることができる人はいないでしょう。焦点があるからです。集中すれば、捨てる部分、見ない部分が必ず出てきます。

「捨てる」と「見ない」を選択と排除と言い換えることもできます。その結果として、「たまたま残ったもの」が、たとえば歴史を構成するのです。必然でそうなっているわけではありません。

また、良いものが残ったとは必ずしも言えないでしょう。運が良かったとは言えると思います。すごい強運です。

文学史、音楽史、美術史、科学史、宗教史。

残ったものは強いです。無言で既得権益を主張することができるからです。しかも誰も既得権益とは言いません。

遺産や古典としてもてはやされます。それしか残っていないのですから、失われた同時代のものと比較できません。褒めるしかないでしょう。

長く残っているものにはファンも多いです。崇拜者もたくさんいるでしょう。ますます評価されます。ただし競争者のいない評価です。

結果オーライということです。

\*

部分なき全体、つまり全き全体とは抽象でしょう。抽象は便利です。焦点や視点と同じく、捨てること、無視することで成り立つからです。つまり、抽象とはすかすかだという意味です。

すかすか、すっきり、軽い、短い、小さい、薄いがもてはやされる現在は、抽象が優先される世界なのです。

0 か 1 かを単位として無数を処理するコンピューター、投稿・複製・拡散・保存が瞬時に同時に並行して起きるインターネットがあらゆる活動の根っこにある世界だから当然であり必然でしょう。

部分に集中することで全体をながめるという抽象は、人類の悲願だと思われませんが、それは彼岸の話でしょう。この世ではありえない話です。虫のいい、貪欲な願望であることは確かです。

幻界ではありえる話でしょう。幻界はそうした不条理で荒唐無稽な話に満ちています。現界での、願い、思い、祈りは、人の幻界で花咲きます。

\*

以上、する・される、部分・全体、分かる、世界史が言葉の綾ではないかというお話でした。

#体感 # 五感 # 触覚 # 視覚 # 知能 # 知識 # 抽象 # 俯瞰 # 世界史 # 言葉# 日本語

03/02 おもかげ



＊

**おもかげ**

**星野廉**

**2023年3月2日 08:09**

毎日インスタグラムで更新される犬のアカウントを見ている。四年前に半年だけ飼った犬と同じ犬種が出てくるアカウントです。

これが同じ動物だとは信じられないくらい、犬は犬種によって容姿ががらりと違いますが、同じ種類だとその面影をたどることができるので、ついついそのアカウントのわんちゃんを見てしまいます。

楽しくもあり切なくもある習慣です。私の病状が急に悪化したために飼い続けるのを断念したという事情があるからです。その子は現在新しい家族のもとで暮らしています。

私はあの子ではない犬にあの子の面影をたどっているわけですが、面影はいい言葉ですね。面と影の組み合わせがわくわくする連想を呼ぶし、辞書にある語義や例文を読んでもみるとぞくぞくします。

私がよくつかっている、「何かに何かを見る」や「影に影を見る」という言い回しと似た発想の語義もあります。

そのほか辞書には「面影に立つ」とか「面影付」という知らない言い回しの説明も載っていました。

森鷗外が「於母影」という訳詩集を出していたと知ったのも収穫でした。鷗外主宰の結社の同人による翻訳詩を集めた本らしいのですが、翻訳というところに「おもかげ」の

意味が重なります。翻訳とは原文のおもかげを別の言語による「かげ」にたどる行為ではないでしょうか。

かげにかげをたどる。かげにかげを重ねる。かげにかげをうつしみる。

\*

母の見える「於母影」という当て字も、想像力をかきたててくれます。文字の姿と意味と、それらが連想させるイメージで頭の中がいっぱいになります。イメージのどれもが断片的でとりとめがなく、なかなか一貫した像を結ばないのです。

「かげ、影」には、目に見える物の姿、物の姿が何かに映る影、影を作る光のほかに、人が思いの中でいだく人の顔や姿という意味も辞書の語義にあります。その意味が「おもかげ」という言葉によく出ています。

「おも」に顔という意味の「面」だけでなく、「表、重、思、想、念」を感じないではいられません。表層は薄く軽いようで人にとっては厚く重いのですが、それこそが思いから生じる「かげ」なのかもしれません。

「面影を抱く」とはふつうは言いませんが、そうした人のうちにある思いとしての影(像)は、「いだく、抱く、だく、抱える、かかえる」ものです。そして、「いだく、だく、かかえる」という動作は、こちらが「ふれる」と同時に相手も「ふれる」という、触感をともなう双方向的なかかわり合いだと考えられます。

「いだく、だく、かかえる」という行為では、物理的には、こっちが相手や対象に接触するのですから、相手と対象もまた「いだく、だく、かかえる」側にあるわけです。こっちとあっちが「する、される」を相互に同時に体感する関係にあると言えます。

内なる影の場合には、ひとりの中で分裂が生じるわけです。思いやった結果として、ひとりがふたりになるのかもしれません。

その体感が残るのが、「おもかげ」なのでしょう。私には「おもかげ」が視覚的な像、つまり姿だけだとは思えません。また対象が人だけでないのももちろんです。

見たもの、聞いたもの、触れたもの、歯で噛んで舌で味わったもの、鼻を震わせて嗅いだもの、身体で気配として感じたもの、そうしたものの「かげ」が人の中にうつり、残って、いただくものになっているとき、それらぜんぶを「かげ」とか「おもかげ」と呼んでいいのではないのでしょうか。

そうやって何かがつつてきた人のうちにおいては、ひとりがふたりになるような気がしてなりません。

この人にあの人の面影を見て一瞬どう応じていいか戸惑ってしまった、ある声を聞いているうちに知っている別の人が話しているような心持ちになり相手の顔をまじまじと見ていた、ある手触りが遠い過去の手触りを蘇らせてうろたえた、この舌触りと歯ごたえはあれにそっくりだ、いま嗅いだ香りがこどもの頃のあの日の匂いとながりに無性に泣きたくなる、いまをもう一つのそっくりないまがいきなり追いかけてきて重なる、誰もが経験するデジャ・ビュと呼ばれるあの現象。

こうした瞬間に内なる自分はふたりに分かれ、二つの時空をまたいでいるのではないのでしょうか。人は影や面影をいただくとき、だかれている気がします。だから寂しくないのかもしれない。

おもかげは「倂」とも書くらしいのですが、これは人と弟をくっつけた字なので気になって漢和辞典を調べてみました。「兄弟は似ている」からという、いかにも分かりやすい説明があり、さらに日本製の漢字だと書かれていて笑ってしまいました。お茶目な感字ですね。

＊

上で述べた意味での「かげ」と「おもかげ」をつかった言い回しと例文を辞書で見ましょう。

亡き母の影を慕う、往年の面影をとどめる、母親の面影がある、亡き父の姿が面影に立つ（広辞苑）、かすかに昔日の影を残す、亡き人の面影をしのぶ、目もとに父親の面影がある（デジタル大辞泉）、古都の面影は今やない（goo 辞書）

「慕う、とどめる、ある（ない）、残す、残る、しのぶ」と相性がいいようです。「見つける、見いだす、さぐる、さがす、求める、たどる、追う、重なる、消える」とも組みあわせることができるでしょう。

こうやって影と面影のつかい方を見てみると、

<物の表面や人の顔に、何かを見る。ぺらぺらした薄いものに奥行きとして、またはその中や裏にある深みとしての「何か」を見る。いなく。そこにはないものを、そこに見る。さぐる。>

という感じがします。「おも、面、表、重、思、想、念」です。

重みがあるといっても、そのうち消えるのではないかというはかなさも感じます。影だから、当然なのかもしれません。

#面影 # 影 # 於母影 # 倂 # 森鷗外 # 翻訳 # 言葉 # 文字 # 漢字 # 日本語# 触感 # ミニチュアシュナウザー

03/03 かげ、figure



＊

かげ、figure

星野廉

2023年3月3日 08:30

目次

そこにはないものを、そこに見る

かげ、figure

英語の figure

形、形態、形状、外観

数字、計算

人の姿、人影、肖像、人物

図案、模様、図、図解、さしえ

フィギュア

名詞として、動詞として

音型、音形、モチーフ

文彩、言葉の綾

私のイメージする figure

そこにはないものを、そこに見る

森鷗外が「於母影」という訳詩集を出していたと知ったのも収穫でした。鷗外主宰の結社の同人による翻訳詩を集めた本らしいのですが、翻訳というところに「おもかげ」の意味が重なります。翻訳とは原文のおもかげを別の言語による「かげ」にたどる行為ではないでしょうか。

(拙文「おもかげ」より)

私は辞書を読んだり眺めるのが好きなのですが、これは国語辞典だけに限りません。英和辞典や仏和辞典もときどき眺めます。眺めると言っても、ある特定の語の欄だけです。わくわくするために眺めるので、その相手はどうしても好き嫌いで選んでしまいます。

英和辞典と仏和辞典で繰り返し読み、眺めるのは figure という単語です。私の中で、figure は日本語の「かげ」ときわめてよく似たおもかげを感じさせてくれる文字列なのです。

仏和辞典よりも英和辞典で見るほうが、その印象は強いです。大きめの英和辞典で figure の語義や例文を見ているときに覚える既視感は、「かげ」を見ているときに感じる心境と、そっくりとは言わないまでもとてもよく似ています。

逆に国語辞典で「かげ、影、陰（蔭）、翳」を見ていると決まって思いだすのも figure なのです。

かげ、影、陰（蔭）、翳

figure

どう見ても似ていません。

「かげ、影、陰（蔭）、翳」と figure のことなのですが、文字として、文字列としてはぜんぜん似ていません。この似てなさは、猫という文字が猫に似ていないのと似ています。

でも、似ています。気配、かげ、おもかげが似ているのです。

似ていないのに似ている。これは言葉においてはぜんぜん矛盾しないのです。それが言葉のありようだからです。具体と抽象が同居しているのが言葉のありようとも言えます。

文字や文字列で、上の両者を見ていて「異なる」——違った文字であり文字列だ——と感じるのは具体的な体験です。

一方で、似ているとか同じだと感じるのは文字と文字列という視覚的な像である具象の向こうに、意味なり語義なりイメージという手で触れることができなものの、つまり観念や抽象を見ているからです。

文字と文字列（具象）に、それとは別のもの（抽象）を見ている、言い換えると、そこにはないものをそこに見ているわけですが、これは影や面影を見ているのと似ていると言えば、分かりやすいかもしれません。

＊

そこにはないものをそこに見る。影や面影を見る。こうした行為は、日常生活において、人が物の形を見たり、人の姿を見たり、物や人の形や姿を思いうかべたり思いだしたり思いえがいたりするときに、誰もが体感しているはずです。

「かげ、影、陰（蔭）、翳」と「figure」、そして辞書にあるそれぞれの語義や例文は、まさにそうした体感を、言葉の顔や表情や身振りとして見せてくれる。そんなふうに私は思います。

これは——ややこしい言い方ではありますが——具象と抽象の同居という言葉ありようでもあるのです。

辞書に載っているのは意味ではありません。言葉なのです。意味を見たことがあるでしょうか。触れたことがありますか。

話し言葉であれば音を聞くことができます。文字であれば、形を見ることができます。それが言葉です。具象としての言葉だと言えるでしょう。

見ることも聞くことも触れることもできない意味は抽象なのです。意味もまた言葉を成り立たせているのは事実です。意味という言葉をつかうかぎり、抽象を免れることはできません。

そうであれば、言葉という具象と抽象の同居と積極的にかかわり、戯れようではありませんか。

＊

以上述べたことは、国語辞典や○和辞典だけにとどまりません。

たとえば、小説に書かれているのは言葉であって作者の意図ではなく、思想書と呼ばれる本に書かれているのは言葉であり思想ではありません。こうしたことにきわめて敏感であり、意識的に言葉を書いていた人たちがいる時期のフランスや英米加にいました。

現代思想とか新しい批評という言葉でくくられたことのある一連の本や論文が立て続けに発表され、飛ぶように売れもした時期が以前はあったのです。

そうした本や論文が日本に紹介されたとき、言葉を意味や思想や意図に置き換えるのではなく、書かれた言葉そのものに視線を向けるという手法を取った人たちがいたのですが、その紹介者たちがの多くが思想ではなく文学研究の担い手であったことは注目していい事実だと思います。

それにもかかわらず、書かれた言葉にもっぱら思想や思考や世界観や生き方や本の宣伝文句を、または意図や美意識や伝統や人生観や伝記や単なる筋や誰かの貼ったレッテルといった抽象を読む人たちがいまもあとを絶たないのは、具象と抽象の同居という言葉のありようが根強くあるからにちがいありません。人はこれなしでは生きられないようです。もちろん、この私を含めての話です。

いい悪いとか正しい正しくないとか、否定できるできないといったことがらでないのは確かでしょう。

＊

繰り返します。そうであれば、言葉という具象と抽象の同居と積極的にかかわり、戯れようではありませんか。

では、じっさいに見てみましょう。

## かげ、figure

まず、「かげ」から見てみます。複数の国語辞典で「かげ、影、陰（蔭）、翳」を調べる

と、おおよそ次の語義があります。

・目に見える物や人の姿、物や人の姿が何かに映る影、何かに映った影を作っている光、人が思いの中でいただく人の顔・姿や物の像、物や人にさえぎられてその後ろにできる暗い場所（陰）

つぎに figure を見てみますが、複数の英和辞典で figure を調べると、次のような語義があります。

・【名詞】形・形態・形状・外観、人の姿・人影、人物・肖像、有名人・名士、挿絵・図・図形、フィギュアスケートのフィギュア（動作・図形）、表象、数字・計算・総額、音楽のモチーフ、計算、模様、言葉の綾  
 ・【動詞】計算する・見積もる・数字で表す、想像する・心に描く・思う・考える、かたどる・彫像や絵画として表す

フランス語の figure と英語の figure の語義はぴったり重なるわけではぜんぜんありませんが、似た印象を私は受けます。ただし、顔や表情の意味が強いのが特徴であり、最大の違いは英語のように動詞として使われない点です。

フラン語での figure を大ざっぱに分類すると以下ようになります。

・顔・顔つき・表情、有名人・名士、挿絵・図・象徴・写真・図表・模様、フィギュアスケートやダンスのフィギュア・フェンシングの構え、人物像・肖像、言葉の綾

【※参考資料：広辞苑（岩波書店）、ランダムハウス英和大辞典（小学館）、リーダーズ英和辞典（研究社）、ジーニアス大英和辞典（大修館）、スタンダード英和辞典（大修館）、プログレッシブ英和辞典（小学館）】

以下では、上で見た英語の figure の語義を小見出しに分けて、それぞれの語義について私がいっているイメージを書いていくことにします。

## 英語の figure

英語の figure の底にあるのは、「形」および「形としてあらわれること、あらわすこと」のようです。語源の欄に「でっちあげる」があってはつとします（ジーニアス英和大辞典）。

figure の語義（辞書に載っている意味）とそのイメージ（私のいただいている個人的な印象）を細かく見ていきましょう。

## 形、形態、形状、外観

形、形態、形状、外観——というふうには、英和辞典に載っている語義は訳語、つまり日本語です。確かに「意味」とも言えますが、そもそもこれは日本語の単語なのです。言葉の意味（意味とは本来は見えないものであるはずですが）、見える言葉として説明されているとも言えます。

英和辞典を読むとき忘れがちな、この事実はどうなにか強調してもしすぎではないと思います。

念を押しますが、辞書に載っているのは意味（抽象）と言うよりも言葉（具象）なのであり、言葉のうちでも文字（具象）なのです。これを漠然と曖昧に「意味」（見えない観念）だと考えると悪しき抽象——私が勝手そう呼んでいるだけでそんなものはありません、これもまた抽象だからです——におちいることがあり、要注意です。

＊

形、形態、形状、外観——figure の持つある側面を日本語の文字としてこう変奏されると、そこに見える漢字や漢語にそなわった身振り、つまり形の喚起力に感心します。それぞれの形が異なっています。意味という見えないものが、具体的な文字の違いとして形を取ってあらわれているわけです。

「ぜんぶ同義だ」とか、「ぜんぶ同じだ」とは悪しき抽象でしかありません。上の文字列では、異なる日本語の単語が並べられ、同時に変奏されているのです。変奏ですから、ずれていく形とそれぞれの形が呼びさますイメージ（意味でもいいです）は異なっています。

私にはこれをぜんぶ同じだという勇氣はありません。

形、形態、形状、外観——。じっと見つめましょう。それぞれの言葉（文字列）の形が、言葉としての語義やイメージを擬態しているのか、またはその逆の事態が生じているのかが不明になり、私はわくわくどころかぞくぞくします。

## 数字、計算

フランス語の figure にはない数字と計算という語義が、英語の figure にはあるのですが、私にはこれが意外であり、考えこみそうになります。語源やその意味がどのような経緯で生まれたのかを調べて知りたいと思うのではなく、勝手に自分で想像してしまうのです。

数という抽象的なものを人が扱うためには、おそらく形のある物に置き換えないと難しいのではないかと想像します。たとえば、I、II、IIIや、一、二、三のように、物を模した形が数字になったのかもしれない。この場合に頭に浮かぶのは、指とか小枝とか小石です。あと貝殻も。

リーダーズ英和辞典には「(アラビア) 数字」という記述があり、ローマ数字と漢数字を連想していた私は苦笑してしまいます。

## 人の姿、人影、肖像、人物

「人の姿」を「人影」に置き換えると、その文字が連想させる「影、かげ」というイメージに魅惑されます。

自分の姿を肉眼では目にできない宿命を負った人間が、自分の姿を地面や壁に映った影として見る、または水面に映った像として見るのですから、はかなげで切ない気がしてなりません。

地面に落ちたり伸びる影も、水面に映る影も長くそこにとどまるものではないからです。

人が絵を描くことを覚えて姿が肖像となり、つくった話や物語の中に登場する人間が人物（キャラクター）になっていったのでしょうか。絵や言葉からなるフィクションに、人物やその姿が生き生きとした形であらわれるようになっていった。そう考えると興味深いです。

### 図案、模様、図、図解、さしえ

図案、模様、文様、紋様、デザイン、図、図解、さしえ、図形。こう並べてみると面白いですね。人において視覚がどれだけ大きな意味を持っているかがうかがわれます。身の回りを見まわすと、こうしたものだらけだと気づきます。

テレビを見ても、パソコンでネットに入っても、絵や像や模様や図に満ち満ちています。ぜんぶ見るものです。

人に備わった「見る」という行為が、その意味とイメージをはらんだ「意味」という言葉を生み、その「見る」が「まねる」「えがく」「かく」「つくる」という一連の視覚をとまなう行為や動作を増殖させていったのでしょうか。

想像すると気が遠くなりそうです。軽い目まいも覚えます。もちろん、気持ちがいいという意味です。こういう想像が私は大好きなのです。これがあるから、この文章を書いているのであり、これがあるから毎日生きていると言っても言いすぎではありません。

### フィギュア

日本語で頻繁につかわれる「フィギュア」はダンスやスケートのフィギュア、つまり舞台上や氷上に描く図形から来たようです。人形の「フィギュア」もカタカナでよくつかわれていますね。

## 名詞として、動詞として

形を描く、形のあるものをいじる。英語ではほとんどの名詞が動詞としてももちいられる点が、日本語を母語とする私には興味深く感じられます。

たとえば、Don't dog me. で「(犬みたいに) 私を追いまわすな」、Please water these plants. で「(花などに) 水をやってください」となります。日本語では「行く (iku)」「食べる (taberu)」「整う (totonou)」みたいに「ウ段」で終わるわけですが、言葉の形のありようを比較してみると不思議です。

figure は「計算する、見積もる、数字で表す」「想像する、心に描く、思う、考える」「かたどる、彫像や絵画として表す」という動詞としてももちられています。

英語の figure には名詞だけでなく動詞があることで、figure の層が増し、さらに楽しい読み物になっていると感じます。

## 音型、音形、モチーフ

音楽に無知なので「音型、音形、モチーフ」という語義の意味は想像するしかありません。音にも形がある。音が心の中に形となってあらわれる。そういうことでしょうか。うっとりするイメージです。

大きめの英和辞典を読むと、さまざまな専門用語としての訳語が出てきて、驚かされることがよくあります。詳しい意味を知りたい場合には、さらに国語辞典や百科事典で調べたり、専門書に当たらなければなりません。

勉強が苦手な私は、その意味を想像してわくわくする楽しさのほうを選びます。

## 文彩、言葉の綾

修辞学や批評や文学研究で使用される訳語である「表象、象徴、比喩、文彩、ことば

のあや」と並べると、個人的にはぞくぞくします。

「比喩で（として）表す、表象する」、「登場する、出る、顕著に現れる、重要な役を演じる」、「筋が通る、意味を成す、理にかなっている」というイメージが頭に浮かびます。私は「正しい」とか「正しくない」にはこだわりません。

研究者でも探求者でもない私には、自分にとっての figure が大切なのです。知識や蘊蓄や含蓄は苦手です。

### 私のイメージする figure

もともとないものを心に浮かべるのは、空（くう）を「なぞる」に近い気がします。見えないけどなぞる。そこにはないけどなぞる。ひまつぶしになぞる。ぼんやり見えるものをなぞる。

なぞっているうちに何かが見えてくる。見えてきたものを逃さないために、さらになぞる。

空をなぞる。これがつくる、でっちあげるの一步手前の身振りなのかもしれません。ただし、次の一步は長い気がします。なぞるが無数に繰り返されて、たぶんいま創作や文芸と呼ばれるものがあるのではないのでしょうか。

ひょっとすると、文学や芸術だけでなく、科学と呼ばれる分野での発明や発見も、さらには広く文化や文明においても、空をなぞることが切っ掛けになって、「つくる（作る、造る、創る）」といういとなみが起こってきたのではないのでしょうか。

空（くう、そらやからでもいいです）をなぞる——これが私の figure のイメージです——の次の一步は永遠の途上にあるのではないのでしょうか。

何をなぞっているかは人には不明。なぞっているうちに形があらわれる。その形にうながされて、ものやことを「つくる」。

だから、なぞる。人はなぞりつづける。

英和辞典の figure に並んでいる言葉たちを見ているとそんな気がします。見ていて飽きません。

#意味 # 抽象 # 具象 # 辞書 # 国語辞典 # 英和辞典 # 仏和辞典 # 英語# フランス語  
# 日本語 # 影 # figure



03/03 柳瀬尚紀先生の思い出に



＊

## 柳瀬尚紀先生の思い出に

星野廉

2023年3月3日 14:51

かつて翻訳家を志していた私は、柳瀬尚紀先生の訳業から多大な影響を受けています。昨日（3月2日）は柳瀬尚紀先生の誕生日だったので、先生の思い出に、先生が出てくる過去の記事を再掲します。

以下はテキストエディタとして保存してある記事のバックアップです。記事のあるアカウントは削除して、いまはありません。

なお、冒頭の「[「外国語」で書くこと](#)」は、2010.02.16 に書いたブログ記事の再掲なのですが、いまの私がやろうとしていることがよくあらわれている文章だと思います。13年経って、なおも引きずっているものがあるのです。私にとっては愛着のある文章です。

柳瀬尚紀先生とその訳業については、ウィキペディアの解説で簡潔にまとめられています。

柳瀬尚紀 - Wikipedia

[ja.wikipedia.org](http://ja.wikipedia.org)

目次

◆ [「外国語」で書くこと](#)

◆ [「言葉は魔法.....。」](#) < [言葉は魔法・004](#) >

◆ [目に入りやすい言葉、耳に入りやすい言葉、ずっと入ってくる言葉](#) < [言葉は魔法・022](#) >

## ◆最後に

### ◆「外国語」で書くこと

2020/09/24 15:05

「母語」の中で「外国語」で書くこと。そのような話を、大学時代に見聞きしたことがありました。だれが、どのような文脈で言っていたのか、書いていたのかは忘れました。大切なのは、そうしたイメージとフレーズが、今、ここで、自分の中にあるということです。

「母語」を括弧でくくったのは、それが抽象的なものだからです。だれにも、知覚できず、極論を言えば、その存在さえも、明確な形で検証できるものではない。それくらいの意味です。「外国語」を括弧でくくったのは、それが比喩だからです。たとえですから、あくまでも、言葉の綾であり、これまた抽象的で、存在や真偽の検証など不可能というか、検証の埒外にあります。

そうした、ないものづくしの、お話をしているのです。「うつせみのたわごと」というタイトルで連載した記事たちは、とりあえず「母語」と呼ばれている言葉をもとに、つたない書き手である自分が、わざと、くずし、まげて、つづった書き物です。「くずし、まげた」という点が、括弧つきの「外国語」と表記した理由とも言えるでしょう。

\*

ふだん、自分がこうして書いている書き方の枠を「ずらした」とも、言えそうです。いつも自分を縛っている枠であれば、気がつかないのが当然でしょう。でも、その枠をずらせば、「縛り」や「締め付け具合」が気になるものになることは、想像しやすいと思います。いつもと違ったベルトをする。買ったばかりの服を身につける。新しい靴を履く。そんな場合に感じる、違和感を思い浮かべてください。

違和感は、心地よいものであったり、窮屈なものであったりするでしょう。「うつせみのたわごと」シリーズでは、なるべく大和言葉系の語をもちいるように努めました。国語が大の苦手だった者の、お遊びですから、めちゃくちゃだったと思います。だからこそ、「たわごと」と名づけたのです。とはいうものの、以前からブログで書いてきたもののすべてが戯言ですから、相変わらずというべきでしょう。

ものを書くさいには、用意していた走り書きメモを頼りに、アドリブで書く癖があります。そのため、文体的な統一など考えずに、文語調であったり、口語調であったり、駄洒落をちりばめたり、ごった煮状態の文章になっています。こればかりは、癖ですし、直す直さないの問題でもないと考えていますので、ご容赦願います。特に、このシリーズはほとんどが、ひらがなであったうえに、今述べたような、あやしげな言葉遣いをしたため、読みにくかったにちがいありません。辛抱して、読んでくださった方々に、あらためてお礼を申し上げるとともに、お詫びいたします。

ありがとうございました。そして、ごめんなさい。

\*

basic English や VOA の special English という言葉をご存知でしょうか。簡単に説明しますと、ふだん、日常生活で見聞きする英語よりも、単語の数を少なくしたものです。英語は、ほかの言語に比べて、語彙、つまり、単語の数がずば抜けて多いと言われています。日本語も、そうらしいです。なぜでしょう。不正確な説明になるのを承知のうえで、単純な理由を挙げると、英語も日本語も、大きな大陸の端っこにくっついている島々で話されてきた言葉だ、という共通点があります。

いわば、ふちっこにあるわけですから、大きな大陸にある複数の言葉の影響を、受けやすい。言い換えると、外からの言葉が、島々にもとからあった言葉と混じり合ったという話ですね。すると、もとからあった言葉と、大陸から入ってきた言葉の、二重構造が生まれるわけです。例を挙げれば、「みごもる・はらむ」と「妊娠する・懐妊する」、「have a baby」と「be pregnant」みたいに、二通りの言い方が可能だということです。個人的な印象を申しますと、やまとことば系の「みごもる・はらむ」は、おなかのあたりでどんとくる感じがし、漢語系の「妊娠する」は頭の表皮あたりで理解している気がします。「懐妊する」にいたっては、「えっつ？」という具合に、理解するのに1秒ほど時間がかかる次第です。1秒って、意外と長いですよ。

basic English や VOA の special English は、さまざまな目的や意図から、英語を母語としない人たちが英語を学習する過程で、なるべく負担のないように考慮し、語数を制限した人工的な英語だと言えそうです。2つの言語に興味のある方は、それぞれ、“ベーシック英語”、“スペシャル・イングリッシュ”をキーワードに、グーグルなどで検索なさってください。ウィキペディアの説明が、わかりやすいと思います。

＊

「うつせみのたわごと」という連載では、自分なりに、使用する単語に制限を設けて、あやしげなつづり方で、文章を書いたわけですが、そのときに、つねに頭にあったのが、basic English と VOA の special English でした。ところが、回を重ねるうちに、だんだん、マンネリ化してくるのを感じました。第二次世界大戦中に、英語を敵性語とみなし、英語を日本語に言い換えるという政策が、この国でとられていました。たとえば、野球では、「アウト」を「ひけ」と言ったらしいですね。

それに似た馬鹿馬鹿しさを感じるようになってきたのです。目的が形骸化してきたと言えば格好をつけすぎですから、ただ飽きてきたというべきでしょう。「うつせみのたわごと-10-」で「Gen 界」をあつかったさいには、遺伝子、投資、経済といった分野の話題を、できるかぎり漢語系の言葉をつかわずに、大和言葉系の語に置き換える作業が、とてもおもしろかったのですが、界＝回を進めるごとに、徐々に難しく、また、わずらわしくなってきました。

「限界」は、「うつせみのたわごと-8-」で、すでに通り過ぎたのに、「うつせみのたわごと-12-」で、「弦界」をめぐるって書いているうちに、大和言葉だけでなく、外国語の単語もまじえるようになってきて、英語と日本語をクロスさせての駄洒落までするほどになり、まさに限界をひしひしとを感じるようになりました。杵が、だんだん緩くなっていったということです。お恥ずかしい限りです。10 の「げん」のうちの最後である「絃界」で、インターネットについて書いているときに、Internet を「あわいあみ」などと置き換えているうちに、あまりにも馬鹿馬鹿しくなり、思わずひとりで笑ってしまいました。

＊

でも、本気だったのですよ。本気で、このシリーズを書いていたことは、確かです。本気だからこそ、楽しかったし、ひとさまに笑われようとも、自分にとっては、やりがいがあったのです。だから、続けられたのです。今でも、「たわごとシリーズ」を書いたことは、後悔していません。また、いつか、大和言葉づくしで、文章をつづってみたいという気持ちもあります。

収穫というとおおげさになりますが、杵をずらして書く、あるいは、言葉をつくりながら書くという体験は、当たり前だと思っている、ことや、ものや、さまを、それまでとは異なった視点からとらえる機会になった気がします。とらえなおす、見なおす、考えなおす、感じなおす、という感じです。杵をずらすさいには、

- 1) ある漢語系の言葉に相当する大和言葉系の語を、辞書などで探しだして使用する、
- 2) 大和言葉系の語を組み合わせて説明的に書く、
- 3) 大和言葉系の語を用いて比喻をつかい、ほのめかす、

以上の3つの方法があるように思います。

いずれの作業も、自転車に乗れるようになるとか、泳ぎを覚えることに似て、体でおぼえる部分が大きいと感じました。実際に、やってみないと、ピンとこないところがあります。万が一、ご興味のある方がいらっしゃるとすれば、ぜひ、お試しください。なかなかスリリングな経験ですよ。いい頭の体操にもなります。どうせ素人のやることなので、自己流でかまいません。楽しければいいのです。お勧めします。

\*

異化という言葉があります。学問の分野によって、さまざまな意味があるようですが、個人的には、自分をいつもいる場所のふちっこに置くことだ、と理解しています。さきほど、違和感とか、窮屈という言葉を出しましたが、ふちっこ、つまり、そとに近い場に身を置くことは、自分を揺さぶることです。比喻をつかえば、崖っぷちにおいて、崖の向こうを目にし、軽いめまいを覚えることです。

たとえば、国籍という言葉があります。漢語系の語です。しかも、抽象的な意味をもっています。辞書や法律関連の専門辞典を引けば、ややこしい説明が書いてあります。でも、何となく、わかったつもりの言葉だとも言えそうです。国籍とは何か。これを感じ取るには、辞書を引くのもひとつの手ですが、国籍の異なる人と接してみるとか、外国に行き、自分が「外国籍の人」になってみるとか、そこまでしなくても、外国旅行をするために必要な手続きを、業者に任せるのではなく、自分でやってみるといいと思います。パスポートの取得作業をしたり、訪ねたい国の大使館などに出向きビザを申請するといった手続きです。

また、いわゆる不法滞在者と呼ばれている人たち、難民とみなされている人たちに関する、テレビニュースや、ドキュメンタリー番組、新聞や雑誌の記事、ウェブサイト、書籍を利用するという方法もあります。そのさいには、自分自身がそうした人たちの立場になったら、どうなるか、というように、「他者＝よそ者＝自分とは関係ない人＝縁のない人＝これまで気にもかけなかったことのない人」を思いやる気持ちと想像力が必要になるでしょう。

違和感や窮屈どころではない、過酷な体験を想像しなければならないかもしれません。でも、そうしないかぎり、国籍という抽象的な概念は、体感しにくいと思います。「国籍」だけでなく、「不法滞在」や「難民」という、何となくわかったつもりでいる言葉を、その言葉が指し示す立場や状態として、体感しようとするならば、相当な覚悟が要るでしょう。そうした境遇にある人たちと出会わないかぎり、あるいは、自分自身がそういう状況にないかぎり、「わかった」とは言えないにちがひありません。

＊

話が飛躍しました。「母語」の中で「外国語」で話すこと、に戻します。上で、「国籍」という話題を持ち出したのには理由があります。大和言葉系の語と、漢語系の言葉についての、個人的なイメージを取り上げてみたいのです。「国籍」はちょっとややこしい例でしたが、たとえば、「遺伝子」という言葉を見聞きしたさいに、自分が「何となくわかったようなつもり」になっているのを感じることがあります。「インターネット」でも、そうです。「電話する」でも、同じです。

今挙げた3語に共通するのは、広義の「からことば」系の語だという点です。漢字から成り立つ語にしろ、英語をローマ字で表記した語にしろ、抽象度が高いという個人的な印象を受けます。説明にしにくいのですが、「偉そう」、「もったいぶっている」、「これを知らなければ馬鹿だという雰囲気を漂わせている」、「真実・事実・正確という言葉やイメージに裏付けられた強い存在感がある」という言い方もできるかと思います。

ちょっと遊んでみます。「いのちのもととなる細かな粒」。これは、「遺伝子」を大和言葉系の語をもちいて言い換えた表現なのですが、説明であり、比喩でもあると思われる。詩の一部であっても、おかしくないでしょう。「この星にめぐらされた、人と人をつなぐ大きな網」が、「インターネット」のことです。「広くめぐらされた糸を通じて、言葉をやりとりする」が、「電話する」に当たります。

＊

「遺伝子」では、その形態や、転写という仕組みや、正確な大きさや、受け継がれるというメカニズムが無視された言い方になっています。これは、文脈に応じて、必要な個所で別の表現にするという方法で、何とかやり過ごせるかなと思っています。

「インターネット」と「電話する」も、文脈次第で異なった言い方はできるかもしれませんが、両者に共通する「電気」あるいは「電子」を大和言葉系の語で表現するのは、至難の業だと半ばあきらめています。せいぜい、「魔法のように」などという具合に、比喻というより「逃げ=ごまかし」でお茶を濁すのが落ちでしょう。まさか、大和言葉系の語を細工して造語するわけにもいきません。つまり、「かみなりちから」とか、「いなずまちから」みたいに勝手につくるわけです。本文で用いているうちに、なじんでくれば、造語もひとつの手かなとも思えますが。

なんて、アホなことをやっているのかと、お笑いのことでしょう。でも、連載中には、本気でこんなことを考えていたのです。また、今も考えているのです。直りそうも=治りそうもありませんね。

＊

「直りそうも=治りそう」で、思い出しましたが、「たわごとシリーズ」を書きながら、つねに心に留めていたことがあります。「翻訳不可能」な言葉でつづろうという、これまた、アホな企てなのです。シリーズでは、やたら、かけことばや、駄洒落を使いました。以前に、翻訳の仕事を少しやっていた時期があったのですが、英語での洒落や言葉遊びを日本語にするのには、とても苦労しました。

英語の洒落を日本語でも洒落にして訳す。そんな言葉のアクロバットに命をかけている翻訳家の方がいます。例を挙げると、柳瀬尚紀という英文学者です。翻訳不可能と言われていたジェイムズ・ジョイスの『フィネガンズ・ウェイク』を訳した人です。「独特の日本語」で訳されているとの話です。自分は、その訳書を読んだことがないので、何とも言えませんが、ご関心のある方は、お調べになってください。これも又聞きで、恐縮なのですが、小田島雄志という英文学の先生が訳したシェイクスピアの戯曲集は、洒落に満ちているとのこと。これも、お勉強好きな方は、原文と照らし合わせて、確認なさってください。

で、このアホの「たわごとシリーズ」ですが、これは、たとえば英語には訳せないと思われる。「標準的な日本語」（※括弧つきなのは、「そんなものがあれば」というくらいの意味です）にも、直せない感じがします。要約ならようやく可能でしょう。そんな、とちくるった企みで書いたたわごとですから、内容はないような部分がたくさんあるだろうとも感じております。

ところで、翻訳機や翻訳ソフトなら、前回まで書いていたあやしげな日本語を、どのように訳すのでしょうか。その種の機械やソフトが苦手というか、恐れ多くて敬遠していますので、使用を検討する気もありませんし、翻訳の結果については見当もつきません。それなりに健闘してくれるのでしょうか。

＊

もうひとつ、「翻訳不可能」を目ざして仕組んだことがあります。これは、以前から何度もやっている「愚行＝徒労」なのですが、つづられる言葉たちに、つづられる内容を演じさせるという、めちゃくちゃな「演出＝自己満足＝ひとりよがり」をやっております。

たとえば、「ふえる」をテーマにした「Gen界」をあつかった「うつせみのたわごと-10-」では、つづられる言葉たちに、「増殖する」さまを演じさせた「つもり」なのです。あくまでも、「つもり」です。また、「減ると増えるとは矛盾しない、むしろ裏腹の関係にある」をテーマにした「減界」を「えがいた」「うつせみのたわごと-8-」でも、「Gen界」以上に、言葉が増殖するさまを「絵」として「かいた」つもりなのです。こんなことを書いていると、うんざりなさっているみなさんの顔が眼に浮かぶようです。でも、本気なんです。正気とはどうてい申せませんが、本気です。

シリーズの最終界＝回の「うつせみのたわごと-14-」では、「揺らぎ」と「伝わる」という、言葉にするのは不可能と思われるテーマに挑みましたが、文字通り、不可能＝失敗を演じております。これは、誰がつづっても、失敗になるでしょう。つまり、巧まずして＝企まずして、目まいに見まわれたという感じの、言葉たちの情けない表情を、文章をつづるというより、絵としてえがいたつもりなのです。つもり、つもりと、つもり重なってしまいましたが、そうするつもりではなかった、つまり、強いて意識して行ったことではないと、申し添えておきます。つまり、言葉に身をまかせて、でまかせに、つづっていると、こういう不思議なことがしばしば起こるのです。

言葉であそぶつもりが、あそばれちゃうのです。言葉はあなどれません。

なお、つづられているテーマをつづられている言葉たちに演じさせるについての弁解＝説明に、興味のある方が、万が一いらっしゃいましたら、「夢の素 (2)」で「渡部直己」という固有名詞がある部分に、ちらりと目を通していただければ、うれしいです。

＊

「絃界」をあつかった「うつせみのたわごと-14-」では、検索が検閲ときわめて近いことについて、触れています。このシリーズでは、読者の方に、マラルメのさいころ遊びに付き合っていただく、つまり、読者参加型ブログを意図とし、「追記」という形で、グーグルを用いてのキーワード検索ができるようにしておきました。

で、その「追記」の部分を除く、たわごとの本文ですが、そこだけは、なるべく検索エンジンにテーマが引っ掛からないように、工夫をしてみました。仕組みだ、とも言えます。ひらがなが多いですから、テーマと関係のある語は、通常の検索エンジンの網＝罟には、かからないのではないかと、高をくくっておりますが、どうでしょうか。固有名詞ですと、ひらがなでも、たいてい引っ掛かります。たとえば、最終回で出てくる「えしゅろん」は、固有名詞ですから、もし「えしゅろん」が、噂どおりに然るべき働きをしている＝ちゃんと機能しているのなら、アホの書いたたわごとがデータとして、傍受され、どこかに保存されている可能性もなきにしもあらずだと考えています。ちなみに、瓶裸出院と表記すれば、餌腫論の網に引っ掛かるでしょうか。

何だか、うつだけじゃなくて、このところ、被害妄想の傾向が強くなってきて、ビョーキ持ちとしては、かなりやばいと自分でも危惧しております。もともと、そうした傾向は強感じていました。だからこそ、「架空書評：ビッグ・ブラザー」、「ビッグ・ブラザー」、「きな臭い話」、「け■■く」、「2010年1月20日にギャグる」などを書いたりするのでしょう。被害妄想とも言えそうですが、要するに、ビビり＝小心者＝臆病者ということですね。

>まぼろしよ、まぼろしであってくれ。ゆめよ、ゆめであってくれ。くるいよ、くるいであってくれ。たわごとよ、たわごとであってくれ。

これは、「うつせみのたわごと-13-」の最後の段落から、引用したのですが、今は「もうそうよ、もうそうであってくれ」という心境です。もう、そうだったりして。「もう、そうなら＝もうそうなら」、「マジこわー＝あやうい」ですね。

※この文章は、かつてのブログ記事に加筆したものです。

うつせみのあなたに 第11巻 | パプー | 電子書籍作成・販売プラットフォーム  
哲学がしたい、哲学を庶民の手に――。そんな気持ちを、うつに苦しむ一人の素人がい

だき、いわば憂さ晴らしのためにブログを始めた  
puboo.jp

◆「言葉は魔法.....。」＜言葉は魔法・004＞

2020/12/02 08:02

言葉は魔法。

「言葉は魔法。」

「言葉は魔法」

『言葉は魔法』

『言葉は魔法。』

『言葉は魔法.....。』

「『言葉は魔法』という魔法」

(言葉は魔法)

(言葉は魔法。)

《言葉は魔法》

【言葉は魔法】

“言葉は魔法”

<言葉は魔法>

\*

こうやって並べると、それぞれずいぶん印象が違うなあと思います。あくまでも個人の感想ですけど。それぞれの違いについて考えると、いろいろな状況が頭に浮かびます。たとえば、それぞれの括弧には何らかの意味があって、どういう状況で、あるいはどういう意図で使われるのだろうか、なんて思いをめぐらすわけです。こういうものは文章の中で意味を成すわけですから、上のように単独で並べるとわけが分からなくなるのは当然ですね。混乱させて、ごめんなさい。

一般的には「言葉は魔法。」とか「言葉は魔法」と記述される時には、それが会話の一部、あるいは独白であるということは、みなさんがご存じのとおりです。そういう約束事があるわけです。また、『言葉は魔法』とか「言葉は魔法」と書いて、それが書名(雑誌や新聞も含みます)や作品名を表す場合もありますね。

もっとも、こういう約束事を故意に守らなかったり、無視したり、知らない人もいます。それはそれで当然のことです。珍しい現象ではありません。こうしたルールには私

も詳しくはないし、結果として守らないこともあるでしょう。べつに恥じることはありません。知らなくてもちゃんと生きていけます。ルールは破るためにあるのです。いや、これは言い過ぎですね。

「」や『』は意味を持つ記号であり印ですから、一種の言葉とか、広い意味での言葉だと考えてもよろしいかと思えます。

言葉は魔法。  
言葉は約束事。  
言葉はルール。  
「」や『』は言葉。

\*

もっと見てみましょう。

——言葉は魔法。  
言葉は魔法——。  
言葉は魔法.....。  
※言葉は魔法。  
言葉は、魔法。  
言葉は魔法。  
♪言葉は魔法

いろいろあって、楽しいですね。おなじみのものもあるのではないのでしょうか。こういう記号とか印を「約物（やくもの）」と呼ぶ人もいます。何らかの意味があるのであれば、約物も言葉と見なしてもいいのではないのでしょうか。

約物は言葉。

たしかこれはああいう時に使うのだった、という心当たりがある一方で、なんでこんなものがあるのかと不思議にも思います。編集や校正や印刷業務にたずさわったり、ライターや記者やコピーライターのお仕事をなさっている方は、その種の学校に通ったり、講習を受けたり、専門の本で、こういうものを勉強なさったのでしょうか。翻訳業者や翻訳家もそうです。物書きである作家や詩人は、意外とこういうものに詳しくなかったりすると聞いたことを思い出しました。

この記事を書いている部屋を見まわすと、『記者ハンドブック 新聞用字用語集』（共同通信社）、『朝日新聞の用語の手引』（朝日新聞社）、『日本語の正しい表記と用語の辞典』（講談社校閲局編）があります（本の名前なので、いまちゃんと括弧を使いました）。翻訳業をしていた時期に、仕事を斡旋する会社から指示されて購入したものです。ときどきぱらぱらめくって読んでいます。辞書もそうですが、こういうものを読んでいると時の経つのを忘れます。言葉が好きなんですね。

言葉は魔法。

約物も言葉。

約物は必要？

＊

言葉は魔法である

言葉は、魔法である。

昔々の日本の文章には句読点がなかったのですよね。上で見た約物ももちろんありませんでした。見てきたようなことを言っていますが、国語や歴史の教科書とかテレビなんかで古文書を見た時には、たしかに「、」や「。」や「」や『』や「——」や「……」を目にした覚えはありません。そもそも古文には段落もなかったというか、段落に分かれることなしにだらーっと書いてあったらしいです。そう言えば濁点「・」もなかったとか……。ないないづくしじゃないですか。

古文は約物がない日本語。

言葉は魔法。

言葉はないないづくし。

どうやって意味を取っていたのでしょうかね。たしかうーんと集中して読んで、「ないもの」を頭の中で補うのですよね。それともでっちあげるのかな。いま「ないもの」と書きましたが、「ない」のに昔の人はたぶんちゃんと読んでいたのですから、いま「ある」のが不思議です。いま無意識に「ないもの」「ない」「ある」という具合に「」でくりましたが、こういうことってよくやりますよね。それは何なのかと問い詰められると、答えられそうにありませんが、とにかくよく使っています。不思議です。「ないもの」「なくてもいいもの」「なくてはならないもの」「なぜかあるもの」……。わけが分からない。そもそもなかった約物って必要なのでしょうか。約物が作られたから、日本語の表現はより豊かになったという見方もできそうです。

約物はいい加減。  
約物は無用の長物。  
言葉はいい加減。  
言葉は無用の長物。  
言葉はヒトの尻尾。  
言葉は揺らぎ。  
言葉は揺らぎの中にある。  
言葉は変わる。

＊

いずれにせよ、古文って面倒くさそうですね。古文の読み方を学校で習ったはずなのですが、忘れました。古典に対する苦手意識が強いので、ずっと毛嫌いしてきたのです。べつに後悔はしていません。横着なんでしょうね。とは言え、古典が読める人を尊敬する気持ちはあります。

古文が読める人はすごいと素直に思います。古典を楽しめるということは教養です。note では、日本の古典に詳しい人でこれほという書き手を見つけると追っかけます。新しくアカウントをつくると、真っ先にフォローしたりします。勉強し直すよりも、追っかけという道を選択する。つまり、自分ではお勉強をしないで、ひとさまのお勉強のおこぼれにあずかるわけです。やっぱり横着なんですね。ちなみに「追っかけ」（追っかけをする人）を英語では「follower(s)」と言うみたいです。そのままじゃないですか。

古文はすごい。  
古典の知識は立派な教養。

＊

村上龍の『コインロッカー・ベイビーズ』が好きです。愛読書のひとつとっていいと思います。やはり村上龍の書いた『トパーズ』もそうなんですけど、会話とか独白なのに「」がない文章が続く箇所があります。「。」を打ってもいいようなところで「、」が打たれることもあります。あれが好きなんです。読んでいてわくわくぞくぞくするんです。そういう段落は字面がべたーっとしています。黒々として見える場合もあります。村上龍は読点がきょくたんに少なかったり、センテンスが長かったりするからでしょう。そこがまたいいのです。表題作の『トパーズ』と『紋白蝶』をよく読み返します。

そういう文章の小説のことを小説に詳しいある人に話したところ、古文みたいで嫌だ、あれってめちゃくちゃ読みにくくね？　と言われて意外に感じたことがあります。上で述べたように、私は古文が大の苦手なのです。思うところがあって、野坂昭如の文章も好きだよ、あとね、古井由吉もよく読むんだけど、とかまをかけてみると、えーっ、あの人の小説やエッセイもまるで古文じゃん、古めかしいことばかり言うし、書き方もややこしいし、というほぼ予想どおりの言葉が返ってきました。

いまの段落では「」をわざと使いませんでした。やっぱり読みにくいですか。違和感がありますか。もしそうなら、私の力不足でしょうね。大家の真似なんかするもんじゃないということです。反省。もっと勉強します。

次の文章をご覧ください。

ねえ、奥さん、聞いてちょうだいな、昨日の夜に旦那がお風呂上がりに、おい、秀美、猫に餌をやったか、なんて言うんです、何言ってるのよ、うちには猫なんかいないじゃないって言い返したんだけど、風呂に入っていたら、窓の外でやたらにゃあにゃあ泣いて催促しているから、モコに餌をやり忘れたんじゃないか、と真顔で言うのよ、モコなんて名前まで付けているみたいなの、ま、最近その種の発言が多くなってきたから、そっちのほうかなあ、とも思うんだけどね、で、無視していたわけ、こっちは孫を寝かせるので大変だったし、そうよ、二番目の娘の子なの、そうなの、この間、スーパーで奥さんに会った時に私が連れていた男の子、あら、ありがとうございます、娘に似てかわいいでしょ、私にも似てるってことなんだけど、で、その子を居間に布団を敷いて寝かせていたわけ、なかなか寝付かなくて、ねえ、ママはまだって、ときどき目を開けて尋ねるわけ、あれくらいの年の子って何やっても何言ってもかわいいの、私にとって至福の時間よ、あの子といっしょにいるのがね、そこに、おいキャットフードはどこだって、旦那が怒鳴り始めたから、ちょっとうるさいわねって言い返したら、何をこの野郎とか言い始めたのよ、わーん、おじいちゃん、こわいって孫は泣き出すし、旦那は、どこだどこだ、という具合に、目の色を変えて居間のあちこちを漁り始めるし、さんざんな目に遭ったわ。

以上は、その辺にあった小説の一部を引用したもののなのですが、句読点はあるものの、括弧はないし、改行はしていないし、読みにくいですね。でも、こういう書き方をした小説が現にあるし、私はこういう文体が好きでたまりません。それにしても、下手くそな小説ですね。文体模写の練習かな？　誰の真似なのか分かりませんが。

よく考えてみると、昔々には、句読点も、さらには濁点もなかったんですよ。それ

を想像すると、昔の人は偉かったなんて短絡して感心したりします。本当はそんな単純な話ではないはずなのですが、勉強不足なので分かりません。

ねえ奥さん聞いてちょうたいな昨日の夜に旦那かお風呂上かりにおい秀美猫に餌をやつたかなんて言うんです何言ってるのようちには猫なんかいないしゃやないつて言い返したんたけど風呂に入っていたら窓の外てやたらにやあにやあ泣いて催促しているからもこに餌をやり忘れたんしやないかと真顔で言うのよもこなんて名前まで付けているみたいなのま最近その種の発言が多くなってきたからそつちのほうかなあとも思うんだけどねて無視していたわけこつちは孫を寝かせるので大変たつたしそうよ二番目の娘の子なのそうなのこの間すばて奥さんに会った時に私か連れていた男の子あらありかとうこさいます娘に似てかわいいてしよ私にも似てるつてことなんたけとてその子を居間に布団を敷いて寝かせていたわけなかなか寝付かなくてねえママはまたつてときとき目を開けて尋ねるわけあれくらいの子つて何やつても何言つてもかわいいの私にとつて至福の時間よあの子といつしよにいるのがねそこにおいきやつとふとはとこたつて旦那か怒鳴り始めたからちよつとうるさいわねつて言い返したら何をこの野郎とか言い始めたのよわんおいしいちゃんこわいつて孫は泣き出すし旦那はとこたとこたという具合に目の色を変えて居間のあちこちを漁り始めるしさんさんな目に遭ったわ

こういう感じになるんですね。すごいですね。目が痛くなりそう。よく覚えていないんですけど、古文では句読点と濁点がないだけじゃなくて、促音の「っ」も「つ」でしたっけ。それとも歴史的仮名遣いだけの話でしたっけ。ま、半分おふざけのお遊びですから、大きな「つ」に直してみましたけど。さすがに歴史的仮名遣いにまで直す知識も技量もセンスも団扇ありませんので、上のような感じということでお許し願います。大目に見てください。

歴史的仮名遣いで思い出しましたが、三島由紀夫は歴史的仮名遣いで書いていたのでしたね。そんなに昔の人じゃないのにあれは教養だけでなくポリシーだったのでしょね。この仮名遣いの書き手で思い出すのは（もちろん、漱石や鷗外は除いての話です）、石川淳と丸谷才一です。もう、うちの本棚にも数冊しか見当たりません。

上の変な文体の文章（それにしても馬鹿みたいな内容の駄文ですね、たぶん馬鹿が書いたのでしょう）に話を戻しますが、まるで実験小説とか、ジェイムズ・ジョイスの『フィネガンズ・ウェイク』の日本語訳みたいです。字面だけの話ですけど。何て言いながら、『フィネガンズ・ウェイク』は読んだことも、見たこともありません。ちなみに、ウェイクってお通夜のことなんですよ。ほのぼのうえいくなんて……。罰当たりなオヤジギャグを言って、ごめんなさい。ずっと起きているから wake な「わけ」。なぜだろう、睡魔が襲ってきました。あいむ・あ・swimmer。眠い……。

フィネガンズ・ウェイク 1: ジェイムズ・ジョイス, 柳瀬 尚紀 | 河出書房新社  
フィネガンズ・ウェイク 1 二十世紀最大の文学的事件と称される奇書の第一部。ダブリン西郊チャペリゾッドにある居酒屋を舞台に  
www.kawade.co.jp

おお、柳瀬尚紀先生、お久しぶりです。ええ、元気でやっております。お懐かしゅうございます。その節は東京の四谷本塩町にあった翻訳学校でお世話になりました。先生がエリカ・ジョングの『飛ぶのが怖い』をお読みにして、大もうけなさりマンションを購入なさった直後くらいでしたね。

飛ぶのが怖い: エリカ・ジョング, 柳瀬 尚紀 | 河出書房新社  
飛ぶのが怖い一九七三年にアメリカで刊行されるや、六百万部の大ベストセラーになり、ヘンリー・ミラーやアップダイクが絶賛した  
www.kawade.co.jp

ちゃんと、あの小説の宣伝をしておきましたよ、「ジップレス・ファック」って言葉が流行語になったのを覚えています、私は新潮文庫版であの頃には買いましたよ、先生の駄洒落と言葉遊びの才能には敬服しておりました、先生じゃなきゃ、ジョイスとか、ルイス・キャロルの『シルヴィーとブルーノ』なんて訳せませんよ、えっ、私ですか、いまはわけあって無職です、はい、もうこんな年ですし、こんなご時世ですから、はい、すみません、たしかに時世は関係ないですね、ええ相変わらず馬鹿をやっております、ご覧の通りです、ここはnote ってところなんです、そこから話しています、先生を最後にお見かけしたのは目白駅のホームでした、先生に合わせる顔がなくて逃げ出したんですよ、翻訳家になるのは無理だなあ、翻訳業を目指そうかなんて悩んでいた時期だったので、ご無礼をお許しください、言葉は魔法、言葉は巫女、言葉は恐山、言葉は手紙、言葉は天国へのメール、言葉はお通夜、合掌。

◆目に入りやすい言葉、耳に入りやすい言葉、ずっと入ってくる言葉<言葉は魔法・022  
> 2021/01/18 08:09

読みやすい言葉、読みにくい言葉、音読しやすい言葉、聞き取りにくい言葉、歌いや  
すい言葉、歌いにくい言葉、ずっと入ってくる言葉——というのはあると思います。ま  
たその理由もあると考えています。

具体的に見ていきましょう。

言葉は魔法。

＊

まず、黙読しやすい文章。

漢字が適度に（漢字ばかりだとうんざりするのではないのでしょうか）使われていると黙読しやすい気がします。読むと言うよりも見て瞬間的に意味を取るのに漢字が適しているのは、もともとが象形文字だったからでしょう。形を音に直してその意味を理解するのではなく、形で直接意味が理解される回路ができているように思えてなりません。

フォトリディングという言葉聞いたことがあります。その内容は知りませんが、写真のように文字を即理解するとすれば、その理解の仕組みは漢字ばいなおと想像しています。

ことばはえ。

言葉は絵。

しゃしんをとるように、ぱちっとあたまにはいる、ことばやぶんしょうがある。

写真を撮るようにパチッと瞬間的に頭に入る言葉や文章がある。

かんじがまじっていると、しゃしんやえのように、りかひできる。

漢字が混じっていると写真や絵のように理解できる。

めにはいりやすいことば。

めにはいりにくいことば。

目に入りやすい言葉。

目に入りにくい言葉。

ことばは、まほう。

言葉は魔法。

\*

速読しやすい文章。

黙読しやすい文章は速読もしやすいと言えるでしょう。速読については、いろいろな本がありますね。上では漢字混じりの文章について述べましたが、そもそも速読は英米から来たような記憶があります。高校生から大学生の頃に、「速読」の文字の入った本をよく見かけました。英語の速読の本も本屋さんにたくさん並んでいました。

段落の冒頭のセンテンスがその段落を要約しているから、各段落の初めだけを読んで一冊の本を数時間で読み終えるなんて、乱暴な内容の本もありました。英語では単語間にスペースがあるので、各単語が漢字のように一つのまとまりを持った「意味のかたまり」（ほぼ形）に見えるのかもしれないね。英単語漢字説なんて感じ。

日本語だと、適度に漢字が混じり、センテンスが短めだと速読に適している気がします。あと、いちばん大切なことは、書かれているテーマに詳しいことです。自分がよく知っているテーマなら速読できるという当たり前の結論になりました。

自分が知っているテーマや話の文章は速く読める。

自分が興味のあるテーマの文章は速く読める。

言葉は魔法。

と言うか、当たり前の話。

あとは、その時の体調とか気分とか気合いでしょうか。

冗談ではなく、そうした気持ち的なものによって、さくさく読める時と、遅々として読み進めないことがある、と経験から思います。

精神一到何事か成らざらん。

\*

次の文を読んでみてください。長めなので、読む前に気合いを入れてくださいね。

(I)

“祖母の部屋は、私の部屋のように直接海に面してはいないが、三つの異なった方角から、即ち堤防の一角と、中庭と、野原とから、そとの明りを受けるようになっており、かざりつけも私の部屋と違って、金銀の細線を配し薔薇色の花模様を刺繍した何脚かの脇掛椅子があり、そうした装飾からは、気持ちのいい、すがすがしい匂いが、発散しているように思われ、部屋にはいるときにいつもそれが感じられるのだった。”

(プルースト『花咲く乙女たち』井上究一郎訳) in (三島由紀夫『文章読本』第七章)

めちゃくちゃ長いですね。『花咲く乙女たち』(花咲く乙女たちのかげに)はマルセル・プルースト作『失われた時を求めて』の第2篇にあたります。これで一センテンスですから、すごいです。翻訳だから可能な文章とも言えそうです。

こうした長いセンテンスの文章は黙読しても頭に入りにくいし、まして音読もしにくいし、音読を聞いてすんなり理解する人は聖徳太子以外にいないと思います。

では、大切なことを言います。読みにくい理由は、飾りが多いからです。平たく言うと、ごちゃごちゃしてる。この記事の文みたいにな？

\*

上の文にちょっと手を加えます。

(I)

”祖母の部屋は、私の部屋のように直接海に面してはいないが、三つの異なった方角から、即ち堤防の一角と、中庭と、野原とから、そとの明りを受けるようになっており、かざりつけも私の部屋と違って、金銀の細線を配し薔薇色の花模様を刺繍した何脚かの脇掛椅子があり、そうした装飾からは、気持ちのいい、すがすがしい匂いが、発散しているように思われ、部屋にはいるときにいつもそれが感じられるのだった。”

(プルースト『花咲く乙女たち』井上究一郎訳) in (三島由紀夫『文章読本』第七章)

飾りを取り去ると、上の太文字の部分になります。プルーストの文章は、飾りが命なので、飾りを取ると味気ない文になります。

祖母の部屋は、外の明りを受けるようになっていた。  
(部屋には) 何脚かの脇掛椅子があった。  
(椅子に施された) 装飾からはすがすがしい匂いが発散しているように思われた。  
(部屋にはいるときに) それを感じられた。

この一文に「装飾」という言葉が使われているのは象徴的です。

装飾命。by マルセル  
そういう文章もあるのですね。

飾り本位の言葉や文章がある。  
飾り本位の文章が好まれたり読まれることもある。

言葉は魔法。

\*

次の文は、上の長いセンテンスの後に来る、これまた長いセンテンスなのですが、気合を入れて読むと言うよりも、ざっと目を通してみてください。

(II)

”そして、一日のさまざまな時刻から集まってきたかのように、異なった向きからはいつてくるそうしたさまざまな明りは、壁の角をなくしてしまい、ガラス戸棚にうつる波打際の反射と並んで、箆笥の上に、野道の草花を束ねたような色どりの美しい休憩祭壇を置き、いまにも再び飛び立とうとする光線の、ふるえながらたたまれた温かい翼を、内側にそっとやすませ、太陽が葡萄蔓のからんだように縁取っている小さい中庭の窓のまえの、田舎風の四角な絨毯を温泉風呂のように温かくし、脇掛椅子からその花模様をちらした絹をはがしたり飾り紐を取りはずしたりするように見せながら、家具の装飾の魅力や複雑さを却って増すのであるが、丁度そんな時刻に、散歩の仕度の着換えのまえに一寸横切るその部屋は、外光のさまざまな色合を分解するプリズムのようでもあり、私の味わおうとしているその日の甘い花の蜜が、酔わすような香気を放ちながら、溶解し、飛び散るのがまざまざと目に見える蜂蜜の巣のようでもあり、銀の光線と薔薇の花びらとのふるえおののく鼓動のなかに溶け入ろうとしている希望の花園のようでもあった。”  
(ブルースト『花咲く乙女たち』井上究一郎訳) in (三島由紀夫『文章読本』第七章より引用)

これも長いですが、(I) よりもずっと読みにくく感じませんでしたか。(I) に比べ

て飾りがややこしく絡んでいるからなのです。

＊

手を加えてみましょう。

(II)

”そして、一日のさまざまな時刻から集まってきたかのように、異なった向きからはいつてくるそうしたさまざまな明りは、壁の角をなくしてしまい、ガラス戸棚にうつる波打際の反射と並んで、箆笥の上に、野道の草花を束ねたような色どりの美しい休憩祭壇を置き、いまにも再び飛び立とうとする光線の、ふるえながらたたまれた温かい翼を、内側にそっとやすませ、

太陽が葡萄蔓のからんだように縁取っている小さい中庭の窓のまえの、田舎風の四角な絨毯を温泉風呂のように温かくし、脇掛椅子からその花模様をちらした絹をはがしたり飾り紐を取りはずしたりするように見せながら、家具の装飾の魅力や複雑さを却って増すのであるが、

丁度そんな時刻に、散歩の仕度の着換えのまえに一寸横切るその部屋は、外光のさまざまな色合を分解するプリズムのようでもあり、私の味わおうとしているその日の甘い花の蜜が、酔わすような香気を放ちながら、溶解し、飛び散るのがまざまざと目に見える蜜蜂の巣のようでもあり、銀の光線と薔薇の花びらとのふるえおののく鼓動のなかに溶け入ろうとしている希望の花園のようでもあった。”

(プルーヴ 『花咲く乙女たち』 井上究一郎訳) in (三島由紀夫 『文章読本』 第七章より引用)

たぶん、たぶんですよ、このセンテンスは三つに分かれるように思います、思うだけです。原文と訳文を照らし合わせたわけではないので、曖昧な言い方になるのをお許しください。

「(外からの) さまざまな明りが、箆笥の上に、美しい休憩祭壇を置き、光線の、温かい翼を、内側にそっとやすませた」

※「休憩祭壇」とは、たぶん原語は *reposoir* のことで、聖体つまりキリストの体とされるパンと葡萄酒を安置する祭壇のようです。カトリックのお祭りで使うものらしいです。この言葉はフランスの文芸ではよく出てきます。きらめく美しい装飾の代名詞とも言えるような気がします。

どうやら、光線が鳥の翼のようだ、とたとえているみたいですね。比喩が使われています。たぶん、ですけど。プルーストは比喩が大好きなのですが、読むほうは付いていくのが大変ですよ。

外から祖母の部屋に差す明りによって、ガラス戸に反射する光が筆筒の上に陽だまりを作り、そこに集まった光がまるで翼を休め温めている鳥のように見えたということでしょうか。

ここで、言い訳をします。比喩は翻訳者泣かせなのです。なぜなら、比喩とは一種の駄洒落だからです。駄洒落とは、AをBに置き換えるとか重ねるとかたとえることですね。たとえば、「アルミ缶の上にあるミカン」みたいにアルミ缶（A）とミカン（B）が二重写しになるわけです。これを英語に訳せますか？ 柳瀬尚紀先生ならたぶん執念でやったと思います。すごい人でした。

もっとも、知性と鋭い洞察に裏づけられた駄洒落や言葉遊びは美しいです。一例を挙げると、クロード・レヴィ＝ストロースの著作名である「La Pensée sauvage」です。「野生の思考」とも「三色スマレ、パンジー」とも取れる言葉遊び（←リンクあり）になっています。また、ジャック・デリダが「différence」（差異）に掛けて「造語」した「différance」（差延・さえん）（←リンクあり、ややこしい話です）は美しいとは言えませんがすごいです。一方で、知性の裏づけもなくただ垂れ流している星野廉の駄洒落は、「冴えん」どころかうざくてみっともないだけです。

ある言語での駄洒落や言葉遊びを別の言語での駄洒落や言葉遊びにするのが至難の業であるように（こういうことを柳瀬尚紀先生は執念で実践なさっていたのです）、比喩の翻訳はきわめて難しいのです。お分かりになっていただけたでしょうか。ややこしい話をして申し訳ありません。苦情は、プルーストさんに言ってください。

次に行きましょう。

「太陽が、絨毯を温泉風呂のように温かくし、家具の装飾の魅力や複雑さを却って増すのであった」

参りましたね。こう読んでいいのか、正直言って、自信がありません。現代詩みたい

じゃないですか。現代詩を書いていらっしゃる方、ブルーストさまの文の一部が現代詩みたいに難解だと申しあげているのですから、もちろんいい意味ですので、誤解なきようにお願い申し上げます。

この文は原文と照らし合わせたほうが良さそうなのですが、その気力も余裕もないです。ごめんなさい。

要するに、お日様が注ぐおばあちゃんの暖かくてお風呂に浸かっているようないい気持ちになり、語り手はぼけーっとしているのではないのでしょうか。家具に施された複雑な模様がより複雑に見えてくるなんて、駄洒落乱発じゃなくて、比喩がめちゃくちゃエスカレートしてきている、としか思えないのですけど……。

「その部屋は、プリズムのようでもあり、蜜蜂の巣のようでもあり、希望の花園のようでもあった」

後半でほっとしました。これなら分かる気がします。比喩（駄洒落の一種です）が穏当なところに落ち着きましたね。ぜんぜん共感は覚えませんが。

【こうした凝った文章は加筆を重ねた結果なのでしょう。個人つまり一人の書き手が文章をいじりまくって作る小説という形式は比較的新しい（novelな）ジャンルだと思います。小説は書き手が書き言葉をいわば物のように彫琢することが可能なジャンルなのです。たとえば、フローベールのように。物語とは大きく異なるわけです。私たちが当たり前に感じていることや、当然のようにやっていることは、長い目で見ると新しかったり、必ずしも当たり前ではない。こうした事実に敏感でありたいと思います。文学史は面白いですね。あれほど昔は嫌いだった文学史の教科書をいまになって取り出してきて読んでいます。】

いやいや、すごい人です。誰がすごいかって、訳者の井上究一郎さんですよ。よくもまあ、こんな律儀な翻訳をなさったものです。敬服いたします。しかも個人訳ですよ。すごすぎます。柳瀬尚紀先生と並ぶほどの駄洒落の達人ではなかったかと想像しないわけにはいきません。

比喩や駄洒落はAをBに置き換えたり、重ねること。

こんなことは言葉にしかできない。

言葉は魔法。

ブルーストの比喻はすごい。  
ブルーストは言葉の魔術師。  
ブルーストを訳す人もすごい。

駄洒落はすごい。  
駄洒落は言葉を使った魔法。  
駄洒落をちゃんと訳す人もすごい。

言葉は魔法。

\*

このように枝や葉が多く、しかも挿入が目立つセンテンスは翻訳文だからあり得るのではないのでしょうか。かつての私もそうでしたが、こういう文章が好きな人もいます（いまは無理です、だいいちこんな文章を読むパワーがありません）。息の長い論理的な文章に興味のある方は、以下の拙文をご覧ください。古井由吉の興味深い文章も引用してあります。

あの長い長い、そして比喻と飾りだらけの小説『失われた時を求めて』を律儀に翻訳された井上究一郎さんはすごい。

ジェイムズ・ジョイス作『ユリシーズ』を翻訳なさった丸谷才一、永川玲二、高松雄一各氏はすごい。

同じくジョイス作『フィネガンズ・ウェイク』の個人訳を成し遂げられた柳瀬尚紀先生はすごい。

ローレンス・スターン作『トリストラム・シャンディ』を個人で訳された朱牟田夏雄さんはすごい。この脱線と逸脱だらけの小説は私の愛読書でして、多大な影響を受けています。

ヘルマン・ブロッホ作『ウェルギリウスの死』を翻訳なさった川村二郎氏はすごい。『源氏物語』を世界に先駆けて英訳したアーサー・ウェイリーはすごい。この方は、現代の日本語は話せなかったらしいのですが、平安朝の日本語なら話せたという話を何かで読んだ記憶があります。

上記の翻訳をすべて読んだわけではぜんぜんなく、ただ名前を知っているか、部分的に読んだだけである私が言うのも僭越極まりないのですが、私はその訳書から間接的および直接的に多くのものをいただきました。また、そうした訳業が、現在の日本語と日本文学のありように大きな寄与をしたことは間違いありません。感謝の気持ちでいっぱい

です。

＊

上で触れた訳業に加えて、個人的にぜひ紹介したいのが平岡篤頼（ひらおか・とくよし）氏が翻訳なさったクロード・シモン作『フランドルへの道』です。学生時代に高山宏先生に勧められて、対訳で読もうとしたことがありました。原著もすごいし、翻訳もすごすぎて、途中で投げ出しました。お恥ずかしい話なのですが、さきほどプルーストの井上究一郎訳を見て思い出した次第です。平岡氏がフランスの新しい小説（ヌーボー・ロマン）の日本への紹介において果たした功績は忘れられません。プルーストの翻訳とはまた違った意味で、想像を絶するご苦勞をなさったにちがいません。

＊

上で引用し、その意味を考えたプルーストの長い二文——（Ⅰ）と（Ⅱ）のことです——が紹介されている、三島由紀夫の『文章読本』はつねにそばに置いています。

例文の数が多くて適切、種類も多彩。いちばん感心するのは、三島の解説の文章です。じつに明晰な日本語で、他者の文章に自分の言葉を重ねているさまは爽快で惚れ惚れします。その滑らかな文章が読みたくてPCの脇に置いているほどです。さらに言うと、敬体であるのが個人的にはうれしいです。理知的で詩情もある上品な敬体なのです。

丸谷才一の『文章読本』もそばに置っていますが、大学の講義を受けているようで、読むとお勉強をした気分になります。なお、谷崎潤一郎の『文章読本』は行方不明です。

＊

話を戻します。

上で見た、プルーストの（Ⅰ）と（Ⅱ）のセンテンスを図式化してみましょう。

（Ⅰ）

|  
|  
|

|

(II)

└|

|┐

└|

|

上の図はあくまでもイメージです。

(I) は「|」が単位になって、すすすつと下に流れていきます。切れ目というか節で休むことができます。竹みたいですね。長くなれば、読みにくくなるのは当然でしょう。日本語の文章は、本来はこういう竹のような構造をしているのです。今回は、この点について残念ながら触れることができません。

(II) は、単位であり幹でもある「|」の左や右に、「└」や「┐」というごてごてした飾り——つまり枝（大枝・小枝）や葉——がくっついているので、流れにくいのです。明治時代になり、さかんに西洋の文物が流入し、それにともなって「翻訳調」の日本語が流通するようになったことが、こうしたごてごてした文章の流行につながったのかもしれない。

竹のような言葉と文章。すすすつと流れる。

木のような言葉と文章。ごてごてして流れにくい。

言葉にもすっきりがあったりごてごてがある。

言葉は魔法。

＊

以下の文は、黙読しやすいうえに、音読もしやすく、それを聞いても理解しやすいと思います。

”あさ、眼をさますときの気持は、面白い。かくれんぼのとき、押入れの真っ暗い中に、じっと、しゃがんで隠れていて、突然、でこちゃんに、がらっと襖ふすまをあけられ、日の光がどっと来て、でこちゃんに、「見つけた！」と大声で言われて、まぶしさ、それから、へんな間の悪さ、それから、胸がどきどきして、着物のまえを合せたりして、ちょっと、てれくさく、押入れから出て来て、急にむかむか腹立たしく、あの感じ、いや、ちが

う、あの感じでもない、なんだか、もっとやりきれない。箱をあけると、その中に、また小さい箱があって、その小さい箱をあけると、またその中に、もっと小さい箱があって、そいつをあけると、また、また、小さい箱があって、その小さい箱をあけると、また箱があって、そうして、七つも、八つも、あけていって、とうとうおしまいに、さいころくらいの小さい箱が出て来て、そいつをそっとあけてみて、何もない、からっぽ、あの感じ、少し近い。パチッと眼がさめるなんて、あれは嘘だ。濁って濁って、そのうちに、だんだん澱粉でんぷんが下に沈み、少しずつ上澄うわずみが出来て、やっと疲れて眼がさめる。朝は、なんだか、しらじらしい。悲しいことが、たくさんたくさん胸に浮かんで、やりきれない。いやだ。いやだ。”

(太宰治『女生徒』・青空文庫)

以上は、太宰治の小説の冒頭なのですが、比較的読みやすいのではないのでしょうか。なぜ読みやすいのでしょうか？

話し言葉を書き写したような文体だからかもしれません。とは言え、太宰はこれを小説として書いたわけですから、実際の談話を書き取った文章とは言えそうもありません。

さきほど述べた、(I)のように、竹の節で切れているリズムが読みやすさにつながっているようです。

(I)

|  
|  
|  
|

しかも、読点「、」が多いのでさらに読みやすいと言えるでしょうが、あまり頻繁に読点があると読みにくくなる場合もあります。あと、目につくのは大和言葉（和語）です。大和言葉とは、ものすごく簡単に言うと、漢字で音読みしていない言葉です。一方で、音読みしている言葉は、漢語系の言葉ですね。漢字を使うと黙読しやすいのは、記事の最初で述べたとおりです。どちらがいい悪いの問題ではありません。大和言葉は「うたう・唱う・詠う・謡う・歌う・謳う」のに適し、漢語系の言葉は「論じる」や「語る」さいに便利だ、とは言えると思います。

太宰のこの小説の文章は、音読もしやすく、またその音読を聞いた人も容易に内容を理解し、その情景を思い浮かべることができるのではないのでしょうか。

＊

耳に入りやすい言葉はあると思います。

朗読されることを意識した散文や詩、ラジオのニュース原稿や語りの原稿、そして歌詞がそうでしょう。

これらは然るべきノウハウやマニュアルがあり、それに添う形で耳に入りやすいように作られているのです。

とくに歌詞は売り物つまり商品です。たくさんのお金をかけて、一か八かの勝負をするのです。歌詞には周到な準備と工夫がなされているはずで

うえをむういてあるこおほほ んなみだが.....

大好きです。永六輔さんの詩はいいですね。シンプルな言葉で素朴な感情をうたう。それがあ

だいたいにおいて日本語の歌詞には大和言葉がきわめて多く使われています。歌謡曲には詳しくないので分かりませんが、そういうことになっているのでしょう。作詞講座などでは、大和言葉をベースに作詞しなさいと教えているとしか思えません。漢語系の言葉だと、同音異義語が多くて聞き間違いやすいし、頭で理解するようところがあって、大和言葉のようにお腹に来るとい

「あの人妊娠したんだって」とか「ご懐妊です」よりも、「あの人赤ちゃんができたんだって」とか「おめでたです」のほうが、ぴんと来ます。前者だと「は？」と一瞬理解が遅れるのに対し、後者だとすっと入ってきます。個人の感想ですけど。

あと日本語の歌詞には英語や英語もどきも多いですね。これは漢語系の言葉と違って、同音異義語の心配は要らないし、洒落た感じを醸しだすのに便利なツールだという気がします。だから、使うの

(拙文「おまじないを旋律に乗せる」より)

＊

耳に入りやすい言葉。  
ずっと入ってくる言葉。  
大和言葉。

言葉は魔法。

大和言葉でこれだけの内容と深さのある思いと感情をつづることができるのですね。

＊

まとめます。

読みやすい言葉、読みにくい言葉、音読しやすい言葉、聞き取りにくい言葉、歌いや  
すい言葉、歌いにくい言葉、ずっと入ってくる言葉——というのがあると思います。

言葉は絵。  
写真を撮るようにパチッと瞬間的に頭に入る言葉や文章がある。  
漢字が混じっていると写真や絵のように理解できる。

目に入りやすい言葉。  
目に入りにくい言葉。

言葉は魔法。

＊

自分が知っているテーマや話の文章は速く読める。  
自分が興味のあるテーマの文章は速く読める。

言葉は魔法。と言うよりも、当たり前の話。あとは、その時の体調とか気分とか気合  
いでしょうか。

＊

長いセンテンスの文章は黙読しても頭に入りにくいし、まして音読もしにくいし、音読を聞いてすんなり理解する人は少ない。

あと、文章が読みにくい理由は、飾りが多いからです。平たく言うと、ごちゃごちゃしてる。

飾り本位の言葉や文章がある。  
飾り本位の文章が読まれることもある。  
とくに文学作品の文章。

言葉は魔法。

\*

比喩や駄洒落はAをBに置き換えたり、重ねること。  
こんなことは言葉にしかできない。

言葉は魔法。

プルーストの比喩はすごい。  
プルーストは言葉の魔術師。  
プルーストを訳す人もすごい。

駄洒落はすごい。  
駄洒落は言葉を使った魔法。  
駄洒落をちゃんと訳す人もすごい。

知性と鋭い洞察に裏づけられた美しい言葉遊びもある。

言葉は魔法。

\*

竹のような言葉と文章は、すすすすと流れる。  
木のような言葉と文章は、ごてごてして流れにくい。  
言葉にも、すっきりがあったり、ごてごてがある。

言葉は魔法。

\*

耳に入りやすい言葉がある。  
朗読されることを意識した散文や詩、ラジオのニュース原稿や語りの原稿、そして歌詞。  
耳に入りやすいように作られているからだ。

\*

大和言葉は「うたう・唱う・詠う・謡う・歌う・謳う」のに適し、漢語系の言葉は「論じる」や「語る」さいに便利。

耳に入りやすい言葉。  
ずっと入ってくる言葉。  
大和言葉。

言葉は魔法。

#### ◆最後に

なお、上の文章の中に出てくる、柳瀬尚紀先生の授業を受けた翻訳学校については以下の記事でも触れられています。これもまた、私には愛着のある文章です。

#柳瀬尚紀 # 翻訳 # 日本語 # 英語 # 思い出



03/04 影のこだまを聞く



＊

影のこだまを聞く

星野廉

2023年3月4日 10:35

目次

こだまする、うつる

英和辞典を読む

フィギュア、フィギュール

読む快樂

文字に見つめられる

文字に先立ち、文字に送られる

こだまする、うつる

ある言葉が別の方言や言語にうつされる。こっちがあっちに映る、こっちをあっちに写す、こっちからあっちに移す。要するに、うつしうつるのが、翻訳と呼ばれている作業です。

”（前略）

そして、目を打ち開いて眺めよ、青い眼薬を塗れ、と励ます。

八百年ほども昔に生きたイスラムの神秘家詩人の、「七つの谷」と題する記から、おそらくいくつかの言語に飴して、二十世紀になりドイツ語に訳され、断片として私の耳にまでようやく響いて来た声である。”

（古井由吉作「埴輪の馬」『野川』（講談社刊）所収・単行本 p.10）

上の引用文では、大昔に遠い地で紡がれた詩人の言葉が、「いくつかの言語に飴して」、最後には「ドイツ語に訳され」、古井由吉の「耳にまで響いて来た声」と要約できそうです。

「研する」というのは翻訳という作業を指しているのですが、「響く」とも共振する、比喩的な言い回しだと思います。目の人というよりも耳の人だという印象の強い古井由吉らしいたとえです。

比喩的なだけでなく詩的にも感じられるのは、ギリシア神話に登場するエコーを連想するからかもしれません。ナルキッソスが水面に自分の姿を「映した」のに呼応するように、エコーの発した歌の節がこだまになった、つまり強引に言えば「うつった」と言える逸話があります。

中途難聴者だからとは言いませんが、ともすると私は言葉を視覚的に影としてとらえる傾向があり、「うつる・うつす」と結びつけがちです。そんな私には、「耳の人」である古井の比喩が新鮮に感じられるのです。

こだま、研、木霊、木魂――。

こうした複数の表記を思いうかべずにはられません。これらの言葉たちが、まさに響きあい共振しています。

かげ、影、翳、陰、蔭、景――。

一方で、こちらの言葉たちは、うつり、映り、写り、遷り、移るわけですが、こだまという聴覚に訴えるイメージと、かげという視覚的なイメージが、どこかで響きあい、うつりあっている気がしてなりません。

上のイスラムの詩人が発した言葉が声で、それが書きとめられたのか、そもそも文字として書かれたものなのかは知りません。いずれにせよ、「目を打ち開いて眺めよ、青い眼薬を塗れ」と発せられた言葉が、別の複数の言語に移され、ドイツ語訳となったものを古井由吉が読み、日本語にした一節が小説『野川』に引用されているのです。

その日本語訳を読者である私が読み、それを私が引用という形でうつした一節が、あなたの端末の画面に映され、それをあなたが読んでいます。「八百年ほども昔」にイスラムの詩人によって「はなされた」言葉が、いくつもの「うつる」と「こだまする」をへて、ここに「ある」と言えそうです。

## 英和辞典を読む

英語にある一つの単語が、日本語にあるたくさんの言葉とイメージを呼ぶ。そのさまをながめてため息をつく。英和辞典を読むのは贅沢な体験だと思います。

辞書を引くだけの人もいるでしょう。辞書を読む人もいるでしょう。眺める人もいます。辞書に物語を読む人もいるでしょう。辞書を読んで詩をつくる人がいても驚きません。

辞書で意味を調べると言いますが、英和辞典に載っているのは意味ではなく言葉であり文字であることに敏感でいたいと思っています。意味とは目に見えず触ることができない抽象だからです。意味は、人の頭の中だけにあるものだとも言えるでしょう。

(いま述べたことは、意味に気を取られると言葉の形が見えなくなるとも言えます。私には、言葉の形、とりわけ文字の姿や形——文字の顔と言ってもかまいません——が愛おしくてたまらないのです。このことについては後述します。)

英和辞典を引いて目にするのは意味ではなく言葉、文字、さらに言うと訳語なのです。翻訳された語ですから、上で述べたように時空を越えて、うつり響いてきた影であり餅です。

辞書の語義として並んでいる言葉たちは、文字という影として私たちの目に映り、文字が喚起する音として私たちの耳に響きます。言葉は私たち一人ひとりの心の中でいだかれる意味やイメージもまた誘いだします。

不思議でなりません。当り前のことが当り前に感じられなくなります。

## フィギュア、フィギュール

figure という英語の単語を英和辞典で引いてみると、そこに書かれた語義の美しさに驚きます。字面が綺麗。言葉が喚起するイメージが美しい。ゆっくり口にする美しい

音になって流れ出ます。

figure が英語から別れて日本語でつづられた語義となって枝分かれしているさまが見えます。

たとえば、形、人影、挿絵、図、図形、フィギュアスケートのフィギュア（動作・図形）、表象、数字、音楽のモチーフ、計算、模様、言葉の綾——という名詞の語義が見えます。

計算する、見積もる、数字で表す、想像する、心に描く、思う、考える、かたどる、彫像や絵画として表す——

動詞の語義も見ていて飽きません。英語から日本語として枝分かれした語義がわくわくするイメージを発しています。奇跡としか思えない出会いと組み合わせに見えます。私は動詞に弱いのです。

figure は仏和辞典にもあります。フランス語だと顔とか表情の意味が強かったりします。

ジェラルド・ジュネットの『フィギュール』という本を思い出します。タイトルは言葉の綾とか文彩という意味です。

辞書で figure の語義を眺めていると、何かをなぞっている自分を感じます。自分の内に動きを感じます。体と心が動いているのです。気が遠くなりそうな心もちになります。

## 読む快樂

読む快樂はあると思います。

私の場合には、見る快樂なのです。テキストの快樂とかいう学問っぽいものではありません。単純明快。文章を見るだけです。小説なんか一度まばらに読んだものを、まだらにながめています。

私の意識はまだら状みたいなのですが、年のせいかな、このところそれが進行しているのを感じます。

ストーリーのあるはずの小説を読んでいて、好きな文字や文字列が、ところどころにある、つまりまだらにあるように見えてくるので、順不同でそこだけを見ているのです。

ある意味悲惨な話なのですが、まだらがまだらをまばらに見るのですから、本人はいい気持ちになります。

小説を読みながら、文字や文字列の形と、意味やイメージとのあいだを行ったり来たりする感じ。抽象と具象のあいだを行き来するとも言えそうです。ストーリーや内容を追うのは苦手なほうです。

だから、読む快樂よりも見る快樂だなんて言うのだと思います。

＊

小説だけでなく、辞書もよく見えています。

上で述べたように、英和辞典では figure という語の語義や語源をながめていると、気が遠くなりそうになります。

連想ゲームのように並んでいる文字たちが見せるダンスもバレエのように綺麗ですし、語義として挙げられている日本語の言葉の字面が、その意味に擬態しているさまには息を飲みます。

英語の単語が見出しにあるのに、日本語の言葉が並んでいるのです。一対一ではなく一対多の対応なのですが、これが不思議です。それがまた綺麗なものがさらに不思議。

どの言葉もみんないい顔をしています。いい顔が一堂に会した集合写真の趣があります。一編の詩にも見えます。ちなみに、私は詩を読むだけでなく見る癖があります。じっと見ているのです。

辞書の話でしたね。

辞書でお薦めしたいのは、短い言葉です。短い語ほど長い語義があるのが辞書の特徴です。一目瞭然なのです。aなんて数ページにわたるじゃないですか。

一対一ではなく一対多の対応の不可思議さ。英語もフランス語も、そしてもちろん日本語もそうです。

いくら見るのが楽しいとはいえ、辞書は読まないわけにはいきませんから、一度読んだら、あとはひたすらながめるのです。見ているのですから、こうなるともう顔をながめているようなものです。

本にも、文章にも、文字にも顔があります。少なくとも、私にはそうです。

## 文字に見つめられる

文字を読んでいると、見られるという瞬間があります。これも、少なくとも私にはあると言ふべきなのでしょうけど。

文字に見つめられる。

文字は顔——それもたぶん自分の顔、または自分に似た顔です——ですから、目のある顔に見つめられて当たり前なのです。こっちが見れば、あっちも見ている。鏡と同じです。

瞳と同じです。鏡に映る目の中にある瞳でも、面と向かっている他人の目の中に見える瞳でも、同じです。瞳の中に自分の姿があります。文字に瞳があるようには見えませんが、見られている気配はあります。濃厚にあると言ふべきかもしれません。

見入られ、魅入られる——自分という異物の目に、です、見入る以上鏡には必ず目が映っていますから——ことが快になっているにちがいません。

嘘だと思ったら、鏡を見てください。そこには鏡瞳があるはずです。そこには自分あなた= I eye という他者自分=眼 meme が映っているはずです。

ちなみにだから何？、ひとみは人見から来たという説もあるみたいですか？。さらに言えばもう、やめたら？、虹彩は英語で iris ですがふーん、iris の二つの ieye の点が目に見えませんか？ 目が点ですわ ぜんぜんそうは見えませんが鏡を前にして乱れて（分裂して）失礼しました。

（拙文「異物を入れる、異物を出す」より）

見ているという気配、そして見られているという気配——。これが自分なのかもしれないと最近よく思うのですが、文字をながめているとそれが実感できます。少なくとも私にはそうです。

### 文字に先立ち、文字に送られる

誰にとっても生まれた時にすでに自分の周り、つまり外にあった言葉は、文字どおり外から自分の中に入ってくるわけですが、発した声がすぐに消えるのに対して、書いた文字は残ります。

文字には顔がありますが、その顔には表情が浮かびます。文字の顔を文字の形、文字の表情を意味と考えると分かりやすいかもしれません。

（文字の表情つまり意味に気を取られると、文字の顔つまり形や姿が見えなくなりますが、いまは文字の顔が無視され、ないがしろにされている時代だという気がします。）

文字は消さないかぎり残っているので、文字の表情もいつまでもそこにあって、付きまとうことになります。

しかも、文字は複製ですから、あちこちに同じ——同一と言ってもかまいません——文字が無数にあるのです。

一つ消しても、どこかに同じものがたくさんあるのです。文字の顔とそれに浮かんでいる表情が、あちこちにうようよしている。世界は、人の世界は、文字と意味に満ち満ちている。

この文字の顔と表情は永久にあるわけではありません。目をつむれば、消えます。その意味ではないのと同じです。

文字はインクや液晶という物質がなければ存在できないのですが、物質からなる、形のある物はいつか必ず壊れます。そもそも人が書く以前には文字はなかったわけですし。

文字に先立った、つまり文字の先にあった人類は、いつか再び文字に先立つ、つまり文字よりも先に消えてしまうのかもしれませんが。いや、冗談ではないのです。昨今の世界情勢とこの星の気象に目を向けると決して冗談ではありません。

世界は文字と意味に満ち満ちています。これだけ文字が増えていくのは殖えているのではないかと思うほど、複製が複製を生み産むさまが進行し拡散しています。

なにしろ、いまは文字の入力と投稿と複製と拡散と保存が瞬時に同時に並行して起こっている時代ですが、人類の歴史の中ではごく最近の出来事なのです。

いつの間にか、こうなってしまった気がします。

人が文字に先立つとき、いまや勝手に殖えつつあるかのように見える文字は——そうです、文字つまり文書の繁殖ですから、ネットの普及だけでなく、例の「名前のない怪物」の台頭を指しています——、人を送ってくれるのでしょうか。このところ、文字に先立ち、文字に野辺で送られる人の光景が、オブセッションになっています。

杞憂と妄想であることを祈るばかりです。

＊

それにしても、文字は美しい。

英和辞典で figure を引いてみてください。見るだけでかまいませんから。綺麗ですよ。いい顔たちに出会えます。

#文字 # 言葉 # 顔 # 読書 # 辞書 # 英和辞典 # 英語 # 日本語 # フランス語# 翻訳  
# 古井由吉 # ジェラール・ジュネット # 意味 # インターネット



03/05 「ない」から書けている



＊

「ない」から書けている

星野廉

2023年3月5日 09:13

目次

欠けている

数量が足りない

動きに追いつけない

点と線でしかない

書くときに感じる失調

欠けていると書けている

最初に失調がある

「ない」から書けている

欠けている

足りない、欠けている、ない。

何か足りない、何か欠けている、何かがない。

上の文字列では「何か」がないわけですが、上と下とでは大きな違いがあるように私には感じられます。そもそも欠けている場合には、その欠けているものがないのですから、何が欠けているのかは不明なはずです。

その不明なものを「何か」と名づけるのは、恐怖感をやわらげるためでしょう。正体不明のものほど人にとって恐ろしいものはありません。なんとか手なずける必要があります。

手なずけるために名づけるという行為は太古から人がおこなってきたようです。名前を付けられないのであれば、「何か」「それ」「あれ」「なに」という便利な言葉があります。

保留するのです。とりあえず「何か」「それ」「あれ」「なに」と名づければ手なずけた気分になります。

足りない、欠けている、ない。  
何か足りない、何か欠けている、何かがない。

上の場合には、ただ欠けているのです。ただ足りない気がするのです。何がないのが分からないのです。これほど気味の悪い、恐ろしい気配や体感はないでしょう。

\*

足りない、欠けている、ない。  
何が足りないのか分からない。何が欠けているのか分からない。何がないのか分からない。

「何か」の代わりに「何が」と名づけて手なずけようとする手もあります。保留の代わりに疑問という形で気持ちを整理するわけですが、いくぶん恐怖心はやわらいだとしても、解決策にはなりません。

気配ほど人にとって恐ろしいものはないのかもしれませんが、気配には実体がないからでしょう。

そんな感じがするだけ。なぜかそんな感じがする。「そんな」は言葉で説明しようがない。「感じ」があるだけなのです。

気分を辞書で調べると「そぶり」という語義がありますが、「そ」がなくて「ぶり」があるだけという感じが私にはします。「そぶり」を「そんなぶり」と取れば、「そんな」はぜんぜん意味がなく「ぶり」だけが立ちあらわれているという感じでしょうか。

足りない、欠けている、ない。これだけが気配としてあるのです。

## 数量が足りない

いったい何の話をしているのかと言いますと、書くときの話なのですが、個人的な思いです。私がそう感じているだけなのかもしれません。

文章を書くとき、私は「欠けている、足りない、ない」といったないない尽くしの状態にある自分を感じます。恐ろしい思いなのですが、その恐ろしさを軽減するために、何が欠けているのか、何が足りないのか、何がないのかをあえて名づけてみます。

たとえば、言葉が足りません。書こうとしても言葉が足りないので出てこないのです。これは、一つには私の書く能力が欠けているからです。一方で、言葉が圧倒的に足りないものであるという状況もあります。

言葉の数量も言葉を覚えておく記憶力にも限りがあります。限りがあるのだから、これは足りないと言えるでしょう。現実なり思いなりを言葉に置き換えるには、その対象が大きすぎて、言葉が足りないと言えば分かりやすいかもしれません。

## 動きに追いつけない

言葉の数量が足りないに加えて、話し言葉にしろ、書き言葉にしろ、言葉は動きをあらわすのが苦手です。その分、言葉は固定するのが得意です

猫、眠っている猫、走っている猫、動いている猫、変化している猫、成長している猫

どれもが静止画です。言葉でどう言おうと静止しているし固定しているのです。話し言葉で言うにしろ、文字で書くにしろ、です。

言葉には始めと終わりがあり、枠があるからです。

話し言葉であれば時間に拘束されます。話しはじめて話しおわる。しかも、声は発したとたんに消えていきます。聞くほうは、つぎつぎと消えていくものをつぎつぎと記憶しながら追いかけていくのでしょうか。

よく考えれば、はかないし切ないし情けない話です。ないない尽くしです。

\*

書き言葉、つまり文字であれば、片っ端から消えていく話し言葉と異なり、消さないかぎり残ります。

猫、眠っている猫、走っている猫、動いている猫、変化している猫、成長している猫

文字にも、文字列にも、空間的な枠があります。物差しをつかえば長さも面積も測れるでしょうが、これは紙に書かれたり印刷された、つまり有限な形で固定された文字や文字列の話です。

ネット上にある文字や文字列や文書は、形（書体やフォント）や大きさがまちまちですから、測ったところで意味はありません。デジタル化された情報がたまたまあるモニターに文字やテキストとして映っているだけだからです。

いずれにせよ、人によって読まれるさいには、人の視覚機能に合わせて、有限な形の文字として固定されます。固定されていなければ、文字は人には読めませんし、見ることもできません。

人は動きをとらえるのが苦手なので、文字も人に合わせて動きをとらえられないのかもしれない。

## 点と線でしかない

猫、眠っている猫、走っている猫、動いている猫、変化している猫、成長している猫

話し言葉にも文字も枠があるわけですが、この枠の中には流れや順番があります。

支離滅裂という言い方がありますが、言葉はしっちゃかめっちゃかであっては困るわけです。人が話すにせよ、書くにせよ、聞くにせよ、読むにせよ、流れや筋や順序がな

いと困るわけです。

困る困ると書きましたが、誰が困るのかと言えば、もちろん人です。誰かに向けて話すのでも書くのでもない場合には、話や文が支離滅裂であって誰も——本人も相手も周りも——いっこうに困らないわけです。

こうした場合というのは、人にとっては意外と多いし日常的に起きている気がします。

また、話をただ聞き流したり、文字や文を読むと言うよりも見ているだけであったり、心がうわの空である場合も意外とふつうに起きている気がします。それは除いて話を進めます。

\*

話や文は、ある程度の方向や筋や順番があって進み流れないと困るのです。そうでないと支離滅裂になります。

支離滅裂、支流に分れたり、筋から離れたり、滅するつまり立ち消えたり、分裂して統一感を失う——脱線と飛躍だらけの、この文章が好例です——と、困るのです。

ある程度の方向や筋や順番があって進み流れるというのは、点が移動していくようなイメージでしょうか。

人の視界で考えてみると、視線というのはある大きさのある点が、そこを中心にしてあちこち移動するようです。視線をたどりながら、情報をとらえて整理していく気がします。

結果的には、面として——ある奥行きや深みのある、つまり「立体的な面」という苦しまぎれのレトリックをつかいたいところです——視界をとらえていく、そんなイメージを私はいだいています。

人が現実をとらえるというのは、こんな感じではないかと思うのです。そうした前提で話を進めます。

＊

現実や思いが、面であったり立体であるとしめます。話し言葉も書き言葉も、その面や立体を再現するためには、まず点から出発しなければなりません。始まりがあって終りがある話の発端です。それを文字にするなら、出だしの一語です。

本人や相手や周りが困らないように、出発点からある方向にむけて、なるべく順序よく、なるべく滑らかに、その点を移動させていく。

この移動とは、話では言葉を時の流れに沿って発していく、つまり並べていくことになります。文では紙や画面の上に線状に並べていく、つまり書いたり入力していくことになります。

話でも文でも、筋や流れを想定しながら、線状に進んでいくのです。

声をつかう話し言葉でも、文字をつかう書き言葉でも、点を移動させて線を描いていくと考えられます。面も立体でもないわけです。

点と線でしかない。これが言界、つまり言葉の世界の限界なのです。

### 書くときに感じる失調

数量が足りない。動きに追いつけない。点と線でしかない。

これが言界、つまり言葉の世界の限界です。

足りない、欠けている、ない。

何かが足りない、何かが欠けている、何かがない。

いまの話はあくまでも私の限界であることをご承知おきください。研究者でも探求者でもない私が、自分語をつかひながら、勝手にイメージして書いてだけです。

05/05 「ない」から書けてい  
いったいなんでこんな話をしているのかと言いますと、私が書くときに、あえて言葉にするとすれば、以上のような、足りない、欠けている、ないを日々感じているからにほかなりません。

個人的な思いでしかありません。この欠けているという思いを失調と呼んでみましょう。欠けているのですが、欠陥とか欠損と呼んでもいいようなものですが、とりあえず失調にという言葉をつかいます。

### 欠けていると書けている

私だけなのかもしれませんが、書くという体験では不思議なことがよく起こります。

欠けていると書けているのです。欠けているとなぜか知らないまに書けているのに気づく。逆に言うと、欠けている状態がつづいていないと書きつづけられません。欠けているを引きずりながら書いていくのです。

つまり、欠けていると感じると書けているのに気づく、欠けているから書けているとしか思えない、という感じです。欠けていると書けていると掛けているわけですが、それは欠けているが宙ぶらりんの宙吊りの状態でもあるからです。

ぶらぶらふらふらゆらゆら。

書く人は枝に引っ掛かっている蓑虫や蜘蛛に似ています。言葉というないない尽くしの細い糸だけを取っ掛かりにして、ひたすら「かく」のですから。夢の中で駆けても駆けても駆けたことにはならない。うつつでどんなに書いても書いても書けていない。藻掻く、足掻くだけ。

もどかしい、ままならない。隔靴搔痒。長靴の上から痒いところを搔いても搔いても痒みがつづく。むしろ、痒みがつづくから書けるのかもしれませんが。もしそうであるなら、これはもう賭けるしかないでしょう。

欠けるに賭けるのです。冗談ではなく、まさに欠けると掛けるに賭けて、この文章は書けているのです。じっさい掛け詞だらけではありませんか。内容はなようなのです。

レトリックというか言葉の綾、つまり文彩だけでなりたっている文章ですから、文才がないことは明々白々でしょう。

＊

見切り発車、行き当たりばったり、連想に頼る、勢いにまかせる、これまで書いた文章の継ぎ接ぎ（パッチワーク）——これが私の書き方なのですが、これは「ない」があるを基本にしているようです。

ないから書くのです。ないことを書くとも言えます。要するに、でっちあげるのです。

とっかかりがないととっかかりを無理にでもつくって、つまりでっちあげて書きます。

これは私の書き方なのですが、そうではない「ない」を切っ掛けにした書き方があります。ありますと書きましたが、正確には「あるように見える」と言うべきかもしれません。

例を挙げます。小説の話です。

### 最初に失調がある

小説の冒頭やその近くに、失調があって作品が書かれていく。そんな感じをいだかせる作家がいます。

まず失調感の確認が儀式のように執り行われて、小説が進んで行くかのような印象を私は受けるのです。

失調とは、たとえば次のような形を取ります。

発熱、うなされる、身体の不調、疲弊・疲労・消耗、渴き・脱水、入院・闘病、時間や方向感覚が失われる・迷う、誰かが亡くなる・葬式・法事、入眠・寝入り際・寝覚め・意識の混濁や喪失、旅

こうした「欠ける」「失う」「無くなる」という出来事や事件があり、それが切っ掛けになって、狂いが生じます。その狂いを引きずりながら、作品が進行し展開していくのです。

上で「旅」がありますが、旅とは非日常が失われ、それが継続していく時空と言えます。大ざっぱな言い方になりますが、太古や大昔や昔は、旅や大規模な移動は命がけの行動であったことを考えると分かりやすいと思います。

旅はくたびれるのです。へとへとへらへらくたくたになります。草臥れる。愛用の辞書には「草臥」は疲れて草に臥す意の当て字（広辞苑）とあり、うなずいてしまいます。

草臥れて空をあおぐ。仰ぐ。仰臥。生まれてしばらくの、亡くなる直前の、姿と重なります。毎晩、夢の世界に入るときの姿勢でもあります。

草臥れる、仰ぐ、仰臥は、古井の作品で頻出する身振りでもあります（たとえば『仮往生伝試文』はこの身振りに満ちています）。登場人物はしばしばくたくたになり、語り手はへとへとの状態で語ります。失調です。旅行はもちろん、山登りや散策を含む「たび」はくたびれるなのです。

＊

”長い下り道をたどってようやく谷底に降り立ったとき、沢音がまるでいままで息をひそめていたように、私の上いきなり降りかぶさってきて、私の感覚を、まわりの光景とのつながりから微妙な具合に切り離してしまった。

あの時の軽い失調の感覚を私は軸として、杏子の座っていた谷の光景を描いたようだ。”

（古井由吉「杏子のいる谷」・福武文庫『招魂としての表現』および、作品社『言葉の呪術』所収）

仮に現実の世界と思いの世界と言葉の世界があるとして、人は言葉の世界、とりわけ文字の世界に入るとある種の失調におちいるのではないかと私は思います。

そもそも文字の世界に入った人間は、現実世界や思いの世界でのように、自由でいられるでしょうか。不自由で、もどかしくままならない状況に投げこまれているのではないのでしょうか。

なにしろ、言葉の世界では、現実や思いを言葉にするにはその言葉の数量が足りないし、言葉は現実や思いの動きに追いつけないし、面や立体であると感じられる現実や思いをたどったり描くのに、点を動かして線状に進むしかないのです。

ないない尽くしの世界に投げこまれると言えます。この状況を失調と言わずに何と言えればいいのでしょうか。

”（前略）もう五時間ちかく人の姿を見ていない男の目の中に、岩の上にひとり坐る女の姿は、はるか遠くからまっすぐに飛びこんできてもよさそうだった。三日間の単独行の最後の下りで、彼もかなり疲れはいた。疲れた軀を運んでひとりで深い谷を歩いていると、まわりの岩がさまざまな人の姿を封じこめているように見えることがある。そして疲れがひどくなるにつれて、その姿が岩の呪縛じゅばくを解いて内側からなまなましく顕あらわれかかる。地にひれ伏す男、子を抱いて悶もだえる女、正坐せいざする老婆ろうば、そんな姿がおぼろげに浮かんでくるのを、あの時もしか彼は感じながら歩いていた。その中に杏子の姿は紛れていたのだろうか。（後略）”

古井由吉『杏子』（『杏子・妻隠』新潮文庫所収・p.9）

上の引用にあるただならぬ日常感覚の失調は、下山する男の疲労がもたらすものであると同時に、不自由な言葉の世界に投げこまれた書き手が体験する言葉つまり文字を相手にするときの過酷な不調でもあると私は感じます。

文字を相手にしているだけに、書いているさいには、そしてそれを文字として目でたどるさなかには、きわめて具体的な体験として、その不調、言い換えるなら、欠けている、ない、うまくいかない、書けないという感覚がそこにある——そんなふうには私は思います。

興味深いのは、その欠けているがあって書けているということです。さらに、その欠けていると並行して書けているが続いていくのです。「ない」という感覚をひたすら書いていくとも言えるでしょう。

このような言葉、とりわけ文字の世界で人が体験する失調を感じさせる小説を書いた作家として、私は古井由吉を挙げたいと思います。

今回は、古井の小説でいちばんよく知られていて、また読まれてもいるだろう、『杏子』から冒頭に近い部分を少しだけ引用してみました。

### 「ない」から書けている

最後に、比較的よく知られた古井由吉の作品を例に取ります。

中編『妻隠』（新潮文庫『杏子・妻隠』所収）と連作集『山蹠賦』（講談社文芸文庫）では、冒頭に病み上がりの熱っぽい状態にある主要な人物が登場したり、語りはじめます。発熱時に起こり、または発熱後に尾を引く、方向や時間や場所の感覚（見当識とも言えるでしょう）が失われる状態、つまり欠損が、描写と語りを支える形で作品が進行していくのです。

短編集『聖耳』（講談社）の巻頭に来る作品である『夜明けまで』では、離陸する飛行機の客席で語り手が耳に挟んだ葬式の話が入院時の記憶へとつながっていく形を取っています。この入院では過酷な感覚喪失をとまなう闘病が語られます。この短編集の一貫したテーマは知覚の欠損ではないかと思われるほどです。

＊

そう言えば『杏子』では、この小説の視点的人物である「彼」の名前が「ない」、つまり欠けていることで書けている状態が持続するという形を取っています。

このように、一貫して「彼」と記述されていた登場人物が、初めて「S」と書かれている箇所でもあるのです。「ヨウコ」と「S」——この唐突な名前の表記の「立ちあらわれ」を異和感と言わずに何と言えいいのでしょうか。

(拙文「異、違、移」より)

『杳子』における「名前の不在」は、『水』（短編集『水』講談社文芸文庫・所収）という中編（比較的長い短編）では「私を省く」という形で変奏されています。日常において「自分」を根底から支え、「自分」にとって自明のものとされている名前と一人称の代名詞が欠けたまま、小説が書かれているのです。

『杳子』と『水』は言界（言葉の世界）が非日常や異次元や異世界であり、現界（現実の世界）や幻界（思いの世界）とは重なら「ない」、欠けて足り「ない」世界、つまり限界でもあると感じさせる作品です。それが具体的な文字の身振りとして「ある」のです。

” そのうちにおもしろいことに気がつきました。ふだんの日常でも「ぼく」とか「わたし」とかいう人称は、できるだけ避けようとしている。日本語というのは、人称をはっきりたてなくも通じますから。そういう習性が、小説を書いているもはたらくんです。「私」という人称をできるだけ減らしてみようと。（中略）そうして、とうとうあるとき、五十枚位の小説で、語り手も主人公もあきらかに「私」なんだけど、一度も「私」という人称を使わずにすませたことがあるんです。「水」という短編です。一度、どうしても苦しくて「こちら」という言葉は使いましたけど。”

(古井由吉「私」という虚構」 p.320 『招魂としての表現』(福武文庫) 所収)

この点については、「私」を省く」という文章で、作品からの引用をまじえて具体的に論じてあります。

\*

最近の私は古井由吉の作品しか読んでいません。古井の小説を読んでいていただくのは、欠けているから書けているという思いなのですが、これは私にとっては自分の書く体験と重なるきわめてリアルな心境でもあるのです。古井先生があのお世でお聞きになれば、失笑なさにちがいませんが。

衰える身体を持ち忍び寄る認知症の影におびえながらも居直っている老人である私が、文字という影からなる古井の作品に自分自身の影を見ている。そんな言い方もできる気がします。

作者の意図とか、古井由吉とその作品に貼られたさまざまなレッテルやフレーズとは

まったく関係がありません。私は古井の作品にある文字を見ながらいただいた思いをつづただけです。

古井由吉の小説については、もっと書くつもりでいます。

「ない、欠けている、足りない」は決して「ない」ではなくむしろ「ある」であり、「ある」がつづくことだと私は思っています。げんに「欠けている」に支えられ、うながされながら、「ない」をめぐる、これだけ長い駄文が「書けている」のですから。

#古井由吉 # 小説 # 執筆 # 読書 # 言葉 # 文字 # 失調 # 欠損 # 見当識# 文学 # 名前  
# 代名詞 # 蓮實重彦



03/06 川のほとりで流れをながめる



＊

## 川のほとりで流れをながめる

星野廉

2023年3月6日 11:49

目次

ふちで流れをながめる

流れを目で追う

ぜんぶ掬えないことで救われている

### ふちで流れをながめる

本人や相手や周りが困らないように、出発点からある方向にむけて、なるべく順序よく、なるべく滑らかに、その点を移動させていく。

この移動とは、話では音を時の流れに沿って発していく、つまり並べていくことになります。文では文字を紙や画面の上に線状に並べていく、つまり書いたり入力していくことになります。

話でも文でも、筋や流れを想定しながら、線状に進んでいくのです。

声をつかう話し言葉でも、文字をつかう書き言葉でも、点を移動させて線を描いていくと考えられます。面も立体でもないわけです。

点と線でしかない。これが言界、つまり言葉の世界の限界なのです。  
(拙文「「ない」から書けている」より)

川のほとりで流れをながめる。

ほとり、辺。辺は、あたり、そば、辺土、きわ、際、ふちです。

私は寝入り際の夢うつつが好きです。ずっとそれが続いてほしいと思うほど好きです。ずっと続くように願うのは贅沢というものでしょう。いつか、さらに、きわ、ふち、かぎりがあるはず。意識が薄れやがて消えるきわがあるはず。

きわからきわへ。ふちからふちへ。ふち、淵、縁。

淵は川であれば深い淀みを指し、縁はへりですからほとりということになります。この二語の語源はともかく、「ふち」という同じ音で懸け離れたものを指すのですから面白いです。

限りのある音と文字で、限りのない世界を掬いとりようとしているのでしょうか。一对多の対応どころか、一对無限です。音と文字が絶対的に足りないじゃないですか。

辞書には一つの見出しでたくさんの語義のある言葉が載っていますが、そんな辞書も無限は写せません。言葉が世界の写しであるというのは言葉の綾でしかないからです。

辞書をながめていたら、ほとりには都から遠く離れた辺土の語義がありました。あたりと辺土は隔たっているどころか懸け離れているのに、つながっている。これもまた面白い。

近いと遠い、浅いと深いといったものは見る位置や見方で変わるようです。どの点からどんな姿勢や心もちで見ているかの違いなのでしょう。

\*

川の流れをほとりでながめる。そのほとりは隅っこでもあり、中心でもあるようです。見ている人は隅っこでもあり、中心でもあるような気がします。

誰もが自分を世界の中心としているわけですが、他人はといえば、近しいか遠いにかかわらず、隅っこにすることになりそうです。一方で、その他人から見れば、自分は隅っこになるのでしょう。

川のふちにいる人には、向こう側の縁にも、川の淵にもいないのですから、遠いも深いも頭の中で思いうかべるしかないようです。思いは遥かかなたへの架け橋なのかもしれませぬ。

## 流れを目で追う

言葉の数量が足りないに加えて、話し言葉にしろ、書き言葉にしろ、言葉は動きをあらわすのが苦手です。その分、言葉は固定するのが得意です

猫、眠っている猫、走っている猫、動いている猫、変化している猫、成長している猫  
どれもが静止画です。言葉でどう言おうと静止しているし固定しているのです。話し言葉で言うにしろ、文字で書くにしろ、です。

言葉には始めと終わりがあり、枠があるからです。

話し言葉であれば時間に拘束されます。話しはじめて話しおわる。しかも、声は発したとたんに消えていきます。聞くほうは、つぎつぎと消えていくものをつぎつぎと記憶しながら追いかけていくのでしょうか。

(.....)

文字にも、文字列にも、空間的な枠があります。(.....) 人によって読まれるさいには、人の視覚機能に合わせて、有限な形の文字として固定されます。固定されていなければ、文字は人には読めませんし、見ることもできません。

(拙文「「ない」から書けている」より)

川のほとりで流れをながめる。

どんどん流れていく川の水も、目で追うことはできません。同じ風景に見えても、流れる水は刻々と入れ替わっているようです。そんなことを言っても分かりませんよね。

言われて分かるような知識は体感できません。いまここにあるものを素直に受けとめるだけでいいのではないのでしょうか。

とはいうものの、思いは馳せます。荒馬のようにあちこちへと駆けまわります。

流れをながめているときには、視界からつぎつぎと消えていく像を残像として、いま見える像に重ねているのかもしれませんが、そうは見えません。

川という言葉で川を見ているから川は川。明快と言えば明快、うかつと言えぼうかつです。

「凝視する」と、「ぼーっと見ている」のあいだに違いはあるのでしょうか。あったとしても程度の差ではないかという気がします。

## ぜんぶ掬えないことで救われている

川のほとりで流れをながめる。

そのさまを思いえがいてみます。川の風景を思いだしてみます。

「川」という言葉、「ほとり」という言葉、「流れ」という言葉、「ながめる」という言葉にうながされて、像を浮かべます。

それぞれの言葉がいろいろなイメージや言葉の断片を呼び起こすことに気づきます。そのイメージと断片たちの洪水です。

おそらく無数のイメージの中から、ある光景が浮かぶのですが、それも一定したり一貫しているわけではなく、刻々姿を変える気がします。

たとえば、「川」とか「ながめる」という言葉があるから、そういうものや、そういうことがあると思ってしまうけれど、必ずしもそういうものでもないし、そういうことではない。

言葉も思いも、ぜんぶを瞬時に掬いとることはできないのです。直感とか直観とか洞察というもっともらしい言葉も、苦しまぎれの負け惜しみにしか響きません。これもまた言葉の綾なのです。

＊

人がとらえる事物が多層的多義的なものであるとすれば、人の知覚や認知機能には限界がありますから、事物をとらえそこねるしかないでしょう。つまり追いつけないのです。複数どころか二つの属性や側面を同時に意識することさえ難しい気がするの、まばらでまだらな個人の個人的な見解なのかもしれません。私のことです。

二つ、複数、多数の側面をすくい取れないといって、救いがないわけではないでしょう。むしろ、かりに全部すくえば壊れてしまうにちがいありません。限界があるからです。

世界（そんなものがあるとしての話ですが）に意味を見てしまう。森羅万象（そんなものがあれば）に意味（そもそも「ない」ものです、人の頭の中にしか）を探ろうとしてしまう。人はすくえないことで、すくわれているのです。

（拙文「すくえないことで、すくわれる（更新：2022/10/05）」より）

ぜんぶを掬いとることができないのは、言葉だけでなく、思いの中に浮かぶ像でも、現実目目の前にある像でも同じだという気がします。

思いも現実も、さらには言葉そのものも、言葉では掬いとれないようです。たぶん人も言葉も、そうできているのです。

だからこそ、人は流れに押し流されて溺れずに済むのではないのでしょうか。ぼーっとながめていることに感謝したい気持ちになります。

＊

ほとり、辺。あたり、そば、辺土、きわ、際、ふち。

へり、端、端っこ、隅、隅っこ。

きわからきわへ。ふちからふちへ。ふち、淵、縁。

寝入り際や昼間の夢うつつの中で、こうした連想をするのが好きです。

ふちの縁が、ご縁の縁であることに、いま気づきました。ぼーっとしながら意識のふちにいるのも、捨てたものではないようです。

＊

川には水の音、瀬の底を転がる砂や石の音——こうした微かな音は重度の難聴者である私にはどうも聞こえないのですけど勢いあまって書いてしまいました——、ほとりに生える草が風に揺れたり、その揺れる葉と葉がこすれる音があるはず。鳥の声——補聴器はしていますが高い音域はとくに苦手な私には聞きとれないのです——がしているかもしれません。

聞こえなくても、目に見えるものから音を想像する楽しみがあるのです。

色もあるはずです。緑が見たくなりました。薄い緑です。

川のおいもあるはずです。鼻の粘膜を通して入った空気が口にも入り、口蓋の粘膜や舌を刺激して川の味がするかもしれません。ほとりの地面のかすかな震えもあるでしょう。ぽかぽかした陽気のきょうだったら、あたたかな日ざしが肌をなごませてくれるにちがいありません。

ネコヤナギのあれ——あれは花なのでしょうか、あのつやつやふわふわした毛をこの指先で撫でてみたい。

こんなことを思いうかべていると、生きていることは——たとえ障がいがあっても——全身で受けとめる豊かな体験なのだなどとあらためて気づきます。欠けているものは、たぶんないのです。「欠けている」と名指したときに欠けるのです。

全身で受けとめるなんていっても、肩に力を入れる必要はない。ぽーっと受けとめればいい。ぜんぶ掬いとりとうしなくてもいい。

いい天気だし、久しぶりに川が見たくなりました。花粉が心配だけど思いきって外に出てみます。とにかく緑が見たい。明るくて薄い緑です。

そういえば、緑って縁に似ていませんか？

#川# 風景 # 夢 # 夢うつつ # 連想 # 言葉 # 文字

03/07 外からやって来る外【引用の織物】



＊

## 外からやって来る外【引用の織物】

星野廉

2023年3月7日 08:03

本記事は「言葉は外から来るもの」というタイトルで、2021年9月28日にnoteで投稿したものです（そのアカウントは削除していまはありません）。再掲にあたって当時の勢いを殺がない程度に若干の加筆をしました。

目次

こういうことはよくあります

言葉は外から来るもの

言葉は後押ししてくれる

言葉はわかる

曖昧放置プレイの名手たち

外から来るものとの出会い

言葉は外へと帰って行く

こういうことはよくあります

自分の言ったことや書いたことについて、後になってよくあれこれ思いをめぐらします。ああでもない、こうでもない、ああでもある、こうでもある、という具合につきこみを入れるわけです。ひとさまの文章や発言にそうする習慣はありません。

要するに、往生際の悪い、うじうじした性格なのでしょうね。

＊

世界は似たものに満ちている。  
世界は顔で満ちあふれている。

似ているはいたるところにある。  
同じや同一はない。  
似ているは印象。

同じと同一は検証しなければならない。それも機材を用いて科学的に精密に。  
似ているが人にとっての体感できる現実。  
同じと同一は人にとっては抽象でしかない。

(拙文「剽窃から遠く離れて あるいは引用の織物」より引用)

\*

繰り返してばかりで恐縮ですが、「似ている」は個人の印象であり感想であり意見です。「違う」もそうじゃないでしょうか。あるものとそれとは別のものが本当に違うかどうかは、かなりマジにそれこそ機械とか器機を使って検証しないと判断できないのではないのでしょうか。

見ただけでは分からない気がします。「違うんじゃないの」としか言えないという意味です。もちろん、さきほど上で述べたように、明らかに違うと思うもの同士を人は比較しないという前提があつての話ですよ。そう、話なんです。論とか説なんてものじゃありません。

その意味で「違う」は、「同じ」とか「同一」と同じです。検証しないと判断できないという意味で似ています。そっくりです。そっくりなところがそっくりなのです。

(拙文「世界は顔で満ちている ——人は夜になると洗濯をする——」より引用)

\*

上で書いたことについて、さっきから考えています。

人にも感知できる「同じ」と「同一」があるのではないか。それだけでなく「違う」や「異なる」もです。今はそんな気がします。こういうことはよくあります。ですから、また前言を撤回する可能性が高いと言えます。

これは、たぶん、私が正解とか正答（あるいは悟り）を求めているからだと思いません。だからこそ、フランスの現代思想と呼ばれるものに惹かれたのかもしれませんが。ミシェル・フーコー、ジル・ドゥルーズ、ジャック・デリダ、ジャック・ラカンといった人の著作を読みながら、正しさとか本当とかを求めているかに見える人がいるのには驚きます。

何をどう読もうと、人それぞれですし、その人の勝手であることは言うまでもありません。

＊

話は少しずれますが、かつてフランスの現代思想が日本に紹介された際にその担い手となったのは、哲学者やアカデミックな哲学研究者ではなく、むしろ文学研究や批評に携わる人たちが多かったのを思い出します。

後者の人たちには、紹介する対象となる著作に唯一の解（まして真理など）を求める傾向は希薄であり、徹底して対象であるテキスト（言語作品）と戯れるという姿勢が基本にあった気がします。あたかも経典や聖典のように有り難く戴いて読むという態度からはほど遠かったという意味です。

特に記憶に残っているのは豊崎光一先生のなさったお仕事です。

＊

ジャック・デリダという、やはりフランスの人が聴覚的な比喻を多用した思索家であったとすれば、フーコーは視覚的な比喻を用いた思想家でした。デリダの文章では、声や鼓膜を始め、ティンパニだの太鼓だの鐘だのが出てきた記憶があります。それに知的アクロバットのような駄洒落の連発が特徴でした。

一方、フーコーは、襞（ひだ）を視る【※フーコーについてのドゥルーズの見解だったかもしれませんが】とか刑務所の監視塔とか砂浜の光景とか絵画・美術作品などをめぐって長文の論文を書きました。駄洒落はあまり得意ではなかった気がします。

なんて、見てきたような、つまり自分で原著を読んだような口調で話しましたが、デリダとフーコーについての以上のお話は、豊崎光一先生の著作からの受け売りです。豊崎先生は哲学書と呼ばれるであろうテキストを、文学作品を読むときと同様の手法で丹念かつ精緻に読んでいました。その手際は斬新で、目を開かれる思いがしました。残念ながら、故人です。その著作は、今では入手しにくいと思います。

(拙文「病室の蛍【モチーフ&断片集】」より引用)

\*

パリ・フロイト派だの、フロイトの大義派だのという「言葉=レッテル=ラベル=レーベル」がまつわりついている、ジャック・ラカンが考えていたらしきことには、とても興味がありますが、ラカンは、ジャック・デリダ同様に「ダジャレ」=「比喩の多用」の名人=迷人ですから、フランス語から日本語に翻訳するのは無理でしょう。読んで大儀なだけです。良心的で丁寧な解説書（今あたまにあるのは、ラカンの解説書ではありませんが、豊崎光一による、ドゥルーズ=ガタリ『リゾーム…序』、『余白とその余白または幹のない接木』（デリダ論）、『砂の顔』（フーコー論）です）を読んだほうが、まだだと思っていますが、現在では、あいにくその方面に疎くて、解説書にもめぐりあっていません。

(中略)

2項対立は、すっきりしすぎていて=きれいすぎて=話ができすぎていて、実に、あやしい=いかがわしい=うたがわしい=うさんくさい感じがします。えっ？ 「うさんくさいのは、おまえだろう」ですか？ 確かにそうだと思います。返す言葉がありませんので、話を変えます。

(拙文「かく・かける (6)」より引用)

\*

詩への評に、デリダやドゥルーズの著作についての「余白」への書き込みを『引用の織物』に織り込んだ宮川淳氏のお仕事も忘れられません。

\*

フランスの現代思想および文芸批評の分野で活動していた人物を、ルポルタージュする一方で、その著作にある「思想」ではなく、あくまでも書かれたテキストの言葉たちの演じる身振りに視線を這わせながら、日本語の身振りとして演じた書物として、蓮實重彦氏の『批評 あるいは仮死の祭典』と『フーコー・ドゥルーズ・デリダ』を挙げたいと思います。

総じてあれよあれよと読み進めることのできる『批評 あるいは仮死の祭典』なのですが、この書物にはジル・ドゥルーズ、アラン・ロブ＝グリエ、ミシェル・フーコー、ロラン・バルト、ジャン＝ピエール・リシャールという固有名詞が出てきて、それぞれの人名をめぐって章が分かれるという作りになっています。この本の目次を見るとわかりますが、学術論文のようにきちんとした構成になっています。

個人的には、ドゥルーズとフーコーとバルトを扱った部分では「収斂（しゅうれん）」を感じて（意識が狭く限定されていくとも言えます）、「なるほど」と思う箇所が多々あります。一方、リシャールを論じた部分では「拡散」を感じ（意識がどんどん広がるとともに薄れてもいきます）、読んでいる自分が崩壊していくような危うい快感を覚えます。

（拙文「3/3『仮往生伝試文』そして/あるいは『批評 あるいは仮死の祭典』【後篇】」より引用）

批評あるいは仮死の祭典

電子書籍ストア Kinoppy、本や雑誌やコミックのお求めは、紀伊國屋書店ウェブストア!  
1927年創業で全国主要都市や海外  
[www.kinokuniya.co.jp](http://www.kinokuniya.co.jp)

『フーコー・ドゥルーズ・デリダ』（蓮實 重彦）：講談社文芸文庫 製品詳細 講談社BOOK 倶楽部

『言葉と物』、『差異と反復』、『グラマトロジーについて』。いまや古典となったフランス現代思想の名著をめぐって展開するこの「  
[bookclub.kodansha.co.jp](http://bookclub.kodansha.co.jp)

\*

蓮實重彦の『フーコー・ドゥルーズ・デリダ』をときどき拾い読みします。通して読むことはないです。思考停止的な印象、つまり個人の意見および感想で恐縮ですが、この

著作でのフーコー論は物語みたいです。何度も読み返さないと分からない物語。読み返しても分からない物語。それでいいのだと思います。あれよあれよと読み返しています。

ドゥルーズ論は現代詩という感じがします。どうてい言葉では伝えられないし説明できないような「何か」をレトリックでほめかす。そんなポエムです。詩ですから、理解というよりも鑑賞するつもりで読むといいかもしれません。

デリダ論は、この著作ではいちばん読みやすいし分かりやすい気がします。記述が図式的なのです。チャート式ということですね。明晰という言い方もできそうです。読むとすっきりします。言語学のとまとめとか整理に最適の解説だと思います。

(拙文「3/3『仮往生伝試文』そして/あるいは『批評 あるいは仮死の祭典』【後篇】」より引用)

\*

話を戻しますが、自分の書いたことを読み返しながらかつ左往するの、思考云々というよりも、やはり性格的に煮え切らなくて、ふらふらしているということでしょうね。でも恥ずかしくはありません。そんな自分には慣れました。

「違う」は、「同じ」とか「同一」と同じです——。と書いた時点から、そうなるのは当然であり、ただ気づくのに時間がかかったというお粗末な話なのです。こういうことはよくあります。

繰り返しますね。人にも感知できる「同じ」と「同一」があるのではないか。それだけでなく「違う」や「異なる」もです。今はそんな気がします。

### 言葉は外から来るもの

唯一、「同じ」とか「同一」とか「違う」とか「異なる」と人が感知できるものがあります。それは、言葉ではないでしょうか。

言葉こそが人にとって唯一体感あるいは感知できる「同じ」であり「違う」であるという気がします。おそらく、「違う」が地で「同じ」が模様ではないでしょうか。基本が「違う」でその上に「同じ」や「そっくり」や「似ている」があるとも言えそうです。

地にある「違う・異なる」は言葉以前だという気がしてなりません。その意味で「わからない」であり「知らない」であり「おそろしい」という状態であり感情なのかもしれません。知覚や感知以前の感覚だという気がします。

同一

同じ

そっくり

似ている

違う・異なる（わからない）（知らない）（おそろしい）

なぜなら、おそらく、人にとって、言葉は外から来るものであり、外との接点でもあり、外のものだとも言えるし、たぶん外そのものだからだかもしれません。そもそも、信用することに無理があるのです。

\*

赤ちゃんは耳から聞こえてくる、そして空気や身体の振動でもある、言葉を外から自分に入れる。それを真似る・真似ぶ・学ぶ。そして自分もはっする・放つ・離す・話すようになる。

同時に表情や印や仕草を目にし、それに反応したり、それに対して自分も似たようなものを発するようになる。

文字の存在も知り、それを真似る・真似ぶ・学ぶ。なぞり、引っ掻き、掻く・描く・書くようになる。

言葉はみんなのもの。  
誰もが生まれた時に、既にあったもの。

言葉は真似るもの。  
誰もがまわりの人の言葉を真似て学んだ。  
まねる、と、まねぶ、と、まなぶは、きょうだいだったらしい。

自分が口にする言葉は既に誰かが言ったもの。  
自分が書いている言葉は既にどこかに書いてある。

言葉は借り物。  
既にある言葉を借りて使わせてもらう。

借り物は返さなきゃならない。  
次の世代のために残すもの。

だから、大切に使おう。

(拙文「剽窃から遠く離れて あるいは引用の織物」より引用)

\*

とはいえ、依然として、言葉が外から来たものだという違和感が残り続ける。言葉をつかってうまくいく場合もあれば、うまくいかない場合もある。うまくいかないことのほうが大きく感じられる。悩ましい。いらいらする。つらい。

言葉をめぐって人は悩み苦しんできた。そう言えそうです。もちろん、こんことで悩むのはごく一部の人です。悩んでいいことなど、これっぽっちもないからです。

チャンドス卿の手紙 - Wikipedia  
[ja.wikipedia.org](http://ja.wikipedia.org)

### 言葉は後押ししてくれる

あれとこれが似ている。同じかもしれない。同じだろう。同じに違いない。同じはずだ。同じと決める。同じだ。

あれとこれが似ている。でもちょっと違うみたい。違うかも。違うだろう。違っているに違いない。同じわけがない。違うと決める。違う。

だって、犬と猫だもの。イヌとネコはちがうでしょ？ inu と neko は音だって違う。文字だって違う。見た感じも違う。

こういう時に、言葉で「違う」ということがどれだけ勇気づけてくれることか。どれだけ判断を後押ししてくれることか。だって、イヌとネコは違う言葉だもん。辞書や事典や検索をすれば「違う」って書いてあるもん。

言葉は後押ししてくれる頼もしい存在なのです。これに頼るともう抜けられません。事実とは、真理とは、本当とは、言葉なのです。

\*

言葉の働きは、区別することです。わかる、分ける、別ける、わかる、分かる、解る、判る。ね？ わかったでしょ？ わけるとわかるのです。わからないとわかりません。言葉は魔法。イツ・マジック。イツ・ア・ミラクル。

言葉の基本には「違う」があります。「わかる」なんて面倒くさいことを言う前に、違っているのです。

有無を言わず、「違う」がある。世界は「違う」からできている。そう感じさせるのが言葉なのです。

言葉は外から来たものです。育った場所や時代が異なれば、覚えて身につける言葉も異なります。英語、日本語、アラビア語、中世ドイツ語、古代ギリシャ語、古代中国語……。でも大丈夫。翻訳ができます。不思議です。摩訶不思議。言葉は魔法。イツ・マジック。イツ・ア・ミラクル。

＊

言葉の基本には「違う」があります。「わかる」なんて面倒くさいことを言う前に、違っているのです。

有無を言わず、「違う」がある。世界は「違う」からできている。そう感じさせるのが言葉なのです。

世界は「似ている」に満ちています。というか、ぼーっとしていると似てくるのです。でも、顔を洗ってしゃきっとすると、世界は「違っている」に満ちたものになります（見えます）。それが知識であり情報であり理解であり教養であり、ひょっとすると悟りなのです。

しゃきっとする。  
覚醒した気分になる。  
世界がクリアに見える。

これは強力な、いや最強の嗜好品ではないか。  
最強の嗜好品どころか、きわめて危うい薬物なのではないか。  
嗜癖している相手に嗜癖を説いても、無駄。

「だいじょうぶだお。らりってなんかいないおー」

いずれにせよ、

言葉は魔法。言葉ってすごい。  
言葉は魔法。

無から有を生むのが言葉という魔法。  
そんな言葉を誘い出す嗜好品。

魔法を生み出す嗜好品。  
嗜好品、恐るべし。  
ヒトにとって言葉こそが最強の嗜好品なのかもしれない。

自然界では得られない言葉という「嗜好品」を呼び出すために嗜好品をもちいる。

ヒトはややこしい生き物だ。  
ヒトは言葉に依存・嗜癖している。言葉なしでは生きられない。

言葉は物神・事神・言神。  
言葉は魔法。

(拙文「言葉を誘い出すもの <言葉は魔法・023 >」より引用)

## 言葉はわかる

言葉はわかります。これが言葉の最大の最強の武器です。わかるから、世界がわけられ、わかるのです。

違う異なるという漠然とした気持ちを、言葉は音と文字という感知できる形で「違う」「異なる」としてくれます。「違う」と「異なる」が目に見えて、耳で聞こえるのです。こんな心強いことはありません。

「似ている」という曖昧なものをわかることさえ可能にします。「同じ」「同一」「似ている」「そっくり」「違う」「異なる」——これらは全部言葉です。石と卵は違います。見て誤魔化されたとしても、言葉で違うと決めれば、違うのです。

そうです。決めたのです。決めるのです。言葉があるから、人はそう決めるのです。そうした決まりにケチをつけると笑われます。馬鹿にされます。そう、そんなことをする者は馬鹿者なのです。馬鹿者という言葉があるのだから、馬鹿者なのです。

ただし半端じゃなく頭のいい人がそういう疑いをもって本を書いたりすると、人は一目置きます。そして考えます。

言葉は物じゃない、だって？ ふーん、そうかなあ。考えたことないよ。てか、そんなこと考える暇がないし。

ミシェル・フーコー、渡辺一民／訳、佐々木明／訳『言葉と物〈新装版〉—人文科学の考

古学一』| 新潮社

ベラスケスの名画「侍女たち」は、古典主義時代における人間の不在を表現している。実は「人間」という存在は近代に登場したもので

[www.shinchosha.co.jp](http://www.shinchosha.co.jp)

そんなふうに疑う人も中にはいるでしょう。でも、ふつうはすぐに忘れます。それが人なのです。そうじゃなきゃ、人なんてやってられません。それでいいのです。

馬鹿 (folie/fou) はどこでもどの時代でも馬鹿であったわけではない、だって？ うっそー！ 馬鹿は馬鹿じゃん？

ミシェル・フーコー、田村俣／訳『狂気の歴史〈新装版〉—古典主義時代における—』| 新潮社

長きにわたって社会から排除され、沈黙の領域に押し込まれてきた狂気を、豊富な例証をもとに探求することを通じて、ヨーロッパ文明

[www.shinchosha.co.jp](http://www.shinchosha.co.jp)

SとMは反対ではない、だって？ いやだ、冗談は顔だけにしてよ、わたしみたいに。

マゾッホとサド | 晶文社マゾッホとサド

ジル・ドゥルーズ 蓮實重彦訳四六判 222 頁定価：2,310 円（本体 2,100 円）4-7949-1264-1 C0398

[www.shobunsha.co.jp](http://www.shobunsha.co.jp)

ザッヘル＝マゾッホ紹介: ジル・ドゥルーズ, 堀 千晶 | 河出書房新社

ザッヘル＝マゾッホ紹介サドに隠れていたマゾッホを全く新たな視点で甦らせながら、マゾッホの現代性をあきらかにしつつ「死の本

[www.kawade.co.jp](http://www.kawade.co.jp)

繰り返しますが、おそらく、人にとって、言葉は外から来るものであり、外との接点でもあり、外のものだとも言えるし、たぶん外そのものなのです。そもそも、信用することに無理があるのです。

外から来たものと、内なるものとの間に齟齬（そご・食い違い）があるのは当然でしょう。そもそも、両者をつながらせようとか対応させようとするのが無理なのです。まさに、どだい無理なのです。

そのことに敏感だった人の一人にニーチェがいるような気がします。名前だけ知っている人です。ニーチェとは私にとって固有名詞であるにすぎません。でも、その固有名詞のイメージの喚起力は、マラルメと同様に途方もなく強いのです。他人とは思えないほど親しい存在なのです。

善悪の彼岸 - 岩波書店

[www.iwanami.co.jp](http://www.iwanami.co.jp)

### 曖昧放置プレイの名手たち

マラルメもニーチェも結果的に曖昧放置プレイがうまい人だったという印象があります。ニーチェはがむしゃらに矛盾と逆説を具現し、マラルメは徹底してほのめかすという手法で読む者を曖昧に放置しました。

クロソフスキーはそんなニーチェに付き合っただけで曖昧放置プレイを試みましたが、なんかイマイチの感を拭えません。その点、ドゥルーズは病弱ながらも淡々とお仕事をし、結果的に曖昧放置プレイ感の濃い巨匠になりました。慕う弟子も多いですね。

禅の公案、世阿弥、芭蕉、そして腹芸という具合に、曖昧放置プレイがお家芸ではないかと思われるこの国にも、マラルメ、ニーチェ、ドゥルーズの信者が多いのは注目すべき現象ではないでしょうか。

ちなみに私は曖昧放置プレイ大好き人間です。上で挙げた固有名詞が載っている本をこれまでにどれだけ購入したことか。どれだけそれを読まずに処分したことか。これだけでも私のミーハーぶりがおわかりになると思います。

今挙げた固有名詞たち——曖昧放置プレイの名人——に共通するのは、真理とか事実とか悟りとか覚醒という言葉が世迷い言だと看破し、概念とか観念とか学術用語とかいう言葉が対応を欠く空虚な記号である、と生真面目に受け止めてしまったという点ではないでしょうか。

こうなると行き場を失います。そうした考え方や立場がほとんどなかった時代に孤立無援に近い状態でいたわけですから、その孤独感とよるべなさを想像すると感情移入のあまりに苦しくなるほどです。

この固有名詞たちが行き場を失った時に目を向けたのは言葉であり、言葉の綾、つまりレトリックであったのはうなずけます。

また、以下のような日本における状況も理解できます。

＊

日本では——哲学や思想界ではなく——むしろ文芸や文芸批評の担い手たちが、フランスの新しい哲学と思想を紹介・導入する際に積極的で大きな役割を果たしたことは注目していいと思います。

(拙文「3/3『仮往生伝試文』そして/あるいは『批評 あるいは仮死の祭典』【後篇】」より引用)

＊

上で挙げた固有名詞たちが残した著作を前にしてやるべきことがあるとすれば、その思想の理解では断じてなく、テキストの分析および戯れとしての多様な解釈なのです。

言い換えると、経典のようにその著作を有り難く戴いてその思想を理解する——理・ことわり・断り・言わり・事わりを解く・とく・説く——のではなく、その著作を詩や小説のように読解する——読み解く・詠みとく・よみほぐす——ことではないでしょうか。

＊

ここで、曖昧放置プレイの尻拭いに関して、以下に図式というレトリックを用いて述べる横着をお許してください。

では、図式的にかいつまんでまとめてみます。

生真面目なドゥルーズは文学作品を思考の対象とすることでレトリックの整理をしながら洞察に至った。並外れた洞察力を持つフーコーは、文学作品を活動の対象とすることで、その直観を確認した。

デリダは、線香花火に終わったソシュールの尻拭いをする形でフランス語として破格の駄洒落を頻発することでレトリックを逆手に取ろうとした。ただし、その駄洒落の多くは、たとえば日本語における表記を見れば見劣りするようなものだった。なぜかデリダを自分の問題ととらえてしまう日本人の勘違いにも助けられたもよう。

諦めきったマラルメは、ふて腐れたようにほのめかしという形のレトリックに走るしかなかったが、今も根強いファンがいる。「何かがあるように匂わせる」というアジア的とも言えるレトリックが功を奏したのかもしれない。

沈黙を選んでしまったウイトゲンシュタインの寡黙な言葉遊び、つまりレトリックはジョイスやベケットの言葉遊びの系譜につらなるのではないか。

自分が曖昧放置プレイをしているという自覚が最も希薄だったと思われるのは、ニーチェです。矛盾するのに忙しくてそんなことを考える余裕はなかったと言うべきでしょうか。根がミーハーな俗物である私はそんなニーチェに憧れます。

ちなみに、ここで挙げた名手のうちで、墓石の下でいちばんにんまりとしていると考えられるのは、マラルメです。私はそんなしたたかなマラルメ師に親しみを覚えます。かまってもらえそうだからです。

もちろん、以上は個人の意見および感想です。というより、ここまで来ると紛れもなく妄想です。

＊

とりわけ、ジャック・デリダ、ジャック・ラカン——ラカンの残したテキストは少ないのですが、だからこそ、結果的にソシュールやマラルメと同じく曖昧放置プレイの名手として名を残しているとも言えます、寡黙、場合によっては沈黙（死者は饒舌なレト

リシャンです)と「テキストの不在」こそが最強のレトリックなのです——、ミシェル・フーコー、ジル・ドゥルーズといった書き手は、言葉の多義性や多層性、ひいては言語の限界性を意識したうえで文章(＝レトリック)をつづったのですから(ほんまかいな)、その文章について語る文章やその翻訳が、ルビや約物を使わざるをえないのは当然であり必然だという気がします(もちろんこれは趣味とレトリックの問題でもあり、使わない強者もいます)。

(拙文「振る/振られる」より引用)

\*

そういえば、最近パトリア・ハイスミスの小説を読み返しているのですが、ハイスミス経由でラカン——この固有名詞の残したテキストの風味(思想ではありません、あくまでも風味です)は、マラルメの散文バージョン、またはマラルメの散文的口述筆記版に思えてなりません——という曖昧放置プレイの名手を思い出しました。ジャック・ラカン(1901 - 1981)にはスラヴォイ・ジジエク(1949 -)という人がついていて、精力的な活動をしています。

ジジエクの『斜めから見る——大衆文化を通してラカン理論へ』という本は、いわゆる大衆文化を題材に斬新な精神分析的な分析をおこなっていて、私はときどき目を通して目まいを覚えます。めちゃくちゃ面白いという意味です。

ジジエクという人が、大衆を対象とした映画や小説、あるいは政治などについて、どれくらい刺激的な考察をおこなう人なのかは、YouTubeの動画をご覧になると一目瞭然だと思います。私はこの人が大好きで、動画(検索するとたくさんあります)をよく見ます。

それにしても、ジジエクさんは、すごいレトリシャンですね。レトリックだけで成り立っているような話術。

このレトリックの大家にはいつも励まされます。

\*

レトリック、表面、器、細工、装飾、水平運動、アメンボ、砂浜、浅瀬、顔、表情、表

現、襷、皺、タトゥー・入れ墨、模様、綾

レトリック、トリック、修辞、美辞、巧言、美辞麗句、ほのぼのれいく、言葉の綾、手品、イリュージョン、錯覚、やってる感、空っぽ、うつせみ・空蟬・現身、あなた・貴方・彼方

### 外から来るものとの出会い

「つなげる」のはいいのですが、どういう具合につながっているのかは、きわめて「曖昧＝テキトー＝あんまり考えていない」場合が多いですね。結論から申しますと、

\* 「AとB」の真ん中にある「と」は、「何でもありー」だ。

さらに、

\* つなげてみないとわからない

\* つなげてみてもよくわからない

と言えそうなんです。

だから、

\* 眺めているしかない

とも言えそうです。ああでもないこうでもないと言いながら。

(拙文「言葉は「と」(言葉は魔法・第8回)」より引用)

\*

何かについて言葉を使って言う場合には、とりあえず

\* 言ってみないとどうなるかはわからない

\* 言ってみたところでよくわからない

だから

\*眺めているしかない

それに

\*一人で眺めているとよくわからない

から

\*複数で眺めてみるとよけいにわからなくなる

\*

サイコロの目は外から来るものだという気がします。マラルメのことを久しぶりに考えていて、そう思いました。以前は、マラルメ師といっしょになってサイコロ遊びをしていたのです。

話を戻します。

サイコロの目は外から来るもの。どんな目が出るかはわからない。目が出ても、その目が何なのか（どういう意味なのか）はわからない。ひょっとすると目が出ていることもわかっていないのかもしれない。

わからないようになっている。わからないようにできている。わからないように仕組みられている。そうとしか思えない。

(中身が見えそうな衣服をまとった人の写真を見て、子どもが横から覗こうとしたり、裏返して見ようとするのと似ている。見えないようになっている。でも、見えるとしか思えない。それくらい、うまくできた仕組みなのだ。それを見るとすれば、想像するしかない。)

わかったと思うのは錯覚。わからないのもやっぱり錯覚。

サイコロの目は外から来るもの。外から来るものとの出会いとは、そんなものなのかもしれない。

## 言葉は外へと帰って行く

あなたが口にした

文字にした

つづった

紡いだ

奏でた

唱えた

歌った

語った

伝えた

吐いた

叫んだ

言葉たちは

あなたとは関係なく流通していく

受け継がれていく

放って置かれる

無視される

忘れ去られる

消える

言葉は外から来るもの

外との接点

外のもの

外そのもの

だから

言葉は外へと帰って行く

言葉は外から来て外へと帰って行く

死とともに人は言葉から解放される

言葉に染まっている人たちを残して

\*

飼い慣らされた外と言うべきなのかもしれない。

舌と唇で転がせる外など、外であるはずがない。

ペンやキーボードを操作して自由につくることができて、変えることができて、消すことさえ可能な外、つまり言葉。

言葉は外から来たものであるとしても、やはり外そのものではない。

ただし、それしか人にとって外を感知できるよすがはない。

消すことさえ可能な外。

ただし、消しても痕跡は残る。

こればかりはどうにもならない。

言葉は人の身体に痕跡を残さずにはおかない。

これこそが言葉が外から来たことを人が感知できるよすがなのかもしれない。

言葉の身体性とはそういうことなのかもしれない。

つまり、いや、たぶん、記憶として。ざらざらとした感触として。痛みとして。視覚的な

ものであったり、風景ではなく。砂の顔でさえなく。

#言葉 # 日本語 # レトリック # ミシェル・フーコー # ジル・ドゥルーズ# ジャック・  
デリダ # ジャック・ラカン # フリードリヒ・ニーチェ# ステファヌ・マラルメ # パト  
リシア・ハイスミス # スラヴォイ・ジジェク# 蓮實重彦 # 豊崎光一 # 宮川淳



03/08 言葉の中にある言葉



＊

## 言葉の中にある言葉

星野廉

2023年3月8日 07:50

本記事は「もう一つの言葉」というタイトルで、2021年9月28日にnoteで「言葉は外から来るもの」という記事に続けて連投したものです。(そのアカウントは削除していません)。

この「言葉は外から来るもの」は「外からやって来る外【引用の織物】」と改題して先日再掲しました。

そんなわけで、本記事と「外からやって来る外【引用の織物】」は内容的につながっています。今回の再掲にあたり、当時の勢いを殺がない程度に若干の加筆をしました。

### 目次

もう一つの言葉

母語で書くこと、外国語で書くこと

バベルの塔、そしてバベルの後に

### もう一つの言葉

言葉は外から来るもの。

上のフレーズについてあれこれ考えています。いろいろ解釈できる言い方ですが、いったん放った言葉は離れていきますから、それはそれで構わない気がします。とはいうものの、さらに言葉を重ねてみます。いわば追い打ちかけるつもりで、追って逐って負って織って折ってみるのです。

言葉は外から来るものだというのを体感するためには、誰にとっても当たり前化している母語よりも、非母語——自分にとってのもう一つの言葉と言ってもいいかもしれませんが——との各自の体験を振り返るのがいいように思われます。外国語ではなく非母語としたのには理由があります。

今頭にあるのは漢文なのです。私には縁遠い話なのですが、かつてこの国には幼い頃から漢文の素読をやらされて育った人たちがたくさんいたらしいからなのです。たとえば、夏目漱石や森鷗外はそうした体験というか訓練を受けたそうです。

漢文の素読や漢文の教育については知りません。私の漠然としたイメージでは、かつてこの国には古代中国語の文語が土着の言葉と並行して使われていた。具体的に言うと、古代中国語がこの国の為政者たちの作成する公文書に用いられていた。さらに言うなら、いわゆる古代中国語の文字、つまり漢字からひらがなやカタカナが作られた。簡単ですが、そんなことを学校で習った覚えがあります。

古代中国語が主に書き言葉としてこの国で使われてきたというのですから、それを教えるという習慣があり手法が生みだされたに違いありません。それが綿々と続いてきて、たとえば慶応3年（1867年）に生まれた夏目金之助（漱石）が漢学私塾二松學舎で漢文を習い、後には漢詩をたしなむまでの素養を身につけた。

もっとも漢文の知識はエリートに必須の条件であり、ごく一部の国民がその素養を身につけていたことを忘れてはなりません。昔の人は誰もが漢文を読めたわけではないという意味です。まして漢詩を作れたのは、エリートのうちでもさらにごく一部の文人であったと思われま

まことに大雑把な図式ですが、そんな伝統というか「制度」があったようです。

いずれにせよ、現在の日本語と現在の日本の諸制度は漢文なしには、この形では存在していないのであり、漢文を日本語の一部、さらには漢文による古文書を日本文化の一部と見なさないほうが無理があるのではないかと思われま

\*

学校で漢文を習うのが嫌で嫌で仕方なかったという記憶しかない私には、こういう話は、語ることはできても、体感できない不思議な物語に思えます。こうした歴史があったからこそ書かれたに違いない文学作品の数々を、まったくそのような前提を意識することなく読んできたのですから、恐ろしくも感じます。自分の無知に対してです。

かといって、今から漢文や古文——古文も私にとってはもう一つの言葉です——を勉強する気にはなれません。私は根っからの怠け者なのです。

＊

話を戻します。

——言葉は外から来るものだということを体感するためには、誰にとっても当たり前化している母語よりも、非母語との各自の体験を振り返るのがいいように思われます。外国語ではなく非母語としたのには理由があります。

冒頭でこう書いた理由は、漢文を外国語と呼んでいいのだろうか、というためらいがあったからに他なりません。ややこしいことはさておき、話を進めましょう。

今頭の中にあることを思いつくままに書いていきます。勢いに任せて書いていきますので、調べ物は後回しになる予定です。今回の記事は、今後の記事のためのメモみたいなものになるかもしれません。

書いてみないと分からないのです。そんなわけで乱文失礼します。え？ 毎度のことだ、ですか？ 恐れいります。

## 母語で書くこと、外国語で書くこと

自分にとっての「もう一つの言葉」という意味での「非母語」の例として、漢文を考えてみます。私たちにとって英語と並ぶ身近な外国語だからです。

想像してみてください。漢文で習う漢詩に描かれた風景や風物は古代中国のものなのです。日本語で対応するものを探すのは難しい部分もあるに違いありません。

國破れて 山河在り  
城春にして 草木深し

くにやぶれて さんがあり  
しろはるにして そうもくふかし

かろうじて覚えている漢詩に、上のようなものがあります。教科書に出ていたのを暗唱しているのです。すらすらと口をついて出る言葉に、あっけにとられます。こんなものが自分の中にあったのか。気がつきませんでした。不思議でなりません。

手術の後で、「あなたの体にこんなものがあったよ」とお医者さまに言われたような気分と言えば言いすぎでしょうか。記憶とか暗唱というものの痕跡は、普段は気づかないままに残っているのですね。

話を戻します。

この漢詩に描かれた風景は昔々の中国のものなのです。それを昔々の日本人はどう受け止めたのでしょうか。戦（いくさ）はどんな民族にも見られますから、昔の日本人もまた自分たちの体験に照らし合わせて読んだのかもしれない。

このように外国語で書いてあることを読み理解するためには、書かれていることに対応する物や事を想像しなければ、容易に習得できないのではないのでしょうか。

漢文という中国語を日本語で読める技術を開発したり、詩吟という芸術に改造したり——、昔の日本人はすごかったのですね。

＊

漢文は古代中国語の文語体です。中国の周辺の国や地域や民族をつなぐリングワ・フランカ（共通語・国際語）でもありました。またそうした地域における為政者の公文書で用いられる書き言葉でもあったようです。

この国では、漢文は漢文脈とか漢文的な言い回し、あるいは文語体といして、現在の日本語の中に入り混じっていると考えられます。日本人は読み下しやレ点という手品（魔法と言うべきでしょうか）を発明して、中国語の文章を日本語の中に取り入れたのです。

たとえば、「あの人が妊娠した」（漢語）、「あの人に赤ちゃんができた」（和語）という具合に、日本語は漢語系と大和言葉系の二重構造があると言われます。

——いわば追い打ちかけるつもりで、追って逐って負って織って折ってみるのです。

冒頭でこのような言葉遊びをしましたが、これは上で述べた二重構造があるからできる遊びです。こんなことができるのはおそらく日本語だけです。やらない手はありません。私は日本語とその特性を愛しています。日本語で遊んでいるのではなく、遊んでもらっているのです。愛おしい言葉です。

今回私が漢文にこだわったのはこういう理由からなのです。

言葉は外から来るもの。

言葉は借り物。

言葉は内で生きているもの。

リングワ・フランカ - Wikipedia

ja.wikipedia.org

\*

英語はどうでしょう。

私にとって英語は外国語です。今も話すのはもちろん、読み書きにも苦労しますから、第二の母語とはとうてい言えません。中学生になって本格的に英語を勉強し始めた頃を思い出すと、頭の中には常にアメリカがありました。幼い頃にテレビで見たアメリカ製のドラマやアメリカ製の歌を重ね合わせながら学びました。

私にとって英語は、身の回りの物と対応させて身につけた言葉ではありません。生活

の中で覚える。できれば学校の科目を英語で学ぶ。これが語学を第二、第三の母語として学ぶコツだそうですが、分かる気がします。

とはいえ、この二つの言語の間の「対応」というのは簡単なものではなさそうなのです。

たとえば、日本語で、米（こめ）、稲（いね）、苗（なえ）、米粒（こめつぶ）、ご飯（ごはん）、飯（めし・いい）、ライス、もみ、白米（はくまい）、精米（せいまい）と呼ばれているものは、すべて英語では基本的に rice というそうです。

次の英語の単語を見てください。

(1) cow、(2) ox、(3) bull、(4) calf、(5) cattle、(6) heifer。

番号を付けたのには理由があります。これらは基本的には、日本語で「牛・うし」と呼ばれているものなのですが、英語では区別するというか、以上のような別個の単語を当ててるのです。順番に、日本語訳を並べます。

(1) 雌牛・乳牛、(2) 雄牛・去勢雄牛（主に食用・荷役用です）(3) 雄牛（去勢していない繁殖用の雄牛です）、(4) 子牛、(5) 畜牛、牛の群れ、牛の総称（複数として扱います）、(6)（三歳未満で、まだ子を産めない）雌牛。

日本語では、すべてに「牛」という言葉がついているのに対し、英語では見た目ではまったく別の単語が与えられていることに注目してください。

日本語を母語としている人たちにとっては、「なんで、牛をわざわざ区別して、まったく違った単語で呼ぶのだろう」という疑問が浮かぶのではないのでしょうか（もちろん、上の英単語をすべての英語のネイティブスピーカーが理解しているわけではありません。人それぞれ、英語もそれぞれです）。

一方、英語を母語としている人たちは、「全部 rice なのに、どうして区別して言うのだろう」と不思議に思うに違いありません。

つまり、日本語と英語とでは、単語レベルで必ずしも一対一で対応しているわけではないということですね。

極端な例を挙げましたが、私たちにとって外国語とは基本的に単語レベルで意味やイメージやニュアンスが一対一で対応しないことが体感できたのではないのでしょうか。

さらに言うなら、日本語の「山」と英語の「mountain」、そして日本語の「川・河」と英語の「river」は一対一で対応しないらしいのです。

國破れて 山河在り

たぶん、中国語の山と川・河も、そうではないでしょうか。

日本語であれ、英語であれ、中国語であれ、漢文であれ、言葉というものが、ざらりとした違和感に満ちたものを感じられませんか。つまり、言葉は借り物なのです。個人レベルでも、国や地域や民族レベルでも、です。

言葉は自分の中にあるのではなく、生まれた時に、既にあった。しかも、自分の外にあったものなのです。それを「真似る・学ぶ」という形で借りて内に入れて身につけたのです。

\*

ところで、対応するものを欠いた（生活空間である身の回りに、対応するものが見当たらない）言語を習得するのは、ある意味空疎であり味気ないものでしょうね。遠く離れていて、風景や、食べ物や、季節感や、生えている草木や花が異なる国や地域の言語。

でも、その空疎や味気なさを日々生きている人たちがいるみたいなのです。「みたい」としたのは、私が実体験として知っていたり体感できることではなく、間接的に知っていて想像するしかない状況だからに他なりません。

次のような環境にいる人たちを想像してみてください。

自分の周りでは自分の母語ではない言葉が話されている。そんな環境の中で、自分が唯一自由に話せるのは、父と母ときょうだいの話す言葉だ。その言葉を家族が話すのを聞き真似て覚えた。

家を一步外に出れば、知らない言葉が話され書かれている世界がある。テレビで知っている世界だ。物心ついた頃から、知っている世界だ。でも、そこで使われている言葉を自分は知らない。知っているのは挨拶と生活に必要なわずかな単語だけ。

つまり、自分の母語と、生活空間とが対応していない、一致していない。たとえば、自分の母語にはない「雪」が降る土地、「春」——「春」も母語にはない——になると「桜」が咲き乱れるこの土地に、自分は住み、家族と暮らしている。

お分かりになったでしょうか。

そうです。たとえば、ブラジル語、スペイン語、ビルマ語（ミャンマーの言葉）、ベトナム語、タガログ語、インドネシア語、マレー語、ペルシャ語、アラビア語です。まだまだたくさんあるに違いありません。思いつかないのは私が単に無知だからです。さらに言うなら、そうした人たちに無関心だからです。恥ずべきことであり、反省すべきことだと思います。

\*

そうした人たちの話す言語には、ひょっとすると「雪」や「桜」や「風鈴」や「蛍」や「炬燵」に相当する言葉がないかもしれません。でも、暮らしている「外の世界」つまり、この国にはあるのです。歌に歌われ、文学作品に登場し、この国の風物として欠かすことのできないものと言えるでしょう。

でも、自分にとっての第一の、あるいは唯一の言語である母語には、それらに相当する言葉がない。

自分の話す言語に対応する物や事がない言語が、あちこちで話され、看板や標識や印刷物に書かれている国。しかも、その国の文字には、ひらがな、カタカナ、漢字、ローマ字まである。信じられない、夢のような言葉が使われている国に、自分と家族が暮らし

ている――。

そんな環境で育った人が「里帰り」した時を想像してみてください。

自分が家族から習った言葉が話され、書かれている「母国・祖国・ふるさと」。そこで自分が歓迎されるという保証は必ずしもあるわけではありません。

「お前の言葉、何か変だね」「あなた、これを知らないの?」「今まで何を食べてきたの? あなたの作る〇〇は本物じゃないよ。まずいったらありゃしない」「きみって本当に〇〇人?」「やっぱり外から来た人間だ。われわれとは違う、あんたはよそ者だよ」「うそー! この使い方を知らないの? やれやれ」「何事においても中途半端なんだよね、きみは」「あれを知っているのに、これを知らないの? 変なの」「言葉で知っているけど、実物を知らないって、どういうこと?」「気をつけなよ。きみが秘密工作員だっという噂を聞いたよ」

「気をつけなよ」で始まる最後の架空の科白は、テレビのドキュメンタリーで聞いた話を脚色したものです。めちゃくちゃ怖くないですか。ヘタをすると刑務所行き、さらには.....。

それぞれが、まったく根拠のないものではないのです。この国で生まれ育ち、日本語を母語として生きてきた人たちには、体感しにくい状況であることは間違いないと思われれます。

今、ひょっとして既視感を覚えている方はいらっしゃいませんか?

それって、あれと同じじゃん。

あるいは、嫌な記憶の数々に襲われている方もいらっしゃるでしょう（思い出させて、ごめんなさい）。

これは私が経験したことだ。

そうです。帰国子女という言葉で呼ばれている、または呼ばれたことのある人たちと同じです。

それって、今の私よ、そしてうちの子たちよ。

海外在住の方は、そう思っているに違いありません。

上で述べたような厳しかったり悲しい状況は決して他人事ではないのです。

このように対応物を欠いた言語との接触とは、結局異文化との触れ合いであり摩擦であり、場合によると衝突なのですね。言葉と文化と土地は切り離せません。でも、切り離されることはよくあるのです。

たぶん、人が移動する生き物だからでしょう。途方もない距離を、です。いい意味でも、悪い意味でも、です。

\*

話は飛びますが、海外に在住しながら、日本語で執筆活動をしている（あるいは、してきた）人たちがいますね。多和田葉子さんが頭に浮かびます。言葉と言語について、独特の視点と感性からお書きになった作品は、私の頭を揺さぶるだけでなく、さらには魂をも揺さぶります。その小説やエッセイは、海外で長く生活なさってきた人でなければ書けない見識に満ちています。

あと、辻仁成さんや塩野七生さんも、忘れるわけにはいきません。

海外で教育を受け、日本語以外の言語で書いている作家としては、カズオ・イシグロを挙げないわけにはいきません。イシグロの初期の作品である『遠い山なみの光』と『浮世の画家』では日本が描かれていることは注目すべき点であると思います。また、その後、日本を直接取り上げた小説をほとんど書かなくなったことも、また注目していい気がします。

紹介が最後になりましたが、もちろん、村上春樹がそうですね。村上春樹の多くの作品は海外で執筆されたものです。世界に誇る日本文学の名作の数々（複数の言語にも翻訳されています）が日本以外の土地で書かれた——この事実の意味と重みを噛みしめたいと思っています。

＊

日本にいて日本語で、あるいはその人の母語で創作活動をしている書き手にも目を向けないわけにはいきません。そう書きながら、恥ずかしいことにそうした作家について私は、デビット・ゾペティさんとリービ英雄さん以外にほとんど知りません。

そんなわけで、楊逸（ヤンイー）さんと東山彰良さんについての、そして「日本外国人作家一覧」というタイトルのウィキペディアの解説を参照ください。

日本外国人作家一覧 - Wikipedia  
ja.wikipedia.org

Category: 越境文学 - Wikipedia  
ja.wikipedia.org

＊

祖国を遠く離れて、母語で書く、あるいは外国語で書くという状況は、どうやら珍しいことではないようです。こうした状況を珍しく感じるとすれば、その人、またはその人たちは幸せだと言うべきなのかもしれません。これは私自身についての思いでもあります。

親の転勤だけでなく、経済的あるいは政治的な理由や事情で、そうした境遇にあった人たち、そして現に今そうした状況を生きている人たちおびただしい数になるのではないのでしょうか。

亡命文学とか亡命作家という言い方があります。私には大きすぎるテーマです。ウィキペディアとコトバンクの解説に丸投げする無恥をお許し願います。

Category: 亡命文学 - Wikipedia  
ja.wikipedia.org

亡命文学 (ぼうめいぶんがく) とは? 意味や使い方 - コトバンク  
日本大百科全書 (ニッポニカ) - 亡命文学の用語解説 - 政治的・人種的・宗教的理由によって祖国を離れたり追われたりして、

\*

そうそう、アーネスト・ヘミングウェイを忘れるわけにはいきません。ヘミングウェイの主要な作品群は祖国アメリカを離れて書かれたものです。ヘミングウェイが長期滞在していたフランスのパリにおけるガートルード・スタインと彼女を取り巻く人物たちにも注目したいところです。

ヘミングウェイとガートルード・スタインの国籍はアメリカ合衆国ですが、ヨーロッパおよび英国となると、地続きであったり、海峡で隔たっているだけですから、祖国を離れて活動する作家や音楽家や芸術家の例は枚挙にいとまがないと言うべきでしょうね。

そういえば、今集中的に読んでいるパトリシア・ハイスミスも祖国を離れて創作していた作家だと気がつきました。英仏両語での著作もあるサミュエル・ベケットもそうです。多言語に通じたナボコフ。ルーマニア語だけでなくフランス語で書いていたシオラン。同じくルーマニア出身のエリアーデもいたなあ。英語でも書いたウィトゲンシュタインも、そうなのか。そうだ、フランス語で書いたアゴタ・クリストフがいた。

話がいつの間にか非母語で書く作家へと越境してきました。人は移動し越境する生き物なのだをつくづく感じます。このテーマは奥が深そうで、收拾がつかなくなってきたようなので、この辺でストップします。

\*

どうでしょう。

言葉は外から来るもの——。このフレーズで私が言いたいことが、体感とまではいなくても、想像力を働かせることで、いくらか具体的にお分かりいただけたとしたら、嬉しいです。

いい意味でみなさんを揺さぶろうとして、意識的にいろいろなケースを挙げたので、話があちこちに飛び、まるで乱暴な運転みたいで、景色が目に入らなかったのではないかと心配もしております。

＊

言葉は外から来たものです。育った場所や時代が異なれば、覚えて身につける言葉も異なります。英語、日本語、アラビア語、中世ドイツ語、古代ギリシャ語、古代中国語……。でも大丈夫。翻訳ができます。不思議です。摩訶不思議。言葉は魔法。イツ・マジック。イツ・ア・ミラクル。

(拙文「言葉は外から来るもの」から引用) ※「外からやって来る外【引用の織物】」と改題して再掲した以下の記事です。

### バベルの塔、そしてバベルの後に

では、今回の記事をまとめます。

言葉は外から来るものなのです。

当たり前化した母語だと、言葉が内から出てくるものだという気がします。それは確かにそうなんですけど、もともと内にあるものではありません。

親や育った環境が異なれば、異なった言葉を身につけるのが人という生き物です。これは当たり前のことなのですが、体感するのは難しいかもしれません。

言葉が外から来るものだというのを体感するのに適しているのは、日本における漢文であり、古文であり、多くの人にとって第一の外国語となっている英語ではないでしょうか。

英語は外国語ですが、漢文も古文も、非母語という意味では外国語です。そうした言葉を身につけるのは、いわば異物を体内に入れるような事態だと言えそうです。でも、よく考えると、既に体内に入っている日本語もまた異物であったことを忘れてはならないのではないのでしょうか。

たまたま日本語だったのです。必然性はありません。当たり前には思えますが当たり前

ではなかったのです。複数の言語が使用されている国や地域では、このような言語の異物感は日常に経験され体感されている事実なのかもしれません。

私はそうした海外での長期滞在の経験がないので、知りません。想像するしかないという意味です。そこで、今回はいろいろな例を挙げて、ひたすら想像するという方法を取りました。

【さらには、母語で書くことも「外国語」で書くことであるという考え方もできます。いつかはこの視点で記事を書きたいのですが、ご興味のある方には、参考文献として『カフカ マイナー文学のために』（ジル・ドゥルーズ＋フェリックス・ガタリ共著 宇野邦一訳）をお薦めします。私は学生時代に読んだのですが、新訳が出たもようです。刺激的な著作です。】

カフカ | 法政大学出版局

カフカマイナーブンガクノタメニ シンヤク 978-4-588-01068-2 9784588010682 4-588-0

www.h-up.com

それにしても、翻訳は不思議ですね。翻訳ということができる、このおかげで人はここまで来ることができたのです。さもないと、人類はばらばらで、知や情報を伝達したり共有したり継承することはできなかったに違いありません。

言語の習得や翻訳という行為の根底には「うつす・うつる」という身振りが 있습니다。これについては以下の引用のある「剽窃から遠く離れて あるいは引用の織物」(※「引用の織物」に改題)という記事に触れてあるので、ご興味のある方は、ご覧ください。

\*

言葉、文字

聖書の写本

経典の写本

源氏物語の写本

うつす、写す、移す、映す、遷す、撮す、伝染す

うつる、写る、移る、映る、遷る、撮る、伝染る

(拙文「剽窃から遠く離れて あるいは引用の織物」(※以下の「引用の織物」に改題)から引用)

\*

こうやって見てくると、世界一のベストセラーであり、世界で最も多言語に翻訳された書物と言われている聖書の、旧約聖書にバベルの塔の話があるのが、象徴的に思えてきてなりません。

バベルといえば多言語に通じていたジョージ・スタイナーの『バベルの後に〈上〉言葉と翻訳の諸相』が思い出されます。バベルの後に、人類にはどういうことが起きたのか——。もっと読まれていい作家です。

バベルの塔 - Wikipedia

[ja.wikipedia.org](http://ja.wikipedia.org)

叢書・ユニベルシタス バベルの後に〈上〉言葉と翻訳の諸相

哲学的な問題意識、文学的な感受性、技術的な言語学を統合し、言語そのものを解明する試み。

[www.kinokuniya.co.jp](http://www.kinokuniya.co.jp)

叢書・ユニベルシタスバベルの後に〈下〉

古今の芸術思想、言語・文学理論、英仏独語の表現に通暁した現代随一の批評家が、文化史、哲学史の沃野を涉猟しつつ、言語の複数性

[www.kinokuniya.co.jp](http://www.kinokuniya.co.jp)

#言葉 #日本語# 翻訳 # 引用 # 漢文 # 英語 # 外国語 # ジョージ・スタイナー# カズオ・イシグロ # 村上春樹 # フランツ・カフカ



03/09 うつせみのたわごと-1- (全 14 回)



＊

うつせみのたわごと -1- (全14回)

星野廉

2023年3月9日 07:44

なにかのかわりに、なにかではないものを持ちいる。かわりを持ちいるかわりに、たちばがかわる。そうなると、もう、もてあそばれるしかない。つかうのではなく、つかわれるがわにみをおくことになる。

＊

ことわりのないところでことわる。いうまでもなく、ことわりはない。わりきれない。

＊

ことをわける。わける。わかる。かわる。おそらく、そのあわいはせまい。わけがわからなくなるほど、せまく、ちかい。

◆

「うつせみのたわごと-1-」(全14回)

できるだけ大和言葉系の語を持ちいて、平仮名づくしで書こうという試みをしています。ふだん書いている文章とは違った書き方で、「言葉」、「書くということ」、「読むということ」をテーマに書くという実験をしています。

標準的な表記に直したキーワードは、「何かの代わりに何かを用いる」「ことわり・事割り・言割り・断り・理」です。

直接書かなかったキーワードは、「坂部恵」「あわい」「かわる」です。

この連載全体を通じての、直接書かなかったキーワードは、「ジェイムズ・ジョイス」『フィネガンズ・ウェイク』「サミュエル・ベケット」「フランツ・カフカ」「ジル・ドゥルーズ」「柳瀬尚紀」「レーモン・ルーセル」「VOA の special English」「basic English」「聖書の翻訳」「ジョージ・スタイナー」『After Babel (邦訳：バベルの後に)』「ピジン言語」「クレオール言語」「ブリコラージュ」です。

※この記事は、かつてのブログ記事「10.02.02 うつせみのたわごと-1-」に加筆したものです。

うつせみのあなたに 第11巻 | パプー | 電子書籍作成・販売プラットフォーム  
哲学がしたい、哲学を庶民の手に——。そんな気持ちを、うつに苦しむ一人の素人がい  
だき、いわば憂さ晴らしのためにブログを始めた  
puboo.jp

#日本語 # 言葉 # 大和言葉# 和語 # 漢語 # ひらがな # 自分語 # ジェイムズ・ジョイス # 柳瀬尚紀

03/10 文字や文章や書物を眺める



＊

文字や文章や書物を眺める

星野廉

2023年3月10日 08:14

人のつくるものは人に似ている。人の外面だけでなく内にも似ている。人の意識をうつしていると思えないものがある。

書物、巻物、タブロー、銀幕、スクリーン、ディスプレイ、モニター。

見えないものを真似ている。聞こえないものを真似ている。感知できないものを真似ている。知らないものを真似ている。

(拙文「影に先立つ【引用の織物】」より)

目次

線や帯を巻く

巻物、綴じた本

読む、見る、眺める

視線の動き

薄っぺらい、ぺらぺら

Aの辻褃合わせや帳尻合わせをAとは別のものとする

Aの代わりにAとは別のもので済ませる

抽象と具象の同居

文字や文章や書物を眺める

線や帯を巻く

レコード、カセットテープ、映画、ビデオテープ、蚊取り線香、トイレトペーパー——どれもが細い線や幅のある帯を巻いたものです。

レコードはよく見るとぎざぎざした溝である細い線が渦を巻いています。私が初めてカセットレコーダーを買ってもらったのは、むき出しの磁気テープである帯を巻いた、

オープンリールという方式からカセットテープに移行する時期でした。帯が細くなり箱に収められたのです。

そういえば、初期のコンピューターにはガラスの窓がついていて磁気テープが回っているのが見えた記憶があります。なんだか生き物じみた動きをしていました。ときどき戸惑うように見えたのです。ずずっずずっという感じ。映画は、巻いた帯状のフィルムを映写機で銀幕に映す形で公開されていました。フィルムはしゃーっと流れます。

ビデオテープは音と像の両方を磁気テープに記憶させた画期的な発明だったらしいです。

以上述べた知識を私は言葉で知っているだけで、仕組みについてはぜんぜん分かっていません。ただ、いま挙げたアナログ的な仕組みのものの方が、そうした知識を体感しやすいような錯覚におちいります。

デジタルは情報処理となると、私にはまったく体感できません。体感するとっかかりがないのです。

## 巻物、綴じた本

トイレットペーパーといえば、トイレで目にするたびに昔の巻物を連想します。絵や文字が書かれていた巻物のことです。

そうした絵と文字からなる文には、流れがあります。その流れは無限ではなく限りのある線や帯や面として存在しています。「限りがある」というのは始まりと終わりがあるという意味であり、「存在している」というのは物だという意味です。

巻物の始まりと終りのあいだには、ある順序や秩序に沿った流れがあり、その流れは筋とも言えるでしょう。筋道を立てて話すという言い回しに見られる筋のことです。

巻物といえば、巻物を裁断すると紙切れになります。その紙切れを流れにしたがって束

ねて綴じていくと本になります。巻物と同じく本にも絵があり、文字からなる文が載っているものがあります。

ページという二次元の枠に収められた絵や写真と、やはり二次元の枠で区切られた文字の列が印刷されている本にも始めと終わりがあります。

人の作った線や帯や面や連続した面や流れや筋には、必ず枠——たとえばページやコマ（コマ送りのコマ）やコマ数や場面（シーン）や段落や章——と、始まりと終り（これも枠ですが）があるのではないのでしょうか。

### 読む、見る、眺める

本といえば、いまは綴じた紙のページからなる本よりも、インターネットに接続されたさまざま端末機の画面を読んだり見ている人が増えているそうです。私もその一人です。

人は液晶の画面をスクロールしたりスライドして、文字からなる文を読んだり見たり、静止画像や動画をじっと見たりぼんやりと眺めているわけですが、そのさまは巻物を見たり読むに似ています。スクロールには巻物の意味があり、なるほどと納得します。

右から左へ流れるか、上から下へ流れるかの違いはあっても、巻物と同じようにある方向に目を走らせていると言えそうです。ある点から流れるように線状に目を走らせているのでしょう。

点が移動して線になるという、例の話です。

走らせるといえば、速度を上げて動画や番組を見るケースが増えていると聞きますが、そうやって映像と同時に文字も読んでいるようです。忙しかったり、せっかちな人が多くなっていると思われませんが、倍速で文字を読むとすれば、もはや読むと言うよりも見ているのではないのでしょうか。

たしかに現在は文字はしだいに読まれなくなり、見る対象になっている気が私にはします。熟読とか精読とか丹念に文字を追うという言い回しが、最近ぴんと来ないのです。

誰もがせわしく文字を追っている。読むと言うよりも見ている感じがしてなりません。

## 視線の動き

本のページや、端末の画面を目にして、人はどうやって見たり読んだりしているのでしょうか。

視線という、おそらく点のようなものをページや画面に当てることで——レーザー光線を面にピンポイントで当てるさまをイメージしています——、点を移動させて線で、面を読んだり見たりしているのではないのでしょうか。

点と言っても、ある程度の面積が視野に入っているようなので、面に近い大きめの点なのかもしれません。そうすると点を移動させた線というより、ある程度の幅を持った帯と考えたほうがよさそうです。

この帯の幅は、その時々気分や集中度によって大きさが変わるでしょう。また帯にも濃淡がありそうです。濃ければきちんと読んだり見ていて、薄ければぼーっと、あるいはうわの空で眺めているだけだという意味です。

まだらであったり、まばらに見ているとか読んでいるという状態が、人には意外とあるのではないのでしょうか。年を取ったせいか、ぼーっとしていることの多い私には、まばらやまだらというのが、とてもリアルな感覚なのです。

私は自分がまだら状とか、まばら状だという気がします。意識だけでなく存在として、です。

## 薄っぺらい、ぺらぺら

巻物、本、レコード、カセットテープ、映画、ビデオテープ、蚊取り線香、トイレットペーパー——こうした広い意味での巻いた物はある部分が薄っぺらで、ぺらぺらしています。巻物だから当然と言えば当然なのですけど。

細い溝や線を巻いたレコードや蚊取り線香のようが平べったい円盤状（ディスク）であったり、薄いぺらぺらしたもの——紙、羊皮紙、フィルム、磁気テープ——を巻き取ってあるという意味です。

CD、MDのDはディスクで円盤です。そういえば、レーザーディスクなんてありました。ハードディスクも円盤ですが、これはパソコンを壊して解体したときに見たことがあります。

ICカードやICチップは薄いです。ポテトチップスも薄い。ICのCはサーキットですから、円環とか輪っかのイメージを感じますが、これも薄そうです。

ひょっとすると、こうしたぺらぺらしたものに載っていたり内蔵されているらしい文字や絵や映像は、薄っぺらいのではないのでしょうか。厚みがあるとは考えにくいです。

でも、人はその薄いものから、量や厚みがありそうなものを読み取っているみたいに思えます。量や厚みがあるだけでなく、深みや奥行きさえ読み取っているかのよう。情報とか知識のことです。

### Aの辻褃合わせや帳尻合わせをAとは別のものとする

そんなふうにと考えると不思議です。まさに深そうな話に思えてきます。

薄いと厚い、浅いと深い、細いと太い、小さいと大きい、軽いと重い、短いと長い、近いと遠いが同居しているのではないのでしょうか。私にはそうとしか考えられません。

たぶん、いま挙げたペアたちが反対に見えるのは、そうした言葉が反対語みたいに扱われているからであり、つまり言葉の世界でそうなっているだけであって、言葉で現実や思いや印象の辻褃合わせや帳尻合わせをするから、矛盾しているように感じられるだけ——そんな気がします。

言葉と現実と思いや印象は別個のものですから、一対一に対応しているわけではないの

でしょう。Aの辻褃合わせや帳尻合わせをAとは別のものとするには無理がありそうです。

### Aの代わりにAとは別のもので済ませる

そもそも人は矛盾することをしていません。

厚いものの代わりに薄いもので済みます。

深いものの代わりに浅いもので済みます。

太いものの代わりに細いもので済みます。

大きいものかわりに小さいもので済みます。

重いものの代わりに軽いもので済みます。

長いものの代わりに短いもので済みます。

人間の代わりに人間でないもので済みます。

人間でないものに代わりに人間のようなもので済みます。

遠いものの代わりに近いもので済みます。

巻物、本、レコード、カセットテープ、映画、ビデオテープ、蚊取り線香、トイレット  
ペーパー。

絵、遠近法、地図、世界地図、地球儀、年表、言葉（音、文字、表情、身振り、しるし）、放送、報道、写真、レントゲン、顕微鏡、望遠鏡、電話、電報、放送、孫の手、糸電話、人生ゲーム、人形、キャラクター、小説、演劇、漫画、アニメ、ロボット、仮想現実、人工知能、MRI、CT、遠隔操作、遠隔医療。

Aの代わりにAとは別のもので済ませる。

Aの辻褃合わせや帳尻合わせをAとは別のものとする。

遠くを近くする。

遠くを知覚する。

やっているじゃありませんか。要するに、Aの代わりにAとは別のもので済ませて澄ましている。しらっと澄ました顔をしてやっているのです。知覚と錯覚をうまく利用しているわけです。

それを言葉、とくに文字にすると、矛盾や、辻褃合わせや帳尻合わせをやっていることがもろに出る、つまり目立つので、あれれーっと思っているだけ。

反意語とか対義語というのは、やらせというか、自作自演の狂言というか、人だけに受けるギャグに見えてなりません。勘違いとか、なにかの間違いではないのでしょうか。そんなふうには私には見えます。たぶん私にだけそう見えるのかもしれませんが。

## 抽象と具象の同居

遠くを近くする。

遠くを知覚する。

遠くを近いと錯覚する仕組みをうまく利用している。

手で触ったり直接目にできないものを抽象と、手で触ったり肉眼で見たりできるものを具象と呼んでみます。

簡単にいうと「遠い」が抽象であり、「近くて知覚できる」が具象です。

抽象の代わりに具象で済ませて澄ましている。こういうことをしていると、抽象と具象が同居してあらわれる、見えることになります。

\*

いちばん分かりやすいのが言葉だと思います。言葉は抽象と具象が同居しているものです。

というか、抽象と具象のあいだを行き来しているというのが正確な言い方でしょう。

遠くを近くする。遠くが近くなる。

近くを遠くする。近くが遠くなる。

たとえば、「猫が眠っている。」という文字を読んでいると、猫が眠っている光景が頭に浮かびますが（または人によってはそれとは別の光景が浮かびますが）、それはいまこ

ここにはない光景です。

肉眼で見ているわけではなく、その猫に触ることもできません。それが抽象です。抽象は人それぞれが勝手にいただくものでもあります。

「猫が眠っている。」という文字に意識を集中してじっと見ていると、文字だけが感じられてきます。これが具象です。

書体、フォント、漢字、ひらがな、濁点、促音を表わす「っ」という小さな「つ」、漢字の偏旁（へんとつくり）、太文字であること一つまり、文字や形や模様（これが具象です）としての「猫が眠っている。」に意識が行って、猫が眠っている姿が消えるという意味です。

「猫が眠っている。」と口にして出た音（音声）でも同じです。その声を聞いて姿や光景（抽象です）を思いうかべる。聞こえている音としての声（つまり、声の質や高さや響きという体感できるものが具象です）に意識を集中する。

抽象と具象が同居している言葉を、人は抽象（そこにはない像）としてとらえたり、具象（そこにある文字やいま聞いている音）として体感しているわけです。両者のあいだを行ったり来たりします。どちらがいいか悪いかの話ではありません。

こういうとりとめのない話をしていると、眠くなります。おそらく、ふちとか、ほとりとか、きわにいるからでしょう。ゆめうつつ、ゆめとうつつのふちにいる。

### 文字や文章や書物を眺める

文字や文章や書物を読む（意味や内容といった抽象としてとらえる）だけでなく、つまりその遠くを見るだけでなく、文字や文章や書物そのものを眺めてもいいのではないのでしょうか。

私はそれが素晴らしい体験、素晴らしい体感だと思い実践しています。

近くは意外と遠いのです。薄くて軽くてぺらぺらしたものが意外と深淵であり深遠であったりもします。ふちに立つと分かります。

(動画省略)

上の動画は、杉浦康平さんのブックデザインなのですが、文字や文章が書物が眺める対象になることをよく見せてくれていると思います。大ざっぱに言うなら、私はそんな感じで文章を見ていることがあります。

そのときの私はひょっとするとまだらでまばらなのかもしれませんが、それでもかまいません。綺麗だし、心地よいのです。似たような光景を夢に見ることもあります。大好きな動画です。

この動画は、以下の記事「書物の夢 夢の書物」にあります。文字や文章や書物そのものを眺めるという体験と体感について述べているので、興味のある方は、ぜひご覧ください。眺めるだけでいいです。

#杉浦康平 # 読書 # 巻物 # 本 # 書物 # レコード # 文字 # 知覚 # 情報 # 知識 # 具象  
# 抽象 # タイポグラフィ # ブックデザイン



03/11 「ない」ものに気づく、「ある」ものに目を  
向ける



＊

「ない」ものに気づく、「ある」ものに目を向ける

星野廉

2023年3月11日 09:15

目次

「」「・」「」

「ない」ものに気づく、「ある」ものに目を向ける

「ない」ために目立つ

一人称の代名詞が省かれている

「」から「こちら」へ

「」と「こちら」から「俺」へ

ストーリーでも内容でもなく、書かれてそこにある言葉の身振り

タイトル、title、肩書き、カタギリ

消える「俺」、再び出てくる「俺」

「」「・」「」

たとえば、私が持っている新潮文庫の古井由吉の『杏子・妻隠』（1979年刊）に見える「・」ですが、河出書房新社の単行本では『杏子妻隠』（1971年刊）らしいのです。らしいと書いたのは、現物を見たことがないからです。ネットで検索して写真で見ただけです。

私は「・」がなかったり、あったりする、または「」のように半角開いている、つまり間が開いて、そこには何もないことがあると、つい目が行ってしまいます。

＊

「・」は中黒と呼ばれ、私の使っているパソコンの入力ソフトでは中黒と入力すると出てきます。

「  
・  
」  
。  
、  
……

ご存じのように、上のいずれもが約物と呼ばれるものであり、まだまだ他にもたくさんありますね。

蓮實重彦の『批評 あるいは仮死の祭典』（せりか書房）では、約物の使われ方を楽しむのが醍醐味だと私は思います。約物と文字の遭遇とからみ合いが目まいを覚えるほど刺激的なのです。

ちなみに、蓮實重彦著『批評 あるいは仮死の祭典』にある言葉と文章を眺めていて気になって仕方がないのは、漢字やかなではなく、「」、『』、「（読点）」、「。（句点）」、「（ルビとして縦書きの文字の右に打たれる読点・傍点（圏点）」、そしてルビです。

仮、  
死、  
の、  
祭、  
典、

古文と呼ばれる日本語の文章にはなかったものばかりです。約物とは読みやすくするためにつくられた一種の約束事であり制度とも言えるでしょう。『批評 あるいは仮死の祭典』では、ときにはタマネギをむき続けるようなもどかしを覚えながら、まだまだかとおつづやっていると「、」が来ます。一息入れて次の「、」あるいは「。」が来るまで読み進みます。「」でくくられた文字で立ちどまり、『』でくくられた文字に思いを馳せ、「（ルビとして縦書きの文字の右に打たれる読点・傍点）」が施された文字を凝視する。読みやすさを促すはずの約物が、その役目とは隔たった異物に見えてきます。

（拙文「2/3『仮往生伝試文』そして / あるいは『批評 あるいは仮死の祭典』その2」より）

＊

『批評 あるいは仮死の祭典』の「 」のように一文字分が開いているとやはり気に

なってなりません。

## 「ない」ものに気づく、「ある」ものに目を向ける

上で「(一文字分が) 開いている」と書きましたが、古井由吉は「明いている」とか「あいている」と表記することがよくあります。そういうことに気づくと、古井の作品を読むとき、そうした表記の箇所には差しかかるとやはり私は目が行きます。

例を挙げると、「扉をゆっくり明けると」(『杏子』 p.153 (新潮文庫『杏子・妻隠』所収))「道を明けて」(『妻隠』 p.174 (新潮文庫『杏子・妻隠』所収))です。

いま述べているのは、たとえば実用書の出版における、表記が標準である標準ではないとか、正しい正しくないとか、校正の対象であるとかないとか、編集者や出版社の意向と作者とのせめぎ合いとか、「大家」の表記だからまたはそうではない、あるいは謎解きといった話ではなく、文学の話をしています。

私の考える文学では、「ない」ものに気づき(気配かもしれません)、「ある」ものに目を向ける(これは体感です)ことも含まれます。「ない」も「ある」も「ある」からに他なりません。文学とは、文字として「ある」ものと「ない」ものに等しく目を向けることではないかと考えています。

ただし、ここで述べている「ない」ものとは、「ある」ものの向こうに見える、意図とか思想とか伝記的事実ではないことは言うまでもありません。とはいえ、「文字として「ある」ものと「ない」ものに等しく目を向ける」は、私がそうありたいと思っている読みのスタンスであって、現実には私は「ある」ものの向こうに、そこには書かれていない「何か」を見てしまいます。これは、人であるかぎり当然でしょう。

## 「ない」ために目立つ

ないからかえって目立つ。英語では conspicuous by one's absence という慣用句があります。

いま頭にあるのは、古井由吉の小説『水』と『杳子』です。

『水』という短編では、「私が省かれている」、つまり「ない」という書き方がなされています。

一方、『杳子』では、杳子をタイトルにし、杳子という文字で始まる小説であり、あれほど杳子という名前が何度も出てくるにもかかわらず、視点的な人物である「彼」の名前が「ない」ままにかなり長く引きずられる形で作品が成立しています。

先日、似たような経験をしました。ある小説を読みはじめたのですが、冒頭からしばらく読みすすんだところで（三人称で書かれているのではなく、一人称の語りだと思いはじめたころ）、語り手の人称代名詞が省かれているのに気づき（語り手の名前もなかなか出てきません）、ないなあと思いながら読みつづけていたところ、p.35 になってようやく一人称の代名詞が出てきたという経験をしたのです。

吉田修一の『元職員』（講談社）という小説です。

上で述べた古井由吉の作品のような書かれ方をしているとは想像もしていなかったのに驚きました。うれしくもありました。私はそういう書き方が好きなのです。

「ない」とか「欠けている」ことが「ある」とビビッと感じてしまうと言え、お分かりいただけるでしょうか。

### 一人称の代名詞が省かれている

吉田修一の『元職員』では、始まりが p.3 で、おしまいが p.166 なのですが、p.35 になって「俺」が初めて出てきます。二番目の「俺」は p.39 に、三番目は p.41 に、四番目は p.42 に出ます。

順を追って説明しましょう。

この小説の冒頭では、語り手がタイのバンコクの空港に到着して、夜の街に出て行く場面から始まります。目立つのは、一人称の代名詞が省かれていることです。

一人称の代名詞があってもいいセンテンスでそれが省かれたまま、作品が進行していくという意味です。目だけが移動したり浮遊する感覚にあふれた文章とも言えます。私がお好きな書き方です。

目だけの人物というか、視点的人物のような語り手は、到着の翌日に通りにある屋台で昼食を取ります (p.10)。そこで、「てっきり現地の若者だとばかり思っていた青年」と知りあいます。

”目が合ったので、「親切なんだね」と声をかけた。” (p.14)

これが青年との初めての接触なのですが、「目が合う」という記述が、この視点的人物である語り手にふさわしいと私は感じます。

「(視点的人物の) 視線に気づいた青年が」 (p.15) という描写にも興味を引かれます。語り手の存在感が希薄で、まるで視点が語っているような書かれ方がなされているために、ここで視点が「視線」という言葉呼び寄せたような印象を私はいだきます。

もぬけの殻と言ったら言いすぎでしょうが、この語り手はひたすら「見る」人として描写されているように私には感じられます。海外や日本全国の街や町や村を、人の目の高さに構えたカメラで撮影する番組がありますが、ああいう視点的な臨場感が、この小説の冒頭に漂っているのです。

「 」から「こちら」へ

続く p.16 で、この視点的人物はある人物と出会います。

”青年は津田武志と名乗った。”(5行目)

このすぐ後で、「こちらが気ままな一人旅だということを伝えると」(8行目) と書かれています。私の見落としがなければ、この「こちら」が、初めて語り手である視点的人

物を指す主語になる瞬間であり、私なんか「あっ」——この感動詞は吉田修一の作品に頻出するものです——と言いそうになります。

出たあという感じ。やっと主語が出ました。

p.18 では、場面と時が変わり、「片桐さん！ 片桐さんって！」と視点的人物が名前と呼ばれます。語り手の名前がここで初めて出るので。

しかも、その次の行で「こちらも相当酔っていたが」とありますが、まだ「私」とも「俺」とも書かれていないのです。そう書かれてもいいセンテンスで、主語が依然として省かれているという意味です。

その後は、「こちら」が続きます (p.25、p.29、p.30、p.34)。もっとも、英語に訳せば、Iではなく here となりそうな、方向を示す「こちら」もあります (p.29、p.30)。

「 」と「こちら」から「俺」へ

場所はホテルの部屋で、時は朝——。

”「帰られないでほしい」と、俺はベッドの傍らを叩いた。” (p.35)

出たあ。ようやく「俺」が出ました。

p.35 になって、一人称の代名詞である「俺」が初めて出てくるのですが、これは上で述べた津田武志という青年に紹介されて、ホテルで一夜を過ごした相手であるミントという現地の女性に対する懇願の言葉なのです。

一人称の代名詞が省かれたり、一人称の代名詞として「こちら」と記述されることもあった視点的人物がようやくここで「俺」になることによって、津田とミントという三人の関係が描写されやすい環境が整ったかのような印象を私は持ちます。

しかも、まだ視点的人物を引きずっている「俺」が、方向と場所を示す「傍ら」を「叩いた」という描写が意味ありげで、私は目を引かれます。

「ねえ、こっち（こちら）においでよ」、ぼんぼんという具合に、このシーンが目に浮かぶようです。この仕草が、視点的人物である自分を語り手が捨てる儀式に見えると言ったら言いすぎでしょうけど。

”車中、運転手はこちらの関係に気づいているのか、ひどく不機嫌で乱暴だった。”(p.36)

ホテルの部屋の場面に続く文章ですが、目にした瞬間に私は唸ってしまいました。吉田修一さんはうまいなあ――。

「こちら」が視点的人物だけではなく、彼とミントという女性の二人を指しているからです。

こういうところに私はぞくぞくしないではられません。これまで書かれてきた語り手を指す「こちら」が、ここになって男女二人を指すことにより、二人の関係を見事に言いあわらしているのです。第三者である運転手の視線があるからです。

＊

p.39 になって、二番目の「俺」が出てくるのですが、そばにはミントがいます。二人がホテルの部屋で朝食を取るシーンです。

この場面が続く p.40 での言葉の身振りがスリリングな展開を見せます。

”珍しそうにジャムを選ぶミントの姿が、ふと妻の麻衣子の姿に重なったのは、ブルーベリーのジャムを勧めた時だった。”(P.40)

ここから立て続けに「麻衣子」という妻の名前が四回 (pp.40-41) 出てくるのです。

語り手、ミント、日本に残した妻。その三角関係を描くために、同じ場面の p.41 で三番目の「俺」、そして p.42 で四番目の「俺」が書かれます。

いきなり人間関係が錯綜し、それに合わせて「 」(省かれた一人称代名詞)と「こちら」が「俺」に変わるとも言えます。

もぬけの殻のような、どこかうわの空でぼーとした視点的人物——放心しているのには理由があるのですが、これはある意味で伏線と言えるかもしれません——が、このあたりから、ようやく人間関係に投げこまれて活気づく感じ。

なお、p.54で、武志の「バンコクで暮らすようになった経緯」を聞き、内省的になった「俺」が、初めて「自分」という言葉を使います。しかも、三行で三回も用いるのですから、なかなか興味深い言葉の使用です。ここでも私は唸ってしまいました。

### ストーリーでも内容でもなく、書かれてそこにある言葉の身振り

まとめます。

私の印象では、この小説においては、「 」(省かれた一人称の代名詞)と「こちら」(一人称の代名詞)と「俺」の登場によって雰囲気が徐々に変わっていくのです。

1) 冒頭での、主語が省かれて目だけが世界を見ているという放心を連想させる書き方。I=eye。

2) 「こちら」という自分を方向で指す語でもある一人称の代名詞の登場が、二人の主要な登場人物たちを「視線」のからみ合いへと転じる。視点的人物だった語り手が自分を相対化する身振りとも言える。

3) 一人称の代名詞の出現。一人称の代名詞としては限定的な使い方しかできない「こちら」ではなく、「俺」という一人称の代名詞が選ばれることによって、錯綜した人間関係——「俺」(片桐)と津田武志とミントと日本にいる妻の麻衣子——を記述する語りの文体へと移行していく。

「 」が「こちら」、そして「俺」となるにつれて、限定的な描写の文体が語りの文体に転じていく。いまとここだけという雰囲気「現在」が、過去と祖国日本を含む時空を背景とした人間関係の渦巻く「現在」へと転じていく。そんな印象を私は持ちました。途中まで、ですけど。最後のほうで、この印象が裏切られるのです。

冒頭の主語を省いた限定的な書き方（文体）では、厚みと奥行きのある人間関係は描けないとまとめることもできます。

＊

「ない」「欠けている」が「ある」「備わっている」へと移行していく言葉のさまは、読んでいきわめてスリリングなのですが、私にとってスリリングなのは、ストーリーでも内容でもなく、書かれてそこにある言葉の身振りだということを書き添えておきます。

### タイトル、title、肩書き、カタギリ

私は吉田修一の小説が好きで、一時期には『元職員』を除く全作品に目を通していました。『元職員』を残したのには深い意味はありません。なぜか、ある時からばたりと読まなくなったのです。でも、好きな作家であることは変わりません。むしろ大好きな作家といえます。

（拙文「他人の家に入る」より）

『元職員』は面白く読みました。以下に、この小説を読みながら取っていたメモ——この作品について何か書こうと思っていたのです——から気になる文字やフレーズを抜き書きします。

冒頭、空港、観光客、観察、傍観、目、視点、浮遊感  
一人称？ 三人称？ ハードボイルド private eye 目  
話者、語り手、視点的人物

お金、嘘、鏡（P.111、p.116）、仮面、犯罪  
「俺」（片桐）が津田武志に染まっていく、うつっていく、演じていく。分身。  
パトリシア・ハイスミス『太陽がいっぱい』、タイ、ヨーロッパ、異国、母国、太陽、分身、鏡。

タイトル、title、肩書き、カタギリ、KATAGIRI、KATAGAKI  
「元職員」（p.158）、報道  
元職員片桐、元職員・片桐、元職員 片桐、元職員・カタギリ氏

## 消える「俺」、再び出てくる「俺」

この作品では最後のほうになって、一人称の代名詞が省かれた文体に戻ります。私の見たところでは、とつぜん「俺」が消えるのです。P.130以降、そうした書き方で小説はラストに向かっていきます。

ハードボイルドという言葉が連想される文体です。描写だけでなく、回想や伝聞をまじえて複雑な人間関係も語られるのですが、目だけになった感のある語り手が一人称の代名詞なしで語っていきます。

「俺」が省略されているため、読む私はよけいに緊張感を覚えます。この文体を維持する吉田のテクニックの冴えを感じます。

「自分」（これは人称代名詞的には使われていません） p.136、「こちら」 p.140、「自分」（これは相手と自分をはっきりと分ける記号として使っています）。次の「自分」はじつに効果的に使われていると思い、唸りました。

”殴られた顎はズキズキと痛んだが、どこかすっきりとしている自分がいた。”（p.164）

”今まで通り、仮面をかぶって働けばいい。”（p.165）

この直後に p.166——このページでこの小説は終わります——になって「俺」が再び出てきます。この段落を引用したいところですが、ネタバレになりそうなので引用できないのが残念です。

### ※参考記事

#### ◆吉田修一の作品に触れている記事

\* 「似ている」の魅惑 ←吉田修一とパトリシア・ハイスミスが好きな方にお薦めします。私にとって愛着のある記事でもあります。

\* イメージの韻

- \*他人の家に入る ←詳しく論じています。
- \*文字を見る
- \*異、違、移

#### ◆キーワード：古井由吉、蓮實重彦

- \*「ない」から書けている
- \*異、違、移
- \*
- \*「私」を省く
- \*文字の顔
- \*文字を見る
- \*「日、月、白、明」、そして「見、目、耳、自」が
- \* 1/3 『仮往生伝試文』そして / あるいは『批評 あるいは仮死の祭典』その1
- \* 2/3 『仮往生伝試文』そして / あるいは『批評 あるいは仮死の祭典』その2
- \* 3/3 『仮往生伝試文』そして / あるいは『批評 あるいは仮死の祭典』その3
- \* 【小説】知らないものについて読む
- \* 【小話】Mの世界で生きる

#### ◆私なりの読みの実践

- \*現象、現像
- \*イメージの韻
- \*「うつる」でも「映る」でもなく「写る」
- \*「似ている」の魅惑
- \*影に先立つ【引用の織物】
- \*プライベートな場所、プライベートな部分
- \*【小説】一人でいるべき場所
- \*他人の家に入る

#吉田修一# 古井由吉# 蓮實重彦# パトリシア・ハイスミス# 文学# 文字# 約物# 文体# 表記# 名前# 人称代名詞# 一人称



03/12 小説をまばらにまだらに読む



＊

小説をまばらにまだらに読む

星野廉

2023年3月12日 07:52

目次

線と点で線状に並べていく

言葉は外にある外

「きょうから、黒いカラスは白いサギだ」

一気に書かれたわけではない

点と線を面として眺める

染み、模様を眺める

文字や文字列や文章を見る、眺める、読む

言葉の夢、夢の言葉

線と点で線状に並べていく

「動き」は自然の状態であり常態であると思います。とはいえ、人は「動き」を見たり知覚したとしても、それを言葉にする以外に他の人と「動き」について語りあうことはできません。言葉という形で外に出さない限り、他人といっしょに確認できないからです。自分の中で思うだけという意味です。

(拙文「【小説】動くものを手なずける」より)

小説は文字で書かれています。小説には最初があって終わりがあるのですが、それは冒頭の一文字、一語、一フレーズ、一センテンス、一段落、一章であるとも言えます。最後も同様に、一文字、一語、一フレーズ、一センテンス、一段落、一章で締めくくられるわけです。

冒頭と終りのあいだはどうなっているのでしょうか。

文字や語やフレーズやセンテンスや段落や章が、線状に並んでいきます。発せられた

瞬間にどんどん消えていく音からなる話し言葉と違って、文字からなる文書は始まりと終りとそのあいだが目に見えます。

これは文字が物だからです。具体的にはインクの染みであったり、液晶上の画素の集まりだったりします。物だから固定されています。動かないのです。消さないかぎり残ります。

印刷物であれば、他にもたくさんどこかに同じものがあるはずです。ネット上で読めるものなら、これまたなぜかどこかに同じものがたくさんあるはずです。

不思議でなりません。私が趣味として言葉のありようの観察をしているのは、言葉がこうした不思議だらけだからです。

文字からなるある文書とまったく同じものがどこかにたくさんあるのは、どんな文字も複製だからであり、そもそもどんな文字や文書も複製で読むものだからでしょう。詩も俳句も小説も宣伝のコピーも法令も実用書も、すべて複製で読まれています。

あっさりと書きましたが、私にはこれもまた不思議でなりません。頭では分かりますが、どう受けとめていいのかよく分からないところがあるのです。

### 言葉は外にある外

おそらく点でも線状でもないもの——現実や思いのことです——を、文字という人の外にあって外であるもの——物だという意味です——をもちいて、点と線として配列するというのは不思議ないとなみだといわなければなりません。

人の中にそういう仕組みがあるとした私には考えられません。人の中にある仕組みに合わせた形で、外にある外——これはままたまらない、つまり人の思いどおりにならないという意味です——である物を利用しているのかもしれない。

人のつくるものは人に似ている。人の外面だけでなく内にも似ている。人の意識をう

つしているとしか思えないものがある。

書物、巻物、タブロー、銀幕、スクリーン、ディスプレイ、モニター。  
(拙文「影に先立つ【引用の織物】」より)

いずれにせよ、声という音と異なり、文字は人の外にある物です。見えます。音読すれば声、つまり話し言葉にもなります。消さないかぎり残っています。しかも文言をいじるという形で文字はいじれます。こう考えると文字はとても便利です。

ただし、いじりやすいのは、それがインクや液晶上の画素の集まりである物としての文字だからであり、曖昧模糊とした思いや、手を加えるのが困難な現実ではないからです。

しかもというか、そもそも、文字と現実と思いは別物であって、一対一に対応したり、きれいにぴったり重なるものではありません。

これを忘れててはならないと思います。だから、文字で現実や思いの辻褃合わせや帳尻合わせをするのは無理があります。

そんな無茶をすると無理がたたって喜劇や悲劇が生まれます。実のところ、あちこちで喜劇や悲劇や悲喜劇が生まれています。これは文字を使う誰もが日々体験することです。

人類にとって最大の悲劇である戦争も、現実の辻褃合わせを言葉、とりわけ文書でおこなっていることから、しばしば起きます。

**「きょうから、黒いカラスは白いサギだ」**

たった一人、または一握りの人たちの辻褃合わせに国民だけでなく、世界が付き合い合われています。現在の話です。

「きょうから、黒いカラスは白いサギだ」

「異議なし。そのとおりでございます」

このようにして「黒いカラスは白いサギである」と決まり、文字になって複製されて世界中に拡散すると、もう消せません。文字は決めた人の手の届かない「外である外」だ

からです。

こうやって今度は文字の辻褃合わせと帳尻合わせのスパイラル（デフレスパイラルのスパイラルです）が始まります。苦勞するのは、それに付き合わされた国民です。スパイラルは渦ですが禍でもあります。

どだい無理な辻褃合わせは必ず綻びが生じますから、つぎつぎと綻びをつくろう必要が出てきます。切りがないわけです。渦どころか禍でしょう。

＊

ここまでをまとめます。

文字はいじりやすいのですが、いったん文字にすると残ります。複製されてたちまち拡散もします。すると取り消すことができなくなるのです。

これを取り消すことができないため、辻褃合わせはエスカレートするしかないという悪循環（スパイラル）におちいりますが、これは恐ろしい話です。いま起きている戦争の話です。

何が恐ろしいって、戦争も恐ろしいですが、文字が外であること、つまり文字が人の思い通りにならないことがもっとも恐ろしいのです。

いじりやすいのに、思い通りにならないし、言うことを聞かないのですから。こんなやっかいなものが、ほかにありますか。

＊

戦争までには至っていませんが、人びとが権力側にいる人の辻褃合わせに付き合わされる例はあちこちで見られます。自分にとって都合の悪いことは、フェイクニュース、嘘、印象操作、でたらめ、捏造、フィクション、事実か確認できない、記憶にないと決めつけたり決めるわけです。

つまり、その人は言葉をいじって、それで辻褃合わせや帳尻合わせをした気分になります。その言葉が文字、つまり文書になり、固定され複製され拡散されます。

すると、その文字化されてがちがちに固まった言葉を支持するか支持しないかで、人びとが分断されるという事態を招きます。真偽や正誤や善悪といったかつての判断基準が機能しなくなり、声の大きさや権力（暴力を法にのっとして行使する権利）で、「そうだ」「そうでない」が決まる時代に、いまはなっています。

権力側は辻褃を合わせるためには何でもしますから、エスカレートして辻褃合わせ地獄になります。

現在は、真偽、本物と偽物、正誤、善悪の境が曖昧になっている気がしてなりません。複製には複製の本物があり、引用には引用の起源があるというモデルが曖昧になっているからでしょう。そもそも真対偽、本物対偽物、実物対複製、起源対引用、正対誤、善対悪なんて図式はウソという感じです。本物や起源の権威が失われてきているだけでなく、本物や起源という概念を成立させている西欧的な知の枠組み自体が危うくなってきているとも言えるでしょう。

（拙文「本物のない複製の複製、起源のない引用の引用（更新：2022/11/08）」より）

辻褃合わせ地獄（スパイラル）で権力を持つ側が圧倒的に優勢なのは、みなさんご承知のとおりです。こうなっているのは、法という最強の「文字による現実と思いの辻褃合わせ集」の後ろ盾があるからにほかなりません。法にのっとしてさらなる辻褃合わせをする権利は、常に権力が握っているという仕組みがあるという意味です。構造的な問題というのでしょうか。

〇〇領令、〇議決定という形で、一人のあるいは少数による辻褃合わせが即法律になったり、法的根拠を持ってしまうのです。それを支えているのが、人事上の任命権や業務の認可権が三権分立と権力の監視をないがしろにし骨抜きにしているという構造です。

こうなると、法にのっとして辻褃合わせをする権利を握っている権力をのっとならない限り勝ち目はないという理屈になります。

＊

このように、文字をいじるのは簡単だけど、いじって固まってしまった文字の辻褃合わせは、するほうもそれに付きあうほうもかなり忍耐を要するし、しんどいということになります。文字が人の外にある外だからです。

とはいうものの、文字は便利です。

文字がどう便利かという、たとえば文字や文字列の入力、投稿、配信、複製、拡散、保存がほぼ瞬時に同時に、さらには並行して継続することができます（だから、恐ろしいのですけど）。げんにネット上でいまも起きていることです。

この文章もそうやって、あなたのつかっている端末の画面で読まれているにちがいません。私にはこれが不思議でならないのです。私の入力した文字はどこにあるのでしょうか。どこにいったのでしょうか。これから先もどこかにあるのでしょうか。その「どこか」ってどこなのでしょう。

分からないこと、知らないことだらけなのです。でも、知ろうとはしません。ややこしそうだし、調べるのが面倒だから、このまま深く考えることなしにパソコンで文章を入力したり読んだりするという生き方をつづけるつもりです。

### 一気に書かれたわけではない

俳句、短歌、詩、新聞や雑誌の記事やコラム、テレビのニュースの原稿、テレビドラマや映画の脚本、口述筆記、インタビュー記事。

思いつくままに上に並べましたが、小説だけでなくいま挙げたものすべてが文字として書かれ、文字として読まれているはず。のちに誰かによって音声化されるものであっても、一語一語並べられて、始まりと終りのある文書としてあったはず。

こうした広い意味での文書は、一気に書かれたものではありません。加筆、書き直し、推敲、第三者によるチェックや手直し、編集、校正といった作業をへて最終的な原稿や

作品として読まれると想像できます。

書き手が一人であるとも限りません。

(※以上のことは、小説だけでなく、楽曲や絵画や写真や映画や演劇でも言えることでしょうが、ここでは触れる余裕がありません。それぞれの分野に詳しい方がお考えになるのがいいと思います。)

それが実感できるのが小説の生原稿でしょう。書き込みがあったりして、決して一気に呵成に書かれたという印象を与えるものではない原稿が圧倒的に多い気がします。

\*

それにもかかわらず、私たちが目にしたり耳にするのはいわば最終的な形の完成品ですから、まるで一気に書かれたような印象を与えますが、それは錯覚であり事実誤認とすべきでしょう。

一気に書かれたという印象を与えるのは、一語一語きれいに活字が並べられたものを目にする（文字を声にされたものであれば、プロによってきれいに音声化された科白やナレーションや朗読を耳にする）からでしょう。

筋があって——筋は人が読み取るものです、それが流れとの違いです、流れは読み取るのではなく「ある」という意味です——、それに沿ってきれいに流れているように見えるのです。とりわけ、活字になった文字の威力は強いです。あまりにも整然としているために、あまりにも流れが視覚的にきれいなために、そう書かれたのだろうという錯覚を起こすのでしょ

\*

もし、一気に書かれたように見えるだけで、じっさいには一気に書かれたものでないなら、一気に読まなくてもいいのではないのでしょうか。まばらにまだらに読むという意味です。

これは音楽や絵や映画の鑑賞でもそうだと私は思います。振り返ってみると、じっさい、そんな聞き方や見方をしてきた気がします。

創作は一気に滞りなく整然とおこなわれる、鑑賞も一気に滞りなく整然とおこなわれる。

予定調和的すぎませんか？ 出来過ぎた話ではないでしょうか？

そんな綺麗事はありません。まるでそれが現実におこなわれているという前提のうえで、文学や芸術が論じられているように私には思えてなりません。

文学と芸術において体裁をつくらう必要があるのでしょうか。

人のつくるものは人に似ているだけではなく、人は自分のつくるものに似てくるのでしょうか。いや、むしろ人は自分のつくるもののようになりたいたいのかもしれません。機械や人工○○のことです（○○に入るのは知能に限りません）。整然と滞りなく作業がこなせるものに。

人は鏡を見てお化粧をしているのではないのでしょうか？ 自分の似姿に自分を似せていくのです。実際には似せているのではなく、自分を変えていることに気づいていないのではないのでしょうか？

## 点と線を面として眺める

私たちは、整然とした字面できれいに流れている文字列からなる文章をどのように読んでいるのでしょうか。

私の場合には、かなり適当に読んでいます。読んでだけでなく、見ているとか、ぼーっと眺めていることも多いです。最近は読んでいるというよりも眺めているのがずっと多くなりました。

文章を読むさいに、点からなる線として、最初の一文字から最後の一文字までの途中

で、視線の動きが止まったり、前に戻ったり、場合によっては先を見たり、あるいは一度席を立ったり、長時間または長期の空白があったりすることなく、一気に整然と読みすすめる。

そんな読み方は現実にあるでしょうか。機械なら、そういう読み方をしそうです。読み取り機ですね。

コピー機は面としてページを複写しているのであり読んでいるようには思えません。いわゆる自炊用のスキャナーは、線状に文字を追うだけでなく、ひょっとすると面としてページを読み取っているのかもしれない。翻訳機であれば最初から丹念に読んでいく気もします。

いずれにせよ、文章を面として眺めたり、面として読んだり、線状に戻ることなく一気に読んでいく読み方と見方がありそうです。機械には、です。

\*

人間はどうやって文章を読んだり見たりしているのでしょうか。

視線の動きを見える形にする機械やソフトがあるようで、視線が点や線として動くさまを映した映像を見たことがあります。視線の動きがそのまま読んでいるとか見ているという保証にはならない気もします。

いずれにせよ、視線の動きはたどれるようです。

話を戻します。

小説をどんなふうを読むかという話でした。

ひとさまのことは知りません。私にとって「小説を読む」とは「点と線を面として眺める」ことだという気がしてなりません。

**染み、模様を眺める**

たとえば、私が古井由吉の小説をどんなふうに見ているかですが、次のように読んでいます。

＊

”（前略）もう五時間ちかく人の姿を見ていない男の目の中に、岩の上にひとり坐る女の姿は、はるか遠くからまっすぐに飛びこんできてもよさそうだった。三日間の単独行の最後の下りで、彼もかなり疲れはいた。疲れた軀を運んでひとりで深い谷を歩いていると、まわりの岩がさまざまな人の姿を封じこめているように見えることがある。そして疲れがひどくなるにつれて、その姿が岩の呪縛じゅばくを解いて内側からなまなましく顕あらわれかかる。地にひれ伏す男、子を抱いて悶もだえる女、正坐せいざする老婆ろうば、そんな姿がおぼろげに浮かんでくるのを、あの時もたしか彼は感じながら歩いていた。その中に杳子の姿は紛れていたのだろうか。（後略）”

古井由吉『杳子』（『杳子・妻隠』新潮文庫所収・p.9）

異、違、移。この場面で描写されている岩は、異和、違和、移和なのです。同じ「いわ」でありながら、つぎつぎとその姿を変えます。

こうした日常感覚の失調は、下山する男の疲労がもたらすものであると同時に、不自由な言葉の世界に投げこまれた書き手が体験する言葉つまり文字を相手にするときの過酷な不調でもあると私は感じます。

＊

以上は、拙文「「ない」から書けている」という記事からの引用です。その記事では、もう少し具体的に私の読みについて触れているのですが、上の引用部分に私の読み方がいちばんよく出ていると思い、紹介しました。

単純化して説明します。

「まわりの岩がさまざまな人の姿を封じこめているように見えることがある。そして疲れがひどくなるにつれて、その姿が岩の呪縛じゅばくを解いて内側からなまなましく顕あらわれかかる。地にひれ伏す男、子を抱いて悶もだえる女、正坐せいざする老婆ろうば、そんな姿がおぼろげに浮かんでくる」

という小説の箇所を、

「異、違、移。この場面で描写されている岩は、異和、違和、移和なのです。同じ「いわ」でありながら、つぎつぎとその姿を変えます。」

と読んでいるのです。

冗談でもなく、奇をてらっているわけでもなく、本気でそう言う読み方をしています。古井由吉は私が尊敬している数少ない書き手の一人です。冗談で、または受けを狙って冗談ばく語るなんて罰当たりなことは私にはできません。

上の読みに異和感や違和感を感じる人がいるにちがいないとは十分に意識しています。でも、私はそう読んでいるのです。

\*

私にとって、小説は点と線を面として眺めながら読むものなのです。線状に並んだ文字を冒頭から終りまで流れるように読んでいくことはありません。そんなことは一度も経験した覚えがありません。

いわば、まばらにまたらに眺めてきたのです。

たとえば、古井由吉、宮部みゆき、吉田修一、スティーヴン・キング、パトリシア・ハイスミスなんて大好きですが、どんなジャンルでも、点と線を面として眺めながら読むことができました。線状に並んだ文字を冒頭から終りまで流れるように読んでいた記憶はありません。

面として眺めるのですから、行ったり来たりしたり、ある部分をじっと見ていたり、ある部分はほとんど目を通さなかったり、読むのを中断したり（数年間かかって読んでいた小説もあります）、読みながらメモを取ったり、寝入り際や昼間の夢うつつに思いだしたり、夢に見たり——そんな読み方をしています。

断じて、整然としてはいないし、一つの方向にきれいに流れて進行していくものでは

ないのです。私にとっては。小説を読む場合の話です。

私は言葉の語義や使い方を調べるために辞書を引くのとは別に、辞書を読んだり眺めることがあります。辞書の読み方と眺め方と、小説の読み方と眺め方とが、大きく隔たっているという感覚はありません。

同じように文字や文字列と接している気がします。

### 文字や文字列や文章を見る、眺める、読む

自分が人とは、ずれている意識はあります。

とはいうものの、ある作品を読んで、その作品について誰かが何かで書いたフレーズを引用したり、その作者について貼られているレッテルをまじえたり、その作品の宣伝文句に沿って作文したり、筋を紹介した文章を読書感想文として公表する気にはなりません。

そうしておけばいいのかもしれませんが。首を傾げられたり軽蔑されたり、または単に無視されることはないでしょう。誰もがそうだそうだと頷いてくれるにちがいません。

\*

私にとって読むことは、具体的な文字の形と模様と身振りをひたすら眺め、それから受けるイメージに浸ることにほかなりません。そうした文字を読むといういとなみは、しばしば自分が崩れ壊れる感覚をともなうのですが、それは言葉や文字という「外から来た外」の世界に身を置く違和と異和と移和から来ている気がします。

言葉、とりわけ文字は人を過酷な異世界に誘う異物——いじりやすいのに、ぜったいに人の言うことを聞かない——なのです。私にはそう感じられます。

読むという体験は、必ずしも綺麗に整然とした言葉でまとめられそうな感覚とイメージではありません。その意味で、「外から来た外」である異物としての文字に接し、かか

わかることは崩壊感覚をともなう体験である気がします。少なくとも私にとっては、そうです。

\*

私が意識散漫な人間であることは確かです。「あなたは、ぼーっとしているね」とよく言われつづけてきたことも事実です。あと、いわゆる論理的思考が苦手だという自覚があります。

「AだからB、BだからC、CだからDだから……」というふうに物が考えられませんか。また「Aして、次にBして、それでもってCして、それからDして」という物語の筋を追ったり、それを再現するのにもとても苦労します。

私が話したり書くときには、「Aといえば、Bといえば、Cといえば、Dといえば……」というふうに連想に頼っている気がします。

だから、私は点からなる線上の文章をたどるのに苦労するし、苦労するからそうするのをやめているようにも思います。

漏れ聞くとところによると、現代の詩の中には冒頭から終りまでを線状に読むことを疑問視したり拒否しているものがあるそうです。当然の帰結として、読むと言うよりも見たり眺めることを想定した書き方になっているらしいのです。

詩について私は素人なので伝聞の話として紹介しました。誰がどのように書いているのかは知らないのですが、例を挙げたり具体的にはお話しできませんが、参考になればうれしいです。

\*

文学作品を、点と線の一方向的な流れとして読むのではなく、面の上の染みや模様として読み、かつ眺めることを想定して創作活動をおこなった人はいまもいるし、大ざっぱな言い方で恐縮ですが昔もいたようです。

いま私の頭に浮かんでいるのは、フランス語で詩を書いた人であるステファヌ・マラルメ、そして英語で小説を書いたローレンス・スターンと、その作品である『トリストラム・シャンディ』です。

この二人とその作品については、以下の記事「書物の夢 夢の書物」をご覧ください。のがいいと思います。言葉を眺めるという話ですから、動画も入っています。

### 言葉の夢、夢の言葉

文学作品を、点と線の一方的な流れとして読むのではなく、面の上の染みや模様として読み、かつ眺める——これは私にとって「言葉の夢」と同時に「夢の言葉」を眺めることなのです。

あくまでもイメージですが、こんな感じです。

文字の顔と表情を眺めながら、浮かんでくる言葉の断片や映像や音の記憶や触感の記憶を体感する——そんな体験なのです。

私は小説を点と線の流れではなく面に浮かぶ染みとして眺めていく。

まばらに、まだらに、とりとめなく。

だらだらと、ばらばらに。

#古井由吉# 杉浦康平 # ステファヌ・マラルメ # ローレンス・スターン # 小説 # 文学  
# 詩 # 読書 # 文字 # 辞書 # 創作

03/13 素描、描写、写生



＊

素描、描写、写生

星野廉

2023年3月13日 08:00

目次

かげ、影、陰

言葉のかたち

記憶の風景、記憶のかたち

写生と描写

描写、なぞる

言葉の影、言葉というまぼろし

複写、複製、印影、拡散

外にある線をなぞる

影には追いつけない

かげ、影、陰

かげという言葉が好きです。「かげ、カゲ、影、陰、蔭、翳、景」という字面をみているだけで、気が遠くなりそうになります。

呼びさまされるイメージに圧倒されるのでしょうか、息が苦しくなり收拾がつかなくなるので、深呼吸をして心を静めます。

寝入り際に、かげについて思いをめぐらすことがあるのですが、そんなときには幸せな気分になります。

昨夜は、影と陰について考えていました。

大きな木の下を夢想しながら、かげについて考えていたのです。それを思いだしながら、文字にしてみます。

### 言葉のかたち

木の陰で木の影について思いをめぐらしていたのです。夢うつつの中での話です。

まず影と陰の違いを見てみましょう。影と陰の使い分けは、例文で見るのがいちばんです。以下の例文は私が作文したものです。

葉の落ちた地面に、木が影を落としている。

庭の池に木の影が映っている。

散歩の途中に木の陰で一休みした。

犬が木陰で身を横たえている。

影は光をさえぎってできる、あるいは水や鏡に映った形や姿です。一方の陰は、日の当たっていない場所です。

＊

かげが影と陰という言葉で分かれているというよりも、かげの使い分けが漢字の使い分けにあらわれている気がします。

もともこの島々にあった「かげ」という音の影が、ずっと後になって「影、陰、蔭、翳、景」という形の影を大陸から迎えたのですから。

「かげの使い分けが漢字の使い分けにあらわれている」というのは、「まず現実での体験があって言葉は後に付けた」というふうにも取れることもできそうです。言葉から現実に入る人は、まずいないでしょう。

いや、いるかも。そういうことが、あるかも。いつか寝入り際に考えてみます。

\*

言葉、とりわけ文字は後付けです。ことわり、言割り、事割り、理なのです。理屈のことです。

分けなくてもいいものを分けているのか、分けるべきだから分かれているのか。分かりません。これは、断り。言いわけです。

私は研究者でも探求者でもありません。ただ言葉が好きだけです。言葉の不思議さに取り憑かれているだけです。

こうやって言葉に付きあってもらっているだけで満足しています。

### 記憶の風景、記憶のかたち

話を戻します。

昨夜の寝入り際の夢うつつの中で浮かんだ景色を、いま思いえがいています。

言葉にしてみます。

\*

草原を歩いていると、遠くに大きな木が見えた。近づいてみると、木のそばには池がある。草の生えた地面に木がくっきりとした影を落としている。

池には、その大きな木の先端の影が映っている。草で被われた地面に落ちている木の影が伸びて、水面に映る木の影につながっているように見えなくもない。

どうなっているのだろうと興味を覚え、歩を進めて木の陰の中に入った。地面に映った木の影が池に映った影と重なっている。

不思議な気持ちでそのさまに見入っていると、そばで何かが動いた気配がしてぎくりとした。

木の陰で身をひそめていたのか、猫がこちらを見ている。灰色っぽい毛の痩せた猫だ。

＊

この後に、寝入った記憶があります。昨夜と今朝の夢では影も陰も出てこなかった気がします。

## 写生と描写

以上の作文は、昨夜の寝際に浮かんだ風景を思いだしながら作ったものですが、いま読みかえしてみると、その嘘っぽさに恥ずかしくなります。

記憶を頼りに何かを思いえがいたり、ましてやそれを言葉にすることの難しさを実感しただけでなく、そこまでして言葉にしようとする自分の執念にたじろいでしまったのです。

影と陰について意識的になっているために取って付けたような作文になっています。いかにも作りものっぽいのです。

＊

文章を書くという行為は、ふつう屋内というか室内でおこなわれます。私の場合には自宅の居間でパソコンを使って書くのが習慣になっています。

何かを、あるいは何らかの風景を見ながら、その場でノートやメモ帳にペンで書くとか、スマホに文字を入力して書くというのは想像しにくいです。

書くことを職業としている人なら、現場で取材メモを取るでしょう。いわば言葉による素描（デッサン）でしょうか。でも、清書するのは帰ってからの屋内だと思います。

俳句や短歌や短い詩の場合には、その場で言葉を口にして、何かに書きとめたりすることは十分に考えられます。俳句だとそのまま、作品になるのかもしれませんが。そういう場合があるとすれば、素描がそのまま清書になる感じがします。

写生という言葉が、明治になって俳句の関係者たちの間で口にされるようになったのは、分かりやすい展開だと言えるでしょう。

＊

絵画と文章を同列に扱うことはできませんが、デッサン、素描、写生、描写という共通の言葉で論じることは多いようです。私もやっています。

文章の場合に話を限れば、その場で文字にして、以後手を加えない——一気に書く、一筆で書く、一气呵成——という写生は、きわめて稀な出来事だと思います。俳句くらいのものでしょうか。

デッサン、素描はあるでしょうが、後で清書することになります。さらには推敲もあるでしょう。

小説、エッセイ、新聞や雑誌の記事、ブログという形で、私たちが読む文章は、現場で撮られた写真とは異なり、現場から持ち帰ったメモや記憶を元にして描かれた絵に近いと言えます。

## 描写、なぞる

描写は、写す、映す、移す、撮すと言うより、事物や風景そのものではなく、その影をなぞっているのです。それもじっさいに見てから時間を経てのことです。見て写す、つまり写生とは、次元が異なっているとも言えます。

その意味で、描写は事物を描き写すのではなく、むしろ事物の影をなぞることではないでしょうか。そもそも見なくても描写できます。現場にいなくても描写は可能だし、じっさいにそういう創作がおこなわれています。

だから、見たことがない事物でも描写できるのです。

(意外に思われるかもしれませんが、『夢十夜』を書いたときの夏目漱石は、このことにきわめて意識的であった節があります。夢日記の形を取りながらも、あの作品が夢の再現では断じてないからです。細部に見られる優れた描写に目を注げば一目瞭然なのです。

たとえば夢日記という言葉があるから、勝手に人はその存在をでっち上げてしまうのでしょうか。その意味で夢十夜はミスリーディングなタイトルと言えるかもしれません。)

なぞるという行為は、必ずしも対象を見ているわけではないのです。

むしろ、影（言葉のことです）そのものの世界に入っていくといとなみなのです。影には影の文法があるようです。現実とは異なる文法にしたがって描かれるし書かれるのです。

絵を描いているとき、もはや対象から離れて、絵を成りたたせている素材と細部、そして絵を描くための道具の「論理」と「文法」にしたがって描かれるのと似ています。

日本でも西洋でも、絵は先行するたくさんの絵を見てその描き方を覚えたうえで、手本に沿って描く、あるいはじっさいに物や風景を見て描かれてきた。そんな話を見聞きした覚えがあります。

ほら、〇〇流とか、〇〇主義とかあるじゃないですか。描き方があって、それに従って描いていたし描いているようです。だから、その流派の絵はそれぞれ似ているのです。

個性や才能は伝統という枠の中での括弧付きのものだという気がします。

\*

影は自立しているとも言えます。

影には影の論理と文法があるのです。影をよく見てください。その現物とされているものとの類似は驚くほど少ないのです。「似ている」はあくまでも印象なのです。

類似や対応や関係性は、想像力と空想力の産物です。

### 言葉の影、言葉というまぼろし

木の影と似た言い方に樹影があります。木の影と木の陰だけでなく、木の姿という意味もあるようです。

樹齢二百年という、そのいちょうの樹影がピラミッドに見えた。

即席に作った文ですが、こんな使い方ができそうです。

＊

木という生き物、その木の姿である樹影、その木に日の光が当たって地面に移る影、その木にさえぎられてできる陰。そうした「かげ」たちは、木そのものではありません。

言葉は、それが指ししめしたり、名指す事物そのものではありません。その意味で、かげに似ている気がします。いわば言影です。勝手に作った言葉、いわば自分語ですが、ことかげとか、ことえいとでも読みましょうか。

言葉には姿があります。文字のことです。文字は形であり姿ですが、文字には音（おん）も、語義も意味もイメージもあります。

音と意味とイメージは目に見えません。それなのに、音と意味とイメージには大きな存在感があります。

＊

音と意味とイメージは、まるで文字の影のようですが、そんなことはなく、むしろ音が先で、文字は後付けなのです。まず話し言葉があって、書き言葉が出てきたのはずっと後のことだと言われています。

それなのに、目に見える形としてある文字はいかにも偉そうに見えます。人は目に見えるものに信を置きます。一方で、目に見えないものに畏怖の念をいだくことがあります。

言葉は目に見えるものでありながら、目に見えないものでもあります。具象と抽象を兼ねそなえている、具象と抽象が同居しているという言い方もできるでしょう。

だから、人の外にあって、人の中に入ったり出たりできるのです。

不思議ですね。謎です。考えれば考えるほど不思議でなりません。

### 複写、複製、印影、拡散

まるでまぼろしのようです。幻影のようです。見ているようで見えていない。見えていないようで見える。

まぼろしは見るものではなく、なぞるものではないでしょうか。なぞるのであれば、目をつむってもできそうです。

なぞることなら、日向もなく陰もない、したがって影もない闇の中でもできそうです。

なぞることなら、生きていない物でもできるのです。人工知能のことです。コピー機のことです。ネット上での文字の入力、投稿、複製、拡散、保存のことです。

よく考えるとぞっとすることが、日々、いやいまこの瞬間にもあちこち、いや無数の場で起きているのです。

＊

見ていなくても、闇の中でも、描写はできます。無生物も、描写ができます。

まぼろしはまぼろしも描けるのです。まぼろしでまぼろしを描くこともできるのです。

まぼろしをなぞる。さらに言うなら、なぞるをなぞる。

これは、人の外にある出来事であって、人の中に入ったり出たりすることがあっても、つまり人がなぞることはあっても、外そのものなのです。

「外にある外である」とはニュートラルで非人称的なものとも言えるでしょう。

だから、機械や AI にも文章が書けるのです。書いていると、書いているように見えるのさかいはないのです。さかいがあるのは人においてだけであり、さかいはおそらく外にはないのです。

たぶん、あらゆるさかいがそうなのでしょう。さかいは人が決めるものです。だから、線引きをめぐる争いが跡を絶ちません。

さかいはありません。少なくとも外にはありません。

### 外にある線をなぞる

人は自分で勝手に引いた線をなぞっているだけだとも言えそうです。

自分が引いたはずの線が「外にある外である」のは皮肉ではないでしょうか。これは線が自立しているからに他なりません。

＊

「外にある外である」とはニュートラルで非人称的なものとも言えるでしょう。人の思いや思惑とは関係がなく「ある」という意味です。

これは、いま始まったことではありません。写本、写経、印刷の時代から起きている出来事なのです。

(人が文字をなぞり写すのは、線からなる文字が外にあるからです。内にあれば、わざわざ苦労して写しません。)

そして、複写。コピー (印影と呼びたいです)、複製。さらには、現在のコピーのコピー、複製=拡散=保存が起きているのは、同じ理由でそうなっていると言えそうです。

いまや、「写す」と「なぞる」は人の手に負えないものになり、人は振りまわされています。いや、これもいま始まったことではないでしょう。

影が外にある外であるという話は、人が言葉を持ったときに始まったにちがいません。

私は詳しくない分野なのですが、おそらく音楽や演劇やスポーツも影をめぐり、影を追っているいとなみだという気がします。

### 影には追いつけない

プレイ (play) なのです。演技、演劇、ドラマ、遊戯、賭け、演奏、競技、パフォーマンス、これらすべてがプレイであり、影を追い、影をなぞっているのではないのでしょうか。

演じる、振りをする、遊ぶ、戯れる、賭ける、奏でる、競う、おこなう、なぞる。名詞ではなく、このように動詞としてとらえるとさらに、体感しやすいと思います。

影をなぞるというのは、動きであり、その動きが刻々とうつつっていくことだからでしょう。ほら、影って動いていますよね。だから、ずっと目で追い、体で追いつづける必要があるのです。

影を前にして、人は迂回するしかなさそうです。おそらく言葉という影にまどわされながら、でしょう。人が（に）先立つ影に、人が導かれるはずがありません。人は影には追いつけません。気づくのにも遅れるのです。全体像を目にすることさえできないのです。

（拙文「意味のある影、意味のない影」より）

そうなのです。人は決して影に追いつけません。それなのに、自然界にある影に満足せず、自分でも影を作っているのです。作りつづけているのです。

#影 # 陰 # 言葉 # 日本語 # 記憶 # 素描 # 描写 # 写生 # 絵画 # デッサン # 文字 # 幻  
# 夏目漱石 # 複製 # 拡散 # AI



03/14 うつせみのたわごと-2- (全 14 回)



＊

うつせみのたわごと -2- (全14回)

星野廉

2023年3月14日 07:43

まことのかたこと。かたことのまこと。

＊

まことちゃんがかたことをいう。からだをゆらすたびに、かたことかたことと、はこのなかのあめだまがなる。たまがころがる。かたり、かたり、こと、こと。

＊

かたことのからことばで、まことのことをのべようとする。まことにもどかしい。かといって、くにのことばで、まことのことをかたるのも、もどかしい。まことは、まことにまことなのか。そう、みずからにとうのがまこと、いや、かたことなのかもしれない。まことは、くちぐせ。とんでもない、くせもの。

＊

かたられるはなしのかたはしを、みみにし、かたはしからわすれていく。それで、すべてをきいたことにする。なんといわれたと、きかれたら、おぼろにおぼえているところをつくり、おぎない、かたればいい。それしかできないのが、みのほど。それなのに、もっとできると、ひとはおもいこんでいる。いいきかせている。

◆

「うつせみのたわごと-2-」(全14回)

「うつせみのたわごと-1-」につづき、できるだけ大和言葉系の語をもちいて、平仮名づくしで書こうという試みをしています。ふだん書いている文章とは違った書き方で、「言葉」、「書くということ」、「読むということ」をテーマに書くという実験をしています。

今回のテーマは、言葉でものごとを語ること、および、ヒトが真実・現実・事実をとらえることの不可能性です。

標準的な表記に直したキーワードは、「まこと」「かたこと」「かたる・語る・騙る」です。

直接書かなかったキーワードは、「蓮實重彦」です。

この連載全体を通じての、直接書かなかったキーワードは、「ジェイムズ・ジョイス」「フィネガンズ・ウェイク」「サミュエル・ベケット」「フランツ・カフカ」「ジル・ドゥルーズ」「柳瀬尚紀」「レーモン・ルーセル」「VOA の special English」「basic English」「聖書の翻訳」「ジョージ・スタイナー」『After Babel (邦訳：バベルの後に)』「ピジン言語」「クレオール言語」「ブリコラージュ」です。

※この記事は、かつてのブログ記事「10.02.02 うつせみのたわごと-2-」に加筆したものです。

うつせみのあなたに 第11巻 | パプー | 電子書籍作成・販売プラットフォーム  
哲学がしたい、哲学を庶民の手に——。そんな気持ちを、うつに苦しむ一人の素人がい  
だき、いわば憂さ晴らしのためにブログを始めた  
puboo.jp

#日本語 # 言葉 # 大和言葉# 和語 # 漢語 # ひらがな # 自分語 # 文体 # 文章 # 散文

03/14 言葉の向こうに見える、言葉、現実、まぼ  
ろし



＊

言葉の向こうに見える、言葉、現実、まぼろし

星野廉

2023年3月14日 15:59

目次

あなた・貴方（貴男・貴女）・彼方

言葉の向こうに見える言葉

置き換える

かげ、影、陰、翳

言葉の向こうに見える現実

言葉の向こうに見えるまぼろし

うつせみのたわごと

あなた・貴方（貴男・貴女）・彼方

「あなた」は「貴方、貴男、貴女」とも「彼方」とも書けます。

こうなったのには理由があるのですが、いまのこの時点で考えると、英語で言えば、1) you の意味と、2) over there の意味の二つがあるということです。

「あなた」という音に、「貴方、貴男、貴女」と「彼方」という漢字を当てたと考えることもできるでしょう。当て字です。

言葉の向こうに見える言葉

上で述べた二つの意味の「あなた」は両方とも言葉であり文字です。言葉の向こうに見える言葉とも言えそうです。

「貴方、貴男、貴女」(you) という言葉の向こうに見える、「彼方」(over there) という言葉。

「彼方」(over there) という言葉の向こうに見える、「貴方、貴男、貴女」(you) という言葉。

どちらから見ても、言葉の向こうに見える言葉です。

いま見えると言いましたが、どちらか一方を意識していると、もう一方が見えない気がします。騙し絵のように。

不思議と言えば不思議です。ふだんは考えないことですから、当たり前と言えば当たり前かもしれません。

## 置き換える

「そういうのはね、両義性とか多義性と言うの」、「多義語っていうのがあるんだ」

そう言われると、「なんだそういうことか」と納得しそうになります。ある言葉に二つ以上の、つまり複数の語義や意味があるという話です。

このように、ある現象を偉そうな言葉や用語に置き換えると、それで分かった気持ちになりますが、それは別の言葉に置き換えただけで分かったのではないと私は思います。

偉そうな言葉に置き換えることで、それが指す現実を観察しなくなるからです。解決済みのものとしてかえりみなくなり、それについて考えるのもやめてしまうからです。つまり、思考停止状態におちいっているとも言えます。

ある具体的な体験を、ゲシュタルト崩壊とか承認欲求とかブルースト効果とかバタフライエフェクトと呼んで済まし澄ましているのと同じです。

レッテルを貼って分かった気分になるよりも、そうした現象をよく観察し自分の問題として具体的に考えるほうが、人生はわくわくと私は思います。

## かげ、影、陰、翳

「かげ」を辞書で調べると、いろいろな語義が載っています。そのどれもが「かげ」です。上で述べた多義語であり、多義性が「かげ」という言葉に立ちあらわれているわけです。

言葉の向こうに見える言葉がこれだけたくさんあるなんて、すごいです。多義語とか多義性なんて言葉に置き換えて、考えるのをやめてしまうなんて、もったいないと私は思います。

「かげ、影、陰、翳」と書き分けることができるのですから、それだけいろいろな「かげ」が現実にあるのにちがいません。

「かげ、影、陰、翳」という言葉から、「かげ、影、陰、翳」を探して現実を見てみる——。そんなふうになるとわくわくぞくぞくしてきます。

さらに、「かげ」を比喩的に騙し絵として考えてみると、ものすごい騙し絵じゃないですか。何通りに見えるのでしょうか。想像すると気が遠くなりそうです。

このすごさは、言葉が必ずしも視覚に訴えるものではないからなのでしょうが、だからこそ、言葉はすごいと思います。

## 言葉の向こうに見える現実

言葉は現実を写したもの、言葉は現実の影、小説は世界を写した鏡——このように言われることがあります。

現実が先あって言葉が後に来るという発想です。

一方で、言葉は現実ではないので、言葉と現実がぴったり重なることはありません。言葉と現実是一对一に対応しないという意味です。

言葉には言葉の世界があります。言葉は自立した世界を持ち、自立した存在でもあるのです。

とはいうものの、言葉の世界と現実の世界は似ています。

＊

猫という文字や発音は、猫という生きものとは同じではない、つまり別物である。それどころか、ぜんぜん似ていないのに猫という文字と発音で、人は現実の猫を思いだすし、思いうかべるし、思いえがくことができるのです。

言葉の世界から現実の世界を見ているとか、入っていくとも言えます。

たとえば、学習の効果とか条件反射という偉そうな言葉に置き換えて、考えるのをやめるのではなく、人が言葉から現実に入っていく現象を、自分のこととして意識的に体験するのもわくわくするだろうと思います。

私はいまこの現象がとても気になります。不思議でならないのです。

### 言葉の向こうに見えるまぼろし

言、現、幻。

この三つの漢字は「げん」と読めます。

言界、現界、幻界。

この三つの漢字の文字列は「げんかい」と読めます。私がつくった自分語なのですが、よくこうやって並べたり、記事の中でつかったりします。

言葉の世界、現実の世界、まぼろし（思い）の世界。

このように変奏したり変装したり変相することもできます。こういうことが好きなのです。

\*

いま私が挙げた三組の文字列ですが、これは言葉であると同時にまぼろしではないかと私は思います。いま現実を目にしているという意味では現実と言えるのかもしれませんが。

これが言界であり現界であり幻界なのですが、そう自分語で言われても困りますよね。そんなことを言われても確認しようがないからです。

その意味では、言界は現界であり幻界であり、限界でもあるのです。

### うつせみのたわごと

上で見てきたように、言葉の向こうには言葉が見えることがあるし、言葉の向こうには現実が見えることがあるし、言葉の向こうにはまぼろしが見えることがある。そんな気がします。

「うつせみのたわごと」（全14回）ではそういう話をしていきます。以上、「うつせみのたわごと」のご紹介と宣伝でした。

読みにくくて退屈な連載ですけど、よろしく願いいたします。

#レトリック # 言葉 # 漢字 # ひらがな # 多義性 # 多義語 # 両義性 # 意味 # 日本語  
# 自分語



03/15 内から来る外【引用の織物】



＊

## 内から来る外【引用の織物】

星野廉

2023年3月15日 07:42

本記事は「言葉は内から来るもの」というタイトルで、2021年9月28日にnoteで「言葉は外から来るもの」と「もう一つの言葉」という2本の記事に続けて投稿した、つまり連投したものです。(そのアカウントは削除していまはありません)。

「言葉は外から来るもの」は「外からやって来る外【引用の織物】」と改題し、また「もう一つの言葉」は「言葉の中にある言葉」と改題して先日再掲しました。

そんなわけで、本記事と1)「外からやって来る外【引用の織物】」と2)「言葉の中にある言葉」と本記事は内容的につながっています。

なお、再掲にあたり、どの記事にも当時の勢いを殺がない程度に若干の加筆をしています。

本記事はとても長いので、太文字の部分だけに目を通して、ざっと読み流していただくこともできます。太文字で気になる部分がありましたら、その前後をお読みください。

目次

テリトリー

言葉は内から来るもの

内、外、辺境

母語で書くことも「外国語」で書くことであるという考え方

自分語  
内なる言葉  
用言体

テリトリー

言葉は外から来るもの――。

最近、上のようなことを考えていて、テリトリーという言葉思い出しました。テリトリーについて考えることは、外、内、辺境といった言葉とイメージについて思いをめぐらすことになります。

普通テリトリーというと、人の集団が作る縄張りを意味しますが、個人としての人間にもテリトリー、つまり外、内、辺境があるのではないのでしょうか。個人のプライベートなスペースというのではなく、人の身体と意識が一つの「内」という場であるというイメージです。

この記事では、共同体のレベルと個人のレベルのテリトリーを重ね合わせたり、両者の間を行き来しながら、外、内、辺境について考えてみようと思います。

言葉は内から来るもの

言葉は外から来るもの。

このフレーズの一文字を変えてみます。私の文章をお読みになると分かると思いますが、私は論理的思考が苦手です。そんな私は、よくこうやって言葉をいじって、思いをめぐらします。眉間にしわを寄せるような作業ではなく、楽しいからです。こんなふうには遊んでいると次々と言葉が出て来ます。

一種の出任せなのです。何に任せているのかは分かりません。

話を戻します（私の文章はよく話が逸れます、ごめんさい）。一文字を変えてみるのでしたね。

言葉は内から来るもの。

今はそんなふうにも思えてなりません。「言葉は内から出るもの」とも言えますが、内も外だという気がするので、「出る」ではなく「来る」としておきます。

言葉が内から来るとは、翻訳や他言語の習得をイメージしていただけると分かるのではないのでしょうか。人類が積み上げてきた知識の集積のほとんどが翻訳と写本および印刷の結果だという気がします。人類にとって当たり前の行為だったというわけです。珍しくも特殊なことでもありません。

Aという言語をBという言語に置き換える。Aという言語の話し手がBという言語を習得する。またはその逆もある。こうした行為が可能であるなら、他言語間には共通する基盤があるはずです。

もっと具体的な例を挙げましょう。ここに米国で生まれたばかりの子どもがいます。父親は日本語を母語とし、母親の母語はアラビア語です。両親はその子どもを何語で育てるかを相談するでしょうね。

この場合、米国で暮らすことになる、この子どもは日本語かアラビア語のどちらかを母語とすることになるでしょう。両親が英語も読み書きできれば、英語が選ばれるかもしれません。

あっさり書きましたが、よく考えると不思議でなりません。おそらく、その子は今挙げた三つの言語のどれか（複数かもしれません）を使うようになるのでしょう。日本語でもアラビア語でも英語でも、環境を整えれば、その子は使いこなすようになるのです。

人の内には「言葉・言語の素地」（内なる言葉と言ってもいいでしょう）みたいなものがあるのではないかと。さもないと、言葉・言語は習得できない。こう考えるのが普通ではないでしょうか。

言葉は内から来るもの、とはそういう意味です。

また、内も外だという気がするので、「出る」ではなく「来る」としておく、と上で述べたのは、自覚や意識されない「内」は「外」と言ってもかまわないのではないか、という意味です。

以前に、私はこういう「内なる言葉」（自覚されない内）みたいなものを「経路」と勝手に呼んで、ああでもないこうでもないと言ったことがあります。正直言って、えらい目に遭いました。收拾がつかなくなったのです。それだけは覚えています。

身の程知らずな冒険をするものじゃありませんね。今ではもうそんな元気はないですけど。

\*

\*ノウ、ノン、ナイン、ニェット、ノ、ノ

\*英、仏、独、露、西、伊

(中略)

\*「ん」「n」「む」「m」「う」「u」

(中略)

\* n が、否定的な意味の印（しるし）だ、素（もと）だ、

ということは、英、仏、独、露、西、伊だけでなく、その周辺から、はるか遠くにあるイラン、インドにまで達する「現象」らしい。さらに言うなら、

\*  $n \in 2 = m$

\* m も、否定的な意味の印だ、素だ（※たぶんですけど）

という駄洒落か嘘みたいな話も、全面的に否定するわけにはいかないらしい。

では、

\*  $n \in (-1) =$  （上下ひっくり返して）u

\* u も、否定的な意味の印だ、素だ

ということが、あったとしても不思議ではないかもしれない。あくまで、「かも」「たぶん」ですが。

(中略)

上で書いた、「ん」「n」「む」「m」「う」「u」です。

「な」「ん」で、こ「う」「な」る「の」、でしょうか？

根拠など、「な」い。実証も、でき「な」い。

単なる「accident = 偶然 = アクシデント = 事故」だ。

果たして、そうなのか？ それとも、何らかの学術的な説や法則があるのか？ あったとして、それは既に定説なのか？

(拙文「「ん」の不思議」より引用)

\*

で、不思議でならないのは、その

\*言語がヒトの集団によってばらばらである。

ことです。それなのに、

\*言語を習得するために必要な「経路=回路=道筋」が、ヒトに共通して備わっている。

らしいのです。

\*ヒトであればどの人種や民族の赤ちゃんであっても、ある言語を用いてある年齢まで育てると、その言語を母語として習得する。

ようなのです。

\*外部（＝世界の諸言語）はばらばらなのに、内部（＝たぶん脳）には一本筋が通っている。

という感じです。これが不思議でなりません。

\*翻訳とは、「ばらばら」を「一本の筋」を頼りに「つなげる＝こじつける」ことである。

と言えそうです。

（拙文「翻訳の可能性と不可能性」より引用）

\*

\*反意語とは、ヒトが本当は体で分かっている、あるいはかつて体で知っていたことを忘れた結果として陥っている錯覚から生じる言葉のペアである

と、簡単にまとめさせてください。何しろ、

\*ヒトは、「○△X」という言葉を作り、その次に「○△Xとは何か？」と問い、思い悩む生物なのである

からなのです。

（中略）

\*「わかる」は日本語の一つだ。

を体感するためには、

\*「わかる」をズラしてみる。

方法があります。

（中略）

\*「わかる」と「理解する」の「ズレ＝違い」は何か？

くらいに、簡単なフレーズでも、それに答えようとする、思わず「うーむ」とうなってしまう。

ややこしいですね。なぜ、ややこしいのでしょうか。

きっと

\*「枠」に突き当たっている。

からだと思います。

その

\*「枠」

というのは、さきほどの、

\*ズレ=違い=差=差異=際・きわ=間・あい・あいだ・あわい=隔たり=分かれ目=境い目=境界線=辺境=縁=ふちっこ=枠

という一連の「言葉=語=イメージ・意味・表象・代理・でたらめ・恣意的なもの」の総称だと考えてください。

(拙文「わかるという枠」より引用)

## 内、外、辺境

「内、外、辺境」をめぐって思いつくままに言葉を並べてみます。

かなり広範な内容のテーマが多くなるもようなので、無理に整理せず順不同に資料を羅列していくことになりそうです。

今後の記事のためのメモや見取り図のようなものになるかもしれません。論理的思考が苦手な構想力がないため、こうやって物事を並べていきイメージを膨らませるしかないのです。そのうち、書きたいことや書くべきことが分かってくるかもしれません。

要するに出まかせです。何にまかせているのかは不明ですが、いつもその何かに助けられています。誰に頼まれたわけでもないのに、やっています。こういうことは一人でやっていると寂しいので、お付き合いいただければ嬉しいです。

一種の連想ゲームであり、ひとりでやるブレインストーミングみたいなものです。引用の織物、コラージュ、ブリコラージュでもあります。

＊

外の思考、内的体験

ブランショ、バタイユ、クロソウスキー、フーコー

＊

extraterritorial、extra-terrestrial、deconstruction、由良君美

ズレ、違い、ギャップ、差、差異、際・きわ、間、あい、あいだ、あわい、隔たり、分かれ目、境目、境界線、辺境、縁、ふちっこ、枠、辺、偏、変、端、端っこ、はみっこ、はみ出す

export、import、exit、exterior、interior、without、within、in、out、inbound、outbound、étranger、stranger、outsider、excentric

ex、extra

X、X JAPAN、ex

X + I = ＊、ex- + in- = ＊、

Ⓔ、☒、＊、※、※※

detour、decline、incline、decentralize、decompose、demerit、devalue、decertify、deconstruction、decontaminate、decrease、increase

＊

追放、流罪、流刑、長期の異郷（異境）生活、亡命、バビロニア捕囚；国外（他郷）に追放された人、流人、異境生活者、亡命者

（リーダーズ英和辞典の exile から引用）

nomad、ノマドランド

放浪、遊牧民、難民、引き揚げ者、無国籍者、移民、移住、入植、植民地、異国生活者、宣教、宣教師、御雇外国人、クラーク博士、フェノロサ

＊

堀田善衛、森有正、高田博厚

多和田葉子、カズオ・イシグロ

越境作家、外国語（非母語）での執筆、母語での執筆、他言語・多言語での執筆

＊

ヘミングウェイとガートルド・スタインの国籍はアメリカ合衆国ですが、ヨーロッパおよび英国となると、地続きであったり、海峡で隔たっているだけですから、祖国を離れて活動する作家や音楽家や芸術家の例は枚挙にいとまがないと言うべきでしょうね。

そういえば、今集中的に読んでいるパトリシア・ハイスミスも祖国を離れて創作していた作家だと気がづきました。英仏両語での著作もあるサミュエル・ベケットもそうです。多言語に通じたナボコフ。ルーマニア語だけでなくフランス語で書いていたシオラン。同じくルーマニア出身のエリアーデもいたなあ。英語でも書いたワイトゲンシュタインも、そうなのか。そうだ、フランス語で書いたアゴタ・クリストフがいた。

話がいつの間にか非母語で書く作家へと越境してきました。人は移動し越境する生き物なのだと思いつくづきます。このテーマは奥が深そうで、收拾がつかなくなってきたようなので、この辺でストップします。

（拙文「もう一つの言葉 ——言葉は外から来るもの」より引用）

＊

遣隋使、遣唐使、空海、漢文、夏目漱石、森鷗外、南方熊楠

鑑真、西遊記、お経、写経、印刷、中国語、サンスクリット語、梵語、梵字、パーリ語・巴利語

聖書、ヘブライ語、ギリシア語、ラテン語、ドイツ語、『車輪の下に』、神学校

筆写、南方熊楠、大英博物館、コリン・ウィルソン、『アウトサイダー』、『至高体験ー自己実現のための心理学』由良君美・四方田剛己（四方田犬彦）訳、大英図書館、カール・マルクス、無国籍者

### 母語で書くことも「外国語」で書くことであるという考え方

【さらには、母語で書くことも「外国語」で書くことであるという考え方もできます。いつかはこの視点で記事を書きたいのですが、ご興味のある方には、参考文献として『カフカ マイナー文学のために』（ジル・ドゥルーズ＋フェリックス・ガタリ共著 宇野邦一訳）をお薦めします。私は学生時代に読んだのですが、新訳が出たもようです。刺激的な著作です。】

（拙文「もう一つの言葉 ——言葉は外から来るもの」より引用）

＊「うつせみのたわごと」（1から14）はいわば「自分語」で書いた文章です。書いた時には、それなりに本気だったのです。愛着のあるシリーズです。ただし、こんなことをする元気はもうありません。

「うつせみのたわごと」（1から14）は、現在は以下の電子書籍に収めてあります。

うつせみのあなたに 第11巻 | パプー | 電子書籍作成・販売プラットフォーム  
哲学がしたい、哲学を庶民の手に——。そんな気持ちを、うつに苦しむ一人の素人がいただき、いわば憂さ晴らしのためにブログを始めた  
puboo.jp

＊

今でも、「たわごとシリーズ」を書いたことは、後悔していません。また、いつか、大和言葉づくしで、文章をつづってみたいという気持ちもあります。

収穫というとおおげさになりますが、枠をずらして書く、あるいは、言葉をつくりながら書くという体験は、当たり前だと思っている、ことや、ものや、さまを、それまでとは異なった視点からとらえる機会になった気がします。とらえなおす、見なおす、考えなおす、感じなおす、という感じです。枠をずらすさいには、

- 1) ある漢語系の言葉に相当する大和言葉系の語を、辞書などで探しだして使用する、
- 2) 大和言葉系の語を組み合わせて説明的に書く、
- 3) 大和言葉系の語を用いて比喻をつかい、ほのめかす、

以上の3つの方法があるように思います。

(拙文「外国語」で書くこと)(※この文章は以下の「柳瀬尚紀先生の思い出に」に入っています)より引用)

## 自分語

自分語、造語、文体

ジェイムズ・ジョイス、フィネガンズ・ウェイク、柳瀬尚紀、ニュースピーク、ジョージ・オーウェル、時計じかけのオレンジ、ナッドサット、アンソニー・バージェス、吉里吉里人、井上ひさし、河童、芥川龍之介、ガリヴァー旅行記、レーモン・ルーセル、アフリカの印象、ロクス・ソルス

\*

で、思ったのですが、動詞を名詞とみなしてもいいのではないのでしょうか。当たり前ですよ。『詞』を辞書で調べると、語義のひとつとして「言葉」と書かれています。ちなみに、広辞苑によると、以前には動詞を作用言とか活語と呼んでいたそうです。すると、「詞・言・語」というふうには、ずらすことができます。やはり、動詞＝名詞となりそうです。

『「動く』行為や状態』に名を付け、名詞化すると、「動く・動き・動くこと」となる。「言葉を介する＝言葉を代理とする」限り、「動く・動き・動くこと・動くさま・動き方・動くという行為・動くという動き・動くという揺らぎ」を、名詞としてしか認識できない。

そう言えるのではないのでしょうか。動詞という名の名詞ということです。

ヒトである限り、動きを動きとしてとらえることの限界性＝不可能性を、ひしひしと感じます。狭い意味での言葉、つまり、書き言葉と話し言葉をもちいる限り、動きを動きとしてとらえられない。極論を言えば、「動く」であれ、「揺らぐ」であれ、名詞でしかない。なぜなら、「言葉＝言語＝言＝語＝詞」の使用においては、そういう仕組みが働いているからだ。そんなふうに思っています。この前提に立つと、ヒトの限界性をイメージしやすくなります。空間的広がりや時間的経過を、知覚すること。さらに、認識・記憶・想起すること。ならびに、空想・想像すること。また、思考・捏造(ねつぞう)すること。以上の「すること」の限界性＝不可能性。そんな感じです。

(拙文「動詞という名の名詞」より引用)

\*

言葉というものは、ヒトを錯覚させます。「見る・見える」という言葉があり、その「見る・見える」をつかうことによって、ヒトは「見た・見えた」気持ちになってしまう。「見る・見える」と「見た・見えた気持ちになる」とでは、大違いです。これは、いわゆる五感とか知覚という言葉のキーワードである、「見る」「聞く」「嗅ぐ」「味をみる」「触れる」だけでなく、いわゆる思考や意識という言葉のキーワードである、「思う」「考える」「分かる」「理解する」「意識する」「感じる」についても、言えるような気がします。気がするだけですけれど。たった今、つけた「気がする」も、思考や意識について語るさいに出てくる言葉ですね。

気がする。気がするという気持ちになる。要するに、この駄文もきわめていかがわしく、うさん臭いものである、ということになります。「そんなの百も承知だ」という、みなさんの声が聞こえてくる気がします。気がするどころか、実際、そうにちがいません。この駄文をつづっているアホ自身が、いかがわしいなあ、うさん臭いなあ、と思っているのですから。

(拙文「名詞という名の動詞(前半)」より引用)

\*

このブログで出てきそうな「固有名詞＋する」、つまり、「夢の素」のうちの人名バージョンを解説付きで挙げてみます。

08/16 11:43 読書日記【引用】

\* 「(ロラン) バルトする」：とっかえひっかえ興味の対象やテーマを変える。

\* 「(ステファヌ) マラルメ」する」：1) 言葉に徹底的にもてあそばれる。； 2) 言葉というサイコロを振ることで、思索=詩作=試作する。

\* 「(ジャック) デリダする」：駄洒落と「考える」をシンクロさせる。

\* 「蓮實重彦する」：1) 言葉の表情・身ぶり・目くばせに目を凝らしながら、読む、あるいは書く。； 2) 映画を好きだとは、ほかの人に言わせないと言うほどまでに、映画に淫する。

\* 「坂部恵する」：大和言葉系の語にこだわりつつ、日本語で哲学する。

書名バージョンもあります。

\* 「(ギュスターヴ・フローベール作の)『紋切型事典(紋切型辞典)』する」：ヒトは決まり文句しか話さないという視点から物事を論じる。

\* 「(ギュスターヴ・フローベール作の)『ブヴァールとペキュシェ』する」：言葉で書かれたものが現実であると錯覚するというヒトの習性に注目して、物事を論じる。

\* 「(ニーチェ作の)『善悪の彼岸』する」：論理的矛盾や破綻といった批判を物ともせず思考を重ね、言説の断片を積み重ねていく。

以上のように、だいたいが一面的で、その固有名詞で呼ばれている各人の、業績や仕事や私生活でのさまざまな役割を切り捨てています。それ以上のことを望むわけにはまいません。たとえば、基本的に「見る」人であると思われるミシェル・フーコーについて、多面的に「固有名詞+する」しようとする、次のようになります。

\* 「ミシェル・フーコー」する：見て、観て、見つめ、認められ、見られ、見入れ、魅入れ、見せられ、魅せられ、身を張り、身をかけ、見舞われ、診られ、看られ、看取られる。【※ 合掌。】

書物であれば、上記のように、ある書物のある部分だけをとらえた、ひとりよがりな根拠の乏しい印象だけに焦点を絞ることになります。つまり、ごく個人的なイメージをもとにして、遊んでいるだけです。ですから、こうしたひとりよがりな言い回しをもちいるさいには、どんな意味で使っているのかが読者に伝わるように、前後関係の記述に工夫をします。

(拙文「名詞という名の動詞(後半)」より引用)

### 内なる言葉

それにしても、翻訳は不思議ですね。翻訳とすることができる、このおかげで人はここまで来ることができたのです。さもないと、人類はばらばらで、知や情報を伝達したり共有したり継承することはできなかつたに違いありません。

(拙文「もう一つの言葉 ——言葉は外から来るもの」より引用)

\*

やはり「内なる言葉」が気になります。関係ありそうなのはチョムスキーだと思われませんが、チョムスキーは大の苦手なのです。ヴィゴツキーのほうがとっつきやすかった記憶があります。

レフ・ヴィゴツキー - Wikipedia

ja.wikipedia.org

\*

いつだったか、フーコーとチョムスキー対談する動画を英語の字幕付きでぼーっと眺めていて感じたのですが、フーコーとチョムスキーの話が噛み合わないのは、「内なる言葉」に対するとらえ方に違いがあるからではないでしょうか。

動画では、直接的には「内なる言葉」について両者は語っていませんが、思ったこと

を以下に書いてみます。なお、本来は語り得ぬものについて語ることになるので、レトリックを多用するのをお許しください。

チョムスキーにとって「内なる言葉」は数字（比喩です）ではないでしょうか。数字ですから、抽象です。

※チョムスキーについて考えていると、いつの間にかモーリス・ブランショについて空想（妄想）していることがよくあります。私の中ではつながるみたいなのです。

フーコーにとっての「内なる言葉」は顔（比喩です）、すなわち「（皮膚を備えた）身体」だという気がします。ただし、砂の顔のように消えます。消えるのは顔の宿命です。

＊

ついでに、思ったことを付け加えます。

ドゥルーズにとって「内なる言葉」は表情（比喩です）、表情ですから消えます。ただし、「チェシャ猫」（ルイス・キャロルの『不思議な国のアリス』）の「笑い」みたいに、消えてもしばらく残るのです。

ニーチェにとって「内なる言葉」は仮面（比喩）です。仮面といっても、デスマスクに近いものだという気がします。デスマスクもマスクです。ニーチェを読む際には、この仮面をかぶって踊るのがよろしいかと思えます。踊ることなしに、ニーチェを読むのは難しいのではないのでしょうか。

## 用言体

用言体と勝手に呼んでいるものについてお話しします。あくまでも個人的な呼び名なので分かっただけか心もとないのですが、説明させてください。イメージとしては古井由吉の小説やエッセイに見られる文章のつづり方で、主語が省かれていたり、抽象度の高い名詞や人称代名詞や固有名詞の放つ強い光を避けながら書いていく方法なのです。

「主語を省く」というのは分かりやすいですね。ああ、確かにこのセンテンスでは主語が書かれていない、というふうに誰が読んでも確認できます。お断りしますが、「主語が省かれている」とは「主語が隠れている」とか、あるいは「主語は書かれてはいないが誰の動作や状態なのかは読んでいて分かる」という状態を指します。

古文と呼ばれる日本語の文章では主語が省かれている場合があるが、隠れた主語がちゃんと分かるように書かれている。そんなことを中学と高校時代に習ったにもかかわらず、古典が並外れて苦手なのでずっと逃げてきました。いまも古文は読めません。

用言体は古文ではありませんが、主語が省かれている（隠れている）場合には、ある行為や状態が誰のものなのかに注意しながら読む必要があります。ただし、主語が省かれていたり隠れていることが用言体の必須条件かと言えば、そうでもありません。

大切なことは、主語があろうとなかろうと、抽象度の高い名詞や人称代名詞や固有名詞による目くらましの光（読む人を分かった気分にさせる虎の威みみたいなものです）よりも動詞の身ぶりが目につくように書かれているかどうか、なのです。どう書いてあるか、どう書かれているか、これがもっとも重要な点です。いまお話ししているのは、あくまでも書き方の問題なのです。内容ではありません。

＊

以上は、拙文「用言体＜動詞について・003＞」から引用したのですが、これは一種の自分語である「うつせみのたわごと」からかなり後に書いた文章です。

こうやってみていると、自分の中に母語に対する違和感があるのが感じられます。大和言葉と用言にこだわることで、「内なる言葉」に近いものを探している、あるいは作ろうとしているようなのです。

このことは、私が詩と哲学を苦手としていることとつながっているような気がします。

詩は読めないし書けません。

かつては自分は哲学をしているという自覚があったのですが、どうやらこの国で哲学と呼ばれているものは、自分のやっていることとは遠いらしいと思うようになりました。

記事に「哲学」というハッシュタグを付けないのは、そういうことから来る配慮なのです。いわば誤配を避けるためです。

なお、用言体という言葉でイメージしているのにいちばん近い文章の書き手は、古井由吉と蓮實重彦です。そのため、一年ほど前までは、この二人の書いたものばかり読んでいました。快かったからです。私は気持ちのいいことしかできないのです。

\*

今後の記事を書くためのメモができました。とりあえずのものですが、これを頼りに、書いていきたいと思います。

#言葉#日本語#翻訳#外国語#文体#大和言葉#和語#自分語#柳瀬尚紀#古井由吉#蓮實重彦



04/16 うつせみのたわごと-3- (全 14 回)



＊

うつせみのたわごと -3- (全 14 回)

星野廉

2023 年 3 月 16 日 07:56

なぞ。なにかわからない。だから、なぞる。くうにゆびでなぞる。いま、ここに、ないからなぞる。つちやかべに、えをなぞる。あるいは、かく。ひっかく。なすりつける。ぬる。そうして、おもう。おもいをめぐらす。おもいをえがく。

＊

なぞ。なにかわからない。だから、なぞる。くうにおもいでなぞる。いま、ここに、ないからなぞる。つちやかべやものに、じをしるす。うちわでしかわからない、ことばともんじ。よそのものには、おしえない、なぞ。うちわだけのなぞ。やがて、それがなかまをしばるようになる。おきて。やぶったものは、とがめられ、むくいを受ける。ことばがちからをえる。ひとにさしずし、もうしつけるようになる。

＊

しる。しるをかける。つばをつける。なづける。なつける。てなづける。なわをはる。なわぼり。それでも、なつかない。このほしをてなづけるのは、むずかしい。どんななをつけても、どんなにながふえても、なつかないものがある。それをわすれる。それをしらない。だから、なつけたものとする。または、このさき、なつくものとする。いのり。ねがい。おまじないのことば。しるしるちしる、しるかけて、つばかける——。ないから、かける。むなしいふるまい。

＊

なつかしいところ。いごこちのいいところ。ただしいものにみちたところ。おのれの

よりどころ。ささえ。みなもと。おもいのうちで、つねに、かえっていくところ。うち。なか。いえ。むら。むれ。もどることのできる、ちとつちがあるところ。なかまや、はらからや、おやのいるところ。だが、かえれないところがある。なつかしいが、もどれないところ。とおいむかしにあった、といわれるところ。あったと、されるところ。そこは、うつつには、ないからこそ、あるとしんじる。よそものちをながしても、まもるべき、つちとち。みなもととは、ないにわ。ないにわを、いのちをかけてしんじる。むなしいふるまい。かなしいさが。

＊

みなもと。にわ。かえれない。うつせみにはないから。うつお。うつせみのから。うつせみのあな。うつせみのな。うつせみのあなた。うつせみのないにわ。ひろいひろいにわ。ほしほしのうかぶにわ。はて。ないはない。こころとおもいにあるだけ。しんじるしかない。な。ことのは。



### 「うつせみのたわごと-3-」(全14回)

「うつせみのたわごと-1-」と「うつせみのたわごと-2-」につづき、できるだけ大和言葉系の語をもちいて、平仮名づくしで書こうという試みをしています。

ふだん書いているさいの枠をずらして書いたり、言葉をつくりながら書くわけですが、当たり前だと思っている事や物や様を、それまでとは異なった視点からとらえる試みとも言えます。とらえなおす、見なおす、考えなおす、感じなおす、という感じです。

- 1) ある漢語系の言葉に相当する大和言葉系の語を、辞書などで探しだして使用する、
- 2) 大和言葉系の語を組み合わせて説明的に書く、
- 3) 大和言葉系の語を用いて比喻をつかい、ほのめかす、

以上の3つの方法を試しています。

＊

今回のテーマは、ヒトが言語を獲得したこととテリトリーと知との絡み合いです。これまで何度か論じてきたことを、大和言葉系の語だけで語ろうとすることのおもしろさ

を感じました。スリリングな体験でした。

標準的な表記に直したキーワードは、「謎」「なぞる」「かく・描く・搔く・書く」「思い」「掟」「しる・知る・領る・汁」「名づける」「手なづける」「なわぼり・縄張り」「ち・地・知・血」「懐かしい所」「帰る」「戻る」「源」です。

直接書かなかったキーワードは、「動物行動学」「縄張り行動」「マーキング行動」「闘争本能」です。

この連載全体を通じての、直接書かなかったキーワードは、「ジェイムズ・ジョイス」「『フィネガンズ・ウェイク』」「サミュエル・ベケット」「フランツ・カフカ」「ジル・ドゥルーズ」「柳瀬尚紀」「レーモン・ルーセル」「VOA の special English」「basic English」「聖書の翻訳」「ジョージ・スタイナー」「『After Babel (邦訳：バベルの後に)』」「ビジン言語」「クレオール言語」「ブリコラージュ」です。

※この記事は、かつてのブログ記事「10.02.03 うつせみのたわごと-3-」に加筆したものです。

うつせみのあなたに 第11巻 | パブー | 電子書籍作成・販売プラットフォーム  
哲学がしたい、哲学を庶民の手に——。そんな気持ちを、うつに苦しむ一人の素人がい  
だき、いわば憂さ晴らしのためにブログを始めた  
puboo.jp

#日本語 # 言葉 # 大和言葉# 和語 # 漢語 # ひらがな # 自分語 # 文体 # 文章 # 散文  
# テリトリー# 縄張り # マーキング



03/17 𠄎境としての人間



＊

## 辺境としての人間

星野廉

2023年3月17日 07:44

本記事は「言葉の夢、夢の言葉」というタイトルで、2021年9月28日にnoteで投稿したものです。(そのアカウントは削除していまはありません)。再掲にあたっては、当時の勢いを殺がない程度に若干の加筆をしてあります。

目次

テリトリー、外、内、辺境

辺境に身を置いた人たち

言葉は外と内から辺境へとやって来る

辺境としての自分

夢の言葉、言葉の夢

テリトリー、外、内、辺境

昔の話です。

「仏文学は澁澤龍彦、独文学は種村季弘(たねむらすえひろ)、英文学は由良君美(ゆらきみよし)」——そんなふうにもう、一部の人たちが口にしてきた時期がありました。三人に共通するのは、博覧強記というところでしょうか。在野、アカデミックな場と、身を置く場所は違いましたが、それぞれが持ち味を生かしながら、いいお仕事をなさっていました。

澁澤龍彦 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

種村季弘 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

三人のなかでは、由良君美がいちばん一般的な知名度は低かったような気がします。ただ専任の大学教員であったために、アカデミックな世界では、著名な方でした。現在、表象文化論というテリトリーがあるのは、由良君美の門下、あるいは、その講義を聞いた人たちがいたからだ。そう言ってもいいように思います。

由良君美 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

由良君美とは何者か？ 阿部公彦 | じんぶん堂

博覧強記の人として知られ数々の逸話を残す英文学者・由良君美（1929 - 1990）。「偏った本ばかり読む男」を自認する由良

book.asahi.com

由良は『脱領域の知性』という邦題の訳書を1972年に上梓しています。原書の著者は、ジョージ・スタイナー（George Steiner）という人で、原題は、Extraterritorial です。ステューブン・スピルバーグのSF映画で邦題が、「E.T.」という作品がありますが、その原題は、E.T. the Extra-Terrestrial です。

似ていますよね。Extraterritorial は、「学問の領域を超えて」という意味であり（治外法権・extraterritoriality の形容詞形でもあり、interdisciplinary・学際的とも近い気がします）、一方の Extra-Terrestrial は、「地球の外の」という意味です。もともと the が形容詞につくと、英語では「○○な人たち」とか、「○○なものたち」という複数名詞みたいに扱われますから、the Extra-Terrestrial は、「地球外の生物たち」という意味になりそうです。

ところで、「脱構築」という言葉があります。英語では deconstruction です。ドイツのハイデガーの著作経由で、ジャック・デリダが、déconstruction（デコンストラクション）と仏訳＝造語したのが、英語になったらしいです。この語に「脱構築」という訳語を当てたのも、由良君美だと聞いたことがあるので、ネット検索をして確かめてみると、ウィキペディアの解説「由良君美」に言及がありました。由良には『メタフィクションと脱構築』という著書があります。

学術の領域における海外の新しい潮流で、ものになりそうなものを嗅ぎだす優れた才能の持ち主だったことが、うかがわれます。先見の明があった人だったと、今になって思います。

とは言いながら、こうしたことはすべて高山宏先生からの受け売りです。かつて大学生だった私に、由良君美について熱っぽく語ってくれた高山先生の姿がいまも目に浮かびます。ちなみに高山宏先生は事物をつなげる名人であり、上のお三方に続く人物だと理解しています。

高山宏 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

\*

以上の文章は、「09.06.12 テリトリー (7)」という十二年前にブログに書いた記事に加筆したものです。

\*

上の文章で出てきた語のうち、気になるものを並べてみます。

- \* extraterritorial
- \* interdisciplinary
- \* extra-terrestrial
- \* deconstruction

ex(tra) や inter や de のつく単語とそのイメージを見てみましょう。

export、import、exit、exterior、interior、without、within、in、out、inbound、outbound、étranger、stranger、outsider、excentric、expose、impose、express、impress

内と外、入ると出る、はずれる・外れる、ずれる、ずれ、よそとうち、なかとそと

detour、decline、incline、decentralize、decompose、demerit、devalue、decertify、deconstruction、decontaminate、decrease、increase

déterritorialisation、deterioration、decode、code、encode、domain、Dominus、

domestic、dominion、empire、emperor、imperium、imperial、imperialism

それる・逸れる・反れる、脱する、脱ぐ、反・逆・降・否・分

international、interaction、intercontinental、interface、inermariage、Intercollegiate

際、きわ、間、あい、あいだ、あわい

periphery、outskirt、periscope、peri-urban、frontier、marginal、border、Doctors  
without Borders、boundry、between、among

隔たり、分かれ目、境い目、境界線、辺境、縁、ふちっこ、枠

\*

澁澤龍彦と種村季弘と由良君美は、それぞれ辺境に身を置いた人物だという気がします。フランス、ドイツ、英米と日本とのあいだに身を置いて、学び、研究をし、執筆活動をしたという意味です。

こうした異国と母国のあいだに身を置くという身振りで決定的な役割を果たすのが言葉、つまり言語であることは言うまでもありません。忘れてならないのは、異国の言葉を身につけることが異国の文化との触れ合いでもあるということです。

母国において異国の言葉を学ぶ際には、たとえその異国の人から直接学ぶという幸運に恵まれたとしても、その異国で学ぶのではないわけですから、制約や限界があります。その言葉のある程度、あるいはかなり身につけながら、その言葉が話されている国や地域に、ほとんど、あるいは一度も足を踏み入れることなく生涯を終える人も多いに違いありません。

### 辺境に身を置いた人たち

上の文章では、辺境に身を置いた人物として、澁澤龍彦と種村季弘と由良君美を挙げました。この三人に共通点は何でしょう。

博覧強記ですか。確かにそうでしょう。語学に秀でていた、ですか。あれだけのお仕事をなさったのですから、それも間違いありません。名文家だった、ですか。おおいに共感します。私は三人の文章の熱狂的なファンです。

三人の残した業績を見れば、フランス語、ドイツ語、英語という言語が大きな役割を果たしたのは言うまでもありません。まず言葉を学び、そして言葉とその言葉にまつわる文物を学び続けるという果てのない過程をとおして創作活動をした。そう言えるのではないのでしょうか。

言葉を学ぶことは、同時にその言葉を生んだ文化を学ぶことである——。言うのは簡単ですが、きわめて困難な道でしょうね。才能、運、環境、身体（健康）、財力、社会情勢といった要素に左右されるに違いありません。

さて、三人の共通点ですが、私の頭にある共通点については、上の文章の最後に書いてあります。

母国において異国の言葉を学ぶ際には、たとえその異国の人から直接学ぶという幸運に恵まれたとしても、その異国で学ぶのではないわけですから、制約や限界があります。その言葉がある程度、あるいはかなり身につけながら、その言葉が話されている国や地域に、ほとんど、あるいは一度も足を踏み入れることなく生涯を終える人も多に違いありません。

それぞれ三人についてのウィキペディアの解説を読んでも、三人とも長期にわたって留学をした経験がないようなのです。澁澤であればフランス、種村であればドイツ、由良であれば英国か米国で、もし若い時に留学していれば、残したお仕事の内容も大きく変わったのではないか。

不用意きわまる感想および意見でしょうが、そんな想像をしてしないではいられません。

歴史に if は許されないという意味のことがよく言われます。その意見にしたがえば、今私の述べた感慨は、想像や空想どころか無意味な妄想でしょうね。

もう一つ、不用意で妄想じみた疑問が浮かびます。

なぜなのでしょう。

なぜ、上の三人は若い頃に留学をしなかったのでしょうか？ しなかったというより、できなかったのかもしれませんが。三人が少年から青年だった時期の情勢がまったく関係なかったとは言えない気がします。

\* 澁澤龍彦 (1928 - 1987) : フランス語

\* 由良君美 (1929 - 1990) : 英語・ドイツ語

\* 種村季弘 (1933 - 2004) : ドイツ語

上に挙げたお三方の生年と享年を見ると、それらが単なる数字の羅列ではないことが分かります。要するに、留学をするのがきわめて難しい時代に少年および青年時代を過ごしたという意味です。

もちろん、この三人と同世代で十代から二十代にかけて海外渡航や留学経験がある人もいますが——その前後の世代に比べればずっと少ない気がします——、海外へ渡航すること自体が不可能に近い国内および世界情勢下の時代を生きたことは事実であると思われる。

\*

次に「辺境」に身を置いた人物を生年順に挙げてみます。あくまでも私個人の興味に基づいたリストで、各人が深くかかわった言葉と海外渡航および留学経験の有無に焦点をあてています。

リストの作成のために、各人物についてのウィキペディアの解説を参照しました。私には語るような知識も蘊蓄もないので、詳しい経歴などをお知りになりたい方は、ウィキペディアでご検索願います。

\*

\* 最澄 (766/767 - 822) : 中国語、遣唐使。

\*空海（774 - 835）：中国語、遣唐使。

\*菅原道真（845 - 903）：中国語、遣唐使。

◆遣唐使（630年から894年）

\*前野良沢（1723 - 1803）：漢文、オランダ語。

\*杉田玄白（1733 - 1817）：漢文、オランダ語。

\*フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト（1796 - 1866）：ドイツ語、オランダ語。  
お雇い外国人。

\*ジェームス・カーティス・ヘボン（1815 - 1911）：英語、宣教医、宣教師。

\*ウィリアム・スミス・クラーク（1826 - 1886）：英語、お雇い外国人。

\*ジョン万次郎/中浜万次郎（1827 - 1898）：捕鯨船員、英語、アメリカ人家庭で養子、  
アメリカで学校教育、帰国後欧州へ派遣。

\*西周（1829 - 1897）：漢文、オランダ語、ドイツ語、留学。

\*福澤諭吉（1835 - 1901）：漢文、オランダ語、英語、万延元年遣米使節。

\*新島襄（1843 - 1890）：漢文、英語、江戸時代の1864年に密出国して米国に渡り、米  
国訪問中の岩倉使節団と会い参加する。

\*森有礼（1847 - 1889）：漢文、英語、薩摩藩第一次英国留学生。

\*ラフカディオ・ハーン/小泉八雲（1850 - 1904）：英語、フランス語。お雇い外国人。

\*アーネスト・フェノロサ（1853 - 1908）：英語、お雇い外国人。

\*坪内逍遙（1859 - 1935）：漢文、英語。

\*内村鑑三 (1861 - 1930) : 英語、札幌農学校、1884年に私費でアメリカに渡る。

\*森鷗外 (1862 - 1922) : 漢文、オランダ語、ドイツ語、1884年陸軍省派遣留学生。

\*新渡戸稲造 (1862 - 1933) : 英語、ドイツ語。札幌農学校、米国へ私費留学、官費でドイツへ留学。

\*岡倉天心 (1863 - 1913) : 漢文、英語、アーネスト・フェノロサの助手、宮内省より清国出張を命じられる。インド訪遊。ボストン美術館勤務。

\*二葉亭四迷 (1864 - 1909) : 漢文、フランス語、ロシア語。ロシア滞在。

\*津田梅子 (1864 - 1929) : 英語。1871年、父親が女子留学生に梅子を応募させ岩倉使節団に随行して渡米 (5人のうち最年少の満6歳)、米国で教育を受け、1882年に帰国。1889年に再び渡米。

\*夏目漱石 (1867 - 1916) : 漢文、英語。1900年文部省より英国留学を命じられる。

\*南方熊楠 (1867 - 1941) : 漢文、フランス語、イタリア語、ドイツ語、ラテン語、英語、スペイン語。私費で渡米、渡欧。

#### ◆明治時代 (1868年から1912年)

\*上田敏 (1874 - 1916) : 漢文、英語、東京帝国大学英文科、講師小泉八雲からその才質を絶賛され、小泉の後任となる。1908年欧州へ留学。

\*有島武郎 (1878 - 1923) : 父の教育方針により米国人家庭で生活、英語、札幌農学校、1903年に渡米。

\*片山広子 (1878 - 1957) : 英語、東洋英和女学校卒。松村みね子名義でアイルランド文学を中心に翻訳。

03/17 定規としての尺貫  
\*永井荷風 (1879 - 1959) : 英語、フランス語。1901 年暁星中学の夜学でフランス語を習い始め、1903 年父の意向で実業を学ぶために渡米。1907 年から 1908 年にかけてフランスに 10 か月滞在。

\*アーサー・ウェイリー (1889 - 1966) : 日本語、中国語。パブリックスクールを経てケンブリッジ大学で古典学専攻。日本語と古典中国語を独学で習得する。東アジアの古典語に通じていたが、現代日本語は操れなかった。来日もしていない。

\*日夏耿之介 (1890 - 1971) : 漢文、英語。フランス、イタリア、イギリス、アイルランドの文学の紹介と翻訳などをおこなう。

\*堀口大樹 (1892 - 1981) : フランス語。外交官の長男。1911 年父の任地メキシコに。父の後妻がベルギー人で、家庭の通用語がフランス語。父の任地に従い、ベルギー、スペイン、スイス、パリ、ブラジル、ルーマニアと、青春期を日本と海外の間を往復して過ごす。

\*村岡花子 (1893 - 1968) : 英語、10 歳で東洋英和女学校に給費生として編入学、そこでカナダ人宣教師から英語を学ぶ。

\*西脇順三郎 (1894 - 1982) : 英語、ラテン語、フランス語。1900 年に小学校に入学し姉からナショナル・リーダーズを習う。1922 年渡英。オックスフォード大学。

\*由良哲次 (1897 - 1979) : ドイツ語、留学。エルンスト・カッシーラーのもとで博士論文を完成。

\*呉茂一 (1897 - 1977) : 英語、古典ギリシャ語、ラテン語。1926 年ヨーロッパ留学して古代ギリシア文学・ラテン文学を修める。

\*ロベルト・シンチンゲル/Robert Schinzinger (1898 - 1988) : ドイツ語。エルンスト・カッシーラーの下で博士号を取得。1923 年来日。東京大学でドイツ語とドイツ文学を教える。1946 年から 1974 年まで学習院大学教授。

※渡辺一夫（1901 - 1975）：暁星中学、フランス語。1931年から1933年、文部省研究員としてフランスへ留学。

※小林秀雄（1902 - 1983）：フランス語。東京帝国大学文学部仏蘭西文学科。

※平井呈一（1902 - 1976）：英語。永井荷風と佐藤春夫に師事。

※田中美知太郎（1902 - 1985）：ギリシャ語、ラテン語。

※久生十蘭（1902 - 1957）：フランス語。1929年から1933年までフランスのパリに遊学。

※河盛好蔵（1902 - 2000）：フランス語。京都帝国大学文学部仏文科。1928年、学校騒動で関西大学を辞職して渡仏しソルボンヌ大学に学ぶ。1930年に帰国。

※神西清（1903 - 1957）：フランス語、ロシア語。東京外国語学校露西亜語学科。

※吉川幸次郎（1904 - 1980）：中国語。1920年第三高等学校文科甲類へ進み、現代中国語を学び、1923年大学進学の前年に中国江南を旅する。京都帝国大学文学部文学科で考証学・中国語学・古典中国文学を学ぶ。1926年、卒業論文を漢文で書き大学院に進み唐詩を研究。

※高津春繁（1908 - 1973）：ギリシャ語、ラテン語。1930年から1934年、オックスフォード大学でギリシア語とサンスクリット語の比較言語学を研究。

※森有正（1911 - 1976）：フランス語。6歳からフランス人教師のもとでフランス語、後にラテン語を学ぶ。暁星小学校・暁星中学校。1948年東京大学文学部仏文科助教授に就任。第二次世界大戦後海外留学が再開され、その第一陣として1950年フランスに留学。パリに留まり1952年にパリ大学東洋語学校で日本語と日本文化を教える。

◆大正時代（1912年から1926年）

＊吉田健一（1912 - 1977）：英語。1919年外交官だった父吉田茂の任地パリ、1920年ロンドンに赴く。1930年ケンブリッジ大学入学。1931年退学、帰国。アテネ・フランセへ入り、フランス語、ギリシャ語、ラテン語を習得。

＊福田恆存（1912 - 1994）：英語。

＊高橋義孝（1913 - 1995）：ドイツ語。1937年フンボルト財団給費生としてベルリン大学へ留学。1938年、ケルン大学へ移りドイツ文学を学ぶ。

＊神谷美恵子（1914 - 1979）：フランス語、ラテン語、イタリア語、ドイツ語、古典ギリシャ語。

※私は神谷美恵子氏を心から尊敬しているのですが、その生い立ちと経歴については、ぜひ以下のウィキペディアの解説をお読みください。あれだけたくさん素晴らしいお仕事をなさった神谷氏が65歳で亡くなったことが信じられません。もっと長生きをしていただきたかったと悔やまれてなりません。

神谷美恵子 - Wikipedia

[ja.wikipedia.org](http://ja.wikipedia.org)

＊朝吹登水子（1917 - 2005）：フランス語。女子学習院を中退後、1936年フランスに渡り、ブッフエモン女学校、パリ大学ソルボンヌに学んで1939年帰国。

＊堀田善衛（1918 - 1998）：フランス語、英語。1945年上海で敗戦を迎える。1947年12月まで留用生活。

＊福永武彦（1918 - 1979）：フランス語、英語。1938年東大文学部仏文科に入学し1941年卒業。1961年学習院大学教授。

＊エドワード・G・サイデンステッカー（1921 - 2007）：日本語。海軍日本語学校で日本語を学ぶ。1947年に国務省外交局へ入り、イエール大学とハーヴァード大学に出向して日本語の訓練を重ねる。1950年に退官し、5年間東京大学に籍を置いて日本文学を勉強する。

＊ドナルド・キーン（1922 - 2019）：日本語。1941年アメリカ海軍の日本語学校に入学し日本語教育の訓練を積んだのち太平洋戦線で日本語の通訳官を務める。復員後コロンビア大学、ハーヴァード大学。

＊竹内実（1923 - 2013）：中国語。中国山東省生まれ。日本へ帰国後、二松學舎専門学校在学中に学徒出陣を経験。第二次世界大戦後、京都大学文学部中国語学文学科、東京大学大学院修士課程修了。

＊遠藤周作（1923 - 1996）：フランス語。1941年上智大学予科入学、1942年同学中退。慶應義塾大学文学部仏文科に入学。慶大卒業後は、1950年にフランスのリヨンへ留学。

＊平野敬一（1924 - 2007）：英語。米国サクラメント生まれ。東大英文科卒、1953年より東大教養学部勤務、のち教授。

#### ◆昭和時代（1926年から1989年）

＊粟津則雄（1927 - ）：フランス語。

＊澁澤龍彦（1928 - 1987）：フランス語。1950年、2年の浪人生活を経て東京大学文学部に入学。1970年、初めての欧州旅行に出たのをきっかけに、1970年代から1980年代にかけて何度か海外旅行。

＊出口裕弘（1928 - 2015）：フランス語。1962年東京経由でパリ大学文学部に私費留学。1963年帰国。1977年から1978年まで、ソルボンヌ大学に国費留学。

＊由良君美（1929 - 1990）：英語・ドイツ語。1949年学習院大学文政学部哲学科に入学。1952年に卒業し学習院大学英文学科に学士入学。1954年に英文学科を卒業し、慶應義塾大学大学院に進学し、教授だった西脇順三郎の指導でコールリッジを専攻。1963年、慶應義塾大学経済学部助教授に就任。1965年、高橋康也の推薦で東京大学教養学部英語科の助教授。英文科等で教えることはなかったが、教養課程の学生を対象とする一般教養ゼミの由良ゼミを担当。1976年に教授。

※久保正彰（1930 - ）：18歳で日本の高校を中退し、単身アメリカに渡る。1953年、ハーバード大学卒業（古典語学・古代インド語学専攻）。呉茂一に師事。

※岩田宏・小笠原豊樹（1932 - 2014）：ロシア語、英語、フランス語。東京外国語大学ロシア語学科中退。

※阿部良雄（1932 - 2007）：フランス語。1958年フランス政府招聘留学生として高等師範学校（エコール・ノルマル・シュペリユール）に学び、パリのCNRS（国立科学研究センター）研究員、東洋語学校講師として長くパリに滞在。1966年再びフランスに渡り1970年に帰国。

※高橋康也（1932 - 2002）：英語。1953年東京大学文学部英文科卒、58年同大学院博士課程満期退学。1981年カナダ・トロント大学客員教授、1986年ケンブリッジ大学客員フェローを歴任。

※種村季弘（1933 - 2004）：ドイツ語。1953年、東京大学文学部美学美術史科進学。1954年、東京大学文学部独文科に転科。1977年、旧西ドイツのヴォルプスヴェーデに滞在。

※蓮實重彦（1936 - ）：フランス語。東京大学文学部仏語仏文科を卒業後、同大学院。1962年にフランス政府給費留学生として留学し、1965年にパリ大学大学院で博士号を取得。同年、帰国。

※古井由吉（1937 - 2020）：ドイツ語。1956年4月、東京大学文科二類入学。同文学部独文科卒。同大学院人文科学研究科独語独文学専攻修士課程修了。

※池内紀（1940 - 2019）：ドイツ語。東京外国語大学外国語学部卒業、1965年東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了。1967年にオーストリア政府奨学金を得てウィーンに留学。

◆太平洋戦争（1941年から1945年）

＊

壮観ですね。ため息が出ます。リストを作るのも大変でしたが、今こうして眺めていると目まいが起きそうな気配を感じます。

リストの作成中に各人物の解説に目を通したのですが、いろいろなイメージや言葉の断片の洪水に襲われそうになりました。

しきりに頭に浮かんだのは、中学生時代に読んだヘルマン・ヘッセの『車輪の下に』なのです。神学校に進学するため、そして進学後も、主人公のハンスが複数の古典語（ラテン語、ギリシア語、ヘブライ語）を勉強する（活用の暗記・文章の暗唱・翻訳・読解・作文）のですが、それと上のリストにある人物たちが重なるのです。

さらに漢文の素読に励む日本の着物を着た少年たちの姿も浮かびました。希望に満ちた表情もあれば、眠気を堪えた苦しげな顔もあります。見たこともないのです。

このリストにまともに付き合ったら寝込みそうな予感がするのでいったん保留し、記事で扱うのは後日にさせていただきます。

結局、上のリストは今後の記事を書くためのメモとなりました。

### 言葉は外と内から辺境へとやって来る

澁澤龍彦と種村季弘と由良君美の三人に話を戻します。

三人はフランス、ドイツ、英米と日本とのあいだに身を置いて、学び、研究をし、翻訳もし、執筆活動をしました。対象とする国から遠く離れた場所、文化と文化の境目という意味での「辺境」に身を置いた人物と言えるでしょう。

何しろ、ヨーロッパから見れば日本は極東（the Far East）にある小さな島国なのです。上で述べたのとは、ずれた意味の辺境なのです。縁や端っこであることには変わりませんが。

＊

普通テリトリーというと、人の集団が作る縄張りを意味しますが、個人としての人間にもテリトリー、つまり外、内、辺境があるのではないのでしょうか。個人のプライベートなスペースというのではなく、人の身体と意識が一つの「内」という場であるというイメージです。

この記事では、共同体のレベルと個人のレベルのテリトリーを重ね合わせたり、両者の間を行き来しながら、外、内、辺境について考えてみようと思います。

(拙文「言葉は内から来るもの」より引用)

＊

日本語であれ、英語であれ、中国語であれ、漢文であれ、言葉というものが、ざらりとした違和感に満ちたものに感じられませんか。つまり、言葉は借り物なのです。個人レベルでも、国や地域や民族レベルでも、です。

言葉は自分の中にあるのではなく、生まれた時に、既にあった。しかも、自分の外にあったものなのです。それを「真似る・学ぶ」という形で借りて内に入れて身につけたのです。

＊

ところで、対応するものを欠いた（生活空間である身の回りに、対応するものが見当たらない）言語を習得するのは、ある意味空疎であり味気ないものでしょうね。遠く離れていて、風景や、食べ物や、季節感や、生えている草木や花が異なる国や地域の言語。

(中略)

このように対応物を欠いた言語との接触とは、結局異文化との触れ合いであり摩擦であり、場合によると衝突なのです。言葉と文化と土地は切り離せません。でも、切り離されることはよくあるのです。

たぶん、人が移動する生き物だからでしょう。途方もない距離を、です。いい意味でも、悪い意味でも、です。

(拙文「もう一つの言葉」より引用)

＊

澁澤と種村と由良の三人にとって、その活動の基礎となるのは言葉でした。あくまでも想像になりますが、フランス語、ドイツ語、英語を初めて学んだ時には、きっといつかその言葉が話される土地へ行くことを夢見ていたに違いありません。若く希望に満ちあふれていたはずで。

何しろ、日本という「内」において外国語とは、周りに一対一で対応するものがない場（この場を「辺境」と言ってもいいかもしれません）で、「外」から借りて身につけるという一種の曲芸をしなければ学べないものなのです。もどかしい体験とも言えます。

(※体系化された「曲芸」を確立しているのが、フランス語を母語としない人たちのためのフランス語教育だと思います。これは海外におけるフランス語教育にも見られます。⇒ フランスの言語政策 )

たとえば、英語の mountain とドイツ語の Berg とフランス語の montagne と、日本語の「山」とは、ずれています。イコールの関係ではなく、日本には五感で「体験する」こともできません。

身も蓋もない話ですが、外国語とは何らかのトリックや錯覚や事実の意識的な忘却なしでは学べない、外から来るものなのです。

本当はほぼほぼでテキトーだけど、細かいことを言っても身につかないから、ま、いっか、気にしない気にしない——というわけです。実のところ、それでいいのです。さもないければ、語学なんてやってられません。

澁澤と種村と由良の三人は、結果的に「よそ」の土地で長期に学ぶ、つまり留学する

ことはなかったにせよ、もっぱら「うち」で書物を読むという形で研究をし、素晴らしい業績をあげたことは事実です。そして、そうした成果が素晴らしい日本語で著わされた書物という形で結実したことを忘れるわけにはいきません。

＊

そもそも、文字の出現以後の人類の歴史とは、そうしたものではなかったか。そんな気がします。すべての人が「よそ者」の言葉を、「よそ」へ行って、そこで学んだり身につけたのではわけではないのです。

写本、翻訳、訳読、素読、読み下し、レ点、暗唱、オーディオリングメソッド、ダイレクトメソッド、全身反応教授法、反復練習、通訳、要約、翻案、意識、直訳、大意、見よう見まね、睡眠学習、催眠学習——。手品というか方法には事欠きません。その手法も次第に洗練されていったはずです。

ずれを解消するにはいかにいまでも、さまざまな妥協と試行錯誤を重ねて、人と人はかろうじてつながってきたということでしょうか。異文化間での「完璧な」意思疎通や伝達など幻想なのです。ずれとエラーと遅滞と勘違いは不可避です。これらがもつて、戦争だって起きます。うまくいかないほうが普通かもしれません。

＊

ここで、澁澤と種村と由良とは別の人物に話を変えます。

対応するものを欠いた（生活空間である身の回りに、対応するものが見当たらない）言語を習得する。遠く離れていて、風景や、食べ物や、季節感や、生えている草木や花が異なる国や地域の言語を学ぶ。

こうした体験をしたのちに、ついに「対応するものがある」憧れの国へ行き、そこで学問をすることができた人物のひとりが森有正です。

＊森有正（1911 - 1976）：フランス語。6歳からフランス人教師のもとでフランス語、後にラテン語を学ぶ。暁星小学校・暁星中学校。1948年東京大学文学部仏文科助教授に就任。第二次世界大戦後海外留学が再開され、その第一陣として1950年フランスに留学。

パリに留まり 1952 年にパリ大学東洋語学校で日本語と日本文化を教える。

森有正は、母語ではないフランス語を「対応するものを欠いた」日本でフランス人の教師のもとで学び、母語並みにフランス語に熟達した学者として、初めてフランスを訪ねたのは 39 歳になった年でした。

フランス語がネイティブ並みに読み書きできるだけでは駄目だ。それはむしろ研究者として当り前の前提にすぎない。それ以上のものがなければならない——。そんな意味のことを森有正が何かに書いていた記憶があります。

森は「経験」という言葉をさかんに著書でつかっていましたが、その経験とは頭で覚えただけの抽象ではない、実体験を積みかさねた結果としての「経験」だったと私は理解しています。

抽象的であることではなく具体的であることの大切さを森有正があれだけ強調した背景には、対応するものを欠いた環境でフランス語を学ばなければならなかった苦く長い——長すぎる——過去があったからではないか。私はそのように想像しないではられません。

＊

話を戻します。

澁澤と種村と由良の三人において、日本語での読書体験が、外国文学の研究と理解に役立ったことは間違いないでしょう。内なる言葉で外からの言葉を受けとめたとも言えるでしょう。

これは素晴らしいことではないでしょうか。というか、これしか他に道はなさそうなのです。

日本語と日本の文化という「内」から、そして異郷の言葉と異郷の文化という「外」の両方から、自分という「辺境」に言葉呼び寄せ吸収し、「辺境」にあって創作活動を続けた。三人の生き様をそんなふう想像しています。

そうなのです。人は「辺境」なのです。そしてあらゆる国と地域もまた「辺境」だと言えるでしょう。

＊

別の言い方もできそうです。

外からやって来る言葉と事物、自覚も意識できないブラックボックスのような「内なる言葉」。この外と内が出会う場が、個人としての人であり、国や地域なのではないでしょうか。そうであれば、人は辺境であり、あらゆる国と地域も辺境だと言えるのではないのでしょうか。

辺境は常に揺らぎ移ろう。辺境は、混合という形での創造が常に生起する場である。そんな気がします。

言葉は外と内から辺境へとやって来る。辺境という揺らぎの場へと。

人は辺境から辺境へと移る。人がいるところは常に辺境。

＊

『書物漫遊記』、『食物漫遊記』、『贗物漫遊記』、『書国探検記』、『好物漫遊記』、『遊読記』、『徘徊老人の夏』、『雨の日はソファで散歩』——。

種村季弘の書物のタイトルを見ていると——たとえ種村自身のネーミングではないにしろ——、古今東西の文献を渉獵した種村が書物と事物の間を歩き回る人であったことがうかがわれます。海外に出なくても、あるいは書齋の中にいても、世界中をそして日本中を歩き回り、過去と現在の間を行き来できるのです。

澁澤龍彦のヨーロッパ旅行記のタイトルが『ヨーロッパの乳房』であることは象徴的に感じられます。澁澤が初めてヨーロッパを旅したのは、1970年ですから42歳の時でした。乳房はボードレールの詩から取られたらしいのですが、中年になってようやく憧れの欧州という母親に抱かれた澁澤を想像しないではられません。

『世界悪女物語』、『夢の宇宙誌 コスモグラフィア・ファンタスティカ』、『秘密結社の手帖』、『異端の肖像』、『人形愛序説』、『東西不思議物語』、『幻想博物誌』――。

種村季弘と同様に古今東西の文献を渉猟した澁澤龍彦もまた、書物と事物の間を歩き回る人であったことが分かります。

由良君美の著作で印象に残っているのは、『椿説泰西浪漫派文学談義』、『言語文化のフロンティア』、『メタフィクションと脱構築』です。また、由良がかかわった訳書では、ジョージ・スタイナー著『言語と沈黙』、ジョージ・スタイナー著『脱領域の知性－文学言語革命論集』、コリン・ウィルソン著『至高体験』が忘れられません。

このように澁澤、種村、由良は、フランス文学、ドイツ文学、英文学という枠に収まりきらない、脱領域的な執筆活動をした人物として記憶されるに違いありません。

三人の中で自分が辺境にいることに最も自覚的だったのは由良である気がします。澁澤と種村は、その個性からあっけらかんと脱領域的活動を具現し、由良は脱領域性を戦略とした、という見方が可能かもしれません。

その意味で、由良は辺境にいる人物たちに惹かれたのであり、自分自身で創作するよりも、コーディネートやプロデュースに長けていた（一例を挙げると、ジョージ・スタイナー著『言語と沈黙』に参加した当時新進気鋭だった研究者たちの顔ぶれを見れば明らかでしょう）ような印象を持ちます。

”スタイナーは類のない批評家であると言われる。なるほど、現代批評のさまざまな潮流――新批評、ヌーベル・クリティック、神話原型批評、精神分析的批評、マルキシズム批評等々――の、どれにも彼は入りきらない。これは当然のことだろう。〈あとに〉きた者の自覚を出発点として、現代になお可能なコスモポリタンの在り方をユダヤ人の誇りを原動力として歩もうとするとき、特定のアプローチの枠組、特定の地域アウトルキーへの忠誠は無意味のものにならざるをえない。残るのは、〈あとに〉きた者の自覚の地図を、あらゆるアプローチの枠組、あらゆる地域の文学を駆使して、探求し、描き出すことであろうから。（後略）”

（ジョージ・スタイナー著『言語と沈黙』由良君美他訳・せりか書房所収、由良君美によ

る「批評はアウシュヴィッツのあとに——解説に代えて」より引用)

この由良の言葉にある「<あとに>きた」という、生き残ったユダヤ人であるスタイナーの自覚は、自分が絶対的な「よそ者」であるという意識に近いと思われます。このスタイナーのコスモポリタン性、そして移動する民の末裔という意識に、由良は深い共感を覚えていたに違いありません。

\*由良君美 (1929 - 1990) : 英語・ドイツ語。1949年学習院大学文政学部哲学科に入学。1952年に卒業し学習院大学英文学科に学士入学。1954年に英文学科を卒業し、慶應義塾大学大学院に進学し、教授だった西脇順三郎の指導でコールリッジを専攻。1963年、慶應義塾大学経済学部助教授に就任。1965年、高橋康也の推薦で東京大学教養学部英語科の助教授。英文科等で教えることはなかったが、教養課程の学生を対象とする一般教養ゼミの由良ゼミを担当。1976年に教授。

ウィキペディアの解説に基づいて作成した由良の経歴を見ると、境界にいた人物であることがうかがわれます。縦割りとか蝸壺と言われることの多かった当時の日本の社会では十分に「よそ者」であったと推測できます。

話をスタイナーに戻します。

由良が、ジョージ・スタイナー著『言語と沈黙』の「解説に代えて」で描くスタイナー像は、常に辺境であろうとする姿勢と読めるのではないのでしょうか。

私には、これが単にユダヤ的な意識と自覚であるとは感じられません。どの民族、ひいては個人についても言える属性だと思います。さらに言うなら、ジル・ドゥルーズとフェリックス・ガタリのいうノマドロジーともきわめて近い指向性であり戦略だという気がします。

ノマドロジーとは？ 意味や使い方 - コトバンク

ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典 - ノマドロジーの用語解説 - ノマド (遊牧民) からの造語。ノマディズムともいう

[kotobank.jp](http://kotobank.jp)

脱領土化 (だつりょうどか) とは？ 意味や使い方 - コトバンク

日本大百科全書 (ニッポニカ) - 脱領土化の用語解説 - フランスの哲学者ジル・ドゥルーズ  
と精神科医フェリックス・ガタリが共  
kotobank.jp

## 辺境としての自分

人は辺境から辺境へと移動する生き物ではないでしょうか。世界各地を歩き回った人も、ある土地で生まれ育ち一生を終えた人もです。

人は他の人と触れ合うことなしに生きることはありません。でも、それぞれの人が他人であり他者なのです。

その他者と触れ合うことは、自分を辺境に置くことに他なりません。自分と異なる人、自分と異なる家族（親とはらから）、自分と異なるパートナー、自分と異なる土地、自分と異なる言葉、自分と異なる文化、自分と異なる性格や流儀、自分と異なる身振りや仕草や表情……。

誰もが辺境にある。辺境にあるからこそ、関係が生まれる。

辺境とは自分ではないでしょうか。辺境という自分の中に、外と内が混在している。個人的な思いですが、それだけが体感できる気がします。揺らいでいる限り、それが体感できる気がします。

目を閉じれば、複数、いや多数の声が聞こえてきます。みんな外から来たものなので。内とは言えば、死ぬまで体感できない謎のように思えます。言葉と言えない言葉だからでしょうか。内であるはずなのに。

外から来たものたちだけが、内をあざ笑うように、明晰な風景として脳裏に映し出され、明瞭な声としてうつせみに響くばかりなのです。

## 夢の言葉、言葉の夢

初めての辞書はどんなふうにして作られたのだろう。

最近、よくそんなことを考えます。外国語と母語をつなぐ辞書。たとえば、英和辞典、和英辞典のように。あ、国語辞典を忘れてはなりません。古語辞典や漢和辞典も。

想像するのは、外国語と母語をつなぐ辞書のない環境で、何らかの形で外国語を習得した人（習得しつつある人と言うべきでしょう）が、自分の中にあるその外国語と母語の知識を総動員して、「これはあれだ」「あれはこれとほぼ同じ」「これに似た言葉はないけど、あれで間に合わせようか」「さっき本を読んでいて思いついたけど、あれにはこの訳語をあてよう」なんて具合に、「自分の中にある辞書」（比喻です）を具体化していくというものです。

素人の空想、いや妄想でしかないわけですが、そんなさまを勝手に思い描いていると幸せな気分になります。

かつて翻訳家を志していたころに、変な言い方ですが「英英辞典」を使うようにと盛んに言われたことを思い出します。英文を読んでそれを日本語にするさいに、英和辞典という既成の訳語集にとらわれずに、なるべく自分の語感で訳せというのです。

それでも訳語が浮かばなかったら、英語のネイティブスピーカーが使っている英語の辞典を引いて、それに相当する日本語を探る。専門用語や特殊な用語については、大きな英和辞典とか百科事典で調べる。大切なのはさまざまな分野の本を英語でも日本語でもたくさん読むこと。

確かにそうです。正論だと思います。でも、大変ですよ。

この記事を書くためにウィキペディアの解説を利用しながら、まだ○和辞典も、和○辞典もない時代に勉強し研究にいそしんでいた人たちのことを思いました。そういう人たちは上で述べたような方法を無意識に実践していたのかもしれませんが。

二つの言語、外国語と母語、古い母語と今の母語、漢文と日本語、言葉の中にある言葉、言語の中にある言語——。異なる言葉のあいだに生きる。それは異なる言葉の境をこえた夢の言葉に身を置くような気がします。

夢や夢うつつで何らかの言葉を話したり書いたりする。歳を取ってきたせいかな、不思議な夢を見たり、日中に荒唐無稽で不可思議な夢にふけることがあります、そのさなかに言葉が浮かぶことがあります。

その言葉は、私の場合だと日本語（和語と漢語と方言）であったり英語であったりフランス語であったり、あるいは何語なのか分からなかったりするのですが、そうした夢の中の言葉がひょっとして言葉の夢ではないかと思う瞬間があります。つまり、私が言葉の夢を見ているのではなく、言葉が私の中で夢を見ているのではないかと。

そんなときの私は縁（ふち）にいます。辺境にいるのです。きっと私自身が縁なのでしょう。

あの夢の言葉は、言葉の夢ではないか――。

眠くなってきましたので、しばらく横になります。長い記事をお読みいただき、ありがとうございました。

#言葉 #日本語 #澁澤龍彦 #種村季弘 #由良君美 #高山宏 #森有正# ジョージ・スタイナー #ジル・ドゥルーズ #外国語 #漢文 #翻訳 #留学# 辞書 #英語 #フランス語 #ドイツ語 #辺境

03/18 赤ちゃんのいる空間



＊

赤ちゃんのいる空間

星野廉

2023年3月18日 08:22

誰もが辺境にある。辺境にあるからこそ、関係が生まれる。  
辺境とは自分ではないでしょうか。辺境という自分の中に、外と内が混在している。  
(拙文「辺境としての人間」より)

先日、病院で見て感じたことと考えたことを書きます。

子も孫もない私にとって、総合病院は赤ちゃんを間近で目にすることができる唯一の場所でもあります。病院の待合室や総合ロビーで待機する時間はけっして楽しいものではありませんが、近くに赤ちゃんがいるとそれだけで心と体がやすらぎます。

目次

目と耳で追う

なぞる・なぜる・なでる

まねる、まねぶ、まなぶ

宙を掻く

薄い皮膚だけがデフォルト

ふち、縁、淵

しっくりする、しっくりくる、しっくりいく

赤ちゃんのいる空間

目と耳で追う

私は言葉を広く取って、話し言葉（音声）と書き言葉（文字）だけでなく、視覚言語と呼ばれることもある表情や身振りやしるしも言葉だと受けとめて生活しています。

赤ちゃんを見ていると、声や音や表情や身振りに敏感に反応します。反応するというのは、真似るという意味です。自分でなぞり演じてみて、その結果がどうなるかを見えています。

なぞり演じた自分に何かを返してくれるものと、くれないものを分けて覚えていくようにも見えます。その様子を見ていると、赤ちゃんは「似ている」を目と耳で追っているように見えます。

「異なる」ではなく「似ている」を目と耳で追っている。「異なる」には目を向けない。そんな感じです。

それだけでなく、「似ている」を舌や鼻や肌でも追っているように見えるのです。やたら口に入れるし手を伸ばすし触りたがります。

\*

私にとって知覚で「追う」というのは「なぞる」でもあるのですが、何をなぞっているのかと言えば、それは「似ている」ではないかと思います。

ひょっとして「異なる」は赤ちゃんにとっては「怖い」ではないでしょうか。「怖い」は見えていても、見ないし触れない。そんな知恵がすでにそなわっているように感じられます。

「似ている」「異なる」「怖い」と書き、「似ているもの」「異なるもの」「怖いもの」としないのは、赤ちゃんが気配の中に見えるからです。

まだ名詞的な世界にいないように見えるという意味です。動きと気配だけがある世界。そしておそらく「似ている」だけに目が行く世界。感じるけど感じ分けはしない。

まだ分けて分れていない世界、似ているが漂う世界、その似ているを目と耳で追うこ

とで、世界は次第に分（わ）けて分（わか）れていくのかもしれませんが。

とはいえ、「分れる」は「別れる」ではないと思います。なじんでいくのではないのでしょうか。

＊

私と赤ちゃんのあいだには、話し言葉（音声）と書き言葉（文字）はなく、音と声と表情と身振りがあることに気づきます。

### なぞる・なぜる・なでる

「目で追う」「視線でなぞる」に話を絞ります。

あれとあれは似ている。これとこれは似ている。あれとこれは似ている。

話し言葉をまだ覚えていない赤ちゃんは、そんな感じで「似ている」を目で追い、同時に目でなぞっているように見えてなりません。

そのうち、あっちがこっちに似ている、こっちがあっちに似ているというふうに、世界になじんでいく気がします。

あっちとは世界、こっちとは自分なのですが、赤ちゃんはそれさえ分けていないように見えます。

＊

「なぞる」は「なでる・なぜる」に近いのではないのでしょうか。赤ちゃんが、離れたものを目で追い、視線でなでる感じです。

「離れている」——これは赤ちゃんの置かれた状況です。世界は必ずしも近くにはないので、手や足や舌でなぜるわけにはいかないのです。

これはおとなになっても同じではないでしょうか。人は離れたものを知覚を動員して「なぞる・なぜる・なでる」しかないのです。

そうやって、遠くを近くする、遠くを知覚するのです。

世界とのあいだには隔たりがあり、それはこちらが働き掛けないかぎり解消しないという意味です。ただし、働き掛けて解消するという保証はない気がします。赤ちゃんにも、おとなにとってもです。

世界に働き掛けてうまくいくかどうかは、一か八かの賭けなのです。

たとえば、お乳が欲しくて「おぎゃー」と泣いて世界に働き掛けても、それが聞き届けられるとは限りません。

後で述べますが、おとなも赤ちゃんも、偶然性の支配する賭けの世界に投げこまれていると言えます。

### まねる、まねぶ、まなぶ

相手や対象とのあいだの隔たりを解消しようとするとき、人は発したり放つのではないのでしょうか。

離れる、離す、放す、放つ、発する、話す。

こちらから、離れたものに向かって放つ、発する。これが「なぞる」と同時に起こっている「まねる・真似る」だと思います。こちらが真似て、それに気づいて何かを返してくれる存在に気づくのです。

気づくに気づく。気づかれていることに気づく。気づくと気づかれるは一人ではできません。相手がいる、双方向的な関係として立ちあらわれます。

この「気づき気づかれる」が「まねる」をうながしているように見えます。「まねる」もまた相手がいて起きる身振りです。しかも、その相手とは「離れている」必要があるのです。

それが、表情や身振りの「まねる」であり、「なねぶ・学ぶ」であり「まなぶ・学ぶ」なのかもしれません。

## 宙を掻く

表情や身振りだけではありません。赤ちゃんは、音や声をなぞり、まねて、まnanでいきます。

「まねる」という動作が、離れた相手とのあいだを埋める動作でもあるように私には思えます。離れた相手に手を伸ばし、近づこうとするわけです。

とりわけ、人間の赤ちゃんは世界とのあいだに隔たりがあります。離れているのです。

馬や犬や猫の赤ちゃんは、生まれて間もなく立ったり、這い回ったり、歩いたりもしますが、人の赤ちゃんはずっと寝ています。

自立、つまり自分の足で立ち、歩きまわるまでには、他の生きものたちに比べて時間がかかるのです。比較するとかなり長い時間を要しているようです。

寝たままの状態の世界を仰ぎ、周りを見まわし、自分から手を伸ばしたり、親や周りの人を呼んで、手を差し伸べてもらわないかぎり、世界とかかわることはかなわないと言えるでしょう。

「よるべない・寄る辺ない・寄る方ない」ですね。人間の赤ちゃんには、まさに寄り掛かるものがないのです。

＊

仰向けに寝かされている赤ちゃんは、よく手と足で宙を搔くような仕草をします。機嫌が悪かったりすると、何かを訴えているのでしょうか、足搔く、藻搔くといった動作もします。

宙を搔き、空（くう）を搔き、寄っ掛かりや取っ掛かりを求めているかのようです。

立つことも歩くこともできない人間の赤ちゃんは無防備で危険にさらされています。病気、事故、事件、犯罪、虐待、放置（ネグレクト）、飢え、渇き、戦争——こうした危機につねにさらされた赤ちゃんが世界中にたくさんいると聞きます。

過酷で残酷な偶然性の世界に投げ込まれているようなものです。その中で、赤ちゃんは賭けを余儀なくされていると言えは言いすぎでしょうか。

一か八か、生か死かの賭けの中で、藻搔き、足搔き、呼び掛け、気を懸ける。

搔き掛け懸け賭ける。これはおとなでも同じでしょう。

### 薄い皮膚だけがデフォルト

ときどき見る夢に、体育館みたいなだだっ広い屋内で、ニホンザルと取っ組み合いの喧嘩をしているという場面があります。私は素っ裸なのです。口論をするというバージョンもあります。

いずれにせよ、私が必ず負けます。なにしろ、向こうは毛皮がデフォルトなのです。こっちは薄い皮膚だけ。

仮に素っ裸で樹海に置いてきぼりにされたら、私はきっと傷だらけになるでしょうし、夜間に凍え死ぬでしょう。実のある木に登れるニホンザルは生きのびるにちがいありません。

病気、事故、事件、犯罪、虐待、放置（ネグレクト）、飢え、渴き、戦争——人間のおとなもまた、寄る辺ない存在だと思えます。

過酷で残酷な偶然性の世界に投げこまれた人間は、たった一人では、そしてデフォルトのままでは、賭けに負ける気がします。

人間は一人では大したことができないし、裸——生まれたままの姿——、そして丸腰ではきわめて脆弱なのです。

## ふち、縁、淵

話を戻します。

よるべない、寄る辺ない、寄る方ない。人間の赤ちゃんには、まさに寄り掛かるものがないのです。

ふち、へり、きわ、はしっこ、すみっこにいるとも言えるでしょう。世界のふち、人間の世界のふち。

でも、縁（ふち）は縁（えん）なのです。どういうことかと言うと、赤ちゃんは縁（ふち）に身を置くことで、縁（えん）を呼び寄せているという意味です。

縁（えん）とは、他者との出会いに他なりません。仮に赤ちゃんがど真ん中にいるとするなら、他者との出会いはないでしょう。縁（ふち）にいるから、外や周りと触れあえるのです。

\*

一方で縁（ふち）は淵（ふち）でもあります。

崖っぶちは崖っ縁と書くらしいのですが、淵は川とか沼の深いところのようです。縁、

つまり端っこにいるくらいならいいですが、崖っ縁となると恐ろしいです。

淵だと深淵という言葉をおもいだします。辞書には「絶望の淵に沈む」（広辞苑）や「絶望の淵に突き落とされる」（デジタル大辞泉）なんて比喩的な用法の例文があって、絶望の淵に沈みそうになります。

＊

赤ちゃんの話でしたね。

よるべない、寄る辺ない、寄る方ない人間の赤ちゃんには、まさに寄り掛かるものがないのです。

でも、だいじょうぶ。

「まねる」「まねられる」ことによって、相手と自分とのあいだに架け橋をもうければいいのです。端っこにいても、橋を架ければいいのです。

端は橋なのです。両者は同源で、二つの端っこをつなぐとか渡すというイメージで橋らしいのです。

箸もたぶん同源ではないでしょうか。二つの端っこをつなぐ感じがしませんか。「食べる」と「食べられる」という出会いのも何かのご縁ですし。

いや、冗談ではなく、衣食住のうちの食は出会いに満ちています。食事のときには人と人が会し、食材と食材が会し、食べる人と食べられる物が会します。

そもそも料理は伝わってきたという意味で、引用であり複製であり変奏なのです。前につくった人といまつくった人、過去と現在、遠い場所とここ——こうしたものの出会う場が料理ではないでしょうか。

＊

話を戻しますと、「まねる」と「まねられる」によって、赤ちゃんは相手と自分とのあいだに架け橋をもうければいいのです。

その橋が、広い意味での言葉ではないでしょうか。

赤ちゃんの場合には文字は無理ですから、音、声、表情、身振りということになります。これが言葉なのです。広い意味での言葉です。

言葉の根っこには必ず「まねる・なぞる・なでる」があります。

### じっくりする、じっくりくる、じっくりいく

以上述べたようなことは自然に起きているのだらうと私は想像しています。「自然に」を本能的というふうに置き換えててもいいでしょう。

自然に、本能的に、ですから、文字のように、苦勞して学ぶものではない。音、声、表情、身振りと、文字とのあいだにあるこの違いは、決定的に大切だと私は思います。文字は異物であるときえ、私は感じています。

だから、音、声、表情、身振りは、じっくりする、じっくりくる、じっくりいくのではないのでしょうか。不自然ではないという意味です。

文字のように、不自然ではないのです。異物のようにつかえない、つかえない。

だから、赤ちゃんはつかっているわけです。すんなりと、つかえずにつかっている。

### 赤ちゃんのいる空間

赤ちゃんが近くにいると、まったりして癒やされるだけでなく、わくわくもします。

赤ちゃんを見ていると私は、広い意味での言葉、つまり、音、声、文字、表情、身振り、しるしについて思いをめぐらさずにはいられないからです。私の唯一の趣味は言葉のありようの観察なのです。

赤ちゃんを見ながら、意味と無意味とか、意味の発生とか、偶然と必然なんてたいそうな話に思いがおよびそうになる場合もあります。

＊

まとめます。

寄る辺ない存在である赤ちゃんは、ふちにいるように私には思えてなりません。ふち、きわ、へり、すみっこです。

世界のふち、人間のふち。世界にはまだ手が届かない。人間としてまだ十分な動きができるわけではない。

だから、可愛いのでしょうか。放っておけない。おとなに可愛いと思わせる、顔の形と体つき、声、表情（とくに目の表情です）、仕草、身振り、動作——こうしたものを総動員して、世界とおとなに訴えかけているかのようです。

寝たままの状態の世界をなぞってなでる。ほかの人間たちをまねてまなぶ。

世界になりたい。自分も世界に加わりたい。赤ちゃんを見ていると、そんなふうに訴えているように見えてなりません。

＊

子もなく孫もない老人である私ですが、赤ちゃんの眼差しの世界に加わりたいと思うことがあります。赤ちゃんの目で世界を見てみたいという気持ちなののでしょうか。老人の赤ちゃん返りかも。

どちらかというと強面で人相もいいほうではない私ですが、赤ちゃんはそんな私にほほ笑みかけてくれます。

赤ちゃんがじっとこちらを見つめているとします。来るぞ来るぞという気配を感じながら待っていると、にこっと笑うのです。

補聴器をした耳には高い音や声が聞こえないのですが、声も掛けてくれているのかもしれません。

私もいまは人生のふちにいます。

ふちとふち、きわときわ、隅っこと隅っことで、笑みを交わせる。おとな、しかもぼーっとしてきた老人の勝手な思いでしかありませんが、私はそんな瞬間に幸せを感じます。

葉待ち めとめを合わせ 橋かかる

# 赤ちゃん # 言葉 # 病院 # 視線 # 表情 # 身振り # 音 # 声 # 文字 # 日本語 # 境界  
# 知覚



03/19 張り裂ける芽、腫れる粘膜、晴れる空



＊

張り裂ける芽、腫れる粘膜、晴れる空

星野廉

2023年3月19日 08:09

目次

筋というつながり

張る芽と腫れる血管と春がシンクロする

血液と水分がみなぎる春

掛けることで言葉と世界がシンクロする

ある一点で一瞬だけつながる、まぼろし

筋というつながり

何かに運ばれていく感じを筋と、とりあえず呼んでみましょう。

そうした筋がシンクロしているのではないか。あちこちに同時に、そして並行して起きているのではないか。シンクロとは筋にそっての動きなのではないか。

今回は、そんな話をします。

＊

世界や言葉には、それぞれになんらかの筋のようなものがある気がします。

筋というのはつながりみたいなものです。

AといえばB、BといえばC、CといえばD、Dといえば.....。

こんな具合に、つながっていく、続いていく感じ。動きなのです。移動のほうがいいかもしれません。

うごき、うつっていく。「うつる」は「移る」だけでなく、映る、写る、遷る、伝染るも含まれます。呼応とか反響とか転写とか、共振や共鳴や共感や交感や交歓や交換も含む感じ。

いま言葉を転がしましたが、まさにそれが筋です。何かに運ばれていく感じで言葉が浮かんできます。

これはたまたまの動きであって、これしかないというものではないでしょう。

人によっても異なるし、同じ人でもその時々気分や環境によって移り変わるはずです。

いずれにせよ、つながる、つづく、うつろう、人はその流れに運ばれていくだけ。それが私の考えている筋です。

＊

この筋とは、「AだからB、BだからC、CだからD……」という論理っぽいものではなく、また「Aして、次にBして、それでもってCして、それからDして……」という物語っぽいものでもありません。

あくまでも、「Aといえば、Bといえば、Cといえば、Dといえば……」という流れを想定しています。

AとBとCとDは、並列や並置であり、どれもフラットな関係にあって、上下関係や因果関係や時系列をなしてはいないのです。

たとえば、このつながりとはレトリックのことではないでしょうか。

**張る芽と腫れる血管と春がシンクロする**

春夏秋冬と煙と風と虹に共通する点は何でしょう？

立つことです。

立春、立夏……。なぜ立つのか、あるいは、どうやって立てるのかは調べれば分かる  
かもしれません。

私は想像を楽しむほうを選びます。わくわくしたいからです。横着なのでしょうね。

＊

春は「張る」だと勝手に思っています。たしか、そういう説もあるみたいですが知り  
ません。忘れたのかもしれませんが。

いまここにあるもので済ませます。寝入り際や死に際と同じ心境で、ああでもないこ  
うでもない、ああだこうだを楽しみたいのです。

寝際に辞書を引いたり検索するのは面倒です。ましてや死に際での辞書やスマホの使  
用は無理でしょう。際にはいろいろなものが訪れると信じています。それで十分な  
です。

際に来てくれるものがいちばん信頼できるように思います。たぶん裏切らないだろう  
という意味です。

＊

春になると、いろいろなものが張ります。木々や草花の芽やつぼみが膨らむのは張っ  
ているからでしょう。

山の奥でも雪解けが進み、川面が膨らんで見えます。道を歩く人たちの頬も上気した  
かのように見えます。細い血管が膨らんでいるようです。

山川草木、そして人が膨らみ張って見えます。膨張するのです。

\*

私は花粉症なのですが、症状が出るたびに、鼻の奥や喉や気管支の粘膜が腫れているような気がしてなりません。

細かい血管に血液が送りこまれている部分が腫れているのでしょうか。腫れるのも膨張です。

身のまわりも、身のうちも、張っている、それが春。水や血液で張っているイメージです。

やっぱり、春は張るだどつくづく思います。

春、張る。世界と体が同時に並行して張る。世界と身体がシンクロする。

張る芽と腫れる血管と春がシンクロする。世界と身体と言葉がシンクロする。

張り裂ける芽、腫れる粘膜、晴れる空。

言葉のレトリックと世界のレトリックを強引に重ねました。

### 血液と水分がみなぎる春

春は始まりの季節です。とくに日本はそうです。会社も学校もお役所も春に始まります。新年度が春なのです。

「たつ」に「発つ」や「起つ」や「勃つ」があるのに気づいて、はっとします。

東京を発つ、旅立つ、風が立つ、虹が立つ、席を立つ、鳥が飛び立つ、民衆が立（起）ちあがる、住民運動に起（立）つ。

どれも、始まるわけです。ある動きが起きるのです。さっと、がばっと、あるいは、むっくりと立つ。

＊

春に張って始まる。

水分や血液がみなぎって、何かが始まる感じがします。眠っていた生命が息を吹き返すイメージでしょうか。

生命を感じさせる「張る」は、生殖や性ともつながっている気がします。

前立腺肥大、前立腺がん。男性にとっては身近な病気です。つらいです。行動が制限されます。気持ちも萎縮します。萎えるのです。立つの反対は座るよりも萎えるかもしれません。

回春という言い方がありますが、春には人生における春という意味あいもあるようです。

＊

発情期がはっきりしないというか、常時発情しているかに見えるヒトも、春にはひときわ、うずうずするのかもしれないね。

常時情事だなんて、この星ではヒトだけではないでしょうか。道理で、常軌を逸した行動が多い気がします。

しかもエスカレートしていませんか。しょちゅうむらむらしているために、正常な判断ができない心理状態にあるようです。

世界はむらむらに満ちていませんか。ヒトの世界です。そんな映像や言葉や音声に満ちています。春だけとか、ある一定の期間ではありません。

それなのに恋せ恋せ恋だ恋だとさらに煽っている。どう見ても、世界に足りないのは愛だと思います。

## 掛けることで言葉と世界がシンクロする

春に張って始まる。

このように言葉に端を発するかたちで、まわりの世界を見たり思いえがくと、動物も植物も、そして人間も春には張り切るようすがうかがわれます。

言葉のレトリックと世界のレトリックが重なりシンクロしているようです。

こじつけっぼいですね。

というか、こじつけや掛け詞や駄洒落や比喩は、言葉と世界をレトリックつまり綾でつなぐという点では同じ仕組みだと思います。

言葉同士をからめることで、言葉と言葉が指すものをからめ、言葉と世界をからめ、ひいては世界と世界をからめる。これが可能なのは、言葉も世界も多層的で多元的であるからでしょう。

\*

具体的には、言葉の音や形や意味やイメージの類似という一点で掛けることで、つなげるのです。

音の類似の場合だと、たとえば「ふち・縁・淵」です。同源だと多義語、語源が同じではないときには同音異義語と区別しますが、言葉を掛けるさいにはそうした区別は意味をなしません。

形の類似だと、たとえば「縁（えん・ふち）」と「緑（みどり）」をつなげることができそうです。

意味の類似だと、たとえば「ふち・縁、きわ・際、へり・縁、はし・端、すみ・隅」がつながります。

イメージの類似は、イメージが意味と違って個人的なものなので、いちがいには言えません。たとえば「陰、隠、淫」に私は音だけでなくイメージの韻を感じます。「渦」と「禍」だと、音も形もイメージも韻を踏んでいる気がします。イメージは「スパイラル・悪循環・地獄」でしょうか。

### ある一点で一瞬だけつながる、まぼろし

このように、言葉の音、形、意味、イメージの類似という一点だけ（上で述べたように複数の点の場合もあります）で、懸け離れたもの同士を一瞬つなげることができます。

それが比喩であり掛け詞であり駄洒落であると言えます。

ちなみに、駄洒落は掛け詞の別称であり蔑称でもあるわけです。いまのは音の類似でつないだ例です。

多層的で多元的なもの同士が、ある一点で一瞬だけつながる世界——はかない美しさを私は感じます。まぼろしなのかもしれません。きっとそうです。

＊

レトリックの基本的な身振りが「からめる」であるとするなら、レトリックの根っこには同期があるように見えます。

上述の「AといえばB、BといえばC、CといえばD、Dといえば……」というつながりであり、ながれです。引っ掛けていくのです。

繰り返します。大切な点は、AとBとCとDが並列や並置であり、どれもがフラッ

トな関係にあって、上下関係や因果関係や時系列をなしてはいないことです。

この関係がフラットなのは、引っ掛け引っ掛けられる、つまり引っ掛けあうそれぞれの要素がニュートラルである、つまりどっちつかずで、どっちにも転ぶからだと思います。

だから、掛けることで言葉と世界がシンクロするのです（このときには、身体もシンクロしているような気がします）。たぶん、この掛けるは賭けるとシンクロしている気がします。掛ける、賭ける、足掻く。

\*

人も人以外の生きものたちも、圧倒的な偶然性の支配する世界で、賭けを余儀なくされている。生まれおちた瞬間に、世界というギャンブルに強制的に参加させられている。そんな気がしてなりません。

さらに言うなら、賭けもシンクロも、きわめてニュートラルな要素のあいだで生じるニュートラルな身振りだという気がします。その意味では平等だし公平なのです。

どっちつかずで、どっちにも転ぶし、うつるのです。私たちはサイコロの目なのかもしれませぬ。

私たちがサイコロを振っているのではなく、私たちがサイコロなのでもなく、たぶん私たちはサイコロの面にしるされた目なのです。一瞬の骰子の一振りから出た目なのです。

それにもかかわらず、ニュートラルな賽の目として受けいれなければならない平等と公平に逆らっているのが、ヒトなのかもしれません。

昨日3月18日は、フランスの詩人ステファヌ・マラルメ（Stéphane Mallarmé）の誕生日でした。

骰子一擲 (トウシイッテキ) とは？ 意味や使い方 - コトバンク

デジタル大辞泉 - 骰子一擲の用語解説 - 《原題、〈フランス〉 Un Coup de dés》マラルメの詩。1897年、雑

kotobank.jp

#言葉#日本語#春#レトリック#言葉の綾#影#シンクロ#掛け詞#駄洒落#比  
喩#連想#多義語#両義性#同音異義語#体感#ステファヌ・マラルメ



03/19 福永武彦先生の思い出に



＊

福永武彦先生の思い出に

星野廉

2023年3月19日 12:37

以下の文章は、2021/08/03にnoteで「うつせみのあなたに」というタイトルで投稿した記事（そのアカウントは削除していまはありません）の再掲です（以前に「はてなブログ」でも再掲しました）。

昨日（3月18日）はステファヌ・マラルメの誕生日でした。そして本日（3月19日）は福永武彦先生の誕生日です。二人の詩人の名前が出てくる文章を、その思い出として投稿します。

なお、本日投稿した「張り裂ける芽、腫れる粘膜、晴れる空」はステファヌ・マラルメの思い出に書いたものです。私は詩が書けないのですが、マラルメは私にとって大きな存在でありつづけています。



目次

ビードロ、ぎやまん、硝子

うつせみのあなたに

山のあなたの空遠く

あなた（かなた）・彼方・貴方（貴男・貴女）

マラルメとうつせみ

ビードロ、ぎやまん、硝子

ガラス。硝子。ビードロ。ぎやまん。

ガラスという言葉で、ビードロという言葉思い出しました。あれもたしかガラスじゃないか——と辞書で調べてみるとポルトガル語から来ているらしいのです。

西洋の事物が日本に渡来する順では、ポルトガル語が先でオランダ語が次だと学校で習った記憶があります。キリスト教の布教と経済活動つまり交易が目的だったわけですね。

ガラスを意味する上の言葉の中では「硝子」が気に入っています。

＊

ガラスという意味である「ぎやまん」という言葉は、ダイヤモンドから転じたと言辞書に書いてあります。ガラスを切ったり削ったりするのに硬いダイヤモンドを使ったことから、ダイヤモンドを意味するオランダ語 *diamant*、またはポルトガル語 *diamão* が訛って、ぎやまんとなったということです。

辞書の記述によく見られる「転じた」とか「または」とか「訛る」という言い回しが好きです。要するに、とりかえが生じたわけです。

最も硬いといわれる透明の石で透明なガラスを切ったり削るなんて、綺麗なイメージですね。天然の石で人造の石を切ると考えると、猟奇的でエロチックな感じもします。そこから「ぎやまん」という綺麗な字面で綺麗な音の言葉が生まれたなんて、これまた綺麗な物語だなあ、なんて感心します。

ぎやまん。とりかえ。転。訛。

とりかへばや物語。

＊

辞書や言葉の由来の事典で「ぎやまん」という言葉の由来を説明する口調は、いかにも歯切れが悪いですね。

Aという言葉はね、本当はBを意味する言葉なの。Aを作るのにBを使ったから、そう なっちゃったわけ。変でしょ？ ごめんね。あはは。

それだけじゃないの。Aと呼ぶのはCが訛ったか、Dが訛ったか、よくわかんない。でもね、CもDもきょうだいみたいなもんだから、間違えるのが人情じゃないこと？ どっちでもいいようなもの。害はないでしょ？ 我慢してね。あはは。

あはは、なんて笑って誤魔化すな、と言いたくなります。ま、笑っているかどうかは別にして、体裁を取りつくろっていることは確かですね。

\*

とはいうものの、「転じる」、つまり「すり替わる」と「とりかえ」が起こる。「または」とは、要するに「わかんない」。「訛る」なんて、口のまわらない幼児が「こども」を「ころも」と言うように愛嬌があって可愛らしい。

人と言葉がともに生きています。

人は常に辞書を持って話したり書いているわけではありません。言葉の規則なんて後付け。いま生きている言葉をめでましよう。

ビードロ ⇒ ぎやまん ⇒ がらす (硝子)・グラス

出世魚みたいですね。揺らぎ、移り変わっていく言葉。いや、むしろ変わっていくのは言葉と事物の間の対応だと言うべきなのでしょうか。もっと正確に言えば、揺らぎ移りゆくのは人の心のあり方なのかもしれません。

## うつせみのあなたに

この記事のヘッダーをご覧ください。

「うつせみのあなたに」とあります。これは、十二年ほど前に私がほぼ一年間続けていた

ブログのタイトルなのです。

星野廉 さんの公開書籍一覧 | パブー | 電子書籍作成・販売プラットフォーム  
puboo.jp

うつせみは、現身（現人）とも空蟬とも表記されます。なぜ、二通り（三通り）の漢字の表記があるのかなのですが、ちょっとややこしいですので結論から書きます。

いまこの世にいる人間である貴方に  
いまこの世の彼方に（向こうに）

蟬の抜け殻のような身である貴方に  
蟬の抜け殻のような状態の彼方に（向こうに）

このように四通りの解釈が可能なのです。

「うつせみのあなたに」というひらがなだけの言葉を漢字をまじえて表記すると、これだけの意味になりうるということは、ひらがなの表記は多義的とか多層的であると言えます。意味が曖昧だとか幾通りにも取れるとも言えます。

私は多義的なものや曖昧なものが好きなので、「うつせみのあなたに」という言葉を愛しています。さらに言うと、「うつせみ」の「うつ」に、かつてうつ病と診断され、いまでも抑うつ状態に悩まされている自分、つまり「うつで苦しむ身・鬱を背負う身」を重ねないではられないのです。

うつせみ、現身、現人、空蟬。  
鬱背身。

そんなわけで「うつせみのあなたに」をブログのタイトルにしていたのです。どうか、タイトルとして、この言葉をお借りしたと言うべきでしょう。言葉というものは私が生まれた時にもうありました。

私は言葉を借りているだけです。私のものではありません。言葉はみんなのものです。

＊

うつせみを細かく見ていきましょう。ここからの説明はちょっとややこしいので、ざっと目を通していただいてもけっこうです。

「うつせみ」をちょっと大きめの国語辞典で引いてみてください。ネット辞書でもかまいません。

中には「空蟬」と「現身（現人）」の関係について歴史的な経緯が書かれている辞書もあるでしょう。

「訛って（要するに、口が回らなかった）」「転じて（要するに、間違えた）」「と解釈して（要するに、勘違いした）」「字を当てて（要するに、当て字であり感字）」とか書いてあるかもしれません。

もうちょっとややこしい話になりますが、坂部恵著『仮面の解釈学』（東京大学出版会）という本をお読みなれば、うつせみについて哲学できます。すごい本だったという記憶があります。何しろちゃんと日本語で哲学しているのですから。

日本語でちゃんと哲学している（してきた）人は少ない気がします。何語で哲学しようと、あるいはしまいとその人の勝手ですけど。

＊

まとめると、ふたつの「うつせみ」——つまり「空蟬」と「現身（現人）」ですが——を取り違えた、早い話が「間違えてしまった」のです。

いまこの瞬間にも起こりつつある、言葉のずれや変化。私はこれを「国語の乱れ」だとは思いません。言葉は生きているから揺らぐし変わるのです。正確に言えば、人の心のありようと人を取り巻く環境が移ろいゆくのです。

## 山のあなたの空遠く

私が「あなた・彼方・貴方」のうちの「あなた・彼方」に出会ったのは、上田敏訳の「山のあなた」（『海潮音』より）というカール・ブッセ（上田敏はカアル・ブッセと表記しています）の詩を読んだときでした。この詩はネット上の青空文庫でも読めます。

以下にその詩を引用しますが、ルビは丸括弧内で処理しています。

### 山のあなたの空遠く

「幸（さいはひ）」住むと人のいふ。  
噫（ああ）、われひとゝ尋（と）めゆきて、  
涙さしぐみ、かへりきぬ。  
山のあなたになほ遠く  
「幸（さいはひ）」住むと人のいふ。

Über den Bergen weit zu wandern  
Sagen die Leute, wohnt das Glück.  
Ach, und ich ging im Schwarme der andern,  
kam mit verweinten Augen zurück.  
Über den Bergen weti weti drüben,  
Sagen die Leute, wohnt das Glück.

残念ながら私はドイツ語にはぜんぜん詳しくありません。原文で脚韻があることはかろうじて認められます。欧米の定型詩で見られる音節の数も合わせてあるのでしょうか。

やまのあなたの そらとおく  
さいわいすむと ひとのいう  
ああわれひとと とめゆきて  
なみださしぐみ かえりきぬ  
やまのあなたの そらとおく  
さいわいすむと ひとのいう

このようにひらがなだけで表記すると、日本の定型詩である短歌や俳句の基本リズムである、七・五調で訳されていることが分かります。

\*

「彼方(かなた)」といえば、私はユイスマンスの『彼方へ』(原題は Là-Bas または Là-bas)を思い出します。この小説は悪魔崇拝がテーマで、例のジル・ド・レの話も出て来ます。田辺貞之助訳の『彼方へ』はまだ二階の書棚にあります。

細かい文字(註の文字がさらに小さくて読みにくい)の創元推理文庫版です。さっき二階に上がって見てきましたが、もう古くなった文庫本は色が褪せて不気味な雰囲気を漂わせていました。

ユイスマンスは澁澤龍彦訳で『さかしま』(原題は À rebours)を学生時代に読みました。これは二階にはもうありませんでした。処分したのでしょうか、いつのことか覚えていません。

「さかしま」という言葉があることは、かつてこの邦訳を手にして初めて知ったのですが、「さかさま」ではなく「よこしま」(邪悪)を連想させる「さかしま」を選んだ澁澤の語感に感心したのを(勝手な連想であり誤解なのだと思いますけど)覚えています。

『彼方へ』(Là-Bas)にしろ、『さかしま』(À rebours)にしろ、晩年に読み返すような内容の作品ではない気がします。後ろ向きすぎるのです。

退廃的であったり悪魔主義的なものを指向するのには、ある程度の若さとパワーが必要なかもしれません。

＊

私は高校時代に澁澤龍彦(そして森有正)に傾倒し大学でフランス文学を学んだのですが、当時よく読んだフランスの作品の訳者に堀口大學がいました。堀口訳のジャン・ジュネ作『薔薇の奇蹟』も忘れられない作品です。いまは新訳が出ているのですね。

堀口大學といえば、次の訳詩を思い出します。冒頭だけを引用しますが、ご存じの方も多いと思います。これも七五調で訳してありますが、こういう職人芸のような翻訳が好きです。

ちまたにあめの ふるごとく  
わがころにも なみだふる  
かくもころに にじみいる  
このかなしみは なにやらん

巷に雨の降るごとく  
わが心にも涙降る。  
かくも心ににじみ入る  
このかなしみは何やらん？

Il pleure dans mon cur 6 音節  
Comme il pleut sur la ville ; 6 音節  
Quelle est cette langueur 6 音節  
Qui pénètre mon cur ? 6 音節

もっと長いのですが、原文を音読すると心地よいです。

ポール・ヴェルレーヌの作であるこの詩は学生時代に暗唱させられました。いまでも口をついて出てきます。フランス語の授業ではやたら暗唱をさせられるのです。詩だと一編丸ごと、小説や戯曲や論文や哲学書だと一節という具合にです。それがフランス語教育の伝統みたいですよ。

＊

第一志望ではない大学に入学した私でしたが、いま思うと恵まれた環境で勉強ができました。

正教員には、福永武彦、辻邦生（卒論の指導教授でした）、篠澤秀夫、白井健三郎、そして福永先生の愛弟子だった豊崎光一がいました。非常勤講師として、蓮實重彦と渡邊守章、そして高山宏が教えに来ていました。どの先生も、手を抜いた授業や講義はしていませんでした。それが誇りです。（以上・敬称略）

フランス語の詩の読み方を手ほどきしてくれたのが福永武彦先生でした。

懐古的かつ感傷的になってきたので（歳を取って体が弱ると、こういうことがよくあります）、話を変えます。

## あなた（かなた）・彼方・貴方（貴男・貴女）

「うつせみ」に続き、今度は「あなた」の二重の意味について見てみましょう。

あなた（かなた）・彼方・貴方（貴男・貴女）

こんなふうには書けますね。どういうことなのでしょう。簡単にいきましょう。

「向こう」とか「遠く離れて」の「あなた・かなた・彼方」から転じて（要するに間違えたり、ずれたりして）、「(向こうという意味の) あっち」とか「(向こうにいる) あのかた」となり、いろいろすったもんだありまして、とにかく「you」の意味の「あなた・貴方（貴男・貴女）」が生まれたらしい。

こういうことなのですが、ややこしいですね。

大切なのは「あなた」という言葉に「遠く離れた愛しいあなた」という意味が込められていることです。

「遠く離れて」と「あなた（貴方）」が二重写しになっているわけで、美しく切ないイメージの言葉です。ここだけ理解していただければ大丈夫です。

## マラルメとうつせみ

上で述べたことをまとめましょう。

現身（現人）とも空蝉とも表記される、うつせみ。  
彼方とも貴方とも、表記できる、あなた。

このような意味があって「うつせみのあなたに」は、次のようにも解釈できます。

いまこの世にいる人間である貴方に  
いまこの世の彼方に（向こうに）

蝉の抜け殻のような身である貴方に  
蝉の抜け殻のような状態の彼方に（向こうに）

＊

フランスの詩人であるステファヌ・マラルメ（Stéphane Mallarmé）のある詩の中で、私が特に好きな箇所があるので紹介させていただきます。「海のそよ風（Brise marine）」の冒頭部分です。

（原文）

La chair est triste, hélas ! et j'ai lu tous les livres.  
Fuir ! là-bas fuir ! .....

（普通の訳）

ああ、肉体は悲しい！ それに私はすべての書物を読んできました。  
逃げよう！ 彼方へと逃げるのだ！

（うつせみ訳 aka アホ訳）

うつせみは悲しいよな、やれやれ、読むものはなくなったし。  
こうなったら、逃げよう！ うつせみのあなたに逃走するのだ！

勝手な解釈で恐縮ですが、マラルメの「海のそよ風（Brise marine）」は、私の大好きな「うつせみのあなたに」というフレーズを具現した文学作品なのです。フランス文学を学び、この詩に出会えたことを感謝しているほどに愛着を覚えています。

私は積極的に詩を読む習慣がなく、また詩を書かない人間でもありますが、この詩だけは別格です。

「海のそよ風（Brise marine）」は、さきほど触れた福永武彦先生の授業で使用した教科書に入っていました。Anthologie des Poetes du XIXe Siecle [MAYNIAL, Edouard.] という、このアンソロジーは今も大切に保存しています。褪せてくすんではいるものの、古い本独特のいい香りがします。しばらくパソコン脇に置くことにします。

# 福永武彦 # ステファヌ・マラルメ # 言葉 # 日本語 # フランス語 # フランス文学 # 詩  
# 翻訳 # 澁澤龍彦





03/20 うつせみのたわごと-4- (全 14 回)



＊

#### うつせみのたわごと -4- (全14回)

星野廉

2023年3月20日 07:36

そと。よそ。かかわりのない、ちのつながりのないものどものすむところ。よそは、うちにもいる。なかにもいる。よそをおう。だから、よそおう。これは、でまかせ。じびきにはないものは、つくり、かたる。じびきは、ことばのあとをおう。ことばは、じびきにしたがわない。じびきは、おきてではない。はなつ、つくる、かたる、あやまる、なまる、まねる、まねそこなう、まなぶ、まなびそこなう。ことばは、そうしてうまれ、うつりかわってきた。よそとあう。よそとであう。だから、よそおう。これもでまかせ。ことばは、よそおう。これは、おそらく、まこと。

＊

よそおう。ふりをする。かぶる。かわをかぶる。ばける。いのちをかけてまで、なにかのかわりをしようとするものもいる。とらのかわをかぶって、ばけるものもいる。とらのかわで、こしをおおうものもいる。とらをよそおう。とらにばける。えらそうにする。とら、とら、とら。でも、とらではない。かわりは、あくまでも、かわり。にせたもの。にせもの。ほんものにみえるものを、よそおう。そうみえるだけなのに。ほんものかどうかを、しるすべはないのに。だから、だれもがかたられる。だまされる。それでいて、さしてさしさわりがないから、よはつづく。

＊

ほんものとみえるものは、かわりのもの。かりのもの。かりそめのさまを、ひさしいものとする。ものとする。そうきめる。みなで、そうだときめる。すると、そうだということになる。だから、にせる。にせようとつとめる。こうして、よは、にせものだらけとなる。にせものだらけと、かす。かす。かする。ばける。かりのすがたを、みあやまる。ほんものとみあやまる。さしてさしさわりはない。よはつづく。

＊

あやまる。はずれる。ずれる。まちがえる。ごまかす。つくろう。それが、ひとのつね。さが。あやまっても、あやまらない。ずれても、とりつくろう。わすれる。なかったことにする。ぐあいのわるいことは、なかったことにする。そのうち、みんなわすれる。あやまらない。あやまらないはず。たがわないはず。そうおもいこむ。うたがわれない。それが、ひとのつね。さが。このほしにすむ、ひととよばれる、はずれ、ずれた、いきするものつね。さが。

＊

さがしい。ごさかしい。さがしても、このほしには、ほかにいそうもない。おのれのおこないを、はずべきものとおもう、さかしさがありながら。ふりかえることができるはずだ、とおもうころがありながら。はずかしがるけはいがない。はずかしい。かしこまるそぶりもない。わるがしこい。

◆

#### 「うつせみのたわごと-4」(全14回)

「うつせみのたわごと-1-」と「うつせみのたわごと-2-」と「うつせみのたわごと-3-」につづき、できるだけ大和言葉系の語をもちいて、平仮名づくしで書こうという試みをしています。

ふだん書いているさいの枠をずらして書いたり、言葉をつくりながら書くわけですが、当たり前だと思っている事や物や様を、それまでとは異なった視点からとらえる試みとも言えます。とらえなおす、見なおす、考えなおす、感じなおす、という感じです。

- 1) ある漢語系の言葉に相当する大和言葉系の語を、辞書などで探しだして使用する。
- 2) 大和言葉系の語を組み合わせて説明的に書く。
- 3) 大和言葉系の語を用いて比喻をつかい、ほのめかす。

以上の3つの方法を試しています。

＊

今回のテーマは、「外部・内部・辺境」という分類です。「よそおう」という言葉をつかって、そうした分類=分ける作業が、ありもしない物事を捏造することだと指摘しています。ヒトという生き物の性（さが）を嘆いています。

標準的な表記に直したキーワードは、「よそ」「装う」「そと」「うち」「ふち」「代わり」「偽物」「ずれる」「はずれる」「語る・騙る」「仮」「化ける」「誤る・謝る」「賢しい」「悪賢い」です。

直接書かなかったキーワードは、「エルンスト・カッシーラー」「クロード・レヴィ＝ストロース」です。

※この記事は、かつてのブログ記事「10.02.04 うつせみのたわごと-4-」に加筆したものです。

うつせみのあなたに 第11巻 | パブー | 電子書籍作成・販売プラットフォーム  
哲学がしたい、哲学を庶民の手に——。そんな気持ちを、うつに苦しむ一人の素人がい  
だき、いわば憂さ晴らしのためにブログを始めた

puboo.jp

参考記事

#日本語# 言葉 # 大和言葉 # 和語 # 漢語 # ひらがな # 自分語 # 文体 # 散文 # 辺境  
# 分類



03/21 解くのではなく溶ける



＊

解くのではなく溶ける

星野廉

2023年3月21日 08:22

目次

ときほぐす

落とした影、投げた影

影を並べる

影をときほぐす

解くのではなく溶ける

関連記事

ときほぐす

ときほぐす、解きほぐす、解き解す

「解き解す」という表記を見てください。こういうことになるのは、日本語がもつれているからです。

もつれにもつれているという印象を私は持っています。言葉の中に言葉があるからでしょう。言語の中に言語があるからでしょう。

日本語が一様なものではないという意味です。次の言葉たちを見ると一目瞭然です。もともと島々にあったらしい音が、のちに大陸から来た形を迎えた跡が見えます。

とく、ほぐ

とく、溶く、融く、熔く

溶きほぐれる

「解く」と「溶く」は同源らしいのですが、「溶きほぐれる」というのもじっくり来ます。溶解というイメージ。

溶けて解れていく。

「溶けて解れていく」のは私たちのことではないでしょうか。もつれにもつれた日本語を話し書きながら、私たちが溶けて解れていくのです。言葉は人という存在を溶かし解していく力がありそうです。

頭だけにではなく体に働きかける力でしょう。おそらく体のつぎに頭なのではないでしょうか。

### 落とした影、投げた影

” ジル・ドゥルーズ——エディプスと形而上学

L'enfant est un être métaphysique.

——Gilles Deleuze, Felix Gatari:L'Anti-dipe”

蓮實重彦『批評 あるいは仮死の祭典』（せりか書房）P.49

「子どもは形而上学的存在である」と日本語にすることもできる文の意味はさておき、『批評 あるいは仮死の祭典』という本で、ジル・ドゥルーズが蓮實重彦に「落とした影」（「投げた影」でもいいです）を眺めていると、次の言葉が浮かびます。

métaphysique、physique（フランス語）

metaphysics、physics、physical（英語）

私にとってジル・ドゥルーズという固有名詞が投げってくる影は、上の語に尽きると言ってもかまいません。

それぞれの単語の語義を辞書で眺めるとわかりますが、フランス語も英語も日本語と同じく、もつれにもつれていることが目に見えます。一目瞭然なのです。言葉の中に言葉があり、言語の中に言語があるからに他なりません。

英語やフランス語の単語のそれぞれの語義は英和辞典や仏和辞典に載っているものの、英和や仏和辞典に載っているのは、語の意味ではなく訳語です。そもそも意味は見えるものではありません。

こうした訳語が日本語の中の言葉になっていることは明らかです。まさに言葉の中の言葉です。

漢字やひらがなからなる訳語があるのに、カタカナで表記された語が並行してもちいられている場合も多々あります。

もつれているのです。私は、こうしたもつれは言葉にとって自然なありようであり、このもつれが言葉を豊かにしていると思います。

もつれにもつれたものを、ときほぐすのは人には無理でしょう。人がもつれているからです。こちらがとけてほぐればいいのです。

＊

英和や仏和辞典で見えるのは、英語やフランス語の落とした（投げた）影たちだという気が私にはします。影つまり像ですから、見えているのは文字という形なのです。意味は見えません。

影は見えるが、意味は見えない。人はもつれているから、もつれた言葉が解けない——。このことをジル・ドゥルーズは繰り返しかえし丹念に言葉にしていた人だったという印象を私は持っています。文学をやるにせよ、哲学をやるにせよ、意味なんていう抽象でお茶を濁すなという感じでしょうか。

河出文庫 意味の論理学〈上〉

ルイス・キャロルからストア派へ、パラドックスの考察にはじまり、意味と無意味、表面と深層、アイオーンとクロノス、そして「出来

[www.kinokuniya.co.jp](http://www.kinokuniya.co.jp)

河出文庫意味の論理学〈下〉

ドゥルーズの思考の核心をしめす名著、渴望の新訳。下巻では永遠回帰は純粋な出来事の理論であり、すべての存在はただひとつの声で

[www.kinokuniya.co.jp](http://www.kinokuniya.co.jp)

批評あるいは仮死の祭典

電子書籍ストア Kinoppy、本や雑誌やコミックのお求めは、紀伊國屋書店ウェブストア!  
1927年創業で全国主要都市や海外

[www.kinokuniya.co.jp](http://www.kinokuniya.co.jp)

## 影を並べる

器官なき身体、corps sans organes

métaphysique、physique

メタフィジック、フィジック

metaphysics、physics、physical

メタフィジックス、フィジックス、フィジカル

形而上、形而下、物質・身体

無形、有形、有形・身体

抽象、具象、具体

形がない、形がある、体で感じ分ける

## 影をときほぐす

- ・無形と有形のあいだで、有形の身体を置いて有形を感知する。
- ・抽象と具象のあいだを行き来しながら、具象を具体的な体験として生きる。
- ・「形がない」と「形がある」との縁（ふち）で、形を体で感じ分ける。
- ・意味と影のあいだで、影を解こうとした人間が溶けていく。

形のある影を、そもそも人がすくい取ったり解いたりできるわけがありません。人は形である影に追いつけません。人には枠があり限りがあるからです。

影を解きほぐそうと試みたところで、人は自分がほぐれるしかなさそうです。自分が

ほぐれて溶けていくのです。

形のある影を、人は解きほぐそうと試みながら、自分が溶きほぐれていく。

## 解くのではなく溶ける

厳めしい、偉そう、もっともらしい、漢字・漢語。  
音の羅列、カタカナの羅列、意味不明、カタカナ語。  
しっくりくる、すっと入ってくる、和語・大和言葉。

漢字からなる語とカタカナ語を大和言葉で解きほぐす。  
抽象を具体的に自分の問題としてほぐす。

ほぐして何かに到達するとは限らないでしょう。むしろこっちがほぐれて溶けていく  
かもしれません。溶けていくのは頭ではなく、たぶん体です。

解くのではなく、溶けるのです。分けるのではなく分（わか）れるのです。

## 関連記事

※以下の2本の記事は、私なりにジル・ドゥルーズの著作を読んだり眺めて、解くのでなく溶けようとした記録です。日本語を母語とする自分の問題として考えたという意味です。解説や注釈や感想文ではありません。

※意味の論理楽・その1【引用の織物】

※意味の論理楽・その2【引用の織物】

※以下の記事は、過去の記事を集めたパッチワークなので重複があります。

※ふーこー・どうるーず・でりだ・ぼると（その1）【引用の織物】

※ふーこー・どうるーず・でりだ・ぼると（その2）【引用の織物】

※ふーこー・どうるーず・でりだ・ぼると（その3）

※ふーこー・どうるーず・でりだ・ぼると（その4）【引用の織物】

※ふーこー・どうるーず・でりだ・ぼると（その5）【引用の織物】

#ジル・ドゥルーズ # 蓮實重彦 # 日本語 # 漢字# ひらがな # カタカナ # 大和言葉 # 和語 # 漢語 # 翻訳語 # 英語# フランス語 # 辞書 # 辞典 # 影 # 文字 # 意味 # 翻訳



03/22 げん・幻（うつせみのたわごと-5-）



＊

げん・幻 (うつせみのたわごと -5-)

星野廉

2023年3月22日 07:47

げん——。きになることば。からからきた、ことば。やまとことばにまけず、おなじおんがおおいのが、からことば。やまとことばとからことば。うちとそと。なかとよそ。ことばのうえに、ことばはない。ことばのしたに、ことばはない。ただ、ひとりひとりにとって、なつかしいことばがあるだけ。みみにこちよいことば、したのうえをよくすべることばがある。こころなごむ。それでいて、みみにさわりの、したにざらつくことばを、いみきらう。よそのことばを、いみきらう。みくだす。わかものことばを、いみきらう。そしる。ひとのつね。

＊

げん・幻。げんかい・幻界。まぼろしのすむ、ひろいところ。まぼろしのある、にわ。まぼろしのいる、ぼ。ま——。おもいことば。いくとおりに、みみにひびく、おん。まをほろぼす。間をほろぼす。まほろぼろし。なまって、まぼろし。これ、でかませ。ちかくにあり、ちかしいものとなったかにみえる、とおくのをむねにいだく。へだたったものをだく。いまーじゅ。いめーじ。image。これも、からことば。

＊

まぼろしは、ひとりひとりがいだく、ゆめのつぶ。ぼちんとはじけ、ひをはなつ。まぼろしは、むれやなかまで、いだくものではない。ゆめは、ひとりでみるもの。ねむりのなかでみる、ゆめ。きたるべきものにかける、ゆめ。ひとつとして、おなじゆめはない。なんどもみるゆめでさえ、ずれている。まをほろぼす。間をほろぼす。魔をほろぼす。真をほろぼす。麻をほろぼす。目をほろぼす.....。

＊

ひととひとは、はなれている。ちかくにみえるひとさえ、へだたっている。ちかくに  
いるのではない。ちかくにみえるだけ。ゆめも、かけはなれている。だから、ゆめにか  
ける。ゆめに、はしをかける。ひとは、つねにうつりかわる。ゆめうつつは、かわりつつ  
あるのが、つね。もどることはできない。かえることはできない。だから、いのる。ねが  
う。ごまかす。いきかせる。むれでいのれば、かなうとしんじるものが、いかににおお  
いことか。あさましい。きなくさい。せめて、ひとりでしんじたい。

＊

魔をほろぼす。まほろぼしば。まをほふるば。まほろば。まほら。まほ。まほう。み  
な、でまかせ。みな、でたらめ。そうやって、ことばはうつろってきた。まちがう。まち  
がえる。まをちがえる。まがさす。まがう。まがよう。まざる。まがごと。まがまがし。  
まがる。ゆめのなかでは、どんなことでもおきる。おもいのうちは、とりとめがないの  
がつね。まがいもの。にせもの。かわり。とはいえ、ひとは、まがいをしんじるしかな  
い。まぼろしを、しんじ、よりどころとし、いきるしかない。

◆

【後記 今回のたわごとで「幻界」が出てきました。10の「げん」について計10本のた  
わごとを書くつもりだったのです。以下は、10の「げん」の見取り図です。

※太文字の部分だけをご覧ください。

- 1) 「げん・幻・幻想・まぼろし・魔を滅ぼす・間を滅ぼす・(隔たったものを) 近くする・  
知覚する」  
= 2) 「げん・言・言語・ことば・言葉・言の葉・事の端」  
= 3) 「げん・現・現実・うつつ・打つを打つ・うつをうつ・うつ (全・空・虚) をうつ・  
うつうつ」  
= 4) 「げん・限・限界・限度・境目・ふち・へり・端っこ・かぎり・かぎる・限る・か  
げる・翳る」  
= 5) 「げん・原・源・元・みなもと・もと・本・基・原子・元素・根っこ・ルーツ・泉・  
湧く・わく・わくわく・出る・でるでる」  
= 6) 「げん・Gen (※ドイツ語)・遺伝子・gene・gen-・因子・ジン・仁・gene-・うまれ  
る・生じる・うむ・産む・発生・子宮・卵・可能性・生殖・生命・いのち・あらわれる・  
でる・でちゃった・できる・できちゃった・わく・わくわく」

= 7) 「げん・眼・がん・まなこ・め・見(げん・けん)・みる・みわける・わかる・わけ  
る・しる・おしっこ・しるす・しるし・知る・ち・じめん・地・なわばり・あらそう・血・  
あやめる・なくす・なくなる・無・むっ・m・n・ん」

= 8) 「げん・弦・つる・ぶらさげる・ぶらさがる・ぶらぶら・ゆらゆら・宙づり・宙ぶら  
りん・おまかせ・どうにでもしてちょうだい・おてあげ・白旗・偶然性・さいころ・なげ  
る・ばくち・ギャンブル・まける・まかす」

= 9) 「げん・減・へる・hell・経る・たりない・欠乏・お腹がすいた・こまった・満足で  
きない・ほしい・欲求・もっともっと・食べてもまた腹がすく・へらす・引き算・ひく・  
無限小・マイナス・ネガティブ・負・陰・だめ・だめだめ・否定・否・非・被・ちがうち  
がう・そうじゃない・ひっくりかえす・ひっくりかえる・ひっくりかえそう・反対・あべ  
こべ・さかさま・かえす・かえる・もとにもどる・堂々巡り・おなじこと・減即増・増即  
減・減=増・無限小=無限大・一定・差し引きゼロ・ゼロサム・ゼロ・zero・零・0・○・  
輪・和・わ」

= 10) 「げん・絃・糸・張る・渡す・つたえる・つたわる・つながる・つなげる・ひびく・  
ひびき・ぴーん・おと・ふるえる・震動・ぶるぶる・ゆらぐ・なみ・波動・ひかり・つぶ・  
ゆれる・上下・左右・うごく・動力・ちから・熱・エネルギー・エントロピー・増大・で  
かい・確率大・無秩序・でたらめ・でまかせ」



### 「うつせみのたわごと-5-」(全14回)

できるだけ大和言葉系の語をもちいて、平仮名づくしで書こうという試みをしてい  
ます。

ふだん書いているさいの枠をずらして書いたり、言葉をつくりながら書くわけですが、  
当たり前だと思っている事や物や様を、それまでとは異なった視点からとらえる試みと  
も言えます。とらえなおす、見なおす、考えなおす、感じなおす、という感じです。

- 1) ある漢語系の言葉に相当する大和言葉系の語を、辞書などで探しだして使用する、
- 2) 大和言葉系の語を組み合わせて説明的に書く、
- 3) 大和言葉系の語を用いて比喻をつかい、ほのめかす、

以上の3つの方法を試しています。

\*

今回のテーマは、「まぼろし・げん・幻」という言葉とイメージをもとに世界をとらえる「幻界」です。この回から、10の「げん」について連載していく形になります。

標準的な表記に直したキーワードは、「幻・まぼろし」「間を滅ぼす」「真を滅ぼす」「魔を滅ぼす」「イメージ・image」「信じる」です。

直接書かなかったキーワードは、「知覚（する）」「想像（する）」「空想（する）」「夢想（する）」「魔法」「まじない・呪い」「だく・だかれる・いだく」「ジャック・ラカン」です。

この連載全体を通じての、直接書かなかったキーワードは、「ジェイムズ・ジョイス」「『フィネガンズ・ウェイク』」「サミュエル・ベケット」「フランツ・カフカ」「ジル・ドゥルーズ」「柳瀬尚紀」「レーモン・ルーセル」「VOAのspecial English」「basic English」「聖書の翻訳」「ジョージ・スタイナー」「『After Babel（邦訳：バベルの後に）』」「ビジン言語」「クレオール言語」「ブリコラージュ」です。

※この記事は、かつてのブログ記事「10.02.06 うつせみのたわごと-5-」に加筆したものです。

うつせみのあなたに 第11巻 | パブー | 電子書籍作成・販売プラットフォーム  
哲学がしたい、哲学を庶民の手に——。そんな気持ちを、うつに苦しむ一人の素人がい  
だき、いわば憂さ晴らしのためにブログを始めた  
puboo.jp

#言葉 #日本語 #大和言葉#和語 #漢語 #自分語 #知覚 #想像 #幻想 #イメージ

03/23 「たったひとつ」「たったひとり」に抗おう  
とする身振り



＊

「たったひとつ」「たったひとり」に抗おうとする身振り

星野廉

2023年3月23日 08:23

目次

ミシェル・フーコーの笑い声

ロラン・バルトの座った席

『批評 あるいは仮死の祭典』

『フーコー・ドゥルーズ・デリダ』

人はもつれているから、もつれた言葉が解けない

たった一つの解を求めるのではなく

危険と崩壊を回避し、無難で安全な中心にとどまる

「たったひとつ」「たったひとり」に抗おうとする身振りたち

関連記事

ミシェル・フーコーの笑い声

昔おもにその著作の邦訳を読んだり、ただその邦訳の字面を見ている存在だった、懐かしいフランス人たちの動画を、最近になって YouTube で漁っています。

以下の動画は最近見つけたものです（この記事が投稿された日のほぼ一週間前）。初めて見ました。ロラン・バルトの長話が続いていますけど、テーブルを囲んで会している顔ぶれをご覧ください。

1978年、ポンピドゥー・センター、ジル・ドゥルーズ、ミシェル・フーコー、ピエール・ブーレーズ……。

(動画省略)

Pierre Boulez Roland Barthes, Gilles Deleuze, Michel Foucault Le temps musical

探すといろいろあります。YouTube が登場した時代まで生きていてよかったとつくづく思います。難聴のために聞き取れないのが残念ですが、それは贅沢な悩みというべきでしょう。字幕を利用できる動画が増えています。

その恩恵に浴して、根がミーハーな私が懐かしいフランス人たちの動画を見て老後を楽しんでいるというわけです。

\*

さて、ミシェル・フーコーですが、なんとノーム・チョムスキーと対談しています。難しいですが、なかなか興味深い話のようです。英語の字幕を見ながら、ぼーっと見ていると、目についた言葉の断片から考えが浮かぶことがよくあります。

(動画省略)

ミシェル・フーコー - Wikipedia

[ja.wikipedia.org](http://ja.wikipedia.org)

二人の議論の噛み合わなさあまりにも刺激的すぎて圧倒される自分がいます。ぜんぜん理解などしていないのですが、何度眺めてもおもしろいです。

この動画を見ると、かつて来日したフーコーが吉本隆明と対談したという話を思い出します。対談は後に書籍化されました。その対談のさいに両者の間で通訳をしたのが蓮實重彦なのです。

そういえば、ミシェル・フーコーがNHKテレビに出たときのことを覚えています。渡邊守章氏がインタビューをしたのです。

フーコー著の『言葉と物』がフランスで「プチパンのように売れた（飛ぶように売れた）」ことに渡邊氏が触れると、フーコーが「きっきっ」とまるでお猿さんのような声を上げて笑ったのでびっくりしました。この笑い声はいまでも夢の中で出てきます。

渡邊守章 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

哲学書がベストセラーになる時代がフランスにあったのです。日本でも思想関連の書籍が飛ぶように売っていた時期です。

あれはいつだったのかと気になって調べてみると、フーコーが二度目に来日した 1978 年のことだと分かりました。

### ロラン・バルトの座った席

フーコーはちょっと強面なので会ってみたいとは思わなかったのですが、ロラン・バルトには会って見たかったというか、この目で見たかったです。バルトも来日したことがありますよね。

大学進学を機に上京した年の思い出なのですが、生まれて初めて入った飲み屋で、びっくりしたことがありました。

「いらっしゃいませ〜。あら、お若いのね、学生さん？ 何を勉強なさってるのかしら？ まあ、フランス文学ですって？ ほら、あなたのいる席の隣に、ロラン・バルトが座ったことがあるの。バルトは知ってるでしょ？ こんなになって、座ってたわ」

その店のママ（男性です）が、わざわざしなを作ったり、身ぶりや手振りを交えてその時の模様を教えてくれたのです。もちろん、感激しました。思わず居住まいを正し、空席だったその椅子に見入ったものでした。興奮のあまりに鳥肌が立ったのを覚えています。

バルトの日本旅行記というか独創性に富んだ日本論である『表徴の帝国』に、バルトが自分で手描きした新宿の地図が収録されていて、そこにお店の場所と名前が出ていることも、ママが教えてくれました。

後にその本を手に入れて、またまた鳥肌が立ったのを覚えています。あと、その地図にはバルトが来日した当時に、ある種の人たちによく知られていた都内のある映画館の場所も明記されていました。

これなどは、ある種の分野の研究において貴重な資料となるのではないのでしょうか。以上は、言うまでもなく、バルトのしたお仕事とは直接的には関係のないことですが。

”「記、号、の、帝、国、」としての日本は、ロラン・バルトにとっては、ありうべからざる楽園の、不意の、しかも東の間の幻影としてあるのであり、だからその言葉たちは、いささかも「日本論」を構成したりはしえないのだ。”

(蓮實重彦著『批評 あるいは仮死の祭典』p.208)

こうお書きになったのが、蓮實重彦先生なのです。かつて先生の授業を受けたにもかかわらず、ぜんぜん学ばなかったこの私は、いまこんなミーハーな文章を書いています。

筑摩書房 表徴の帝国 / ロラン・バルト 著, 宗 左近 著

筑摩書房のウェブサイト。新刊案内、書籍検索、各種の連載エッセイ、主催イベントや文学賞の案内。

[www.chikumashobo.co.jp](http://www.chikumashobo.co.jp)

ロラン・バルト - Wikipedia

[ja.wikipedia.org](http://ja.wikipedia.org)

ロラン・バルトの動画では以下の映像がとくに好きなのですが、それは素のバルトを感じるからです。

(動画省略)

私は大学の卒業論文でバルトの『S/Z』を論じたのですが、一時期バルト漬けだったこともあって特別な思い入れがあります。

『批評 あるいは仮死の祭典』

蓮實重彦（以下は敬称略で失礼します）の『批評 あるいは仮死の祭典』では、ミシェ

ル・フーコー、アラン・ロブ＝グリエ、ジル・ドゥルーズ、ロラン・バルト、ジャン＝ピエール・リシャルが扱われていますが、フーコーとドゥルーズとバルトについてはインタビュー（バルトを除いて蓮實がその自宅やアパートに訪ねていく）があり、またその生の人物像が語られていて、私のミーハーな気持ちを満足させてくれます。

ルポルタージュ形式の小説みたいなので、楽しく読めます。

これだけ臨場感にあふれるフランス現代思想のテキストは他にはないのではないのでしょうか。何しろ見てきたように語られているのですから。実際、そうなんです。若き日の蓮實は現場で見てきたのです。

批評あるいは仮死の祭典

電子書籍ストア Kinoppy、本や雑誌やコミックのお求めは、紀伊國屋書店ウェブストア!  
1927年創業で全国主要都市や海外  
[www.kinokuniya.co.jp](http://www.kinokuniya.co.jp)

ジル・ドゥルーズの出てくる動画では以下が好きです。始めに話しているのはフェリックス・ガタリで、ドゥルーズは11:00から映ります。

(動画省略)

Deleuze & Guattari in Vincennes / A Thousand Plateaus / Lecture 1 / November 18, 1975

晩年のドゥルーズの映像と比べると、この動画から熱気が感じられます。見入ってしまいます。

ジル・ドゥルーズ - Wikipedia  
[ja.wikipedia.org](http://ja.wikipedia.org)

『批評 あるいは仮死の祭典』で描かれている人間味あふれるドゥルーズ像と、あまりにも悲しいあの最期を思うと感傷に流されていきます。ドゥルーズだけではありません。バルトもフーコーも、レイ・アルチュセールも、死因こそ異なりますが非業の最期でした。

もっと長生きして、お仕事を続けていただきたかったと心から思います。

合掌。

\*

『批評 あるいは仮死の祭典』で印象に残っている「ルポルタージュ」があります。

一九七二年の一月にパリで三日間にわたって、マルセル・ブルーストをめぐるシンポジウムが行われ、「ブルーストとヌーヴェル・クリティック」という会が持たれたというのですが、その発言者たちの顔ぶれがすごいのです。

ロラン・バルト、ジャン・ルッセ、ジャン・リカルドゥー、ジェラルド・ジュネット、セルジュ・ドゥブロウスキー、ジル・ドゥルーズ。しかも聴衆の中に小説家クロード・シモンや批評家ジャン＝ピエール・リシャルがいたと書かれています。

その会場にいた蓮實が耳に挟んだという隣席の男のつぶやきが当時の状況を伝えていて興味深いです。

”（前略）今夜の客を見ろ、あれがブルーストって顔かよ、（中略）、ほらあの女の子はバルトの本をかかえている、連中はみんなバルトを見に来たんだ、（中略）、彼等はサインでももらえればとっとと帰ってゆくんだ（後略）”

（蓮實重彦著『批評 あるいは仮死の祭典』p.38、丸括弧内は引用者による。）

根がミーハーな私はこのあたりの描写で、もうため息吐息でめろめろへろへろになります。その会でジル・ドゥルーズが登場して、会場の雰囲気が一変するのですが……。それはいったいどういうことなのか。

これ以上引用も要約も私にはできません。この本を読んでいただくのがいちばんいいと思います。

お祭り騒ぎの雰囲気のイベント。数々の新しい手法を用いた批評のプレゼン大会。ミーハーな観客たち。そんな現場を活写した蓮實の文章はいま読んでスリリングです。

とりわけ、新しい批評がフランスという場でどのような登場の仕方をし、どのように受け入れられていったか、については歴史的な文脈に置いて考えることが不可欠だと感じます。新旧の対立とかせめぎ合いという単純な構図には収まらない「事件性」があったのです。そして蓮實はその事件に立ち会ったのです。

＊

『批評 あるいは仮死の祭典』が出版された時期の日本はどうだったか。

「エピステーメー」をはじめ、「パイディア」、「海」といった雑誌におけるさまざまな書き手の活動が、当時の状況を歴史的な波として考えるさいの資料になると思います。いま振り返ると、フランスとは状況がかなり異なっていたのが分かります。とくにアカデミックな場での状況は日仏では大違いだったみたいです。

日本では——哲学や思想界ではなく——むしろ文芸や文芸批評の担い手たちが、フランスの新しい哲学と思想を紹介・導入する際に積極的で大きな役割を果たしたことは注目していると思います。ともに故人ですが、宮川淳氏と豊崎光一先生のお仕事が忘れられません。

宮川淳 - Wikipedia

[ja.wikipedia.org](http://ja.wikipedia.org)

豊崎光一 - Wikipedia

[ja.wikipedia.org](http://ja.wikipedia.org)

沈黙の向こう側—豊崎光一追悼集

沈黙の向こう側 豊崎光一追悼集豊崎令子（監修）／岩崎誠、佐久間和男、中村裕、平山規子（編）／2013年

[www.shumpu.com](http://www.shumpu.com)

＊

ジャック・デリダの動画も行きましょう。

あまり長くない動画ですが、内容的に好きな動画です。英語の字幕で読むことによって、エクリチュールという空疎なカタカナ語の不用で無用な呪縛から逃れるだけでも収穫ではないでしょうか。

(動画省略)

ジャック・デリダ - Wikipedia

ja.wikipedia.org

### 『フーコー・ドゥルーズ・デリダ』

蓮實重彦の『フーコー・ドゥルーズ・デリダ』をときどき拾い読みします。通して読むことはないです。

思考停止的な印象、つまり個人の意見および感想で恐縮ですが、この著作でのフーコー論は物語みたいです。何度も読み返さないと分からない物語。読み返しても分からない物語。それでいいのだと思います。あれよあれよと読み返しています。

ドゥルーズ論は現代詩という感じがします。とうてい言葉では伝えられないし説明できないような「何か」をレトリックでほのめかす。そんなポエムです。詩ですから、理解というよりも鑑賞するつもりで読むといいかもしれません。

デリダ論は、この著作ではいちばん読みやすいし分かりやすい気がします。記述が図式的なのです。チャート式ということですね。明晰という言い方もできそうです。読むとすっきりします。言語学のまとめとか整理に最適の解説だと思います。

講談社文芸文庫 フーコー・ドゥルーズ・デリダ

今や古典となった『言葉と物』『差異と反復』『グラマトロジーについて』をめぐって紡がれた、この「三つの物語」は、一九七八年、

www.kinokuniya.co.jp

### 人はもつれているから、もつれた言葉が解けない

影は見えるが、意味は見えない。人はもつれているから、もつれた言葉が解けない——。このことをジル・ドゥルーズは繰り返しかえし丹念に言葉にしていた人だったという印象を私は持っています。文学をやるにせよ、哲学をやるにせよ、意味なんていう抽象

でお茶を濁すなという感じでしょうか。  
(拙文「解くのではなく溶ける」より)

人はもつれているから、もつれた言葉が解けない——。以下の人たちは、共通してそうした言葉の身振りを演じていたような気がしてなりません。それは、言葉が人の外にある外だからではないでしょうか。

Roland Barthes (1915-1980)  
Gilles Deleuze (1925-1995)  
Michel Foucault (1926-1984)  
Jacques Derrida (1930-2004)

＊

以下の人たちは、上の人たちのものした言葉の模様を、といたりほぐしたりする振りを演じながら、母語である自らの言葉の模様としてほぐしてみせる——それぞれの手法や持ち味は大きく異なりましたが——という、しなやかな身振りを示してくれた。その美しい言葉の身振りは、外国語の著作に母語を重ねるといふいとなみに対する誠実さに他ならなかった。そんな印象を私は持っています。

宮川淳 (1933-1977)  
豊崎光一 (1935-1989)  
渡邊守章 (1933-2021)

合掌。

### たった一つの解を求めるのではなく

話は飛びますが、二十世紀の一時期にフランスあたりで文化的な革命に似た運動の機運がありました。

「フランス現代思想」なんて言葉で検索すれば、たくさんの人名や作品名が出てくるはずです。私もそれに熱中したことがありました。

いまになって思いかえすと、あの運動は決まりに逆らうという言葉と、言葉の身振りに満ちたものでした。

「たったひとつ」という決まりに反抗しまくった人たちがたくさん出たという感じ。

読みの多層性、権力の構造の多元性、解釈と意味の多様性、文字と文字列（アルファベットです）の多義性と多層性、歴史の無数性、知に無数の穴があること（つまりま

だらでまばらですかすかであること)、に注目した人たちがいました。なぜか、みんな比較的短命に終わりました。

(拙文「「たったひとつ」感、「たったひとり」感」 in 「すくえないことで、すくわれる (更新：2022/10/05)」)

フーコー、ドゥルーズ、デリダ、バルトの言葉の身振りから、私が学んだ大切なことは、彼らの著作から「たったひとつ」の解を求めるなという戒めでした。どのセンテンス、どのパラグラフ、どの章、どの著作のレベルにおいてもです。

それなのに、フランス語で読もうと日本語の翻訳で読もうと、人は「たったひとつ」の解を読もうとか求めようとしてしまいます。

「たったひとつ」の解を求めるのではなく、自分の問題として自分の母語で、彼らの言葉の身振りを真似て演じることが、「フーコーする」であり、「ドゥルーズする」であり、「デリダする」であり、「バルトする」だと、私は思います。

たとえば、彼らの著作の翻訳にある翻訳語をもちいて作文したり、または著作を部分的に引用したり、あるいは部分を継ぎ接ぎすることが、「○○（上の固有名詞のお好きなものを入れてください）する」ことになるわけではぜんぜんないのです。

極端な話が、○○の著作を読んでいなくても、たとえ○○の名前を見聞きしたことがなくても、「○○する」のはじゅうぶん可能であり、知らずに○○と似たような身振りを自分の母語の言葉の身振りとして演じている人は、どの国にもいるにちがいありません。

いま述べた状況を、「実物や現物のない複製」とか「起源のない引用」という比喻をつかってもいいでしょう。いや、むしろそもそも複製や引用や影響といった、「たったひとつ」「たったひとり」への指向を引きずった状況ですらないと言うべきでしょう。

### 危険と崩壊を回避し、無難で安全な中心にとどまる

よそとよそ者たち（外部と他者である多者）と出会うためにふち（辺境）を歩こうと

08/25 たったひとつの「たったひとつ」に就いての身振り  
いう身振りに満ちたテキストを前にして、ひとつ（同一性や真理や一つの解）を求めてど真ん中（中心）にとどまる。

テキストを解くのではなく、自分の問題としてとらえて自らが溶ける——そんな余裕は頭にも身体にもない。危険と崩壊を回避し、無難で安全な中心にとどまる。

そもそもたった一つの真理やたった一つの解を求めがちな読者層に忖度し迎合しなければならない業界の事情がある。本は売れなければ意味がない。たった一つ感をプレゼンして売るしかない。

そもそもたった一つを指向するアカデミックな村で冷遇されないためには、たった一つを指向する振りをする必要がある。たった一つを指向しがちな学生たちにそっぽを向かれないために、たった一つを指向する振りをしなければならない。

以上のような事情があるのは私も承知しています。

\*

「先生、『△△』で○○が何と言っているのか、その意味を分かりやすく、できればX  
X字以内にまとめてご教示願います。あと、この著作における○○の意図についても手短かに教えてください。全体を簡潔かつ明快で、やや難解っぽい味付けで仕上げただけであればうれしいです」

ほら、読者も学生もフォロワーも口をそろえてそう言っているではないか。現在は、著作や作品の意味と意図をすっきりさくさくと投稿して拡散させる時代なのだ。

たった一つを指向する身振りをしなければ、いいねもフォローももらえない、すっきりすんなりさくさく至上のSNSが、出版界や学問の世界の「武器」になっている事情も理解しています（なお、味付けについてもうるさくなっている傾向に関しては同情いたします）。

ただし、そこにはきっと葛藤があるにちがいないと私は想像しています。

## 「たったひとつ」「たったひとり」に抗おうとする身振りたち

固有名詞（たとえば人名や著作名や作品名）の放つ光はまばゆいです。「たった一つ」「たった一人」を指向するからです。その指向する力はとてつもなく強いと言えます。

たった一つの作品、作品はたった一つでしかない、たった一人の作者、作者はたった一人しかいないー。

なにしろ、この記事で挙げた固有名詞たちが戦ってもびくともしなかったのです（もしそんなことがあったとしての話ですけど）。現在もそのまばゆい光と力は温存されています。

この記事で挙げた固有名詞たちに共通した身振りがあったとするなら、それは「たったひとつ」「たったひとり」に抗おうとする——抗って勝てるものではないのを承知のうえであえて抗おうとする——身振りではなかったかと思います。

そうした身振りがいまでも世界のあちこちで演じられているはずだと私は信じています。

### 関連記事

※以下の記事やマガジンでは、この記事に出てきた人物たちの著作を私なりに読んだり眺めながら、解くのではなく溶けようとした記録が集めてあります。解説や注釈や感想文ではないという意味です。

イメージ、連想、似ている | 星野廉 | note

このマガジンのキーワードは、イメージ、連想、似ている、起源なき引用、実物なき複製です。

[note.com](https://note.com)

意味、言葉、レトリック、体感 | 星野廉 | note

このマガジンのキーワードは、意味、言葉、レトリック、体感です。

[note.com](https://note.com)

抽象、具象、体感、印象 | 星野廉 | note

このマガジンのキーワードは、抽象、具象、体感、印象（「似ている」「そっくり」）、レトリックです。

note.com

※以下の各記事には重複する内容があります。

\* 「たったひとつ」感、「たったひとり」感

\* 私たちは同じではなく似ている

(※この2本の記事は比較的読みやすいと思います。)

\* ふーこー・どうるーず・でりだ・ばると (その1) 【引用の織物】

\* ふーこー・どうるーず・でりだ・ばると (その2) 【引用の織物】

\* ふーこー・どうるーず・でりだ・ばると (その3)

\* ふーこー・どうるーず・でりだ・ばると (その4) 【引用の織物】

\* ふーこー・どうるーず・でりだ・ばると (その5) 【引用の織物】

\* 意味の論理楽・その1 【引用の織物】

\* 意味の論理楽・その2 【引用の織物】

\* 1/3 『仮往生伝試文』そして / あるいは 『批評 あるいは仮死の祭典』 その1

\* 2/3 『仮往生伝試文』そして / あるいは 『批評 あるいは仮死の祭典』 その2

\* 3/3 『仮往生伝試文』そして / あるいは 『批評 あるいは仮死の祭典』 その3

\* 文字の顔

\* 【小説】知らないものについて読む

\* 【小話】Mの世界で生きる

# ミシェル・フーコー # ジル・ドゥルーズ # ロラン・バルト # ジャック・デリダ # 宮川淳 # 豊崎光一 # 渡邊守章 # 読書 # フランス語 # 日本語 # 批評 # 現代思想 # 同一性 # 蓮實重彦



03/24 人工〇〇になりたい



＊

人工○○になりたい

星野廉

2023年3月24日 07:52

目次

お化粧

象徴的儀式

自分と鏡の中の似姿

似姿、写し

フィクション

人工、人造

人形

身体

逸脱、倒錯

二人になる

なりきる、なる

お化粧

私は経験はないのですが、鏡の前で化粧をするさまを思いうかべてみます。鏡の中にある像を見ながら、肉眼では見えない自分の顔を手探りでいじっていくさまを思いえがいてみます。

目の前にあるのは似姿であるはずなのに、本当に似ているのかは不明。似ていると言われているものを手探りでいじっていく。いじっているのだから、目の前の姿は変わりつつあるはず。直接見ることができない自分も変わりつつあるはず。

自分の似姿を見ながら自分の顔をいじっているわけですが、その作業はあくまでも手探りでしかない気がします。手が届くほど近くに見えていながら、遠隔操作をしているようなもどかしさを覚えるのではないのでしょうか。

お化粧をした経験がないのに、あれこれ言ってごめんなさい。

## 象徴的儀式

じっさい、そうなのでしょう。

遠隔操作のことです。肉眼で見ることできない自分の似姿を目の前にして、手探りで顔をいじってお化粧をしているのですから。

知覚機能という「代わりのもの」を頼りに、世界と森羅万象を相手にする。言葉という「代わりのもの」をもちいて、世界と森羅万象を相手にする。

いずれも、遠隔操作です。もどかしいし、ままならない遠隔操作——人の思いどおりにならないのです。長靴の上から痒いところを搔いているような、または孫の手で背中を搔いているのと同じく隔靴搔痒の遠隔操作だと言えるでしょう。

毎日鏡を覗くという、あるいは毎日鏡に向かってお化粧もするという儀式に似たいとなみが、人の表象行動と言語活動の象徴的な行為に見えてなりません。

いわば表象の表象であり、象徴の象徴ですが、やはり鏡をのぞき見る人のいとなみと重なります。人のやっていることが、そもそも同語反復的なのです。人はつねに鏡——現実も思いも言葉も鏡です——を見ているから当然なのでしょうが。

## 自分と鏡の中の似姿

自分と鏡に映る似姿は「似ている」はずですが、同一という意味での同じではありません。なにしろ映っている影であり像なのですから。

でも、同じだったら。そう考えるのが人だと思えます。私だってしょっちゅうそう思えます。

鏡の中に入りたい。その中の自分に会いたい。触ってみたい。そう考えたことがない人を考えるのは難しい気がします。

\*

人は自分を肉眼で見たことがないため、自分と鏡の中の似姿が「似ている」と知識として学んで知っているだけで、体感しているわけではありません。

人は二人ではなく一人だからです。自分に会った人はいないでしょう。誰にとっても自分は見知らぬ人なのです。

自分が二人いれば、目が二組（二対）あることになり、それぞれが一方の自分を肉眼で見ることができるし、自分に会えるはずですが。

でも、じっさいには自分は一人しかいません。

その意味で、自分と鏡の中の似姿が「似ている」というのは外にある外なのです。自分では確かめられないという意味です。

他人に教えてもらう、または器具や器械や機械に教えてもらうしかないとも言えます。

\*

目の前にある「これ」と、少し離れたところに見える「あれ」が似ている——というのは、似ているけど異なるのです。

人は「似ている」が基本である印象の世界に住んでいると私は思うのですが、自分のことになると、人は「似ている」が確認できない事態に放りこまれているようです。

自分の目で自分が見えないという枠から出られないのです。自分が二人になるしか、この枠から出る道はなさそうです。

## 似姿、写し

とはいうものの、自分と鏡に映る似姿は「似ている」はずです。これを疑って生きていくのはつらいにちがいありません。お化粧をするのにも、さぞかし苦労するでしょう。

自分が鏡の中の似姿と「似ている」のを確かめる方法はあるのでしょうか。

鏡の像という鏡から離れればすぐに消えてしまう、頼りないものに頼るのではなく、カメラという器具というか器械の手を借りて確かめる方法があります。

とはいうものの、写真や動画という写しを見たところで、やっぱり自分を直接に見たことがないという枠の中にいる自分を感じて、がっくりするしかありません。

＊

見たことも会ったこともない自分と、写真や動画に映っている自分が似ているのか——同じ、つまり同一でないことは確かですけど——確認しようがないのです。

こうなったら、他者しかありません。自分で確かめられないのであれば、他人に頼りましょう。他人に教えてもらうのです。自分一人で、くよくようじうじしているからいけない。

「似ているよ」、「そっくりだってば」、「だいじょうぶ、安心して」、「私が保証するから、とにかく落ち着いてよ」、「てか、夜とかちゃんと眠れているの？」

他者に請けあってもらっても、それが似ているという保証にはなりません。なぜなら、それは言葉でしかないからです。

口約束と同じでぜんぜん当てにならないのです。語るは騙るという語るに落ちます。他人の口にした言葉は信じるしかない。嘘だったら、それまで、ということになります。

\*

そんなに面倒な話だったら、写真や動画に映っている自分（写し）も、鏡の中の自分の似姿（写し）も、自分に「似ている」ことにしよう。「似ている」かどうかなんていうふうには悩まないでおこう。

そう考えるのがいちばんです。というか、みんながそうやって妥協して生きているのです。いや、妥協だと考える人なんていないでしょう。

写しを見ても、他人の言葉で教えてもらっても、自分を直接に見たことがないという枠から逃れそうにはありません。

やっぱり自分が二人になるしか、枠から出る道はなさそうです。

## フィクション

小説は世界の鏡だとか小説は世界の写しだという言い回しがあります。

私は小説や物語や童話や説話の登場人物（人間とは限りません、人間以外の生きものや無生物も登場します）のようになりたいと思ったことがあります。数えきれないほどありました。

というか、フィクションに登場する人物や擬人化された生きものや無生物を受け入れて、その存在になりきらないとフィクションは楽しめないのです。

映画やテレビドラマやお芝居でも、そうした経験を何度もしてきましたが、小説や説話は文字や音声ですから、言葉だけを見たり読んで、そこに出てくる人物や生きものになりきったり、憧れるというのは、よく考えると不思議な話です。

なりたいと思う、なりきる、なった気持ちになれる——それが言葉の力だ。そう言われると頷いてしまう一方で、そうかなあと首を傾げる自分を感じます。

なんて言いながら、やっぱり言葉の力は想像以上にすごいという気持ちに傾いてきました。小説や物語を読んでいるさなかには、登場人物になりきる、その人物になった気持ちになれるのですから。じっさい、そういう気持ちになっているじゃありませんか。

これだけで十分ではないでしょうか。

## 人工、人造

鏡、似姿、写しといえば、ロボットと人工知能を連想します。ロボットはかつて人造人間と翻訳されたことがあるそうです。

人が人に似たものをつくる、作る、造る、創る。こうやって漢字を眺めていると神を感じてしまいます。天地創造の神です。

きっと人は神になりたいのでしょう。もうなったつもりでいるようにも、見えます。妄想？ もうそうです。

\*

さらに言うなら、人は人工〇〇になりたいのではないのでしょうか。

人工〇〇は人がいわば「神」としてつくったものなのに、人はその自分のつくったものになりたいのではないかと私は最近よく思います。

## 人形

人形のようにになりたい。

この気持ちは分かる気がします。可愛い人形、綺麗な人形、美しい人形、格好いい人形、妖艶な人形——これらは、そのようにつくられているようです。

なんらかの目的や意図なしに、人は人のようなものをつくるのでしょうか。

人間——人類でもホモ・サピエンスでもヒトでもいいです——は自分たちのつくったものになりたいのではないのでしょうか。

最初はそんなつもりはなくて、ただ自分たちに似たものをつくって楽しんでいたのですが、そのうち、つくったものに憧れをいだくようになったという意味です。

あまりにもうまく出来すぎたからかもしれません。つくってから、二度見してしまったのです。

あら、可愛い、格好いい、美しい、綺麗。

これだけではなく、すごい、めっちゃ速い、とてつもなく頭がいい、ぜったいに失敗しないなんて尊敬したくなる

ぜんぜんぶれない、誤っても謝らない、あやめてもあやまらない、エラーを自分で修正している、えっ勝手に学習するの？

疲れを知らないなんてすごすぎます、壊れたら部品を取り替えるだけでいい、要するに年を取らないし死なないってこと？

こうなるのを薄々感じていた。無意識のうちに、自らこういう事態を招いたという気がします。たぶん機が熟したのでしょう。

いまは神への遠慮も忖度もない時代です。もはや歯止めはないかのようです。

## 身体

人工〇〇になりたい。〇〇に入るのは知能だけではありません。人に備わっているあらゆるものが入りそうです。

人工〇〇がほしい。人工〇〇を自分の一部にしたい。眼鏡、コンタクトレンズ、補聴器、衣服（皮膚の代わりです）、靴、帽子、臓器、血液、リンパ液、足、手、腕、指、皮膚・肌、毛だけではありません。

記憶、現実、思い、意識、知能もそうでしょう。仮想現実（VR）とか拡張現実（AR）なんて、まさにそうではないでしょうか。このところ——このほんの数年で——そうした言葉があちこちで書かれたり口にされるようになりました。

エスカレートしているようです。

## 逸脱、倒錯

人が人のつくったもの（具象であり物）、つまり人工〇〇や人造〇〇になりたいと願う。あるいは、人が人の思いえがいたものや想定したもの（抽象であり幻）、たとえば知識や体系や情報に憧れる。

こうした欲求は逸脱とか倒錯と言ってもかまわない気がします。

これらの言葉をつかうのは、わが子を二度見したり、それだけにとどまらずに、じっとした熱い視線を送り、その挙げ句には合体を望む行為と重なって見えるからに他なりません。

どこかエロチックなのです。しかも不自然と言うか、転倒しているのです。

私は究極の美を具現した人形になりたい。私はぜったいにぶれない論理になりたい。私はぜったいに誤らず謝らない人工知能になりたい。

私は排泄をはじめとする生理現象や老化もない仮想現実の中の住人になりたい。私はゲームの中で生きたい。私はゲームそのものになりたい。

私は美そのものになりたい。私は詩になりたい。私は映画の世界の住人になりたい。私は映画の中に生きたい。

私は小説の登場人物になりたい。私はボヴァリー夫人になりたい。私はドン・キホーテになりたい。

最後の小説の例はもちろん皮肉であり冗談ですが——とはいえ虚構と幻想と現実を混同した登場人物になりたい人（既にそうであるにもかかわらずなんて辛辣なことは言いませんけど）が皆無とは言えませんが——、以上挙げた種々の例を逸脱と倒錯とわずに何と言えればいいのでしょうか。

いやいや、そもそも人は逸脱して倒錯した生きものである。それは、他の生きものたちを見れば一目瞭然——パンツをはいてマスクをつけた生きものが他にいるだろうか——のことだ。

というか、逸脱と倒錯こそが人と他の生きものをつかさどる最大の相違であり、そのおかげで人はこの星でこれまでになれたのだ。したがって、逸脱と倒錯は人にとって当然なのであり、かつ自然なのである——。

こうした意見もありそうですね。

## 二人になる

人工〇〇になりたい——。

この彼岸への悲願は、「二人になりたい」ではないでしょうか。

分身という言葉をつかってもいいです。変身でもいいでしょう。でも、自分なのです。自分でないといけないのです。だから、二人になっても自分でなければなりません。

誰かに乗っ取られたら、自分でなくなります。「自分であること」は死守しなければな

らないのです。

\*

自分のことになると、人は「似ている」が確認できない事態に放りこまれます。自分の目で自分が見えないという枠から出られないのです。自分が二人になるしか、枠から出る道はなさそうです。

ところで、どうして私が「二人になる」にこだわるのかというと、人は思いの世界で常に「自分を見ている」からであり、そのときの人は意識の中で二人になっていると考えているからなのです。

夢と同じです。夢の中で人は自分の出る夢をもう一人の自分の視点から見ている（つまり「二人になっている」）気がします。夢と、夢うつつと、うつつの思いは、緩やかにつながっている、グラデーション状に連続している。そんなふうに感じられます。

とはいうものの、あくまでも以上は思いの話であり、現実には人は「一人である」という枠の中にいるわけです。思いの中では自由に出ていながら、現実の中では決して出ることのできない枠であるからこそ、こだわっているとも言えそうです。

「二人になる」と「二人である」は、私にとってオブセッションなのです。目下のマイブームとも言えます。

\*

人形になりたい。

人間（人類でもいいです）は自分たちのつくったものになりたいのではないか。最初はそんな気はなくて、ただ自分たちに似たものをつくって楽しんでいたのですが、そのうち、つくったものに憧れをいだくようになったという意味です。

人形、登場人物、キャラクター、フィクション上の人物——人物と書きましたが人間であるとは限りません——を相手にするのは小さいころからやってきたことです。

人形、ひとがたを相手にするときには、人は必ず相手の名前を呼びます。そして言葉を掛けるのです。これは「ふたりになる」という意味です。

\*

人工〇〇がほしい。人工〇〇を自分の一部にしたい。眼鏡、コンタクトレンズ、補聴器、衣服（皮膚の代わりです）、靴、帽子、臓器、血液、リンパ液、足、手、腕、指、皮膚・肌、毛だけではありません。

これが叶えば、老化も病気もなくなるのでしょうか。

それにしても、しんどそうですね。面倒くさそうでもあります。何度手術をすればいいのか。体が持ちませんよ。命を延ばすために命を縮めるに決まっています。

それどころか、メンタルをやられそう。人はそんなしんどいことに耐えられない気がします。

それにたいそうなお金もかかりそうだし。だいいち、いますぐには無理でしょう。

VRゴーグルを最期まで二十四時間装着しつづけるとか、不老や不死を夢見るのもいいでしょうが、私はいつか来るものを受け入れようと思っています。

## なりきる、なる

やっぱり言葉の力は想像以上にすごいという気持ちに傾いてきました。小説や物語のことです。

読むことで登場人物になりきる、その人になった気持ちになれるのですから。じっさい、そういう気持ちになっているじゃありませんか。

ままならなくて面倒くさい現実なんて二の次です。ねえ、ボヴァリーの奥さん。ねえ、ドン・キホーテさん。

私は小説や物語や童話や説話の登場人物（人間とは限りません、人間以外の生きものや無生物も登場します）のようになりたいと思ったことがあります。数えきれないほどありました。

というか、フィクションに登場する人物や擬人化された生きものや無生物を受け入れて、その存在になりきらないとフィクションは楽しめないのです。

なりきっているさなかには「なる」を体感している。それが言葉の力です。仮想現実どころではない臨場感を人は生まれながらに身につけているのです。

これは人がつくったものではない気がします。人工○○とか仮想現実なんて要りません。

これだけで十分ではないでしょうか。二人どころか、何人にでもなれる、なりきれる能力が誰にでもあるのです。

人の身のほどに合った贅沢だとは言いませんが、言葉ってすごいです。

#言葉 # 文字 # 鏡 # 人形 # 夢 # 仮想現実# 人工知能 # 機械 # 連想 # 自分 # 分身  
# 名前 # 小説 # フィクション

03/25 影の文法



＊

影の文法

星野廉

2023年3月25日 07:37

目次

影を落とす

慣用句、決まり文句、定型を外す

定型を外す

文字どおりに取る

影の文法

影を落とす

影という言葉を使った言い回しはたくさんあります。どれもがぞくぞくするようなイメージをいだかせてくれます。

「影を落とす」という言い方が好きです。作文してみましよう。

久しぶりに庭に出ると、伸び放題になったヤツデの茂みが、これまた伸びた雑草の上に黒く大きな影を落としていた。

道に夕日が影を落としている。私はまぶしさに目を細めた。

戦争の記憶がいまも彼の日常に影を落としているのは間違いない。

＊

最初の例文は、そのまま文字どおりに取れます。ヤツデに日が当たって、その下に影

が映っているという物理的な現象を言葉にしたものです。余計な飾りを取れば、純粋な描写だと言えそうです。

「夕日が影を落とす」という場合には、「光がさす」という意味になるのですが、個人的にはこの言い回しを使ったことはありません。初めての作文です。

三番目の例文の「影を落とす」はネガティブな影響を与えるという意味ですから、比喩的な言い方だと理解しています。

### 慣用句、決まり文句、定型を外す

「影を落とす」という言い回しはどの辞書でも、「影」の語義の例文としてではなく、別の扱いになっています。いわゆる慣用句とか成句であり、決まり文句とか定型とも言えそうです。

「(地面や水面に) 影が映る」、「光がさす」、「ネガティブな影響を与える」——「影を落とす」は、大きく分けて上の作文で見た三つの使い方ができるようです。

つぎの例文を見てください。

彼は影を落とした。気がつく自分の影がなくなっていたのだ。

午後遅くのことだった。夕日が影を落としている坂道を下っていくと、長い影を引きずりながら上ってくる友人が見えた。すれ違いざまに軽く会釈した瞬間、彼ははっとした。目の前にあるはずの自分の影がないのに気づいた。

理屈に合わない描写もありますが、小説であれば、ありえる文章ではないでしょうか。「これは小説です」と断れば、それはどんなことを書いた場合でも、その言い訳になります。

＊

小説と嘘は意外と近そうです。小説、フィクション、虚構、作り話、嘘と並べると分

かりやすいと思います。

小説では何を書いてもいいのです。詩もそうかもしれませんが。とはいえ、詩は嘘に近いと言う勇氣は私にはありません。書きましたけど。

こういうご飯論法はいけないですね。

小説の基本は「語る」ですから「騙る」に堕ちるのはやむをえないでしょう。「かたる・語る・騙る」、血は争えませんが。

一方の詩の基本は「うたう・となえる・よむ」らしいので、「かたる」とは異なる文脈でとらえたほうが良いと私は思います。

## 定型を外す

「そこのあなた、忘れ物です。影を落としましたよ」

これは小説ならありそうです。

シュールな展開だと言えます。この科白をうまくつかえば、おもしろい掌編小説が書けるかもしれません。

「影を落とす」という慣用句を文字どおりに取ることで、慣用句の意味をちょっとずらした、つまり定型を外したとも言えるでしょう。

「ずらす」とか「はずす」といったことを私はよくやります。へそが曲がっているからかもしれません。

＊

「へそが曲がる」も文字どおりに取ると、なかなか面白い光景が頭に浮かびます。

「へそで茶を沸かす」——いま頭の中で視覚化してみましたが、仰向けになっておへそにやかんをのせている光景には、まさにへそで茶を沸かす滑稽さがあります。

## 文字どおりに取る

影を落とす、影が落ちる、影は落ちる、影に落ちる、影と落ちる、影で落ちる

こういうふうには、言葉を転がすことが好きです。寝入り際にやるルーティーンの設定です。眠れない夜にも、この遊びをよくやります。

浮かんだフレーズを文字どおりに取って、そのさまを思えがいて楽しむのです。もう少しやってみましょう。

影が影を落とす、影に影が落ちる、陰に影が落ちる、「影を落としたことが、その後の影の生き方に影を落とすことになった」、影と駆け落ちする

＊

「影に影が落ちる」と「陰に影が落ちる」は、日常生活でよく目にします。いまも目の前にそうした光景があります。

居間のテーブルでパソコンを使っているのですが、目の前にあるモニターの背後には、窓からの光で薄く長い影ができています。そこに頭上の蛍光灯を浴びたモニターが、濃い影を落としているのです。

輪郭のあいまいな長く四角い影に、くっきりとした長方形の濃い影が落ちているわけですが、陰の中に影があるとも言えそうな気がします。

## 影の文法

上で述べた「影に影が落ちる」と「陰に影が落ちる」は、よく観察すると現実にある

わけです。

言葉にするとややこしいことが現実にはある。言葉にしてみるとありえない、つまり非現実に見えるけど、そんな現実がある。

言葉には言葉の世界があるのではないか。言葉を現実の影として考えると、影には影の世界があるのではないか。言葉に文法があるように、影の文法があるのでないか。

こう考えるとわくわくします。

\*

繰り返します。

言葉にするとありえないことに思われることが現実にはあるのではないのでしょうか。

もしそうであるなら、現実には現実の文法（比喻です）があって、それは言葉の文法や言葉の慣用とは重ならないし、ずれていてもおかしくはありません。

こういうありえないことを想像すると、わくわくどころかぞくぞくしてきました。ありえなさにぞくぞくするのです。

ありえないこと、さらにはありもしないこと、ないことほどぞくぞくするものはない気がします。少なくとも私にはそうです。

ありそうや、あるは、つまらないのです。ありふれていて退屈なのです。

\*

言葉の文法があるように、現実の文法があり、影の文法がある。影の文法なんていいですね。

影の思考とか、影の夢とか、影の言葉なんていうふうにエスカレートしたくなります。

ところで、「影の文法」という言葉に「影の内閣 (shadow cabinet)」を連想してしまい、「言葉には裏の文法がある」なんてぞくぞくするような妄想をいだきそうになります。

ありえない、ありえなさそうなだけに魅力的なフレーズです。いつか妄想してみたいです。記事が一本書けそうな気がします。

そんな妄想をしていたら、言葉には裏の文法がありそうな気がしてきました。あるかも……。影には何でもありそう。

\*

影は自立しているとも言えます。

影には影の論理と文法があるのです。影をよく見てください。その現物とされているものとの類似は驚くほど少ないのです。「似ている」はあくまでも印象なのです。

類似や対応や関係性は、想像力と空想力の産物です。

(拙文「素描、描写、写生」より)

上の引用文ですが、もうエスカレートしていましたね。書いたことを、すっかり忘れていました (最近物忘れがひどいのですが、それでいて既視感の洪水に襲われてもいます)。

影 (言葉や絵や映像や音楽) には影の文法があるようです。現実とは異なる文法にしたがって描かれるし書かれるし作られるのです。

絵を描いている最中に、もはや対象から離れて、絵を成り立たせている素材と細部、そして絵を描くための道具の「論理」と「文法」にしたがって描かれることがあるのと似ています。

そんなときには、描く人は対象を見ながら描いていないように見えます。失礼な言い方になりますが、絵の中での辻褄を合わせているように私には見えます。

私が文章を書くとき、私は言葉の辻褃合わせに夢中になっている自分を感じます。現実にある物や風景を描写しているときにさえ、そうなのです。

細かいところになるほど、目の前の言葉に目を注ぎます。物も風景も思いうかべていないのです。少なくとも私はそうです。

そうした意味で、影（言葉や絵や映像や音楽）は自立していると思います。だから、見たことのない物や風景を描いたり書いたり作ることができるのかもしれませんが。

＊

先ほど上で挙げた作文ですが、「あるべきはずの自分の影がない」というのは確信犯的な「ありえない」だとしても、もし忠実に実写したなら、それ以外にありえない描写がありそうな（要するに下手である）気がします。

私は描写が大の苦手なのです。だから、影の文法なんて言ってレトリックを弄しているのです。

彼は影を落とした。気がつく自分の影がなくなっていたのだ。

午後遅くのことだった。夕日が影を落としている坂道を下っていくと、長い影を引きずりながら上ってくる友人が見えた。すれ違いざまに軽く会釈した瞬間、彼ははっとした。目の前にあるはずの自分の影がないのに気づいた。

# 作文 # 影 # 陰 # 言葉 # 日本語 # 描写 # 文字 # レトリック # 比喩 # 擬人法 # 夢 # 絵画



03/26 影の落とし物



＊

## 影の落とし物

星野廉

2023年3月26日 07:49

### 目次

ありえないから人を魅惑する

ありえない描写

【掌編小説】落とし物

説明と描写

### ありえないから人を魅惑する

言葉にするとありえないことに思われることが現実にはあるのではないのでしょうか。

もしそうであるなら、現実には現実の文法（比喻です）があって、それは言葉の文法や言葉の慣用とは重ならないし、ずれていてもおかしくはありません。

こういうありえないことを想像すると、わくわくどころかぞくぞくしてきました。ありえないさにぞくぞくするのです。

＊

影は自立している。影には影の文法がある。

言葉は自立している。言葉には言葉の文法がある。

この考え方は私にはとても魅力的に感じられます。人は無意識のうちに、言葉の世界の論理と文法に従ったり、それと戯れたり、楽しんだり、裏切られたり、それによってもどかしい思いをしている気がします。

その一例が、「文字どおりに取る」です。文字どおりに取るとは、現実の論理を退けて言葉独自の論理に従うことでしょう。

すると「ありえない」が立ちあらわれます。

＊

月のしずく  
月のシズク  
月の滴  
月の雫

こうしたフレーズがあります。ときどき見聞きしますが、これはありえないから美しく見えるし響くのです。

「ありえない」フレーズが人を魅惑したり打つとしたら、それはそのフレーズが、言葉の文法にしたがって書かれ（言葉の文法にしたがわなければ文フレーズは書けません）、現実の文法からしなるようにして逸れ、影の文法に寄り添っているからだと思います。

＊

月の涙

月の涙が彼女の頬を白く濡らす。

比喩、擬似法、詩的表現、陳腐、「アホか」とレッテルを貼るよりも、この「ありえない」を受け入れて、「ありえない」の魅惑に浸ってみてはどうでしょう。

言葉を楽しむのに、忖度や遠慮は無用だと思います。

「アホか」と言われれば、私はめげますけど。

＊

影が影を落とす——その光景を思いえがく。ありえないことや、ありえない姿や形、ありえない光景を思いえがく。

幼いころに歌い覚えた歌に、「もしもしかめよ、かめさんよ」があります。

月にいるウサギがカメさんに電話をしているさまを本気で思いえがいていました。いまでも、そのさまを思いうかべることができます。

ウサギといえば、勘違いの定番である「うさぎおいし、かのやま」を思い出しました。

「もしもしかめよ、かめさんよ」と違って「うさぎおいし、かのやま」は、視覚的には頭に浮かびません。でも、おかしくて、こどものころには何度も口にしていました。

いまでも、ときどきふいに口をついて出ます。漏れでる感じです。

こうした自分だけの愛おしいイメージも、影の文法に沿っていると私は思っています。

## ありえない描写

この章の冒頭で、スラヴォイ・ジジエクはヒッチコックの「海外特派員」を取り上げ、チューリップ畑が続くオランダの田舎で「風車の一つが風向きと逆に回っている」ことに主人公が気づく場面に注目するのですが、次のように要約できるでしょう。

見慣れた風景（オランダの風車の並ぶ風景）に、ちょっとした特徴（風向きと逆に回っている、一つの風車）が加わったとたんに、その自然な風景が不気味なものに変わってしまう。そこには属さない場違いな、つまり何の意味も持たない細部が加わったのである。（拙文「人は存在しないもので動く」より引用）

（動画省略）

\*

ありえない描写とは、言葉の世界の論理と文法に従っている描写です。現実世界とは異なるの論理と文法で書かれ描かれていると言えます。

言葉を読む人は、いったんその言葉を信じないことには、読むことができません。評価、判断、否定は、後付けになります。一瞬だけでも、人は言葉の世界の「住人」になるのです。

言葉の世界ではどんな荒唐無稽も不条理も肯定されます。夢に似ています。夢ではすべてが肯定され、あれよあれよと進んでいくのです。

映画もそうですね。見ているもの（銀幕上の影です、現実ではありません）を信じないことには映画は見えません。

ヒッチコックはそのことに意識的であるだけでなく、そのことを映画という作品で具現するだけの、映画という世界での「論理力」と「文法力」を備えていた作家だと言えるでしょう。

レトリックはトリックなのです。いったん騙されないことには読めません。

### 【掌編小説】 落とし物

五時半が過ぎたところで、坂の上にある喫茶店を出た。外はまだ明るい。ブラックで飲んだコーヒーは美味しかったが、頭のぼんやりとした感じはまだ去らない。

夕日が影を落としている坂道をゆっくりと下っていくと、先の方に男の姿が見えた。長い影を引きずりながら坂を上ってくる。

日を背にした男の影が、長い影を従えてやってくる。

男性が苦手な私はどきどきする。できるだけ距離を置いてすれ違おうと考え、歩きつづけながらも道の端へとわずかに寄る。

坂の下から吹き上げる風のせいか、生臭いにおいが鼻をつく。息をとめ、目を伏せたまま、男とすれ違った。

「あとう」背後から男の声がした。「落とし物です。影を落としましたよ」

振り向こうとした私は、足元を見るわけにもいかず、かといって後ろを見る気にもなれず、息を詰めたまま空を仰いだ。

## 説明と描写

上の掌編ではありえない描写がありますが、お気づきになりましたか？ 話としては、影の落とし物自体がありえないのですが、そういう筋の展開という意味でなくて、描写です。

(私の描写がまずすぎて伝わらなかったら、ごめんなさい。)

描写は無視されたり、読み飛ばされる運命にあるようです。読んでいてもどかしいし、ある意味退屈だからでしょう。そこが説明との違いだと思います。

それから十年が過ぎた――。

わたしは女子高校生。

彼は娘を溺愛している。

説明はすっと頭に入るのです。「十年が過ぎた」は描写ではありません。かといって、十年間にあったことを羅列するわけにはいかないので、小説には説明が必要です。

描写ばかりの小説なんて読めたものではないでしょう。小説では、説明と描写と会話のバランスが大切だとよく言われますね。

溺愛という出来合の言葉でまとめるのも描写ではないでしょう。どんなふうに溺愛しているのかを具体的に書かないと描写ではないと思います。

執拗に細かく描写するか、要所を的確にとらえて簡潔に描写するか——。私の印象では、前者の例は川端康成だと『雪国』、後者の点描の好例は『山の音』です。

＊

いずれにせよ、描写を読むのがもどかしいのは、現実を写そうとするからでしょう。言葉と現実とは異なるし、それぞれの世界も文法（比喻です）も違ったものなのに、言葉で写そうとするのですから。

それだけに、現実を必死に写そうとしている描写は愛おしく感じられます。影に似ています。いや、写そうとしているのですから影そのものでしょう。

読み飛ばされるのは仕方ありませんが、読者の目にとまったときに伝わる描写ができるようになりたいです。

私は描写が苦手なので、優れた描写があればそれから学ぶ気持ちがつねにあります。人が書いたものでも、機械や人工知能が書いたものでもです。こちらに触れてくる描写なら出自は関係ありません。

ただし説明や成句や比喻に頼らない正確な描写でなければ尊敬できません。映像による描写に比べて、言葉によって正確な描写をするのは至難の業だと思っています。

言葉による描写が困難なのは、言葉が視覚的なものではないからです。視覚を呼び覚ますものであっても、視覚に直結していないという意味です。

要するに、視覚的ではない言葉をつかっての描写——事物や現象を写すこと——は効率が悪くて、もどかしいのです。そのため逸脱と停滞をとまいます。書く側にも読む側にも集中と忍耐が要求されます。

停滞を避けてストーリーに沿って説明するほうがずっと楽だとも言えるでしょう。いまはそうした書き方が求められている気がします。

こういうご託を並べるより精進するだけですな。

# 作文 # 小説 # 掌編 # 影 # 陰 # 言葉 # 日本語 # 描写 # 文字 # レトリック # 比喻  
# 擬人法 # 夢 # スラヴォイ・ジジェク # 映画 # アルフレッド・ヒッチコック # 風車



03/27 げん・言（うつせみのたわごと-6-）



＊

げん・言（うつせみのたわごと -6-）

星野廉

2023年3月27日 07:37

げん——。きになることば。からからきた、ことば。ことだまは、おそれおののくもの、はたらきかける。おのれのでだてとしよう、おもわくをもって、ちかづくものをあいてにすることはない。このしまじまにくらすものことばだけにやどると、だれがいったらうか。ことばは、ひとをえらばない。たまも、ひとをえらばない。ひとしいのが、ひと。ひとは、みなひとしい。ことばも、ことごとくひとしく、ことなることはない。ことなるのは、かたとかたちだけ。ことばは、ひとしく、ひとにはたらきかける。

＊

げん・言。げんかい・言界。のっぺらぼう。ぺらぺら。ひらひら。はっば。ことのはし。もの、こと、ありよう、みさかいなくはりつく。もっとも、はりつけるのは、ひと。おととして、こえとして、はなち、はなすのも、ひと。もんじとして、しるしとして、かき、ひっかき、ぬり、こすりつけるのも、ひと。なぞり、えがき、ほりきざむのも、ひと。このほしでひとがきえても、きずあととして、のこる。いしころのように、ものとしてのこる。

＊

のっぺらぼう。ななし。おと、こえ、かたち、もんよう。よむのは、ひと。うたうのは、ひと。ことこまかに、ことわけするのも、おそらく、ひとだけ。げんかい、幻界、言界。おなじ、おと。そうよむのは、ひと。おなじ、おと。おそらく、おなじおもい。すくなくとも、ちかいおもい。そのあわいはあわい。だから、おもいはおもい。さまざまなおもいが、おなじおとにかさなる。おびたしい、おもいとおとが、かさなりあう。だから、おもい。

＊

のっぺらぼう。べらべら。べらべら。さわがしい。やかましい。だが、おそらく、おとなしが、まこと。だから、つまるところは、おなじ。おとなし、おんなし、おんなじ、おなじ、とずらす。これ、でまかせ。しゃれ、じゃれ、ざれ、ざれごと、たわごと、かたこと、ところがす。ころがる、たま。たまたま、たま。たまをころがす。じびきにたより、からことばのちからをかりて、ころがす。げん・幻・言・現・限・原・源・元・Gen・眼・弦・減・絃——ま・真・眞・間・魔・麻・摩・目・身・ma——。やはり、おもい。まことのかたこと。かたことのまこと。ことたま。ことのはしに、たまをみいだし、はたらきかけられるのは、ひと。ひとりずもう。ひとりてんか。ひとりごと。ひとりわらい。ひとりしばい。ひとりじめ。このほしにすむいきものたちのなかで、ひとひとりだけ。

＊

ことばは、すじ。くせもある。うろうろ、おろおろ。なまり、ころがり、うつろい、ふみはずし、ずれる、いや、ずれまくる。ずれることこそがつとめのように、ことばは、ずれる。おもいとことばは、ずれている。どうしようもなく、ずれている。なぜだろう。どういうわけか、ひとは、ずれた。さるから、はずれた。あたまのなかで、なにかがずれたというはなしもある。ひとにひとしくそなわっている、といわれている、ことば。ひとをまねるかのように、ことばは、ずれる。ずれまくる。

＊

ことばは、おもいをうつす。おもいも、ことばをうつす。つねに、ゆれ、ゆがみ、ずれながら、うつし、うつり、うつろう。それでいて、ことばは、まこととまっとうさをめざす。ところが、ことばは、まことはいうまでもなく、ほんものにも、にせものにも、まがいものにすら、なりそこねる。ひとのおもわくや、たくらみや、いのりや、ねがいをよそに、ことばはなにかのかわりとして、ある。というか、なにかのかわりとしてしか、ない。せめて、こういたい。けなげに、なにかのかわりをつとめるのだと。いとしい。

＊

ことばは、いとしい。みからでたもの。もとは、いき。いきるのいき。かく、きぎむ、ぬる、しるす、つづる。もんじは、あとのはなし。もとは、あなからでるもの。あかんぼうや、うんちのごとく、ことのはは、いとしい。どれも、いきんで、あなからだすもの。あなどれない。だからこそ、いとしい。でたあとは、はなれる。かなしい。だが、なにかにはたらきかける。ちからをおよぼす。うごきをさそう。とはいえ、うごくのは、ひと。

うれえぬわけにはいかない。このほしのいのちと、ゆくすえさえも、ひとのはく、ことばのちからにかかっている。ひと。ずれた、さる。はずれた、さる。くるえる、さる。むごい、さる。あやうい、さる。むやみにあやめる、さる。おやまの、さる。

＊

はなに、ことばありき。はなに、ずれありき。すべては、そこからはじまった。ことのは。ことのはし。ことのはじまり。

◆

以下は、10の「げん」の見取り図です。

- 1) 「げん・幻・幻想・まぼろし・魔を滅ぼす・間を滅ぼす・(隔たったものを) 近くする・知覚する」(うつせみのたわごと-5-)
- = 2) 「げん・言・言語・ことば・言葉・言の葉・事の端」
- = 3) 「げん・現・現実・うつつ・打つを打つ・うつをうつ・うつ(全・空・虚)をうつ・うつうつ」
- = 4) 「げん・限・限界・限度・境目・ふち・へり・端っこ・かぎり・かぎる・限る・かげる・翳る」
- = 5) 「げん・原・源・元・みなもと・もと・本・基・原子・元素・根っこ・ルーツ・泉・湧く・わく・わくわく・出る・でるでる」
- = 6) 「げん・Gen(※ドイツ語)・遺伝子・gene・gen-・因子・ジン・仁・gene-・うまれる・生じる・うむ・産む・発生・子宮・卵・可能性・生殖・生命・いのち・あらわれる・でる・でちゃった・できる・できちゃった・わく・わくわく」
- = 7) 「げん・眼・がん・まなこ・め・見(げん・けん)・みる・みわける・わかる・わけける・しる・おしっこ・しるす・しるし・知る・ち・じめん・地・なわばり・あらそう・血・あやめる・なくす・なくなる・無・むっ・m・n・ん」
- = 8) 「げん・弦・つる・ぶらさげる・ぶらさがる・ぶらぶら・ゆらゆら・宙づり・宙ぶらりん・おまかせ・どうにでもしてちょうだい・おてあげ・白旗・偶然性・さいころ・なげる・ばくち・ギャンブル・まける・まかす」
- = 9) 「げん・減・へる・hell・経る・たりない・欠乏・お腹がすいた・こまった・満足できない・ほしい・欲求・もっともっと・食べてもまた腹がすく・へらす・引き算・ひく・無限小・マイナス・ネガティブ・負・陰・だめ・だめだめ・否定・否・非・被・ちがうちがう・そうじゃない・ひっくりかえす・ひっくりかえる・ひっくりかえそう・反対・あべこべ・さかさま・かえす・かえる・もとにもどる・堂々巡り・おなじこと・減即増・増即減・減=増・無限小=無限大・一定・差し引きゼロ・ゼロサム・ゼロ・zero・零・0・〇・輪・和・わ」

= 10) 「げん・絃・糸・張る・渡す・つたえる・つたわる・つながる・つなげる・ひびく・ひびき・ぴーん・おと・ふるえる・震動・ぶるぶる・ゆらぐ・なみ・波動・ひかり・つぶ・ゆれる・上下・左右・うごく・動力・ちから・熱・エネルギー・エントロピー・増大・でかい・確率大・無秩序・でたらめ・でまかせ」



### 「うつせみのたわごと-6-」(全14回)

できるだけ大和言葉系の語をもちいて、平仮名づくしで書こうという試みをしています。

ふだん書いているさいの枠をずらして書いたり、言葉をつくりながら書くわけですが、当たり前だと思っている事や物や様を、それまでとは異なった視点からとらえる試みとも言えます。とらえなおす、見なおす、考えなおす、感じなおす、という感じです。

- 1) ある漢語系の言葉に相当する大和言葉系の語を、辞書などで探しだして使用する、
- 2) 大和言葉系の語を組み合わせて説明的に書く、
- 3) 大和言葉系の語を用いて比喻をつかい、ほのめかす、

以上の3つの方法を試しています。

\*

今回のテーマは、「言葉・げん・言」という言葉とイメージをもとに世界をとらえる「言界」です。言葉が代理でしかないこと、ヒトには言語を習得する先天的な能力が備わっているらしいこと、言葉はヒトの思いや感情の表出や伝達を担っていること、言葉がヒトの知の体系をつくり上げる支えとなってきたこと、について論じています。

(こうしたことがらを、大和言葉を多用しながら平仮名だけで記述する場合と、そうした語の使い方によらない書き方をした場合とを比較すると、つづる形態がつづられる内容に大きな影響を及ぼすことがよく分かる。そんな気がしました。簡単に言うと、書き方が書く内容を左右するということです。)

標準的な表記に直したキーワードは、「のっぺらぼう」「事の端・言の端・言の葉」「言

霊」「思いは重い」「ひとり言」「すじ」「ずれ」「うつす・写す・移す・映す」「息・生きる・息る」「出る」です。

直接書かなかったキーワードは、「表象」「代理」「ニュートラル・匿名性」「ノーム・チョムスキー」「言語能力・competence」「経路」「ミメーシス」「コミュニケーション」「ヒトの言語獲得」です。

この連載全体を通じての、直接書かなかったキーワードは、「ジェイムズ・ジョイス」『フィネガンズ・ウェイク』「サミュエル・ベケット」「フランツ・カフカ」「ジル・ドゥルーズ」「柳瀬尚紀」「レーモン・ルーセル」「VOA の special English」「basic English」「聖書の翻訳」「ジョージ・スタイナー」『After Babel (邦訳：バベルの後に)』「ビジン言語」「クレオール言語」「ブリコラージュ」です。

※この記事は、かつてのブログ記事「10.02.07 うつせみのたわごと-6-」に加筆したものです。

うつせみのあなたに 第11巻 | パブー | 電子書籍作成・販売プラットフォーム  
哲学がしたい、哲学を庶民の手に——。そんな気持ちを、うつに苦しむ一人の素人がい  
だき、いわば憂さ晴らしのためにブログを始めた  
puboo.jp

#日本語 #言葉 #大和言葉#和語 #漢語 #自分語 #言の葉 #言語



03/28 2人のゲンちゃん



＊

## 2人のゲンちゃん

星野廉

2023年3月28日 07:39

ところで、唯〇論って、ありますね。で、思い出したのですが、唯幻論と唯言論とのあいだで論争があったとか、なかったとか、そんな話がありました。昔の話です。いわば、ゲンちゃんとゲンちゃんとの喧嘩です。

声に出せば、同じ「ゲンちゃん」なんだから、それに、両方とも結局は同じことなんだから、喧嘩はやめましょう。当時、そう思ったことも思い出しました。

ゲンちゃん同士の喧嘩がどういう内容だったかは忘れましたが、言と幻が材料なら、こんな話になりうるという横着な乗りで勝手に考えてみます。

＊

まず、「言は、物=物質=具体的」vs.「幻は、現象 or 意識=こと=抽象的」と図式的に処理しておきます。

蛇足とは思いますが、誤解を避けるために申し添えますが、言=言語=言葉は、話し言葉=音声=空気の振動、書き言葉=文字 or 活字=刻んだり引っ掻いた跡 or インクのかすなど、という具体的な物質です。

したがって、知覚の対象になります。見たり鼓膜を振動させたり触ったりできない、意味やメッセージのことではありませんので、よろしくご理解とご了承をお願いいたします。なお、意味やメッセージは、むしろ幻さんの担当のようです。

ここで、視点=支点という点を考慮しなければなりません。最初から、どちらかに加担=支持=配慮する形になっては、2人のゲンちゃんが、ひがんで腹を立てますので、公平にいきましょう。

「言から見れば=言に重点を置けば、すべては言=言語=言葉である」となり、「幻から見れば=幻に重点を置けば、すべては幻=幻想=まぼろしである」となります。

＊

で、言が、特権的=メタな立場にある、根拠=基盤=背景=理由として、ヒトは広義の言語=言葉でしか関係を築けないし、言葉によってしか知を継承できないという説=フィクション=イメージ=物語があります。

一方、幻が、特権的=メタな立場にある、根拠=基盤=背景=理由として、ヒトはしょせん本能が壊れた生き物なのだから「狂え！ 狂え！」という説=フィクション=イメージ=物語があります。

さて、いま、上で並べた2つの文章ですが、同じことを言っています。意識的に=故意に、同じことを言わせた、同じことを書いた、やらせだ、出来レースだ、八百長だ、とも言えます。何とでも言えます。

いずれにせよ、両者が同じことを言っているというのが顕著にあらわれている個所は、「ヒトは広義の「言語=言葉」でしか関係を築けない」=「ヒトは本能が壊れた生き物だ」です。

ヒトにおける、言語の存在=本能の壊れと単純化すると分かりやすいと思います。あとは、いわゆる、「卵が先か、にわとりが先か」の問題ですが、「言語の存在=本能の壊れ」のどちらが先かは検証も実証もできないし、結論も出ない点は大切だと思います。

2人のゲンちゃんをめぐる喧嘩の仲裁は、以上です。

＊

"唯\*論" でネット検索してみると、たくさんの唯○論があります。その中で以前に聞いたり見たことがあるものを個別に見てみたのですが、仮想敵があるのではないかと感じられる唯○論が多いようです。

唯○論対唯△論とは限りませんが、何かを敵（かたき）にして論を張っているという感じで、ほのめかしや当てこすりが透けて見えるのです。さらに興味深いのは、その仮想敵と推測できる「何らかの論」と、その論がよく似ていたり、ほぼ同じではないかと感じられることです。

「唯」という大げさな言葉をつかいながら、意外と局所的な不満や批判ややっかみ、あるいは近親憎悪から生まれているのではないか。そんな気がしました。今回の2人のゲンちゃんの喧嘩も、そうした文脈で読めそうです。

#まぼろし# 幻想# メタ# 言葉# 言語



03/29 連想でつなぐ「2・二・II」



＊

\*\* 連想でつなぐ「2・二・II」

星野廉

2023年3月29日 07:52 \*\*

目次

\*\* 連想でつなぐ

見える影で見えない影を遠隔操作する

ふたつ、ふたたび、ふたまた

パートナー、パート、パーティー

「分ける」は「減る」ではなく「増える」\*\*

\*\* 連想でつなぐ \*\*

「似ている」に「に・二」を見てしまうのは私だけでしょうか。

「似る」の語源を調べると「似る・とうばる」とあり、唾然とします。さらに「賜ばる・とうばる」と同源とか、「賜る・たまわる」とあり、呆然となります。

貴人の容貌を受けいれてその人に似る——。そんな意味のことが複数の辞書に書かれています。

好き（like）になったからその人に似る（like）——。思いきりこじつけてみましたが、しっくりきません。

ぜんぜんわくわくしないのです。こうなったら、勝手に想像することにします。私が言葉と遊ぶのは、わくわくしたいからであって、お勉強をしたいわけではありません。

私は探求者でも研究者でもなく、言葉のありようを観察するとか、辞書を眺めるのが趣味なのですが、そうやっているのは単にわくわくぞくぞくを求めているからです。

この記事のタイトルは「連想でつなぐ「2・二・II」」であって、「語源でつなぐ「2・二・II」」ではないのです。

\*\* 見える影で見えない影を遠隔操作する \*\*

私は数をかぞえるのと数字が苦手です。算数と数学が苦手でした。数学では赤点——たしか20点以下だった気がします（赤点のたびに校長室で追試を受けました）——ばかり取っていたのです。

私は「すう・かず・数」は影だと思っています。「すう・かず」は見ることも触ることもできそうもないので、抽象とか観念という意味での影に思えます。

私にとって、数字は「すう・かず・数」という、抽象である影の具象としての影です。影の影なのですが、この影は見えます。文字ですから物——インクの染みだったり画素の集まり——だと思えます。

算数と数学は、私には数字という影（目の前にある物）をつかって、数という影（見えない抽象）を遠隔操作する操作マニュアルに感じられます。影を処理するための文法とかレトリックというイメージも浮かびます。

影の文法集、影のレトリック集という感じです。

念を押しますが、この記事のタイトルは「連想でつなぐ「2・二・II」」です。ここでやっているのは連想（廉想）であり、研究や探求ではありません。

\*\* ふたつ、ふたたび、ふたまた \*\*

そんなわけで——意味不明の言葉でごめんなさい、つなぎの言葉であって、大した意

味はないのです——、「似ている」に見える、「に・二」が気になります。

「ふたつ、ふたり、ふー」の「ふー」でもありますが、「ひーふーみー」という具合に、「ひとつ、ふたつ、みっつ」を略したもののようです。

「ひとり、ふたり」の次が「さんにん」となるのも、おもしろいですが、なぜかとは考えません。連想をするときには、「なぜ」「どうして」は邪魔になります。

「に」「ふたつ」「ふたり」と来ると、「ふたまた・二股」なんて連想します。

「また・股」の「また」は、「また来たよ」の「また」と似ています。辞書で調べれば、ひょっとしてつながりそうな気配がしますが、このまま連想に任せましょう。

私は解を求めるのではなく、あくまでも快を求めたいのです。

「また」から「ふたたび」を連想して「ふた」が出ました。

「蓋」も「ふた」ですね。「割れ鍋に綴じ蓋」と言いますが、誰にでもふさわしいパートナーがいるという意味です。

パートナーということは「二人」になるわけですから、「蓋」が「二」につながりました。

語源とかその辺は知りません。少なくとも、いまは知りたくないです。

ふたたび、またたび、木天蓼、股旅。

「ふたたび」——「再び」ですが「二つの度(たび)」でしょうね——から「またたび」に行きたくようになりますが、ここでは我慢します。

ここでは、あくまでも「2・二・II」を連想でつなぐことに寄り添います。

\*\* パートナー、パート、パーティー \*\*

パートナー、ふたり、片割れ。partner の part は「分れる」というイメージです。

学生時代に、part つなかりで単語を覚えたことがあります。語源やイメージで英語の単語を覚えるのが好きでした。わくわくした覚えがあります。

part (部分、部品、部、分ける・分れる)、party (分派、派閥、政党、一行、集まり、宴会)、particle (分子)、apart (離れて、べつべつ)、depart (出発する、お別れ、死ぬ)

「分れる」の基本は「二つに分かれる」だという気がします。いきなり三つやそれ以上に分裂する場合もありそうですが、ぴんと来ません。

\*\* 「分ける」は「減る」ではなく「増える」\*\*

「分れる・分ける・別れる・別ける」は「減る・減らす」ではなく、むしろ「増える・増やす」。

これは、party の語義を見ると分かります。そもそも part (部) とは、全体を構成する一部なのです。ひとりぼっちではないわけです。

「減る・減らす」と「増える・増やす」を反意語や反対の関係にあると見なすとすれば、それは事実誤認ではないかと私は思います。言葉の世界の文法 (比喩です) と、現実の世界の文法 (比喩です) は異なるからです。

いま述べたことはたぶん数学とは違います。あくまでも現実の世界の話です。数学には数学の文法 (比喩です) があります。

\*

「半分にする」(減る)とは、数や量が「二倍になる」(増える)ことなのです。人にとっての現実の世界では。

ほら、幸せを二人で分けると二倍になるとよく言うじゃないですか。あと、ケーキも。

bicycle (二輪車・自転車)、bilingual (バイリンガル)、binocular (双眼鏡)、biathlon (バイアスロン)

bi- は「二・両・双・複」の意味があると学生時代に習いました。

「半分・二つ」に分れて、bi-, bi-, つまり倍々に増えていくのです。

細胞の分裂みたいですね。増えるは殖える。産むは生む。生命を感じます。

biology (生物学)、biography (伝記)、biotechnology (バイオテクノロジー)

残念ながら、「生命・生・命」の意味のある bio- とは関係ないようです。

two (二・2)、twelve (十二・12)、twenty (二十・20)、twice (二二回)、between (二つの間で)

duo (デュオ・二人組)、dual (二・二重)、duel (決闘)、deuce (ジュース・二点)、double (ダブル・二倍)

上の二列ですが、t と d は舌の位置がほぼ同じで、次に発音する w と u では唇の形と動かし方も「似ている」と私は感じます。

英語の tw- はゲルマン系の「二・2・II」で、du- は bi- と同じくラテン系の「二・2・II」だと学生時代に習いましたが、こういう「似ている」に私は弱いのです。

わくわくして気が遠くなるほど好きだという意味です。

＊

話を日本語に戻しますが、「似ている」と言えば、「似ている」と感じるさいには、基本的に「二つの物や人を見る」わけです。やっぱり、「似」は「二」に「似ている」と思わずにはられません。

ところで、「二」の片割れみたいな「弐」は、「二」よりももっと「似」に「似ている」気がします。とはいえ、これは意見が二つに分れそうです。

#連想 # レトリック # 掛け詞 # 対義語 # 反意語 # イメージ # 二つ # 二人 # 分れる  
# 数 # 数字 # 数学 # 算数 # 言葉 # 日本語 # 英語

03/30 はなは、はなが、はな



＊

\*\* はなは、はなが、はな

星野廉

2023年3月30日 08:36 \*\*

花は花が花  
花は人のために咲くのでない

人は花が散ると木と葉には気を掛けない  
人は木を伐り葉を払う

蝉は音が花  
蝉は人のために鳴くのではない  
鳴き終えた蝉は土に帰る

蛍は光が花  
蛍は人のために光るのではない  
光り終えた蛍は水や土に帰る

虫は声が花  
虫は人のために歌うのではない  
歌い終えた虫は土に帰る

紅葉は色が花  
もみじは人のために燃えるのではない  
落ちた葉は土に帰る

花は花が花  
誰が決めた

人はいまが花  
それは確か

三分、五分、七分、満開、散り始め  
それは分からない

人はさる、いつか去るさる

先立った影たちに先立ち  
おそらく影たちに送られて去る

言の葉だけが  
せめてものたむけ

その言の葉も散る  
花ははなに、音はねに、光はひかりに、声はこえに、色はいろに、人はひとに帰る

はな、ね、ひかり、こえ、いろは、のこる  
はな、ね、ひかり、こえ、いろは、かわらずいきつづける

#桜# 蝉# 蛭# 虫# もみじ# ヒト# 桜は花が華

03/31 もつれる、ねじれる、こじれる（連想でつ  
なぐ）



＊

\*\* もつれる、ねじれる、こじれる（連想でつなぐ）

星野廉

2023年3月31日 07:56 \*\*

「分れる・分ける・別れる・別ける」は「減る・減らす」ではなく、むしろ「増える・増やす」。

(.....)

「半分にする」(減る)とは、数や量が「二倍になる」(増える)ことなのです。

ほら、幸せを二人で分けると二倍になるとよく言うじゃないですか。あと、ケーキも。  
(拙文「連想でつなぐ「2・二・II」より)

今回も、連想で言葉と言葉をつないでいきます。

「分れる」というのは、「離れる」と「似る」の二つがいっしょに起きているように感じられます。

もともと一つだったものが、二つに分かれるのですから、離れたところに似たものがもう一つできるようなものです。

鏡の前の体験と重なります。

「分身」という言葉が浮かびます。「分」れてできたもう一人の自分自「身」のことで、わくわくどころかぞくぞくしてきます。怪しいです。

私は解を求めているのではなく快を求めて、こういう連想の遊びをしているのですが、快ではなくて怪のほうに行ってしまうような自分を感じてしまいます。

戻れるかしら……。戻れなくてもいいなんて危うい気持ちに傾きます。こうなると分身というより分心です。

向こうから戻れるかしら……。向こうに行ってしまった心。やっぱり、鏡の前の体験と重なります。危ういのです。鏡は私にとって「鬼門」みたいです。

## 目次

\*\* に、ふたつ、ふたたび、また

つねに「さかい」と「へり」をまたいでいるのが人

tw- は「枝が分れる」イメージ

言葉の中に言葉があるから、言葉はもつれている

「短い」「長い」は印象、「長さ」は器具で測れる

二つを「と」でつなげてみても、どうつながっているのかは分からない

拗、振、縊、捻

twist は「ねじれる、よじれる」

参考記事 \*\*

\*\* に、ふたつ、ふたたび、また \*\*

個人的には分身も分心も気が進みません。私は基本的に一人が好きなのです。

不安になってきたので、「分れる」から「二」に話を戻します。

そんなわけで、「似ている」に見える、「に・二」が気になります。

(拙文「連想でつなぐ「2・二・II」」より)

そもそも「似ている」から「二」へと話に移ったのでした。ふたたび、つまり、また「に・二」に戻ります。

に、ふたつ、ふたたび、また。

「二股、二股をかける、またぐ」と連想します。「股」と「またぐ」は、「人」という字みたいです。

人——またいでいるように私には見えます。

またぐ、こっちとあっち、これとあれ——またいだ瞬間に「あっち」が「こっち」になる。

そんなふうには人は二つの世界をつねにまたいでいるのかもしれません。つねにです。それが反復されてずっと続くのです。

\*\* つねに「さかい」と「へり」をまたいでいるのが人 \*\*

人がつねにまたいでいるのは世界という界であり、「さかい・境、ふち・へり・縁」なのですが、辺境とも言えます。

人は辺境から辺境へと移る。人がいるところは常に辺境なのです。

\*

人は辺境を移動しつづける辺境——。人ですから、おとなだけでなく赤ちゃんも含まれます。

よるべない、寄る辺ない、寄る方ない。人間の赤ちゃんには、まさに寄り掛かるものがないのです。寄る辺の「辺」とは「辺境・さかい目・ふち・縁」に他なりません。

赤ちゃんは、ふち、へり、きわ、はしっこ、すみっこにいるとも言えるでしょう。世界のふち、人間の世界のふち。

でも、縁（ふち）は縁（えん）なのです。どういうことかと言うと、赤ちゃんは縁（ふち）に身を置くことで、縁（えん）を呼び寄せているという意味です。

縁（えん）とは、他者との出会いに他なりません。仮に赤ちゃんがど真ん中にいるとするなら、他者との出会いはないでしょう。縁（ふち）にいるから、外や周りとは触れあ

えるのです。

赤ちゃんのいる空間もまた辺境なのです。

話を戻します。

そんなふうに人は二つの世界をつねにまたいでいるのかもしれませんが。つねにです。それが反復されてずっと続くのです。

あっ、既視感に襲われました。

\*\* tw- は「枝が分れる」イメージ \*\*

思い出しました。two です。

この単語を元にして、イメージや語源で別の単語を整理して覚えたときの記憶がよみがえってきました。学生時代の話です。

two (二・2)、twelve (十二・12)、twenty (二十・20)、twice (二回)、between (二つの間で) です。

たしか、「twig (小枝、二股の枝)」から出発して覚えた気がします。「ツイッギー (Twiggy)」さんを連想しながら覚えたのです。

twig (小枝) のように、か細い英国のモデルか俳優さんでした。

(動画省略)

Twiggy in a Fashion Show, 1960's

\*

tw- は「枝が分れる」イメージのようです。

また「分れる」に戻ってきました。またまた。また股です。ふたたび股です。くどくて

ごめんなさい。

too も、「もまた」の「また」ですね。two の仲間なのでしょうか。気になったので辞典で語源を調べてみました。

「to の強勢形」(リーダーズ英和辞典)、「副詞 to の強意形」(ジーニアス大英和辞典)。

困りましたね。こういう説明はさっぱり分かりません。

「あまりにも……すぎる」の too ほうの説明なのでしょうか。too と two は発音が似ているというか同じなので、こういう説明をされると拍子抜けします。

でも、言葉は割り切れない部分がないと言葉っぽくないので、こういうこともあるのだと自分に言い聞かせます。

\*\* 言葉の中に言葉があるから、言葉はもつれている \*\*

too と two は簡潔で明瞭なまでに音が、似ているどころか、そっくりというか、同じなのに語源や意味が重なりそうもないわけですが、これはひょっとすると「もつれている」のかもしれないなんて考えが浮かびました。

ときほぐす、解きほぐす、解き解す

「解き解す」という表記を見てください。こういうことになるのは、日本語がもつれているからです。

もつれにもつれているという印象を私は持っています。言葉の中に言葉があるからでしょう。言語の中に言語があるからでしょう。

(拙文「解くのではなく溶ける」より)

それぞれの単語の語義を英和辞典で眺めるとわかりますが、英語も日本語と同じく、もつれにもつれていることが目に見えます。

一目瞭然なのです。言葉の中に言葉があり、言語の中に言語があるからに他なりませ

ん。純粋に一系統だけから成る言葉も言語も存在しません。

ただし、機械語とか人工語とかプログラミング言語ならあるかも。もつれていては、「あやまってもあやまらない・誤っても謝らない」「ぶれない」機械は操作できないと思います。

\*

日本語にも英語にも複数の言語が入っているという意味です。

日本語だと大きく分けて、大和言葉（和語）と漢語の二つの系統があるそうですが、英語にもゲルマン系とラテン系という二つの大きな系統があると学生時代に習いました。

上で述べた英語で「2・二・II」の意味のある tw- はゲルマン系（土着・島の言葉系）で、bi- や du- はラテン系（外・大陸から来た系）らしいのです。

bicycle（二輪車・自転車）、bilingual（バイリンガル）、binocular（双眼鏡）、biathlon（バイアスロン）

duo（デュオ・二人組）、dual（二・二重）、duel（決闘）、deuce（ジュース・二点）、double（ダブル・二倍）

この二つのラテン系ですが、私には字面も発音も似ていると感じられます。

- ・英語：ゲルマン系（土着・島の言葉系）とラテン系（外・大陸から来た系）
- ・日本語：大和言葉・和語系（土着・島々の言葉系）と漢語系（外・大陸から来た系）

こうやって見ると、地理的にも歴史的にも文化的にも両者は似ていますね。わくわくします。

この島々（日本）もあの島々（英国）も、大陸から見て、へり・きわ・ふちにあるのです。そして、そこで話され書かれている言葉（日本語・英語）も、つねにへり・きわ・ふ

ち、つまり辺境にあると言えるでしょう。

逆に言うと、両国は「へり」にある——大陸のへりにへばりついているのです——からこそ、他者との出会いがあり、その結果としてさまざまな文物を取り入れたと考えられます。

(ただし、このへりである国に、さらにへりと辺境——それぞれの隣国や内なる辺境である「よそ者」の存在——があることを忘れてはならないでしょう。)

へりにあるから、言葉がもつれているのです。私は、このもつれを豊かさだと感じています。

たとえば、英語に二つの系列があるのは、日本語で漢字の「二」を、「ふ（ひふみのふ）・ふた」と訓読みする場合と、「に（いちにさんのに）」とか「じ」（次男の「じ）」と音読する場合があるというふうに、「分れる」のに似ています。

\*

(もともと日本語には文字がなかったために、1) 中国から来た文字である漢字という「形」とその「意味」（解字にあるような語源的というか本来の意味）、2) 漢字を当てた日本語の「音」（複数あり）とその「意味」（複数あり）、3) 漢字の複数の「音」（時代と地域によるバリエーションがあるために複数ある）とそのバリエーションによって異なる複数の「意味」というふうに、もつれている気がします。以上はあくまでも私の印象です。漢和辞典を眺めているとそんなふうに見えるという意味です。)

\*\*「短い」「長い」は印象、「長さ」は器具で測れる \*\*

英和辞典をぺらぺらめくってみてください。電子辞書ではなく紙の辞書です。

短い単語ほど説明が長いのです。

「短いけど長い」とか「短いと長い同居」という現象が体感できます。英和辞典ほどの迫力はありませんが、国語辞典でもだいたいそうです。

辞書で「短い」と「長い」が同居しているのも、言葉の中に言葉があるからだといいます。

この点については、以下の記事で具体的に述べています。興味のある方は、ぜひご覧ください。

「短い」と「長い」——両方とも印象であることに注目したいです——が必ずしも反意語とか反対の関係にはななかったりすることは、たとえば俳句が「短く」なくてむしろ「長い」という話ともつながってきます。

定型があり、それゆえに先行するおびたしい数の句とつらなる俳句が、一句で自立し完結しているはずはありません。その意味で俳句はぜんぜん短くはないわけです。

一句に、過去の人たちの声が響き、過去の言葉が映っているのです。厚いし熱いし、濃いし重いと言うべきでしょう。

＊

俳句にかぎらず、定型があるということはその定義からして、先行する作品を踏まえているわけですから踏襲と同義と言えるでしょう。

個々の作品が型という鎖で縛られているうえに、伝統という長い連鎖につらなっているわけです。

作者の個性やオリジナリティや著作権は、そうした枠と鎖を前提としての話なので、すごい世界だと思えます。苦勞やトラブルや葛藤が多いだらうという意味です。どう考えても、短いわけがありません。

その作品だけで自立してもいないし、完結してもいない。それが定型のあるジャンルのありようです。繰り返して恐縮ですが、短いわけがありません。

私の印象では、「短い」「長い」は印象であり相対的なものです。人それぞれという意味です。一方、「長さ」は具体的に物差しやストップウォッチで測れる具象として立ちあらわれます。

とはいうものの、一句の文字数を正確にかぞえたところで、印象の世界に住む人間の感じる「短い」と「長い」を説明できないのは言うまでもありません。

私の印象では、印象である「短い」と「長い」が反意語だというのは何かの間違ひではないかと思えます。

\*\* 二つを「と」でつなげてみても、どうつながっているのかは分からない \*\*

「短い」と「長い」、「軽い」と「重い」、「薄い」と「厚い」、「寒い」と「暑い」、「冷たい」と「熱い」

このように「と」でつながれたペア（2・二・II）に、人は何らかの関係を見てしまいます。「関係があると見てしまう」と「関係がある」とは異なります。

人が想定している関係が印象であるかぎり、混乱は続くと思えます。

\*

「と」はペア（2・二・II）をつなげます。

「つなげる」のはいいのですが、どういう具合につながっているのかは、きわめて「曖昧＝テキトー＝あんまり考えていない」場合が多いですね。分からないのです。

\* 「AとB」に真ん中にある「と」は、「何でもありー」だ。

さらに、

\*つなげてみないと分からない  
\*つなげてみてもよく分からない

と言えそうなんです。

だから、

\*眺めているしかない

とも言えそうです。ああでもないこうでもない、ああだこうだと言いながら、関係を考えるのです。

\*\* 拗、振、縊、捻 \*\*

「言葉の中に言葉がある」、つまり言葉に二つの系統があれば、もつれますよね。

「こじれる・拗れる」「よじれる・振れる」「よれる・縊れる」「よる・縊る」「ねじれる・捻れる」わけです。

もともとこの島々にあったらしい「こじれる、よじれる、よれる、よる、ねじれる」という音に、大陸から来たという「拗、振、縊、捻」という文字を当てたようです。

こんなことをしていれば、もつれそうだし、こじれて当然でしょう。

\*

なお、先ほど述べた英語の two と too の激似（そっくり）現象について、tw- はもちろんのこと、「to の強勢形」と「副詞 to の強意形」をはじめ、あちこちで調べてみましたが、英語がもつれたりこじれたりしている結果なのかどうかは、分かりませんでした。

もつれてこじれているのは自分の性格だと分かっただけでも収穫だったと、ポジティブに考えております。

\*\* twist は「ねじれる、よじれる」\*\*

two、twelve、twenty、twice、between に共通する tw- のイメージは、「twig (小枝、二股の枝)」から来た「枝が分れる」らしいという話に戻ります。

そういえば、twist (ツイスト) や twin (ツイン) も、語源的につながっているのを思い出しました。

twist は「ねじれる・捻れる・ねじる・捻る、よじる、振る・よじれる、振れる」ですから、「もつれる・纏れる」とつながってきます。

昔、ツイストというアメリカ発のダンスが日本でも流行しましたね。

\*

twist、ツイスト、ねじれる・捻れる、よじれる・振れる、もつれる・纏れる、こじれる・拗れる

「あらら、また話をややこしくしてる。これ以上こじらせるのはやめて」なんて声が聞こえそうです。

分かりました。

これ以上の拗こじらせはやめますので、どうか拗すねないでくださいね。では、また。

\*\* 参考記事\*\*

※以下の記事では、日本語の「かく・かける」(書・描・搔・掛・賭・架・懸・欠・駆)のもつれぶり・よじれぶりが記録してあります。長いものなので、読むのではなく、一部にざっと目を通すだけでも、どうぞ。

\*かく・かける (1) - (2)

\*かく・かける (3) - (4)

\*かく・かける (5) - (6)

\*かく・かける (7) - (8)

\*占い・占う／賭け・賭ける (連載「かく・かける」の補遺)

\*書く・書ける (1) - (2)

#連想# レトリック # 掛け詞 # イメージ # 大和言葉 # 和語 # 漢字 # 漢語 # 数字 # 俳句 # 言葉 # 日本語 # 英語 # 語源 # 英和辞典 # 辞書 # 関係 # 辺境 # 縁



---

うつせみのあなたに 2023年2月・3月

---

著 星野廉

制作 Puboo  
発行所 デザインエッグ株式会社

---